

福沢諭吉

現代語訳 文明論之概略

三浦良訳

二〇一五年十二月二十五日

目次

緒言 4

第一章 議論の本位を定める事 7

議論の本位とは何か 1 議論の本位が違ふ事例 7 異端妄説が世の中を進歩させる 10

第二章 西洋の文明を目的とする事 13

文明の発展段階 13 西洋文明も発展途上 14 文明の外形と精神 15 文明を求める順序 16 腕力から智力へ 17 中国と日本の文明の違い 19 精神的権威と政治的権力 20 文明と国体の関係 21 国体と政統、血統の関係 24 国体を保つため古習の惑溺を一掃 25

第三章 文明の本旨を論ず 30

文明とは何か 30 文明とは言えない社会の例 31 文明は特定の政治体制を要求しない 32 アメリカ民主制の理想と現実 36 人間万事試験の世の中 38

第四章 一国人民の智徳を論ず 40

一国全体の気風 40 人心は日々変化するもの 41 統計による大量観察の方法 43 原因には遠因と近因がある 45 時に逢わずと嘆く豪傑 46 孔孟も時勢を知らず 48 楠公も時に遭わず 49 英雄も時代の気風には勝てない 51 衆論は敵なしだが変革できる可能性がある 53

第五章 前論の続き 54

衆論の特徴①人数でなく分布の仕方が変わる 54 明治維新が成功した理由 55 攘夷論は近因、智力が遠因 57 少数派の知力が衆論になった 58 知力はスパイでなく自由な言論によつて知るべき 60 衆論の特徴②人が集まると議論も変わる 61 西洋には議論の習慣、議論する習慣に変える必要 62

第六章 知徳の弁 64

智徳の四様⁶⁴ 文明が進むと私徳万能では立ち行かない⁶⁶ 文明では智と徳の兼備が必要⁶⁷ ①徳は内、智は外の働き⁶⁸ ②徳の影響は狭く、智は広い⁶⁹ ③徳は不変、智は進歩⁷⁰ ④徳は無形、智は有形⁷² ⑤徳は心掛け、智は学習で進む⁷⁴ 道徳主義批判⁷⁶ 道徳教育は頭があっても腕がない人をつくる⁷⁸ キリスト教と文明⁸⁰ 今の日本に必要なものは知恵⁸² 宗教も文明で変化⁸⁴ 宗教的狂信が迫害を生む⁸⁶ この章の要約⁸⁷

第七章 知徳の行われるべき時代と場所とを論ず・・・89

時代と場所を考慮する困難さ⁸⁹ 時代論と未開時代は徳が支配⁹⁰ 政府と人民⁹³ 文明の大平⁹⁵ 所論く徳の力は限定的⁹⁶ 規則は徳を排除する⁹⁷ 規則は徳に代る効能¹⁰⁰ 経済道徳と規制の関係¹⁰²

第八章 西洋文明の由来・・・・・・・・・・103

西洋文明は西ローマ帝国の滅亡から始まる¹⁰³ 封建制¹⁰⁵ キリスト教の隆盛¹⁰⁵ 自由都市の発展、市民の台頭¹⁰⁶ 十字軍の役割¹⁰⁷ 絶対主義で国が統一¹⁰⁸ 宗教改革¹⁰⁸ 近代国家の形成¹⁰⁹

第九章 日本文明の由来・・・・・・・・・・111

権力の偏重¹¹¹ 権力の偏重¹¹² 治者と被治者が分離¹¹⁴ 政府が交代しても国勢は変わらない¹¹⁵ 日本に国民（ネーション）なし¹¹⁷ 人民が独立市民になっっていない¹¹⁸ 宗教に自立的統治権なし¹²⁰ 学問に権なく世の専制を助く¹²² 武士に独一個の気象なし¹²⁵ 抑圧移譲の発生¹²⁷ 権力偏重で治乱があっても文明は進まない¹²⁹ 敢為の精神の喪失¹³⁰ 権力の偏重で文明も停滞¹³¹ 経済の二大原則¹³³ 経済に現われた権力偏重と蓄財と消費が分離する弊害¹³⁵ 理財の要は蓄財と消費のバランス¹³⁸

第十章 自国の独立を論ず・・・・・・・・・・141

文明論の課題¹⁴¹ 維新直後の精神的空白状況¹⁴¹ 精神的空白を埋める⁶ 説①尊王国体論¹⁴³ ②キリスト教立国論¹⁴⁵ ③漢学者の儒学¹⁴⁷ 外国交際が重要な課題¹⁴⁸ 外国交際が品行を卑屈にさせる¹⁵⁰ 同権論と世界の実情¹⁵¹ 外国交際の経験不足¹⁵⁴ ④天地の公道論¹⁵⁶ ⑤攘夷論¹⁵⁸ ⑥鎖国復活論¹⁶⁰ 独立が目的、文明化は手段¹⁶¹ 結論¹⁶²

緒言

文明論とは人の精神發達の議論である。その趣旨は一人一人の精神發達を論ずるものではなく、社会全体の精神發達を一体として集めて、その發達を論ずるものである。故に文明論のことを衆心發達論ということもできる。人の世に身を置くと、局部的な利害得失にとらわれて、その所見を誤ることがとても多い。長年の習慣になつてゐるものについてはほとんど天然と人為を区別することもできない。天然と思つていたことが習慣であることもある。あるいは習慣と思つていたことが逆に天然であることもある。このはんじようふつぱく紛擾雜駁な（社会が入り乱れて意見がまとまらないこと）時に、乱れていない事物の道理を求めようとすると、文明の議論はさらに難しいと言える。

今の西洋文明は、ローマ滅亡以降今日に至るまでおよそ一千有余年の間に成長したもので、その由来は大変長い。わが日本も、建国以来すでに二千五百年を経て、わが国固有の文明もおのずと進歩して到達するところまで達したといえるが、西洋文明と比較すると大いに異なる点がある。嘉永年間にアメリカ人が渡来し、次いで西洋諸国と通信貿易の条約を結ぶに至つて、我が国の人民も初めて西洋があることを知り、彼我の文明の有様を比較して大きく異なることを知つて、一時に人々を驚かして、あたかも人心騒乱が起きたようだった。もともと二千五百年の間、世の治乱荒廢で人を驚かせたことがなつたわけではないが、人心の内部まで入り込んで深く感動させたのは、大昔に儒仏の教えが中国から伝わつたこと以来で、その後は最近の外交問題が最大だった。

そればかりでなく、儒仏の教えはアジアの元素が伝わりアジアで広まつたことだったので、密度の濃淡があるだけで、これを受け入れるのは難しいことではなかった。我々には新しいことだが珍しいことではなかったともいえる。しかし、最近の外交問題はそうではなかった。地理が別で、文明の元素を異にし、その元素の發達も別で、その發達の度合いも異なつた特殊異別のものに出会い、急に近くで接することになつたので、わが人民にとつてそのことが新しく珍しいことはもちろんだが、あらゆるものが見れば珍しいことばかりであつた。聞いても怪しげなことばかりであつた。例えると、極熱の火を極寒の水に混ぜるようなもので、人の精神に波乱を起こすだけでなく、その内部の底からひっくり返すような大騒乱を起こさざるを得なかつた。

この人心騒乱が事件としてあらわれたものが、前年の王制復古である。次に廢藩置縣である。いずれも今日にも影響していることだが、これだけの事件で終わるようなものではなかつた。戦争の騒乱は数年前に終わつて今では跡形もないが、人心の騒乱は今なお、依然として、日に日に激しくなつてゐる。思うに人心の騒乱は全国の人民が文明に進もうとして氣力をふるい起したものと思う。これまでの我々の文明に満足せず、西洋の文明を取ろうとする熱心さの表れである。ゆえにそれ

が期待していることは、わが文明を西洋の文明のように発展させて並ぶか、あるいはそれを追いつき越すまで止まることはないだろう。そうして、かの西洋文明も発展のさ中で、日々進歩しているので、我が国の人民もそれと一緒に動き続け、結局発展が終わることはないだろう。嘉永年間にアメリカ人が渡来した出来事は、あたかも、わが国の民心に火を付けたようなもので、一度燃え上がった火は消すことができないのである。

人心の騒乱はこのような状態である。世の中の物事の紛擾難雑な様子はほぼ想像もできない。こうした時期に、文明を論じて乱れのない筋道を通った議論をしようとするのは、学者にとっては至大至難の仕事といえる。西洋諸国の学者が日々新しい説を唱えて、その説が日々出てまた日々新しくなって、人々の注目を集めるものも多いが、西洋では千有余年の伝統に則って先人の遺産を伝えて切磋琢磨するので、たとえその説が新奇なものであっても、等しく同一の元素から発生しているので、元素自体は新規に作るわけではない。これを今の我が国の有様と比べると、全く違って比べ物にならない。今日の我が国の文明は、いわば火が水に変化し、無から有が生まれるようなもので、突然の変化は単に改進というようなものでなく、あるいは始造と呼ぶこともできる。このように文明の議論が極めて困難であるのは理由がある。

今の学者はこの困難な仕事に当たっているが、ここに偶然的の僥倖がないわけではない。そのわけは、我が国の開港以来、世の学者はしきりに洋学に向かつて研究しているが、その研究はまだ粗雑で視野も狭いが、西洋文明の一端は彷彿としてうかがい知る事ができた。また一方では、この学者たちは、二十年以前は純然たる日本の文明に浴し、単にそれを見聞しただけでなく、実際に従事して行ってきた人たちだから、過去を論ずる上で憶測推量で曖昧に陥ることが少なく、自分の経験をすぐに西洋文明に照らすことができるという強みがあった。この一点についてはかの西洋の学者ですでに形をなしている西洋文明の中にいて他国の有様を推察するよりも、日本の学者が自らの経験によってさらに確実である。今の学者の僥倖は実際に経験していることの一事で、しかもその経験は今の世を過ぎると二度と得られないものだから、今は特に大切な機会といえる。

試みにみると、現在の我が国の洋学者たちで以前は全員漢書生でなかったものはいない。全員神仏者でなかったものもない。封建時代には士族でなかったものは平民だった。あたかも一身で二生を経験したようなもので、一人で二つの体を持つようなものだ。二生を比べて二つの人生を比較し、前の時期に得たものを、今得た西洋文明に照らして、その形や影が互いに反射するのを見れば、果たしてどんな風に見えるか。その議論は必ず確実なものにならざるを得ない。思うに、私がぼんやりと見える洋学の所見によって、あえてその劣ることを顧みず、この本を著すに当たって、ただ西洋諸家の原書を翻訳せず、その大意を斟酌して日本の事実の参考にしたのも、私が得て後輩が再び得られない好機会を利用して、今の所見を残して後の時代の参考にしたいというささやかな考えである。ただし、その議論が

雑駁で誤謬が多いことは、告白して悔い改めるが、特に願わくば後世の学者が大いに学んで徹底的に西洋のさまざまな書籍を読み、徹底的に日本の事情を詳しくして一層所見を広くし議論を密に行つて、真に「文明の全大論（大文明論）」を書いて、日本の面目を一新することを希望する。私もまた、まだ年をとつたわけではないので、他日必ずこの大事業がなされることを待ちながら、今よりもっと勉強してそれに少しでも助力することを樂しむだけである。

書中、西洋の書物を引用して原文を直訳したものは、その著者名を記して出典を明らかにしたが、ただ大意をとらえて訳したり、諸書を参考にしてその趣意を探り著者の論を述べたものはいちいち出典をしるさなかった。これは、たとえば、食物を食べて消化したようなもので、食物は外物であるが、ひとたび食べれば自然と自分の体内のものになる。だから、書中にたまに良説があつたとすれば、それは私の良説でなく、食べたものがよかつたためと思つてほしい。

この書を著すに当たり、たびたび社友に相談したり、あるいは所見を聞いて、あるいは以前に読んだ本の議論からヒントを得ることが少なくなかつた。特に、小幡篤次郎君には特別に本を閲覽していただき、細かなチェックをお願いし、その結果理論の品価を著しく高めたものが多かつた。

明治八年三月二十五日 福沢諭吉記（しるす）

第一章 議論の本位を定める事

議論の本位とは何か

軽重、長短、善悪、是非等の言葉は相対的な考え方から生じたものである。軽がなければ重はない、善がなければ悪もない。故に軽とは重よりも軽く、善とは悪よりも善いということ、両者は相対させなければ軽重善悪を論じることができない。このように比較して重と決まり軽と決まるものを「議論の本位」と名付ける。ことわざに、腹は背に替え難し、また小の虫を殺して大の虫を助ける、という。故に、人身の議論をするには、腹の部分は背よりも大切だから、むしろ背に傷をこすむることがあっても腹は無傷に守らざるを得ない。また、動物を取り扱う時に、鶴はドジョウよりも大きくて貴いものだから、鶴のえさにドジョウを使って差し支えない、ということである。たとえば日本の封建時代に、大名や藩士が何もしないで衣食していたものを、その制度を改革して今のようにしたのは、いたずらに有産の人々を倒して無産の苦しみに陥しいたように見えるが、日本国と諸藩を比較すれば、日本国は重く、諸藩は軽い、藩を廃するのは、腹が背に替えられないと同じで、大名藩士の禄を奪ったのも、ドジョウを殺して鶴を養うようなものだった。

すべて事物を調べるには、枝葉を払ってその本源にさかのぼり、究極の本位を求めざるを得ない。このようにすれば、議論する事柄は次第に減って、その本位はますます確実にできる。ニュートンが初めて引力の法則を発見し、すべて物は一旦動けば動いて止まることがなく、一旦止まれば止まって動くことはない、と明確な法則を立てて以降、世界の万物の運動の法則でこれによらないものはない。法則とは道理の本位（基準）ともいえる。もし運動の理論を論じるに当たり、この法則がないと議論はバラバラで際限がなくなり、船は船の運動によって理論の法則を立て、車は車の運動によって議論の本位をたてて、徒に理論の数ばかり増えて、結局その根本を一つにまとめられず、一つにならねば確実なものを得ることができない。

議論の本位が違つ事例

議論の本位を定めなければ、その利害得失を議論できない。城郭は守る側の者には利があるが、攻める側の者にとっては害がある。敵の利益は味方の損失の關係になる。行く者にとって便利なものは来る者にとっては不便である。故にこれらの利害得失を議論するには、まず、何のためにするかを定め、守る者のためか、攻める者のためか、敵のためか、味方のためか、いずれにしてもそれが目指す根本を定めないわけにいかない。古今の世論は複雑で多岐にわたるもので、互いに矛盾し

合うものも、その本を調べると、初めから考えが異なっているのに、最後になって無理に伸びた枝を同じにしようとするようなものである。

たとえば神仏の説はいつも折り合わず、それぞれの主張を聞くと、どちらも尤ものように聞こえるが、その基本を調べると、神道は現在の吉凶のことを言い、仏法は未来の禍福を説いており、議論の本位が違っているので、両説は最後まで折り合うことができない。漢儒者と和学者（国学者）の間にも論争があつて、多くの見解の相違がある。この二つが意見を分ける大きな理由は、漢儒者は湯武の放伐（とうぶ 殷の武帝がした君主の討伐）を是とし、国学者が天皇の系万世を主張することにある。漢儒者が困惑するのはただこの一点である。このように事物の根本に返って考えずに枝葉だけを議論する間は、神儒仏の間の見解の相違が決着することがなく、その様子は軍事で弓矢劍槍の得失を争うようなもので、際限がない。

もしもこれを和解させようとすると、各々が主張するものより一層高尚な新説を出して、彼らに新旧の得失を判断させる方法があるだけである。弓矢劍槍の議論も、以前一時的に騒々しい時があつたが、小銃が登場して以来、これを語る者はいなくなつた。（神官の話を知ると、神道にも神葬祭があるので未来を説く宗教だといひ、僧侶の話を知ると法華經などには加持祈禱のしきたりもあるので、仏教も現在の吉凶を重んじていると言つて、必ず込み入つた議論になる。しかし、これらは神仏混合が長く続いて、僧侶が神官のまねをしてみたり、神官が僧侶の職分を侵そうとしたために生じているのであつて、神仏両教の大趣意を論じれば、一方は未来を主とし他方は現在を主にしていることは、数千年来の習慣をみれば明らかである。今また、あれこれの議論を聞くほどのことではない。）

また、議論の本位が違ふ者を見ると、結論は同じようだが、議論の途中から互いに枝分かれして出発点が違ふことがある。ゆえに物事の利害を説明する時は、これを利としこれを害とするところを見て両方の説が同じでも、利害の理由についてその説が途中で別れて結論が違つてくることもある。

例えば、頑固な士族はいつも外国人を憎んでいる。また、学者流の人で少し見識のある人は外国人の挙動を見て決して心を奪われたりしないが、これを悦ばない心はあの頑固な士族と同じとも言ふこともできる。この段までは両説とも一致しているようだが、悦ばない理由を述べるに至つて始めて違いが生じ、甲はただ外国人を異質な人々とし、事柄の利害得失にかかわらずただひたすらに憎むだけである。乙は少し視点が遠大で、ただ憎み嫌うのでなく、その交際から生じる弊害を考えて、文明人と称する外国人でも我々に不公平な扱いをすることを怒っている。双方ともに外国人を憎む心は同じだが、これを憎む原因が違うために、彼らと接する方法も同じにはならない。このことは、攘夷家と開国家が結論は同じだが、遡ると途中から道が分かれており、その根本とするところが異なるためである。すべて人間の万事、遊嬉宴楽に至るまで、人々は行動を同じにしても好みに違いがでる場合が多い。一時的にその人の行動をみて、にわかになにその考えまで判断することはできない。

また、事物の利害を論じるには、その極端と極端を持ち出して、議論が初めから分かれて、双方が近づくことができない場合もある。その一例をあげると、今人民同権の新説を述べる人がいると、古風家（保守派）の人はこれを聞いてすぐに民主政治と思ひ、今わが日本で民主政治を主張したら国体をどうするかといひ、最後には不測の災難があるかもしれないと言ふ。心配する様子はあたかも今にも無君無政の大混乱に陥いるとして恐怖するようなもので、議論の初めから未来の未来を想像して、未だに同権がどういふものかも確かめずに、その趣旨も聞かず、ただひたすらこれを拒否するだけである。また、新説家も初めから古風家を敵のようと思ひ、無理にでも旧説を排除しようとし、ついに敵対關係に陥つて議論がかみ合いことがなくなる。結局、双方から両極端の議論を持ち出すためにこうした不都合が生じるのである。

手近な例でたとえてみる。ここに酒飲みと下戸の二人がいて、酒飲みは餅を嫌い下戸は酒を嫌つて、同じようにその害を述べてそれを止めさせようとする。下戸は酒飲みの説を排除して、餅を有害というなら、我が国数百年來の慣習をやめて正月元旦に茶漬けを食べて、餅屋の家業をやめさせて国中でもち米を作ることを禁止しろというのか、そんなことはできないと言ふ。酒飲みは下戸に反論して、酒を有害なものとするなら明日から國中の酒屋を壊し、酔っ払いを嚴罰に処し、薬品の酒精には甘酒を代用し、婚礼の式には水盃を使ふというのか、そんなことはできないと言ふ。

このように両説が極端な場合は、その勢いはきつと衝突して近づくことが出来ない。ついに人間の不和を起こして世の中に大きな害を生じることがある。天下にこれまでその例は少なくない。

この争いが学者士君子の間で行われるときは、舌と筆で戦ひ、ある時は口頭でまたあるときは論文を書いて、いわゆる空論（實際とかけ離れた議論）によつて人を動かすことがある。ただし、無学文盲の人は舌や筆も使うことができないので腕力にたより、ややもすると暗殺などを企てることも多い。

また、世の中で議論が反駁し合つてゐるのを見ると、お互いの欠点を攻撃しあひ、双方の本來の眞価を見せることができないことがある。その欠点とは、事物の一利一得に伴う弊害のことを言う。例えば、田舎の百姓は正直だが頑固で愚かしい、都會の市民は利口だが輕薄である。正直と利口は人の美德だが、頑固、愚か、輕薄は常にこれに伴う弊害である。百姓と市民の議論を聞くと、その争ひの発端がこの点にあることが多い。百姓は市民をみて輕薄児と呼び、市民は百姓を頑陋物がんろうぶつとののしり、その様子は、あたかも双方が敵対しあひ、あたかも各々片目を閉じて、相手の美しい所を見ないで醜いところだけを窺うようである。もし、両目を開いて、片目で相手の長所を見て、もう一方の目で短所をみれば、あるいは長短が償ひあつて、論争も終わるかもしれない。あるいは、その長所が短所を覆ひ尽くせば、論争は止むだけでなく、ついには友達のようになつてお互いに利益を得ることがあるはずである。

世の学者もまた同じようなものだ。例えば今の日本で議論家の種類を分けると、保守派と改革家の2種類があるだけである。改革家は才智があつて進んで何かをしようとし、保守派は手堅く一步下がつて守るものである。退いて守る人は頑陋に陥る弊害があり、進んでことを成そうとする人は軽率に流される心配がある。そうはいっても、手堅さが必ず頑陋を伴うわけもないし、鋭敏は必ずしも軽薄に流れるわけでもない。試みにみると、世間の人で、酒を飲んでも酔わない人がおり、餅を食べても食傷しない人もいる。酒と餅は必ずしも酩酊や食傷の原因ではない、そうなるかならないかは、これを適度にするかどうかによる。それならば古風家も必ずしも改革家を憎んではいけないし、改革家も必ずしも古風家を侮つてはいけない。

ここに四つのものがあり、甲は手堅さ、乙は頑陋、丙は鋭敏、丁を軽率とする。甲と丁、乙と丙が会うと必ず敵同士になり互いに軽蔑しあうが、甲と丙が会うと必ず意気投合して親しくなるに違いない。親しみ合う情をもてば、初めて双方が真の姿をあらわして、次第に敵意も溶解できる。

昔、封建時代に、大名の家来が江戸藩邸に住む者と藩(国)に住む者がいると、議論にいつも齟齬が生じて、同じ藩の家中がまるでかたき同士のようになることがある。これもまた人が真価を発揮できない一例である。こうした弊害は、本来人の知識が進むにつれて自然となくなるが、これを取り除くうえで最も有力なものは人と人の交際である。その交際は、商売でも学問でも、甚だしいのは遊芸、酒宴、公事(公務)、訴訟、喧嘩、戦争でも、人と人が接してその心に思うことを言葉や行動に表現できる機会になるものであれば、大いに双方の人情を和らげ、いわゆる両目を開いて相手の長所を見ることができ、政府の会議、学校での演説、交通の便利、出版の自由など、このたぐいのことについて識者が注目する理由も、人民の交際を助けるために、特にこれを重視するのである。すべて事物の議論はめいめいの意見を述べるもので、もともと一様ではない。その意見が高遠なら議論もまた高遠になり、浅薄なものなら議論も浅薄になる。その浅薄な議論では未だ議論の本位に達していないのに他の説を早く反論しようとして、このために両方の議論がかみ合わなくなることがある。

異端妄説が世の中を進歩せしむる

たとえば今、外国交際の利害を論じるのに、甲も開国説、乙も開国説で、ちよつとみると甲乙の説は同じように見えるが、甲がその論説を説明してやや高遠な議論に入るに従つて、その説は次第に乙と違うものになって、ついに双方が不和になってしまうことがある、という場合である。確かに、この乙は、いわゆる世間通常の人で、通常の世間の常識的な意見を言い、その意見が浅薄なためにいまだ議論の本位を明らかにすることができず、急に高尚な意見を聞いて、どうしていいかわ

からなくなってしまうものである。世間にその例は少なくない。胃弱家が滋養物を食べて、これが消化できず、かえって病がひどくなるようなものだ。この様子を一見すると、高遠な議論は世のためには有害無益のようだが、決してそうではない。高遠な議論がないと、後輩を高遠な域に導く道がなくなる。胃弱を恐れて滋養をやめてしまったら、患者は最後には死んでしまうかもしれない。この心得違いのために、昔から今まで世界にとって悲しむべきことが起きている。

いずれの国でもいずれの時代でも、人民を見ると、至愚な人はとても少なく、至智な人もとても少ない。世間に多いのは、智と愚の中間にいて、世の移り変わりとともに動き、罪も功績もなく定見もなく他の説に同意して一生を終わる人々である。こうした人を世間通常の人物という。いわゆる世論はこうした人々の間で生まれる意見で、これが正に当世の有様を浮き上がらせており、過去を振り返って反省することもなく、将来に向けて先見があるわけでもなく、あたかも一箇所にとどまって動かないようなものだ。それなのに今、世間にはこうした人が多く口やかましいからといって、その所見で天下の意見を画して、少しでもその線の上に出る者がいると、たちまち異端妄説といって、無理に線の中に引き戻して天下の議論を一直線のようにしようとする者がいるが、一体どういう考えなのか。もしそんなことをすれば、あの智者たる人は国ために何の用も果たすことができないではないか。将来を先見して文明の一端を開こうとするのを、果たして誰に頼んだら良いのか。思慮がないひどい話である。

試しに古来からの文明の進歩をみると、その始めはみんないわゆる異端妄説で始まらなかったものはない。アダム・スミスが初めて経済論を発表したとき、世間はみんなこれを妄説として非難したではないか。ガリレオが地動論を唱えたときも、異端と呼んで罰せられたではないか。異説争論も年を経て、世間の普通の人々は智者の鞭撻（戒め励まし）を受けて知らず知らずのうちにそれを受け入れて、今日の文明の時代になると学校の子供といえども経済学や地動説を疑うものはない。怪しまないだけでなく、その法則を疑う者がいれば、世間は愚人といって黙らせるほどの勢いである。

また、身近な一例を挙げて言えば、今からわずか一〇年前、三百人の諸侯が各々政府を設けて、君臣上下の分限を定めて生殺与奪権を握って、その強固な様子は永遠に続きそうだったが、一瞬で瓦解して今の有様に変わり、今日になるとそのことを怪しむものもいなくなったが、もし一〇年前に藩士の中に廃藩置県などと言う者がいたら、その藩中ではこれを何と言っただろうか。たちまちその命は危うくなったことはいうまでもない。

ゆえに、昔の異端妄説は現在では常識になり、昨日の奇説も今日には常識になる。だとすれば今日の異端妄説も、また、必ず後の世には通論常談になるに違いない。学者は世論の騒々しさに遠慮せず、異端妄説の非難を恐れず、勇気を出して自分が思う説を述べるべきである。あるいは、他人の意見を聞いて持論に合わないところ

ろがあつても、その意のあるところを考へて容れられるものは取り入れ、取り容れる事ができないものはしばらくほつておいて、将来ある一つのところに落ち着く時を待つべきである。これが議論の本位になる時である。必ずしも、他人の説を自分の意見に巧みに取り入れて、天下の議論を画一にしようと欲してはならない。

このような次第で、事物の利害得失を論じるには、まず利害得失が関わる点を考へてその輕重是非を明らかにせざるを得ない。利害得失を論じるのは容易であるとしても、輕重是非を言う事は大變難しい。個人の利害によつて天下のことは是非を言つてはいけない。一年の便利・不便を述べて百年の目論見を誤つてはいけない。古今の多くの論説を聞き、広く世界の事情を知つて、先入観を持たないで落ち着いた気持ちで、最高の善の到達点を明らかにして、たくさんの方害を乗り越えて、世論にも束縛されないで、高尚の地位を占めてから前の時代を顧み、活眼を開いて後世を予想するしかない。

まさしく議論の本位を定めて、それに到達する方法を明らかにして、世界の人すべてを自分の意見と同じにしようとすることは、もともとそんなことは私も企てはしないけれど、あえて一言述べて世間の人に聞いてみたい。今この時に當つて、前に進むか、後ろに退くか。前に進んで文明を追うのか、退いて野蛮に帰るのか、ただ進退の二字があるだけである。世間の人がもし進もうと欲するならば、私の議論もまた見るべき価値があるだろう。それを実際に、実行する方法を説くのはこの本の趣旨ではなく、それは各人の工夫に任すことである。

第二章 西洋の文明を目的とする事

前章で事物の輕重是非は相対的な言葉であるといった。だから文明開化という言葉もまた相対的なものである。今、世界の文明を論じると、ヨーロッパ諸国とアメリカ合衆国が最上の文明国で、トルコ、支那、日本等のアジア諸国を半開の国と呼び、アフリカ、オーストラリア等を指して野蛮の国といい、この名称が世界の通論になっている。西洋諸国の人民が独り文明を誇るだけでなく、半開野蛮の人民もその名称を強いられていないのに自分から服し、自分から半開野蛮の名を不満に思わず、あえて自国の有様を誇って西洋諸国より進んでいると思う者もない。単に思わないだけでなく、少し事物の道理を知る者は、その真理をますます深く知るに従って、ますます自国の有様を明らかにし、さらにこれを明らかにするに伴って、ますます西洋諸国に及ばないことを悟って、これを心配し、悲しみ、あるいは彼に学んで倣おうとし、あるいは自分から強いて対立しようとして、アジア諸国においては、有識者の生涯の憂いは、この一事にあるようである。（頑固な中国人も、近年伝習生を西洋に送っている。その憂国の情を見ることができる）

文明の發展段階

文明、半開、野蛮の名称は、世界の定説で、世界の人民が認めている。これを許している理由は何か。明らかにその事実があつて欺くことができない確証があるからである。以下にその事情を示したい。これは人類が経過すべき階段である。あるいは「文明の年齢」ということもできる。

第一 住居が定まらず、決まった食物もない。群れで便利を追いかけているが、便利が尽きてしまうとたちまち四散して跡形もなくなる。あるいは場所を定めて農業・漁業を行い、衣食が不足することはないが、道具を使う工夫もせず、文字がないわけではないが文学（学問、文芸）なるものもない。自然の力を恐れて他人からの恩威に頼り偶然の禍福を期待するだけで、自分から工夫をめぐらす者がいない。これを「野蛮」と名付ける。文明からはずいぶん遅れている。

第二 農業は大いに開け、衣食も足りないものがない、家を建て街を作り、外観は一つの国であるが、その内実を探ると不足するものが大変多い。文学は盛んだが実学に努める者が少なく、人間交際については猜疑心や嫉妬心が強く、事物の道理を議論する場合 には 疑いをもつて判らないことをただすほどの勇氣はない。他を真似た細工は上手だが、新たに物を作る工夫は乏しく、古いことを勉強してもその古いものを改めることを知らない。人間の社会には規則がないわけではないが、習慣に圧倒されて規則として機能していない。これを「半開」と名付ける。未だ文明には到達していない。

第三 自然界の事物を法則としてとらえ、その中で自ら活発に活動し、人々の気風も活発で昔からの旧慣に惑溺せず、自分自身でその身を支配して他人の恩威に頼らず、自ら徳を修め知性を発達させて、昔を慕うこともなく今に満足もしない。少しばかりの平安に甘んじることなく未来の大成を目指して、進んで退かず望みを遂げて立ち止まらず、学問は虚学でなく発明の基礎になっており、工業や商業を日々盛んにして幸福の源になっている。智力は今も使うが、後日にさらなる発展を期すところがある。これが今の「文明」である。野蛮・半開の有様から遠く離れていると言える。

このように三段に分けその有様を述べると、文明、半開、野蛮の境界ははっきりするが、もともとその名称は相対的なもので、未だに文明を見ない間は、半開を最上のものと考えるのはもつともである。文明も半開に対してこそ文明だが、半開といえども野蛮に対しては文明といわざるを得ない。たとえば、今の支那の有様は西洋諸国に比べれば半開といわざるを得ない。しかしこの国を南アフリカ諸国と比べるか、近くは我が日本の人民と蝦夷人を比べれば、これは文明といえる。

西洋文明も発展途上

また西洋諸国を文明といっても、今の世界でこの名前を下すことが出来るだけである。細かく論じれば不足するものが多い。戦争は世界最大の禍だが、西洋諸国は常に戦争をしている。盗賊殺人は人間の一大悪事だが、西洋諸国にも物を盗む者や人を殺す者がいる。国内で党派を組んで権力争いをする者がいる。失脚して不平を言う者もいる。ましてや、外国交際の法などは、権謀術策がいたるところで行われているといってもいい。

ただ一般的に見渡して善が盛んに行われる方向へ向かう勢いがあるだけで、今の有様を見て直ちに最上ということとはできない。今後数百年数千年たつて世界の人民の知徳が大きく進歩し太平安楽の頂点に至ることが出来れば、今の西洋諸国の有様をみて、哀れむべき野蛮だったというため息をつくことがあるかもしれない。このようにみれば、文明には限界がないので、今の西洋諸国の状態で満足すべきではない。

西洋諸国の文明も十分満足できるものではない。それならばこれを捨てて採用しないでよいだろうか。採用しなければどのようなところで満足すればよいのだろうか。半開も満足できる場所ではない、野蛮もいうまでもない。この二つを捨てれば、別に行く所を探す必要がある。今から数百年数千年後の先まであの太平安楽の頂点を待とうというのは人の想像に過ぎない。かつ、文明は死物でなく、動いて進歩するものである。動いて進歩するものは必ず順序段階を経て進まざるをえない。

野蛮は半開に進み、半開は文明に進み、その文明も今進歩中である。

ヨーロッパといえども、その文明の由来を調べると、必ずこの順序段階を経て今の有様になっているので、今のヨーロッパ文明は、今の世界の知性によってやっと達した頂上の地位といえる。だから今の世界各国で、たとえ野蛮あるいは半開であっても、かりにも一国の文明の進歩を企てようとする者は、ヨーロッパの文明を目的にして議論の本位を定め、この本位によつて事物の利害得失を話さざるを得ない。この本の全編で論じている利害得失は、すべてヨーロッパ文明を目的に定めて、この文明を基準にして利害があり、この文明を基準にして得失があるというものだから、学者はその趣意を間違えないでほしい。

文明の外形と精神

ある人が言っている。世界中で国々が分かれて各々独立の体をなせばそれに伴つて人心風俗も異なり、政治制度も同じというわけにはいかない。それなのに、今その国の文明を目論んで、利害得失についてことごとくヨーロッパを目的にするのは、不都合ではないだろうか。ほどよくあちらの文明を採用しこちらの人心風俗を推し測つて、その国体に従いその政治を守り、これにふさわしいものを選んで、取るべきものを取り捨てるべきものを捨てて、初めてうまく調和がとれるというべきではないか、と。

答えて言うと、外国の文明を半開の国に適用するには、言うまでもなく取捨選択がほどよいことが大事である。しかしながら、文明には外に現れる事物と内側にある精神の二面がある。外に現れた文明を採用するのは簡単だが、内側にある文明を求めることは難しい。国の文明化を目論むには、その難しいことを先にして容易なことを後にし、難しいものを得る度合いに応じてしっかりと精神の深淺を測り、容易なものに適用して、正しくその深淺の程度に合わせざるを得ない。もしこの順序を間違つて、未だ精神の難しいものを得る前に先に容易な文明の外形を得ようとする、単にその用を果たさないだけでなくかえつて害を生むことが多い。

そもそも、外に現れる文明の事物とは、衣服、飲食、器械、住居から政令、法律等に至るまで、すべて耳や目で見聞きできるものをいう。今この外形の事物だけで文明とすると、初めから国の人心風俗に沿つて取捨選択すればよい。西洋の国境を接する国々でも各国ごとにその趣は同じでない。ましてや東と西のはるか遠隔地のアジア諸国で、ことごとく西洋風に倣うことなど出来るだろうか。たとえこれに倣つてもそれは文明とは言えない。

たとえば近年我が国で行われる西洋流の衣食住をもって文明の兆候とできるだろうか。断髪した男性にあつてその人を文明の人と言えるだろうか。肉を食べる人を見て開化の人と呼べるだろうか。決してそうではない。日本の都市で石造建物や鉄橋を西洋に真似て建設し、あるいは支那人が急きよ兵制を改革するとして西洋の風に真似、巨艦を作り大砲を買い、国内の事情を顧みずみだりに財政を支出するようなことは、私は支持しない。これらの事物は、人の力で作ることもできるし、お金を投じて買うこともできる。有形の文明の最も著しいもので、導入も最も簡単なことだから、これを採用するには初めから前後緩急の十分な考慮もなしに行うことができるだろう。確かに、自国の人心風俗に従わざるを得ないし、必ず自国の強弱貧富を問わざるを得ない。これがある人が言う人心風俗を配慮することにはかならない。

この一段については私も異論はないが、ある人はただ文明の外形だけを論じて、文明の精神を捨てて問わないように見える。その精神とは何か。人民の「気風」がこれである。この気風は売ることが出来るものでないし、買えるものでもなく、また人力で急に作ることもできない。一国人民の間にまんべんなく広がって全国にその痕跡も表われるとはいへ、目でその形を見ることができないので、それがどこにあるかを知ることでも大変難しい。

今試みにそれがある場所を示してみる。もし学者が広く世界の史書を読んで、アジアとヨーロッパの二州を比較し、その地理や産物を問わず、その政令、法律にかかわらず、學術のうまい下手を問わず、宗教の違いを別にして、別にこの二州の趣がかけ離れているものを探すと、必ず一種無形のものがあることを発見できるだろう。そのものたるや形を表現することはとても難しい。

これを養えば成長して地球の万物を覆い尽くし、これを抑圧すれば委縮してついには影形も見えなくなる。進退があり榮枯があつて片時も動かないことがない。このように微妙だが、実際にアジアとヨーロッパ二州の中でお互いにその痕跡に現れたものを見ると、明らかにそれが嘘でないことがわかる。今仮にそれを一国人民の気風と名付けたが、時代についていう時は「時勢」と名付け、人の場合は「人心」と名付け、国の場合は「国俗又は国論」と言える。いわゆる、文明の精神とはこのことである。この二州の趣でかけ離れているものはこの文明の精神である。故に文明の精神とは、一国の「人心風俗」とも言える。

文明を求める順序

これから考えれば、ある人の説に西洋の文明を採用しようとする時はまず自国の人心風俗を観察せざるを得ないと言うのは、言葉が足らなくてはつきりしない言い

方だが、よくその意味を考えると、文明の外形だけを取るべきでなく、必ず先に文明の精神を備えてその外形にふさわしいものでなければいけないとの意見を述べたのである。今私がヨーロッパの文明を目的にするというのも、この文明の精神を備えようと言う趣旨だから、たしかにその意見に符合している。ただある人は文明を求めるに際して外形を先にしたため、たちまち妨害にあい、その妨害を逃れる方法も知らないではないが、その精神を先にしてあらかじめ妨害を取り除いてから、外形の文明が入りやすくしようとする違いがあるだけである。ある人は文明を嫌う人でなく、私のように文明を切実に望まないもので、未だ議論を極めていないだけのことである。

前論に、文明の外形は取るに易く、その精神は求むることが難しいことの次第を述べた。今その意味を明らかにする。衣服、飲食、器械、住居から政令、法律等に至るまで、皆目や耳で見聞きできるものである。しかし政令法律は、衣食住に比べると少し趣が違って、耳目で見聞きできるが手で握ったり、お金で売買できる実態を持たないので、これを採用する方法もやや難しく、衣食や住居の比でない。故に今、鉄橋や石造建築の家によって西洋に擬することは容易だが、政令法律を改革するのは大変難しい。すなわちこれが我が日本でも、鉄橋や石造建築はあるが、政令法律の改革が未だ行われ難く、議会も急には出来ない理由である。更に一步を進めて、全国の人民の気風を一変させることは、極めて難しいことで、一朝一夕の偶然でうまくいくようなものではない。独り政府の命令で強制することも出来ず、独り宗教の教えで説得することも出来ない。ましてや、少しばかり衣食、住居等を改革して、外からこれを導くことが出来ないの言うまでもない。唯一の方法は、自然のままの本性にしたがって妨害するものを取り去り、人民一般の智徳を発生させて自然にその意見を高尚の域に進ませることにあるだけである。

このように天下の人心を一変させる糸口を開けば、政令、法律の改革もまた少しずつ行われて妨害は起こらない。人心がすでに改まり、政令法律も改まれば文明の基礎がはじめてここに立ち、あの衣食住のごときは、自然の勢いで招かなくてもやってきて、あえて求めなくても得ることが出来る。故に、ヨーロッパの文明を求めるには、難を先にして易を後にし、まず人心を改革し、その次に政令に及ぶようにし、最後に有形のものに至るべきである。この順序に従えば、実行するのは難しいが、本当の妨害もなく目的に到達できる。その順序を逆にとすると、一見たやすそうに見えるが、その道はすぐふさがり、あたかも壁の前に立つようなもので、一步も進むことも出来ず、壁の前で躊躇するか、あるいは一寸でも進めようとして却って激しく一尺も退くような事になる。

腕力から智力へ

以上はただ文明を求める順序を論じたものだが、私は決して有形の文明が無用と言うのではない。有形でも無形でも、これを外国に求めても国内で作っても差はな

い。ただその際に前後緩急（優先順位）の用心が必要なのである。決してこれを禁止するでもない。そもそも、人間の活動に際限があるわけではない。身体の働きがあり、精神の働きがある。その影響は広い範囲に及び、その需要も極めて多く、人の天性は本来文明に適するものだから、仮にもその天性に危害を与えなければよいのである。文明の要点はただ、自然に与えられた心身の働きを余すところなく用い尽くして残すところがないことにあるに過ぎない。

たとえば、未開の時代には、人は皆腕力を尊重し、人間の交際を支配するものはただ腕力だけで、社会の権力も一方に偏らざるをえなかった。人間の働を利用することが極めて狭かったといえる。文明が少し進むと、世の人の精神も次第に発達して、知力も自然と力を持つようになって腕力と対抗するようになり、知力と腕力がお互いにけん制し均衡して、少しは権威の偏重を防ぐことが出来るようになる。人の働を用いる領域が少し増してきたと言える。

そうであるとはいえ、この腕力と知力を用いるに当り、昔は事柄がとも少なく、腕力のみで戦闘に費やしてほかの事は顧みる余裕もなかった。衣食住の物を求めるのはわずかに戦闘の余力を使う程度だった。いわゆる尚武の風俗武事を重んずる風俗がこれである。知力もまた次第に権力を得てきたが、当時は野蛮な人心を維持するのに忙しく、その働きも平和で心穏やかなことに施すことができなくて、もっぱら野蛮な治民制人（人民を治めて人を従わせたこと）の手段に用い、腕力と互いに連携して未だ知力が独立の地位を占めていなかった。今試みに世界諸国を見ると、野蛮な国の人民はもちろんのこと、半開の国でも知徳ある者はきつと様々な関係で政府に属し、政府の力に頼って人を治める。中にはまれに、政府に頼らず、自身で物事を成そうとする者もいるが、単に古学を勉強するか、もしくは詩歌文芸などの技芸に耽るに過ぎない。人間の働を利用することが未だ広くなかったといえる。

人間がすることが次第に繁多になり心身の需要が増えてくると、世間で発明や工夫も起こり、商工業も発達して学問も複雑多岐になり、昔のような単一な世界に満足できなくなった。戦争、政治、古学、詩歌なども人間がなすことの一つに過ぎなくなり、特権的地位を占められなくなった。たくさんの事業が並んで発生して成長を競い合い、結局のところ均衡して、互いに近づきあい、前へ進めあい、次第に人の品行を高尚な状態に進めていく。こうしてはじめて知力が全権を占めて、文明の進歩が見られるようになった。

人の働きは、単一になれば心もかかりきりにならざるを得ない。その心が一途にかかりきりになれば、権力はますます偏らざるを得ない。確かに昔は、事業も少なくて人の働きを用いる場所もなくて、このためにその力も一方に偏っていたが、歳月を経るにしたがって、あたかも無事の世界を多事の世界に変えて心身のために新たな活動の場を開拓したようになった。今の西洋諸国は、正に「多事の世界」というべきものである。故に、文明が進歩する要点は、人間を忙しくして需要を増

やし、事物を軽重大小を問わずに活用して、精神の働きを活発にさせることにある。こうして人の天性を妨げなければ、物事は日々忙しくなり、その需要は毎月繁多にならざるを得ない。世界の最近の実際の経験から判る。これが人が自然に文明に適する理由で、決して偶然のことではない。これを創造主の深意ともいえる。

中国と日本の文明の違い

この議論を推し進めると、また一つの事実を見出すことが出来る。その事実とは、支那と日本の文明の違いのことである。純然たる独裁政府又は神政政府とよばれるものは、君主の尊い理由を一に天からの授かりものとして、至尊の位と至強の力を一つに合わせて人間の社会を支配し、深く人心の内部まで支配してその方向を定めるものだから、その政治の下にいる者の思想が向かう方向も必ず一方に偏り、その他を考える余地を残さず、その心事は常に単一にならざるを得ない。（心事繁多ならず）。

故に世の中に異変があつて少しでもこの社会の仕組みを毀す者がいると、事柄の良否に関わらず、結果は必ず人心に自由の風を生まざるを得ない。支那で周の末世に、諸侯が各々割拠の勢いとなり、人民も皆周王室あることも知らずに数百年の間、天下が大いに乱れたといえども、独裁専一の元素は著しく権力を失つて、人民の心に少し余裕が生まれた。自然と自由の考えが生じてきたのだろうか、支那文明三千年の間に、異説争論が盛んに起こり、黒白が全く相反するものも世に受け入れられたのは、特に周の末世のことだった。（老莊楊墨その他百家の説が大変多い）。

孔孟のいわゆる異端というのがこれである。この異端も、孔孟から見れば異端だが、異端の側から見れば孔孟の方が異端であることは免れない。今日になると、残された資料も少なくてこれを証明する手立てもないが、当時の人心が活発で自由の気風があつたことは容易に推量できる。かつ、秦の始皇帝は天下を統一して焚書をしたが、もっぱら孔孟の教えばかりを憎んだわけではない。孔孟でも楊墨でも、すべて百家による異説争論を禁じたためである。当時もし孔孟の教えだけが世に行われていたら、秦の皇帝も必ずしも書を焼くまではしなかつたろう。どうしてかという、後世にも暴君は多く、秦の皇帝に劣らない者もいたが、これまで孔孟の教えを害としたものは誰もいなかったことからわかる。孔孟の教えは暴君の働きを止めるものではなかつた。それなのに秦の皇帝が当時の異説争論を憎んで禁じたのはなぜか。人々が意見を盛んに言うこと自体が自分の専制の支障になつたためである。専制の支障になるものはほかでもない、この異説争論の間に生じた自由の元素（要素）だったことは明らかである。

故に単一の説を守ると、説の性質がたとえ純精善良であっても、決して自由の気風を生む事はできない。自由の気風はただ「多事争論」の間で存在すると言うことが判る。秦の皇帝は一度多事争論の源をふさぎ、その後は天下がまた統合されて長く独裁政治に戻り、政府はしばしば交代したが、人間社会の趣は改まることなく、至尊の位と至強の力が一体になって世の中を支配し、その仕組みに最も便利だったために、独り孔孟の教えだけを世に伝えたのである。

精神的権威と政治的権力

ある人の説に、支那は独裁政府だったが政府の変革があった。日本は一系万代（万世一系）の風だから人民の心も自然と固陋（ころう）（古いことに執着して新しいものを嫌うこと）にならざるを得なかったと言う者がいる。その説は外形の名義にこだわって事実をよく見ていないものである。事実を詳しく見れば、結局その逆を見ることが出来る。そのいきさつは、我が日本においても昔は神政府によって一世を支配し、人民の心も単一で、至尊の位と至強の力が統合されてこれを信じて疑うことがなかったのだ、その心事が一方に偏ったのはもちろんで支那人と異ならなかった。しかし中世、武家の時代になり、次第に社会の仕組みが壊れて、至尊が必ずしも至強でなく、至強必ずしも至尊でない勢いになったと民心が感じるようになると、至尊と至強は自ずから別のもので、あたかも胸に二物を入れてその運動を許すようになった。

二物を入れて運動させると、その間にまた一片の道理を交えざるをえなくなる。故に神聖尊崇の考えと武力圧政の考えとの他に道理の考えを加えて、三者にそれぞれに強弱があるとはいえ、一つとして権力を独占することができない。独占できなければ、その際に自然と自由の気風が生まれざるを得ない。これを支那人が純然たる独裁者を仰ぎ、至尊至強一つだけを信じて惑溺したことに比べれば、全く違って比べものにならない。この一事については、支那人は思想が貧しく、日本人は思想に富む者である。支那人は無事で、日本人は多事である。心事繁多で思想が豊かなものは、惑溺の心も自然に淡泊にならざるを得ない。

独裁の神政府で、日食の時に君主が席を移し、天体を見て吉凶を占うなどを行えば、人民もまたそれに倣って、一層君主を神聖化し愚に陥ることがある。今日の支那はまさにこの状態であるが、わが日本はそうではない。人民はもともと愚で惑溺も激しいが、その惑溺は自分自身の惑溺で、神政府から害を蒙ったものは少ない。例えば武家の時代に、日食のために天皇が席を移したこともあろう、天体の様子を窺ったりあるいは天地の神を祭ったことがあったかもしれないが、この至尊の君主に至強の力がなければ、人民は自然とそれを度外視して顧みる者もいなくなる。また、至強の將軍はその威力が真に至強で人々を威服させることができて、人民の目では至尊の君主の威光を仰ぐようにはならず、自然と人並みに見ざるを得ない。このように、至尊と至強の考えが均衡してその間に余地を残し、いさ

さかでも思想の運動を許して道理が働くことができる糸口を開くことができたのは、わが日本の偶然的僥倖と言わざるを得ない。

今の時勢に至ると武家の復活も本来願うべきものではないが、仮に幕政七百年の間に王室が將軍の武力を得るか、または將軍に皇室の位を得させて、至尊と至強を一体化し人民の心身を同時に侵害することがあったら、とても今の日本はなかった。あるいは今日に至り、かの皇学者流の説のように、祭政一致の趣旨で世の中を支配することがあれば、その後の日本もまたなかった。そうならなかったのは我が日本人民の幸福と言うべきである。故に、支那は独裁の神政政府を万世に伝えたものであり、日本は神政政府の要素に対抗して武力を用いたものである。支那の要素は一つで、日本の要素は二つある。この一事について文明の前後を論じると、支那は一旦変化しなければ日本のようににはならない。西洋文明を採用するには日本は支那より容易であるといえる。

文明と国体の関係

前段のある人が言うに、各国は国体を守りながら西洋文明を取捨すべき云々という論がある。国体を論じるのはこの章の趣意ではないが、他の文明を採用する議論にとって、まず人心に支障を感じさせるものが国体論で、極端な人は国体と文明は並立できないともいい、ここまで来ると、議論家も口を閉ざして物を言わなくなる人が多い。それはあたかも銚を交えないで退くようなものである。とても和解することができない。ましてや、その道理を詳細に議論すれば、きつと戦うことなく必ずや和解の道が開けるのにそうしない。どうしてこれを捨てて議論しない道理があらうか。これが、私が長い文章になるのをいとわず、ある人の言葉に应えて弁論する理由である。

第一 国体とは何を指すか。世間の議論はさておき、まず私が知っていることから説明する。体は合体の意味である。また、体裁の意味である。ものを集めてこれを独立して他のものと区別できる形を言う。故に国体とは、一種族の人民が集まって憂楽をともにし、他国の人に対して自他の区別を作り、自国民同士を見るのに他国民を見るより手厚くし、自分たちが互いに力を尽くすのは他国民のためにするよりも一生懸命にして、一つの政府の下で自ら支配し、他の政府から制御されることを好まず、禍福ともに自分たちで担当して独立するものをいう。西洋の言葉にナショナリティと言うのがこれである。おしなべて世界中で国を建てるものがあるれば各々に国体がある。支那には支那の国体があり、インドにはインドの国体がある。西洋諸国もいずれも一種の国体を備えて自分でこれを保護しないものはない。

この国体の情が起きる由来を調べると、人種が同じによるもの、宗教が同じによるもの、あるいは言語によるもの、地理上のまとまりによるものなどその事情は様々だが、最も有力な原因と名付けるべきものは、ある人民が一緒に世の中の歴史を経験して懐古の情を同じにするものがこれである。あるいはこれらの条件と違って、

国体を全うするものがないわけではない。スイスの国体は堅固だが、国内諸州では、人種が違い言葉も違い宗教も違うところもある。しかし、この諸条件が同じならば、その人民に親和がより多く生まれざるを得ない。ドイツの諸連邦では、各々独立国の体裁をなしているが、言語、文学が同じで懐古の情も共通するため、今日になってもドイツはドイツ連邦の形の国体を保護して他国と区別しあっている。

国体はその国でも必ずしも昔から今まで一様であることが出来ず、かなり変化がある。ある場合は一つになったり分かれたり、またある場合は伸びたり縮んだりするものもある。或いは全く絶えて跡形もなくなるものもある。だから、絶えるか絶えないかは、言語宗教などの諸条件の存亡で決めてはならない。言語宗教は残っている、その人民が政治の権力を失って他国人の支配を受けるときは、国体が断絶したという。例えば、イギリスとスコットランドが統合して一つの政府になったのは、国体が統合されたので双方ともに失うものはない。オランダとベルギーが別れて二つの政府になったのは、国体は分かれたが、他国人に奪われたわけではない。

支那で宋末に国体を失って元に奪われた。これが中華滅亡の始めである。後にまた元を倒してもとへもどり、大明一統の世になったのは中華の面目と言える。しかし、明末になって満州人の清に政権を奪われて、遂に中華の国体が断絶して満清の国体となった。今日に至るまで中華の人民は、昔にならって言語風俗が一緒に、その中にしかるべき人物がいれば政府高官にも登用して、外形は清と明との合体のように見えるが、実態は中華南方の明が国体を失って北方の満清に権力を奪われたものである。またインドがイギリスに征服され、アメリカの原住民が白人に追われたのは、国体を失ったはなはだしい事例である。結局、国体の存亡はその国の国民が政権を失うか失わないかにある。

第二、国にポリテイカル・レジメーションということがある。ポリテイカルとは政治の意味で、レジメーションは正統、本筋と言う意味である。今仮にこれを政統と訳す。その国で行われて広く人民が認める政治の本筋と言うことである。世界中の国柄と時代に応じて政統は一樣でない。君主説によって政統とするものもある、あるいは封建割拠の説で政統と言うものもある。また、議会政治（民衆会議）を正しいとし、あるいは寺院が政治をすることを本筋と言うものもある。

そもそもこの政統が起こる由来は、初めは権力を得るために必ず半ば腕力を使わざるを得ないが、権力を得れば改めて腕力を輝かす必要もなく、これが不要になるだけでなく、権力を得た由来を腕力によるとするのは、権力者の禁句で大変嫌が多い。どんな政府でもその權威の源を聞くと、必ず、自分が権力を持っているのには道理がある。権力を持ってすでに長い歳月がたつと言って、時がたつに従って次第に腕力を捨てて道理に頼るようになる。腕力を憎んで道理を好むのは人の天性で、世間の人も政府の処理が理にかなっているのを見て喜び、歳月を経るに従い、一層これを本筋のものと思うようになって、昔を忘れて今をよしとし、

世の中の物事について不平を訴えることもなくなる。これが政統というものである。

故に政統の変革は戦争によつて起きることが多い。支那で秦の始皇帝が周の末期に封建を倒して郡県制とし、ヨーロッパでローマが衰退するに従い、北方の野蛮人がこれを侵略した後、遂に封建の勢力となったのも、この事例である。そうであつても、文明も次第に進んで学者の議論が權威を増して、併せてまたその国の事情に都合がよければ、必ずしも兵力を用いずに平和のうちに変革することもある。

たとえば、イギリスで、今の政治と千七百年代初頭と比較すると、その趣は天と地ほどの著しい違いがあつて、ほぼ他国の政治のようになったが、イギリスで政權に關して内乱になったのは千六百年の半ばから末までのことで、一六八八年にウイリヤム三世が位に就いた後は、国内で戦争があつたことがない。故にイギリスの政統は百六、七十年の間に大きく変革したが、その間に少しも兵力を用いることなく、知らず知らずのうちに様子を改めて、前の人民は前の政治を本筋と思ひ、後の人民は後の政治を本筋のものと思うだけである。或いは、野蛮な時代でも、兵力を用いなくて政統が変わつたことがある。昔フランスでカロリング朝の人々は、フランス王に家来として仕えたが、實際は權力を握つていたことがあつた。日本で藤原氏の王室に対する關係、北条氏の源氏に対する關係もこの例である。

政統の変革は国体の存亡に關係するものではない。政治の風がどのように変わり幾度かの変化を経ても、自国の人民が政治を行う間は国体を損なうことはない。昔合衆政治だつたオランダは、今日では君主制をいただき、近くはフランスのように、百年の間に政治が十数回も改まつたが、その国体は依然として昔と異ならない。まゑにものべたように、国体を保つことの極みは、他国の人に政權を奪われない一事にある。アメリカ合衆国で大統領になる人は必ず自国で生まれた人を選ぶ例があるのも、自国の人に自国の政治をさせる人情にもとづくのだろう。

第三、血統とは英語でラインと言う。君主が父子で伝えあつて血統が絶えないことである。世界の国で君主の血統を男子に限るものがある、あるいは男女を選ばないものもある、相統も必ずしも父子に限らず、子がなければ兄弟をたて、兄弟がなければさらに遠縁に広げて、親戚中から最も近い者を選ぶという具合である。西洋諸国で君主制を戴くところでは最もこれを重んじ、血統相統の争いから戦争を起こした例は歴史に珍しくない。或いはまた、甲の国の君主が死んで子がいなくて、たまたま乙の国の君主がその近親に当たる時は、甲乙の君主を兼ねて両国一君になることもある。こうしたことはただヨーロッパで行われるだけで、支那にも日本にも例はない。ただし両国の間で一君をいただいても、その国体にも政統にも影響はない。

国体と政統、血統の関係

このように国体と政統と血統は別のもので、血統は改めないが政統を改めることがある。イギリス政治の沿革、フランスのカロリング朝の例がそれである。また、政統は改めるが国体を改めないこともある。世界中にその例は多い。また、血統を改めないで国体を改めることもある。イギリス人、オランダ人が東洋を支配して元の酋長をそのままにしておいて、英蘭両国の政権で現地人を支配し、併せて酋長も束縛するものがこれである。

日本は開闢以来国体を改めたことがない。君主の血統も連綿と続いて絶えたことがない。ただ政統になるとしばしば大きな変革があった。初めは天皇が自ら政治を行い、次いで親戚の大臣なるものが専ら政権を担い、次いで権勢が武家へ移り、またその臣下に移り、また移って武家へ戻り、次第に封建の勢いとなって慶応の末に至った。政権が一旦王室を去って以来、天皇は虚位（実態がない地位）を擁しただけだった。山陽外史は、北条氏を評して天子を見ると孤豚（孤独な豚）のようだった。まことにその通りで、政統の変革がこのように変わっても国体を失わないのはなぜか。言語風俗をとにもする日本人が自らその政治を行い、外国人に少しも政権をゆだねたことがないからである。

しかしながら、ここに私に大いに不審を抱かせるものがある。その理由は何か。世間一般に通じる意見で、もっぱら血統の一方に注意して、国体と血統を混同し、血統を重んじて国体を軽んじる弊害がある事である。もともと我が国の皇統は国体とともに連綿として今日に至るのは、他国にも例がなく珍しいもので、これは一種の国体と言うこともできる。しかしよく物事の筋道を確かめると、皇統が連綿としているのは国体を失わなかった兆候と言うべきである。人身に例えると、国体は身体のようなもので、皇統は目のようなものである。眼の光を見れば身体が死んでいないことがわかるというが、一人の体の健康を保とうとするには、眼だけに注意して全体の生命力を顧みない道理はない。全体の生命力が衰弱すると、目も自然と光を失わざるを得ない。極端な場合に至ると、全体がすでに死んで生命力の痕跡もないのに、ただ眼が開いているのを見て、これを生きた体と見誤る恐れもある。イギリス人が東洋諸国を支配する場合に、体を殺して眼を残す例は少ない。

歴史の記録によれば、血統を連綿として保つのは難しい事ではない。北条の時代以降、南北朝の事情を見てもわかる。その時代には血統に順逆（恭順と反逆、背くこと）があり、争ったこともあるが、ことが収まって今日に至ればその順逆を問うべきではない。順逆は一時の議論に過ぎない。後世から論じれば、同じ天皇の血統であるのでその血統が絶えなかったことを見て満足できる。だから血統の順逆はその時代においては最も大切だったかもしれないが、時代を度外視して、今の心で昔

を推し量り、ただ血統の連綿だけに目をつけて、これを連綿させる方法を無視して論じなければ、忠も不忠も義も不義もあるべきでない。忠臣・正成と逆賊・尊氏の区別も立て難い。しかしながら、よくその時代の有様について考えると、楠氏はたんに血統を争ったのでなく、実は政統を争い、天下の政権を天皇に帰そうとし、困難を先にして容易なことを後にした人である。この様子を見ても、血統を保つことと政権を保つ事のどちらが難易かを知ることができる。

昔からの通論を聞くと、我が国を、金鷗無欠きんおうむけつ（傷のない金の亀のように、完全で欠点がないこと）、万国に絶す（世界に例がない）と言って、意気揚々としているようである。世界に例がないというのは、ただ皇統が連綿としてだけ自負するだけなのだろうか。皇統を連綿とさせるのは難しいことではない。北条、足利のような不忠義者でも、よくこれを連綿とさせることができた。あるいは政統性が外国をはるかに超えるものだったのだろうか。わが国の政統は昔からたびたび変革を経て、その有様は外国と違わず、誇るに足らない。それならかの金鷗無欠とは、開闢以来国体を保って外国人に政権を奪われたことがないという一事にあるだけである。

故に国体が国の本である。政統も血統もそれに従って盛衰をともにするものと言わざるを得ない。中世に、王室が政権を失いまたは血統に順逆があったとしても、金鷗無欠の日本国内で行われたからこそ、今日でも意気揚々としていられるのである。仮に、昔、ロシア人やイギリス人に頼朝がしたことを行わせたなら、たとえ皇統は連綿としても、日本人として決して得意にはなれなかったろう。鎌倉時代には、幸いにしてロシアやイギリスの人もいなかったが、今日では現に來ており、日本国の周囲に方々から集まっている。時勢の移り変わりを考えざるを得ない。

国体を保つために古習の惑溺を一掃

今になって、日本人の義務はただ国体を保つことの一箇条だけである。国体を保つとは、自国の政権を失わないことである。政権を失わないようにするには、人民の智力を進歩させざるを得ない。やるべき項目は大変多いが、智力発生の道で一番の急須は、古習の惑溺を一掃して西洋で行われている文明の精神を採用することである。陰陽五行の惑溺を払いのけなければ、物事の道理を極める道へ入ることができない。人間社会でもまた同じである。古風な束縛である惑溺を取り除かなければ、人間の社会を維持することはできない。この惑溺を脱け出て心地活発（心が活発なこと）の域に進み、全国の智力で国権を維持し、国体の基礎が初めて定まれば、何を心配することがあろうか。皇統の連綿を持続するなどとは簡単なことだ。

試みにいうと、天下の紳士は、忠義のほか心に思うことはないのだろうか。忠義も決して駄目ではないが、忠を行うならば大忠を行うべきである。皇統連綿を守りたいならば、その連綿に光を増して保護すべきである。国体がしつかりしなければ血統にも光があるはずがない。前の譬えにもある通り、全身に精力がなければ眼も光を失う。その眼が貴重と思うなら、身体健康にも注意せざるを得ない、点眼水（目薬）を使って眼の光明を保てるわけではない。この次第から考えれば、西洋の文明は我が国体をしつかりさせ、加えて皇統に光を増すことができる唯一無二のものだから、これを採用することに何を躊躇することがあろうか。断固として西洋の文明を採用すべきである。

前条で古習の惑溺を一掃することを述べた。惑溺の文字ははなはだ広く用いるから、世の事物について様々な惑溺があるが、今これを政府のことについて政府が実威と虚威に別れる由来を示すことにする。すべて事物の便不便是、そのためにする目的を定めなければ決してこれを決められない。家は雨露をしのぐために便利である。衣服は風や寒さをしのぐのに便利である。人間がする様々な行為はすべて目的があつてするものばかりである。しかしながら、長い間使い慣れたあるいはその事物の効用を忘れて、そのものだけを大事にして、これを装い、飾り、愛し、贖し、ひどい場合は他の不便を問題にしないでひたすら保護することもある。これが惑溺で、世に虚飾が起きる理由である。

たとえば、戦国時代に武士が皆二本の刀を身につけていたのは、法律が頼りにならず、人々が自ら身を守るためであつたが、長い間の習わしだったため、太平の世になつても帯刀を止めなかった。廃止しなかっただけでなく、一層その物を重んじ、財産を減らしても刀を飾り、すべて士族の名をもつ者は、老幼を問わず、皆これを身につけていないものはなかった。それなのにその実際の効用を聞くと、刀の外面に金銀をちりばめて、鞘の中には細身のなまくら刀を納めているものがいた。それだけでなく、剣術も知らずに帯刀するものが十に八九人もいた。結局、有害無益なものだが、これをやめようとする人情に背くというのはどういふことか。世の人々は皆帯刀の実用を忘れて、ただそのものを重んじる習慣になつていただけである。その習慣が惑溺である。今、太平の士族に向かって刀を持つている理由を問いただすと、逃げ口上で祖先伝来の習慣と言ひ、士族の徽章というだけで、きつと他にはつきりした理由は聞けない。誰か一人でもうまく帯刀の実用性を挙げ、この質問に答えられる者がいるだろうか。すでにこれを習慣といい、また徽章というときは、その物を廃止する事もできる。あるいは廃止できない実用性があるなら、その内容を変えて実の効用だけをとることもできる。どんな口実を設けても、帯刀によって士族の質量を測る道具という理由はない。

政府もまた同様である。世界万国いずれの地方でも、初めて政府をたてて一国の体裁を設けた由来は、その国の政権を全うして国体を保とうとするためである。政権を維持するために、もともとその権威がないわけにはいかない。これを政府の実威という。政府の役割はこの実威を主張する一事にあるだけである。こうして開

關後の草昧の時代（人智が発達していない時代）には、人民も皆事物の道理に暗くて外形だけを恐れ敬うので、これを支配する方法もまた自然とその趣意に従って、道理以外の威光を用いざるを得ない。これを政府の虚威という。もともとその時代の民心を維持するためにやむをえない権道（支配の方法）で、人民のためを考えれば同類が互いに食い合う獣の世界を抜け出して次第に人に従うことの初步を学ぶものだから、これを咎めるべきではないが、人の本性から権力を持つものは、自然にその権力におぼれて濫用する弊害を免れることができない。

これを例えると、酒をたしなむ者が酒を飲むと、酒の酔いに乗じてさらに酒を求め、「酒よく人をして酒を飲ましむる」と言うように、権力者も一旦虚により威権（威光と力）を得ると、その虚威に乗じてまた虚威を振うようになる。人に虚威をしたいままにする習慣が長くなると、ついには虚によって政府の体裁をつくり、その体裁に様々な飾りを施し、その飾りがますます多くなると、ますます世の人々の耳目を幻惑させる。振り返って見ると、その実用性は失われて、ただ飾りが加わった外形だけを見て、これを一種の金玉（得がたくて珍重すべきもの）と思い、しっかりと保護するために、他の利害得失を捨てて聞き糺すこともなくなるようになる。君主と人民の間が別のもののように無理にその区別を作り出し、位階、服飾、文書、言語、すべてに上下の定式（きまつた儀式）を設ける。いわゆる周唐の礼儀というのがこれである。根拠のない不思議なことを言つて、君主はじかに天の命を受けたと言い、祖先は靈山に登って天の神と会話したといい、夢を語り神のお告げを唱えて、平気で怪しまないものがある。いわゆる神政政府（祭政一致の神政政治）というものが、これである。これはすべて政府が保つべき実威の趣意を忘れて、保つべきでない虚威に惑溺した妄誕（うそ）と言わざるを得ない。虚実が分かれるのはまさにここにある。

この妄誕も昔の妄誕の世では一時的な術であるが、人智が段々開かれてくるとこの術は用いることができない。今の文明の世では、衣冠が美しくても、建物が立派であっても、どうして人の眼をごまかすことができようか。いたずらに識者の哀れみを誘うだけである。たとえ文明の知識人でなくても、文明の事物を見聞きする人は、その耳目も自然と高尚に進歩していくので、決してこの人に妄誕を強いることはできない。こうした人民を支配する方法は、ただ道理に基づく約束を定めて、政法の実威によってこれを守らせる方法があるだけである。今の世で七の大旱魃（中国古代に起きた七年間続いた大干ばつの事）の時のように祭壇を作って雨乞いをしても雨が降らないことは皆知っている。君主自らが五穀豊穡を祈っても科学の法則を動かすことができない。人々のお祈りで一粒の粟も増やすことも出来ない道理は、学校の子供でも知っている。昔は剣を海に投げて潮が引いたこともあったが、今の海潮には干満の時刻がある。昔は紫煙がたなびくのをみて英雄の所在を知ったが、今では人物を雲の中に求めることは出来ない。これは今と昔で事物の道理が異なるためでなく、人智や品位が昔と変わったことの証である。人民の品行が次第に高尚に進み、全国の智力も増して、政治に実の権威を得るのは国のためには祝うべき事ではないだろうか。

それなのに今、実を捨てて虚によつて、外形を飾ろうとして、却つてますます人を痴愚に導くのは惑溺のはなはだしいものである。虚威を主張したいと望むならば、民衆を愚にして開闢の始めに戻るほうが上策である。人民が愚に戻れば、政治の力は次第に衰弱するだろう。政治の力が衰弱すれば、国はもはや国でなくなる。国がその国でなくなれば、国の体もあることが出来ない。こうしたことは、国体を保護しようとして逆に自分でこれを害するものである。この始末は不都合と言うべきである。例えばイギリスでも、先の王の意思を継いで君主専制の古風を守ろうとしていたら、その王統はもつと早く絶滅したことは言うまでもない。そうならなかった理由は何か。王室の虚威を減少して民権を盛んにさせ、全国の政治に実の勢力を増やして、その国力とともに王位も堅固にしたためである。王室を保護するための上策だったといえる。つまり、国体は文明によつて損じるものではない。実際は文明によつて価値を増すものである。

世界中のどの人民も古習に惑溺する者は、必ず由来が古くて長いことを誇り、連綿として長く続くとこれを一層ひどく尊んで、その様子はあたかも好事家が古物を尊ぶようである。インドの歴史に言える事がある。初代の王をプラザマ・ラジャといい聖徳の王（優れた智徳を持った王）だった。この王が即位のときが年齢二〇〇万歳で、在位六三〇万年で位を王子に譲り、さらに一〇万年を経て世を去ったといわれている。また、同国には、ヌマ法典という典籍がある。（インドの伝説に、この典籍は造化の神であるプラザマの子ヌマから授かったもので、こう名付けたという。千七百九十四年イギリス人ジョーンズ氏がこれを英文に翻訳した。本の趣意は、神道専制説を巧みに記したものであるが、修得の簡条に至るとすこぶる厳正で議論も立派になり、その諸説にはキリスト教と符合するものが大変多い。符合するのは教えの内容だけでなく、文章もまた類似している。例えばヌマ法典で、人に会うときは悲しく感じるようにして見せ、相手に不平を訴えさせてはならない。行いで人を害してはならない。また心で人を害してはいけない、人をのしつてはいけない。人にのしられてもこらえて我慢すべきで、怒りにあつても怒りに報いてはならない、云々。またキリスト教のダビデとヌマ法典の文によく似た文章がある。ダビデの文に、愚人は自らの心にゴッド（神）がないと言う。ヌマ法典に悪人は自らその心の中で誰も自分を見ていないといえども、神は明らかにこれを見分け、かつ胸中の精神も知っている、とある。このように両者は符合している。以上はブランド氏の書物から抄訳。この典籍を人間世界に授かったのは今からおよそ二〇億年前という。大変な古物である。インドの人は、この尊い典籍を守り、この古い国風を保つて安心して眠っている間に政權を西洋人に奪われて、神霊な一大国もイギリスの台所になり、プラザマ・ラジャの子孫もイギリス人の奴隷になった。

かつ、六〇〇万年といい二〇億年といつて、天地とともに長いと自負するものも、もともと根拠のないおごり高ぶった言葉で、かの典籍の由来も実際は三千年よりも長くないものであるが、しばらくの間はその高慢に任せて語らせれば、インドの六〇〇万年に対して、アフリカに七〇〇万年のものがあるといい、その二〇億に対して三〇億という者もいて、インド人も口を閉ざさざるを得なくなる。つまるところ、子供の戯れである。また一言でその自負をくじくことも出来る。天地の仕掛けは永遠で広大なものであり、どうして個々の典籍や系統とその長短を争う必要があろうか。万物の創造は一瞬に過ぎず、たちまち億万年が過ぎていく、かの二

○億年の月日もただ一瞬の小さな時間に過ぎない。このわずかな時間について無益な議論に費やし、かえって文明の大計を忘れるのは、軽重の区別を知らない者である。この一言を聞かせれば、インド人もまた口を開くことができなくなる。故に、この世の事物は、ただ古いだけで価値を生むものではない。

前に言ったとおり、わが国の皇統は国体とともに連綿と続いて外国に比類がない。これからわが国は一種の君国並立（君主が統治する国）の国体とすることができ。しかしながら、たとえこの並立を一種の国体といつても、これを守り続けて後退するのではなく、これを活用して前に進むべきである。これを活用すれば場所によつて大きな効能が得られる。故にこの君国並立が尊い理由は、古来からわが国に固有のものであったためでなく、これを維持して政権を保ち、文明を進めさせるから貴いのである。ものが貴いのでなくその働きが貴いのである。家屋の形を貴ぶのではなく、雨露をしのぐ効用を貴ぶようなものである。もし、祖先伝来の家作のやり方といつてその家の形だけを貴ぶならば、紙で家を作ることにも出来る。故に君国並立の国体がもし文明に適しなければ、適さない理由は必ず習慣が長い間に生んだ虚飾惑溺のせいだから、その虚飾惑溺だけを取り除いて実際の効用を残し、それに応じて政治の趣を変革して進んでゆけば、国体と正統と血統の三者は互いに後退せずに今の文明とともに並立することができる。

たとえば今、ロシアでその政治を改革して、明日からイギリスの自由の風を真似ようとしても、実際に行うことが出来ないばかりか、たちまち国に大きな害を起こすことになる。害を起こす理由は何か。ロシアとイギリスの文明はその進歩の度が違い、人民にも智愚の差があるので、今のロシアは今の政治がその文明に適するようになっているからである。そうであっても、ロシアが長く旧物の虚飾をかたくなに守つて、文明の得失を考えずに必ず固有の政治をいただくことは、あえて願うところではなく、ただ文明の度を察して、文明が一步進めば政治もまた一步進み、文明と政治が一步一步相伴うことを望むだけである。このことについては次章の終わりにも論じるところがあるのでそれを参考にしてほしい。

（この書で西洋と言い、ヨーロッパと言うのもその意味は一つである。地理を記す時はヨーロッパ、アメリカと区別があるが、文明を論じるときはアメリカの文明もその源はヨーロッパから移したものである。ヨーロッパの文明とはヨーロッパ風の文明と言う意義のみで、西洋と言うのもこれと同じである。）

第三章 文明の本旨を論ず

文明とは何か

前章の続きに従えば、ここでは西洋文明の由来を論ずべき場所だが、その前に、まず文明が何ものであるかを知らないわけにはいかない。それを形容するのは大変難しい。単に形容するのが難しいだけでなく、極端な場合には、世論において文明を是とするか非とするか争うものがある。この論争が起きる由来を調べると、文明の意味を広く解するか、狭く解するかによる。狭い意味に解せば、人間の力によりむやみに人の欲望を増やし、衣食住の虚飾を多くするという意味に解することができる。また広い意味に解すれば、衣食住の安楽だけでなく、智を磨き徳を向上させて人間として高尚の地位に昇る意味に解することができる。学ぶ人たちが文明の字義に広狭があることに着目すれば、論争に時間を費やすこともなくなる。

そもそも文明は相対的な言葉で、その進歩には限りがない。ただ野蛮の有様を抜け出して次第に進歩することをいう。元来人は互いに交際する性質がある。一人孤立する時はその才智を発生させる手立てもない。家族が集まってもまだ人間の交際を果たしたとはいえない。世の中で互いに交わり、人民がお互いに触れあい、その交際が一層広がり法律も一層整備されてくると、人情も一層厚くなり知識も一層広げることができる。文明とは英語でシビリゼーションと言う。ラテン語のシビタスからきたもので、国と言う意味である。故に文明とは、人間交際（社会）が次第に改善されて良い方へ赴く有様を形容した言葉で、野蛮無法な独立に対して一国の体裁をつくるという意味である。

文明というものは至大至重（この上なく大きく重い）で、人間の何事につけてもこの文明を目的にしないものはいない。制度といい学問、商売、工業、戦争、政治もこれらを互いに比較してその利害得失を論じるためには、ただ文明を進歩させるものを利とし得として、これを後退させるものを害とし失とするだけである。文明はあたかも一大劇場のようなもので、制度、学問、商売などのものは役者のようなものである。この役者なるものは、各々得意の芸を演じて一定の仕事をして、うまく劇の趣旨になつて真情を映し出して、見物客を喜ばせる者を上手い役者とする。進退の度を誤り、言葉が節度を失い、笑いも真に迫らず、泣くのも情がこもらなくて、芝居の組み立てがそのために趣を失うものを名付けてへたな役者と呼ぶ。或いはまた、泣き笑いは真に迫って優れていても、場所と時を間違えて、泣くべき時に笑い、笑うべき時に泣く人もまたへたな芸といえる。

文明はあたかも海で、制度、学問以下のものは川のようなものである。海に注ぐ水量が多い川を大河と呼び、少ないものを小河と言う。文明はあたかも倉庫のようなものである。人間の衣食、生業なりわいの資本、生活力で全部この倉庫にないものはない。嫌うべき事物でも、この文明を進歩させる効果があれば、その欠点を不問にかまわない。例えば、内乱、戦争のごときものだろうか。はなはだしいものは独裁、暴政も文明を進歩させる助けになりその効能が著しく世に顕われる時になれば、以前の醜さを忘れてこれを咎めるものはいない。あたかも物を買ってその値段が高すぎても、それを使って大いに便利を得ることができれば、半ば前日の損亡を忘れるようなものだ。これが世間の人情の常である。

文明とはいえない社会の例

今仮にいくつかの問題を設けて文明があるところを詳しく述べる。

第一。ここに一群の人民がいる。外観は心のどかに快適で、税金は低く力役も少なく、裁判も正しくないわけではなく、悪を懲らしめることも行われて、概していえば、人間の衣食住の様子は上手く取り計らわれて特に訴えるべきこともない。しかし、ただ衣食住の安楽があるだけで、智徳を生み出す力をことさらに塞いで自由にさせず、人民を牛や羊のように見て、人民を放牧して養い、ただ彼らの飢えや寒さに注意するだけである。その様子は、単に上から抑圧する類でなく、四方八方から締め付けるようなもので、昔、松前藩が蝦夷人を取り扱ったのがこれである。これを文明開化と言うことが出来るだろうか。この人民の間に智徳の進歩の様子を見ることが出来るかどうか。

第二。ここにまた一群の人々がいる。その外観の安楽さは前段の人民ほどではないが、耐えられないほどでもない。その安楽が少ない代わりに、智徳の道が全くふさがっているわけでもない。人民の中には高尚な説を唱える者もあり、宗教道徳の議論も進歩しないわけではない。しかし、自由の大義は少しも行われることがなく、あらゆる事物が人の自由を妨げようとしている。人民の中に智徳を得る者がいても、その人はあたかも貧民が救助の衣食をもらうように、自分で得るのでなく、他人に頼んで得るに過ぎない。人民の中で道を求める者がいても、その人は自分のために求めることが出来ず、人のために求めている。アジア諸国の人民で、神政府のために束縛を蒙り、活発な気象を失い、蠢爾卑屈（無知なものが卑屈に騒ぐこと）の極みに陥っているものがこれである。これを文明開化と言えるだろうか。この人民の間に文明進歩の痕跡を見ることが出来るかどうか。

第三。ここにまた一群の人民がいる。その有様は自由自在だが、少しも物事に秩序がなく、少しも同権の考えが見えない。大が小を抑えつけ、強が弱を抑えて、世

の中を支配するものはただ暴力だけである。例えば、昔のヨーロッパはそんな具合だった。これを文明開化ということが出来るだろうか。もちろん文明の種はここに芽生えるといえども、この有様を名付けて文明という事はできない。

第四。ここにまた一群の人民がいる。人々の身は自由でこれを妨げるものはない。人々は力を盛んに發揮し、大小強弱の差別はない。行きたければ行き、止まりたければ止まり、各人の権利が異なることはない。しかしながら、この人民は未だ人間交際の味を知らず、人々はその力を自分一人のために費やして全体の公共の利益には目がとどかず、一国がどんなものかも知らず、交際がどんなものかも知きまえず、代々生まれては死に、死んでは生まれて、生まれるときの有様は死ぬときと変わらず、何代たつてもその土地に人間が生い立ち育った痕跡を見ることができない。例えば、今日、野蛮な人種と呼ばれるものがこれである。自由同権の気風は乏しくないが、これを文明開化といえるかどうか。

この四つの事例をみて一つも文明と言えるものはない。それなら何を指して文明と名付けるか。いうならば文明とは人の身を安楽にして心を高尚にすることをいうのである。衣食を豊かにして人の品位を貴くすることをいう。身の安楽だけで文明といえるだろうか。人生の目的は衣食だけではない。もし衣食だけが目的とするなら、人間は蟻やミツバチのようなものである。これを天から与えられた使命ということは出来ない。あるいは心を高尚にすることだけで文明といえるだろうか。天下の人は皆汚い街に住んで水を飲む顔回（春秋末期の魯の賢人で、陋巷で貧乏しながら徳行をなした人）のようになるだろう。これも天命とはいえない。故に人の心身がともに安心した境遇をえることが出来なければ、文明の名を下すことは出来ない。

しかし、人の安楽には限りがあるべきでなく、人心の品位もまた極みがあるべきではない。安楽といい高尚というのは、更に高いところを目指して進歩するときの有様を指して名付けたもので、文明とは人の安楽と品位の進歩をいうのである。また、この人の安楽と品位を得させるものは人の知徳だから、文明とは結局、人の知徳の進歩ということが出来る。

文明は特定の政治体制を要求しない。

前に述べたとおり、文明は、この上なく大きくて重いので人間のすべてを網羅し、その影響は際限がなく、今正に進歩している状態にある。世の人々がこの意義を知らずに、ひどい間違いに陥ることがある。ある

人が言うに、文明とは人の知徳以外に現れるものという。それなのに今、西洋諸国の人を見ると、不徳な振る舞いが多く、或いは詐欺によって商売をするものがあり、或いは人を脅かして利益をむさぼるものがあり、これらを有徳の人民とは言えない。また、至文至明といわれるイギリスの支配下にあるアイルランドの人民は、生計の道に通じなくて生涯無知なまま芋を食べているだけで、これは智者ということが出来ない。このことからみると、文明は必ずしも知徳と並んで行われるものではない、と。

しかしながら、この人は今の世界の文明を見てその頂点と思い、かえってその進歩に至った由来を知らないものである。今日の文明はまだ発展の半分にも至っておらず、どうして急に清明純美の時を望むことなど出来るだろうか。この無智無徳の人は、とりもおさず文明の世界の病氣である。今の世界に向かって文明の極度を催促するのは、たとえれば世に十全健康な人を探すようなものである。世界に人間は多いとはいえ、身に一点の病もなく、生まれてから死ぬまで少しの病にも罹らないものがあるだろうか。決してありえない。病理からみれば、今の世の人はたとえ健康に見えることもあるが、これは帶患健康、病をもっているが健康な状態といわざるを得ない。国もまたこの人のようなものである。たとえ文明と呼ばれても、必ずたくさんの欠点がないわけではない。

ある人が言うに、文明は大きく重いので、文明に道を譲っている。ところで、文明の本旨は上下同権にあるのではなかったか。西洋諸国の文明をみると、改革の第一番は必ず貴族を倒すことで、イギリス、フランスその他の歴史を見てもそれを実証出来る。近くは我が日本でも、藩を廢して県を置き、士族はすでに権力を失い、華族もまた手も足も出ない。これもまた文明の趣意でないだろうか。この道理を広げると、文明の国では君主をたてまつることが出来ないようだが、果たしてどうか。

答えていうと、これは片目で天下を窺う論である。文明は大きくて重いだけでなく、広大でゆったりとしている。どうして君主を認めることが出来ないことがあるか。君主も、貴族も置くことが出来る。どうしてこれらの名称にこだわって個々に疑いを抱くには及ばない。

ギゾー氏が文明史で述べていることがある。君主政は人民の階級制度を頑なに守っているインドのような国でも行うことが出来る、或いはこれに反して人民の権利が同等になり、漠然と上下の区別をつけない国でも行うことが出来る、あるいは専制抑圧の国でもできる。あるいは開化して自由になった国でも行うことが出来る。君主はあたかも一種の珍しい頭のようなもので、政治や風俗は体のようなもので、同一の頭を種類の違う体にのせると君主はあたかも一種珍奇な果実で、政治風俗は木のようなものである。同一の果実がうまく異なった種類の木に実ることが出来る。この言葉はまことにその通りである。

すべてこの世の政府は、ただ便利のために設けられたものである。国の文明に便利なものなら、政府の体裁は君主でも共和でも、名を問わないで実をとるべきである。開闢以来今日に至るまで、世界で試みられた政府の体裁には、立君独裁（絶対君主）、立君定律立憲君主、貴族合議（貴族制）、民庶合議（民主制）があるが、その体裁だけをみてどれが便利でどれが不便と決めてはいけない。ただ一方に偏らないことが緊要である。君主制は必ずしも不便ではない、共和制が必ずしも良ではない。千八百四十八年、フランスの共和政治は公平の名目だったが実際は残酷なものだった。オーストリアでフランス二世の時代には独裁政治だったが寛大な実績があった。今のアメリカの合衆政治は支那の政府よりは良いといえるが、メキシコの共和制はイギリスの君主の政治にはるかに及ばない。だからオーストリアやイギリスの君主政治を良としても、このために支那に君主制を望むことはできない。アメリカの合衆政治を快く思っても、フランスやメキシコの例に倣うべきではない。政治はその実態についてみるべきで、その名だけを聞いて品定めすべきでない。政府の体裁は必ずしも一様でないので、議論に当たっては、学ぶ人は適切に心を寛大にして、一方に偏ってはならない。名前を争って実態を害することは、古今に例が少なくない。

支那や日本では君臣の道を人の本性と称して、人に君臣の道があるのはあたかも夫婦親子の道があるようなもので、君臣の区別は人が生まれる前から決まっていたと思い込んでいる。孔子のような人もこの惑溺から抜け出ることができず、生涯で心に思ったことは周の皇帝を助けて政治を行うか、又は窮迫するあまり諸侯でも地方官とであっても自分を雇ってくれる人がいれば仕え、とにかく土地人民を支配する君主に頼んでことをなさそうとする以外の方法がなかった。結局、孔子も未だ人の本性を極める道を知らず、その時代の物事の有様に目を遮られ、その時代に生きた人民の気風に心を奪われて、知らず知らずのうちにその中に取り込まれて、国を立てるのは君臣のほかに方法がないと決め込んで、教えを残しただけである。いうまでもなくその教えで君臣のことを論じた趣意はとも純粋で正しく、その局面にいてこれをみれば差し支えないだけでなく、いかにも人がすることでも最上のものであるように思われる。しかし、もともと君臣関係は人が生まれた後にできたものだから、これを人の本性とはいえない。人の本性のままに備わるものが本である。生まれた後にできたものは末である。事物の末について議論に純正なものがあると言っても、それによって本を動かすことはできない。

たとえば、昔の人が天文学を知らなくて、ひたすら天が動くと思ひ、地静天動の考えをもとに無理に四季循環の勘定を決めて、その説が一通り筋道を備えたように見えるが、地球の本当の性質を知らないために、遂に大きく誤って星宿分野（天体を⁸⁸に区分して星座の所在を決めたもの）の間違った説を作り、日食月食の理論も解くことができず、実際にも不都合なことが大変多かった。もともと昔の人が地静天動と言うのは、日、月、星座の動きをみて、見たとおりに推測して決めただけのことだが、実際を確かめれば、これは地球と他の天体が相対して地球が動くために生じた現象だから、地動が本来の性質で、現象は末の現象である。末の現象を誤認して本来の性質ではないことが分からなかった。天動説に道理があるとしてそれを主張して地動説を排するべきではない。その道理は決して真の道理ではない。

つまり、物についてその理論を極めないでただ物と物の関係だけを見て無理に作った説である。もし、この説が真の理論とするならば、走る船の中から海岸が走るような様子を見て、岸が動き船は静かであると言わざるを得ない。大きな誤解ではないだろうか。だから天文を議論する時は、まず地球が何物でその運動がどうなっているかを調べて、その後にこの地球と他の天体との関係を明らかにし、季節循環の理論も説くべきである。故に、物があつてその後に倫理（人が守るべき道）があるのであつて、倫理があつてその後に物が生じるのではない。憶測で先に物の倫理を説いて、その倫理によつて物理をそこなつてはならない。

君臣論も同じようなものである。君主と臣下の間柄は人と人の関係である。この関係の道理にはみるべきものがあるといつても、その道理はたまたま世に君臣なるものがあつてその後にできたものだから、この道理を見て君臣を人の本性と言うべきではない。もしこれが人の本性だと言うと、世界中の国で人がいれば必ず君臣でなければならぬ理屈になるが、事実は決してそうではない。人間世界で父子、夫婦でない者はいない。大人と子供、友達でない者はいない。この四者は人の生まれつき備わつた関係で、これは本性と言うべきといえるが、君臣に限つては地球上の某国に關係がないところがある。近年民主主義の政府を立てた諸国がそれである。この諸国には君臣がないが政府と人民の間に各々義務があつて、治風は大変美しいものがある。

天に二日、地に二王なし（礼記にある言葉で、一国に二人の君主はいないの意味）とは孟子が言つた言葉だが、現に王がない国があり、しかもその国民の有様は唐虞三代（堯と舜の時代を併せて呼ぶ名称で、中国史上理想的な太平の世のこと）にくらべてはるかに傑出しているのはどういふことか。仮に孔孟が今日生きていれば、果たしてどんな顔をしてこれらの諸国の人民を見ることだろうか。聖賢の手落ちと言える。

故に立君政治（君主制）を主張する者は、まず人間の本性がどんなものかを考えてその後に君臣の義を説き、その義なるものが人の本性から生まれたものか、或いは人が生まれた後に偶然的な事情で君臣の關係が生じ、その關係についての約束を君臣の義と名づけたものか、事實に基づきその前後を明らかにせざるを得ない。わだかまりのない平静な気分でしたつかりと自然の道理を考えれば、必ずこの約束が偶然に出てきた由縁を明らかにできる。それが偶然であることが分かれば、次にはその約束の便不便を論じないわけにはいかない。事物について便不便の議論を許すのは、これに手を加えて改革すべき余地があることの証である。手を入れて変革すべきものは自然の法則ではない。故に子は父になることはできず、婦人は夫になることはできない。父子夫婦の間は変えがたいが、君主は変えて臣下になることはある。湯武の放伐がこれである。あるいは、君臣が地位を同じにして肩を並べることが出来る。わが国の廢藩置縣がこれである。これからみれば、君主政治も改められないわけではない。これを改めるかどうかの決め手は、その文明に便利か不便かを考えることにあるだけである。（ある西洋学者の説に、君臣は支那日本に限らず、西洋にも、マスターとサーバントの称号がある。君臣の意味と言う者もあるが、西洋と東洋の君臣はその意味が同じではない。かのマスター、サーバントに当たる文字がないので、仮

に君臣と訳したが、この文字にこだわってはいけない。私は、昔から和漢の人々に認められた君臣を君臣と言うのである。例えば昔、我が国で主人を殺す者は磔、家来を手打ちにする者は差し支えないといわれる。この主人や家来は、君臣である。封建の時代の大名と藩士の関係は明らかに君臣と言える。）

アメリカ民主制の理想と現実

前の論によれば、立君政治（君主政治）はこれを変革することが出来る。そこでこれを変革して合衆政治を採用し、この政治をもつて至善の頂点とすることが出来るだろうか。決してそうではない。北アメリカに一族の人民がある。今から二五〇年前、その種族の先入者（ピルグリム・ファーザーズをいう。総勢一〇一人でイギリスを去ったのは千六百二十年のことである）。イギリスの厳しい政治に苦しみ、君臣の道理を嫌がって、国を捨ててアメリカへ来て、苦勞して次第に自立のきっかけを開いてきた。その地がマサチューセッツのプリマスで、その古跡は今でも残っている。その後有志の人々が後を追ってきて、本国から移る人が大変多く、場所を選んで住まいを定めてニューイングランドを開き、人口も次第に増加し、国の財政も次第に増えて、千七百七十五年になると十三州の地を占め、遂に本国政府に背いて八年の苦戦の末、やっと勝利をおさめて、初めて一大独立国の基礎を開いた。今のアメリカ合衆国がこれである。

そもそも、この国が独立した由来は、その人民が自分だけの利益を考えるのではなく、あえて一時的に野心を盛んにしたわけでもない。至公至平（公平な天の道理）に基づいて、人の権利と義務を保護し、天から与えられた幸福を全うしたためだった。その趣旨は独立当時の檄文（独立宣言）を読むとわかる。ましてやそのはじめ、かの一〇一名の先人が、一六二〇年十二月二十二日に、風雪の中を上陸して海岸の石の上に足を止めたその時には、何ら一点の私心もなかった。いわゆる本来無一物で、神を敬い人を愛すること以外に余念がないことは明らかである。今この人々の心に思うことを推し量ると、暴君汚吏を嫌うことはいまでもなく、或いは全世界から政府なるものを廃止して痕跡もなくしてしまおうとするほどの意志に他ならない。二五〇年以前にすでにこの精神があった。次いで一七七〇年代、独立戦争もこの精神を受けて、実際にこれを実現したものである。戦争が終わりその後政体を作ったのもこの精神に基づいたものである。以降国内で行われた各種の工業、商売、政令、法律などすべての人間交際の道も、この精神を目的にしそれに向かうものだった。そうであるならば合衆国の政治は、独立の人民がその気力を盛んにして、思い通りに定めたものだから、その風俗は純精無雑で、真に人が留まるべきところに留まり、安楽国土の真の境地に似たものになるべきはずなのに、今日になって事実を見ると、決してそうではない。

合衆国の政治には人民が一緒になって暴力を行うことがある。その暴力の程度は君主独裁の暴力と異ならないが、ただ一人の意志から出るものと大勢の人々の手に

なるものと、その趣が異なるだけである。また、合衆国の風俗は簡易を尊重する。簡易はもともと人間の美事だが、世の人が簡易を喜ぶと、簡易を装って世間に迎合する者や簡易を偽って人を脅かす者もある。あたかも田舎者が朴訥なふりをして人を欺くようなものである。また、合衆国で賄賂を禁じる法律が大変細かくあるが、細かく禁じるほど、それは一層煩繁に行われる。その次第は日本で博打を厳しく禁じながら、盛んに流行しているようなものである。

こうした細かなことを列挙すれば際限がないが、これをさしおいて、世論が合衆政治が公平だとする理由は、その国民一般の心によって政治を行い、人口百万人の国では百万の心の一つにしてことを決定するために、公平であるというものである。しかし事実は大いに違うことがある。その一つをあげる。

合衆国で代議士を選ぶのに、入札（選挙）を使って、多数の方に落札する方法がある。多数となれば、一枚でも多ければ多数になるので、万一、国中の人氣が二組に分かれて、百万の人口の中で一組を五十一万人、一組を四十九万人として札を投じれば、選挙に当選した人物は必ず一方に偏り、四十九万人の人は最初から国等の議論にあずかれなくなるわけである。またこの選挙で当選する代議士の数を百人とし、議会に出席して大事な国事を議決する時に、例のごとく入札を使って、五十人と四十九人の差になると、これもまた五十一人の多数に決めざるをえなくなる。故にこの決議は、全国の人民の多数に従うのでなく、多数中の多数で決定し、その差が極めて少ない場合には、おおよそ国民四分の一の心で他の四分の三を制圧する割合である。これは公平とはいえない。（ミル氏代議政治論のうち）。このほか、代議政治のことについては、はなはだ議論が入り組むものがある。簡単にその得失は決められない。また、君主の政治には、政府の威力で人民を苦しめる弊害がある。合衆の政治には、人民の意見で政府を煩わせる心配がある。

故に、政府がそのわずらわしさに耐えられなければ、たちまち兵力に頼りついには大きな禍を招くことがある。合衆政治に限って戦争が少ないということはない。最近では千八百六十一年奴隷売買の議論から合衆国を南北に分けて、百万の市民が急に凶器を持って未曾有の大戦争を開始して、兄弟が殺し合い同類が傷つけあって、内乱四年の間に、使った費用や失った人数はその数も分からないほどであった。もともとこの戦争が起きた原因は、国内の上流の紳士が奴隷売買の悪習を憎み、天理人道（自然の道理や人道）を主張して事件に及んだもので、人間界の一美談と言うこともできるが、いったん戦争が起されれば、ことの枝末に枝末が生じ、理と利が混ざりあって、道と欲が乱れあって、ついにはもとの趣旨があつた所も分からなくなつて、その事件の痕跡を見ると、つまるところ、自由国の人民が互いに権力をむさぼりあって、私欲を盛んにしようとするものにほかならない。その状況は、あたかも天上の樂園で群鬼が戦うようなものだった。もし、地下の先人がこれを知れば、この群鬼が戦うのを見て何と言つたろうか。戦死者も黄泉の国へおもむくというが、先人を見たら顔色を失うだろう。

人間万事試験の世の中

また、英の学士ミル氏が書いた経済書では、ある人の説に、人類の目的は進歩することであり、足で踏み手で推して、お互いに相手を踏み倒しても先を争わなければならぬ。これが生産進歩のために最も望ましい有様と言つて、単に利益を争うことが人間最上の約束と思う者がいるが、私の意見ではこれはよいことではない。今日世界中でこの有様を実際に映し出しているのはアメリカ合衆国で、白人の男子が集まつて、不正不公の束縛から逃れて別に一世界を開いている。人口が増え、財産も豊かになった。土地も広くて耕してもまだ余裕があり、自主自由の権利も広く行われて、国民もまた貧困がどんなものかも知らず、至善至美の便利さを得ていたが、一般の風俗を見ると、怪しいことに、国内の男子は生涯忙しく金銭を追ひ、婦人は生涯励んでそのお金を追いかける男の子を生み続けるのみで、これを至善の社会と言えるだろうか。私はそうは思わない。このミル氏の説を見ても合衆国の風俗についてその一端を窺うことができる。

この所論からみれば、君主政治は必ずしも良ではない、民主政治は必ずしも使い勝手がよいわけでもない。政治の名称を何とつけようと、結局、社会の中の一つにすぎないのだから、わずか一つの体裁を見て、文明の本旨を判断してはならない。その制度が実際に不便ならば改めることもできる。あるいは事実上支障がなければ改めないこともできる。目的はただ文明に達することの一事にある。これを達成するために様々な手段がある。したがって、これを試み、次に改め、たくさん試験を経て、その際に多少の進歩が出来るので、人の思想は一方に偏つてはいけぬ。ゆつたり落ち着いて余裕を持つことが必要である。

世の物事で試さずに進歩するものはない。たとえ試してよく進んでも、未だその頂点に達したものはあることは聞いたことがない。開闢の初めから今日にたるまで、これを試験の世の中ということもできる。各国の政治も今まさに試験中だから、急にその良否が決められないことはいうまでもない。ただその文明に貢献できるものを良政府と名付け、これを寄与することが少ないか又はこれを害するものを名付けて悪政府というだけである。だから、政治の良否を評するのは、その国民が達した文明の程度を測つて、決定すべきである。世に未だ至文明の国がないので、至善至美の政治もまたありえない。或いは文明の頂点に達すると、どんな政府も全く無用の長物になってしまう。もしそうなった時に、どうして政府の体裁などを選ぶ必要があるか、どうして名義を争う必要があるか。今の世の中の文明は進歩の途中にあるので、政治もまた進歩の途中にあるのは明らかなことである。ただ、各国は互いに数歩の前後があるだけである。

イギリスとメキシコを比較して、イギリスの文明が優れているなら、その政治もまた優れていることになる。合衆国の風俗はよろしくなくても、支那の文明に比較して勝るところがあれば、合衆国の政治は支那より良いことになる。故に、君主制も共和制も、良だと言えばともに良であり、不良と言えどもともに不良である。

且つ政治だけが独り文明の源ではない。文明に伴って政治も進退し、文学、商売などの諸件とともに、文明の中の一部分で働くものということは前に述べた。故に文明は例えば鹿のようなもので、政治等は射手のようなものである。射手はもともと一人ではなく、射術（射る仕方）も人により流儀が異なる。ただその目的は、鹿を撃ってこれを捕ることにあるだけである。鹿さえ獲れば、立って射ろうと、座って射ろうと、あるいは場合によっては素手で捕ろうとも、支障ない。特に、一家の射術にこだわって、当たるはずの矢を打たず、獲るべき鹿を失うのは、狩猟が下手といえる。

第四章 一国人民の智徳を論ず

一国全体の気風

前章で文明は人の智徳の進歩であると言った。それならここに有智有徳の人がいれば、この人を文明の人とよべるだろうか。呼べる、その人は文明の人といえる。しかし、その人が住んでいる国を指して文明の国と呼べるかどうかは、未だ分らない。文明は、一人の個人について論じることではない、全国の有様についてみるべきものである。今、西洋諸国を文明と言い、アジア諸国を半開と言うが、二、三人の人を取り上げて論じれば、西洋にも頑なで愚かな人がおり、アジアにも智徳がある優れた人材がいる。そういうわけで、西洋を文明としアジアを不文明とするのは、西洋ではその愚か者がその勢いを強めることができず、アジアではその俊英の人が智徳の勢いを強めることができないためである。勢いが強く出来ないとはどういうことか。個々人の智愚によるのではなく、全国に行き渡っている気風に制約されるからである。

故に、文明のあるところを探すには、まずその国を支配する気風を調べざるを得ない。かつ、その気風は一国の人民の智徳の現象で、進んだり退いたり、あるいは増減し、進退増減は一瞬も止むことなく、あたかも国全体の運動の源であるために、一旦その気風が判ればその国の物事は一つとして明瞭にならないものではなく、その利害得失を調べて論じることが懐の中で財布を探すよりも容易である。

以上のようにこの気風なるものは、一人一人の気風でなくて全国の気風であるために、今その場でこれを見ようとしても、目で見られず、耳で聞くこともできない。たまたま見聞したことがあっても、その考えは見聞する状況で常に齟齬を生じ、ことの本来の姿を断定するわけにはいかない。例えば、一国の山や川を計るには、国中の山川の坪数を測量し総計を記して、これを山国と名付け、川国と名付けることができる。まれに大山や大川があっても、にわかには憶測でこれは山国、川国と言えないようなものである。故に、全国の人民の気風を知りその智徳の様子を探ろうとするには、その働きが集まって世間一般の実績に現れるものを見て、調べざるをえない。あるいはこの智徳は個々人の智徳でなく、国の智徳と名付けるべきものである。国の智徳は、国中一般に広まっている智徳の総量を指して言うためである。その量の多少を知れば、進退増減を調べてその運動の方向を明らかにすることもまた難しいことではない。

そもそも智徳の運動は、大風や川の流れのようなものである。大風が北から南へ吹き、川の水が西から東へ流れ、その緩急や方向は、高い場所から眺めればつき

り見えるが、家の中にいると風は無いと同じで、土手の淀みを見ると水は流れていないように見える。あるいはこれを妨げるものがあれば、方向を全く変えて逆に流れることもある。逆に流れるのは防げるものがあってそうなるのだから、一部分の逆流を見て川の流れの方向を臆断することはできない。必ずその所見（観察）は高遠にせざるを得ない。

たとえば経済論で、富裕の基礎は正直と勉強（仕事）と倹約の三箇条にあるという。今、西洋の商人と日本の商人を比較して、その商売の様子をみると、日本の商人は必ずしも不正ではない。また必ずしも怠け者でもない。それだけでなくその質素倹約の風になるとはるかに西洋人より優れている。それなのに、国全体の商業の実績に現れる貧富についてみると、日本ははるかに西洋諸国に及ばない。また、支那は昔から礼儀の国と称して、その言葉は自負に似ているが、実態もなければ名もあるわけがない。昔から支那には実際に礼儀正しい紳士がいて、そう呼ぶことが出来るものが少なくなかった。今日になってもそういう人物は少なくないが、全国の様子を見れば人を殺し物を盗むものはなはだ多く、刑法は極めて厳格だが罪人の数は常に減ることがない。その人情風俗が卑屈で賤劣なことは、真にアジアを象徴したもので言うことが出来る。だから支那は礼儀の国ではなく、礼儀をわきまえた人が住む国というべきである。

人心は日々変化するもの

人の心の働きは様々で、朝と夕方で異なり、夜と昼で同じではない。今日は身分が高い人でも明日は卑しい身分になり、今年の敵は来年には友達になることもある。人の心の臨機応変ぶりはますます奇妙なことになる。幻や魔法のようで、考えて議論することも出来ない。測ることもできない。他人の心を推察できないのは言うまでもないが、夫婦親子間でもお互いにその心の変化を測ることが出来ない。単に夫婦親子だけでなく、自分の心の変化も自分でコントロールできない。いわゆる「今吾は古吾に非ず」というのがこれである。その様子はあたかも晴雨の天候を予測できないようなものである。

昔、木下藤吉が主人の六両を盗んで家出し、その6両を武家奉公の資金として、初め織田信長に仕え、次第に立身出世するにしたがい、丹羽、柴田の名望にあこがれて羽柴秀吉と姓名を改めて織田氏の武将になって、その後数々の事変にあつて、負けたり勝ったりして、臨機応変に活躍して、ついに日本国中を手に入れて、豊臣太閤の名で全国の政権を握り、今日に至るまでその盛んな功績を賞賛しないものはいない。

しかし、初め藤吉が六両のお金を盗んで家出した時、果たして日本国中を支配するなどの志があつただろうか。信長に仕えた後も、ささやかに丹羽、羽柴の名望を

羨んで自ら姓名を改めたぐらいである。その志が大きくなかったことは簡単に推量できる。だから、主人のお金を盗んで捕まらなかったのは、盗賊の身としては望外の幸せだった。次いで信長に仕えて武将になったのも藤吉の身には望外のことだった。また、数年間の成功や失敗を経て、ついに日本国中を手に入れたのも、羽柴秀吉の身には望外のことだった。今この人が太閤の地位にいて、振り返って過去に六両のお金を盗んだ時の有様を回想したとすれば、生涯にわたる事業で一つとして偶然でなかったものではなく、正に夢の中又は夢に入る心地であつたに違いない。

後世の学者で、豊太閤を評論する者が、豊太閤だったときの言行によってその人の一生を説明しようとするので、大きな誤解を生むことになる。藤吉といい、羽柴といい、豊太閤といつても、皆一人の生涯の間の一齣で、藤吉の時には藤吉の心があり、羽柴の時には羽柴の心があり、太閤になれば必ずからまた太閤の心があり、その心の働きは始、中、終の三段において一様ではなかった。さらに細かく言えば、生涯の心の働きは、千段も万段にも区別して、様々な変化を見る事ができる。

古今の学者がこの道理を知らずに、人物を評論する時に、某は幼くして大志をもち、某は三歳でこんな奇言を述べたと言い、某は五歳でこんな奇行をしたと言い、はなはだしいのは生前の目出度い兆しを記し、また夢を説明してその人の言行録の一部にする者もいる。考え違いもはなはだしいというべきである。(世の正史と称する本の中に、豊太閤の母は、太陽が懷に入る夢を見て妊娠し、後醍醐天皇は南木の夢をみて楠氏を得たといい、また漢の高祖劉邦は竜の目出度いしを得て生まれたので、その顔は竜に似ていたという。この類の虚誕妄説を数えると、和漢の歴史に枚挙のいとまがない。世の学者はこの妄説を唱えて人をたぶらかすだけでなく、自分もまたこれに惑溺して、自らも信者のようである。気の毒千萬なことといえる。きつと昔を慕うことにこだわりの、むやみに古人を敬い、その人の死後から遡って遠く彼の事業を見てこれを不思議なものとして、今日の人を驚かし、とても及ぶことが出来ないものようにするために、こじつけの説を作っただけのことである。これは売卜者(はいぼくしや、占いをする易者)流の妄言と言える。)

そもそも人たる者は、天賦の才能と教育により自ずから高い志をもつ者もあり卑しい者もあつて、志の高い者は高いことを志し、卑しい者は卑しいことを志して、その志に大体の方向性が生じるのと言うまでもないが、今ここで論じることが、大志をもつ者が必ずしも大事業を成すとは限らない、大事業を成した者でも、必ずしも幼児の時から生涯の成功が約束されていたわけではない。たとえ大体の志の方向が定まっていなくても、その心づもりや事業は時とともに変わり、時とともに進み、その進退変化はとめどなく、偶然の勢いに乗じてついに大事業も行ふとの次第を述べたのである。学者はこの趣意を誤解してはいけない。

統計による大量観察の方法

前に述べたことからこれをみれば、人の心の変化を観察するのは人の力ではできない。つまりその働きはすべて偶然に始まり全く規則性もないものと言うのだろうか。答は決してそうではない。文明を論じる学者には自らこの変化を察知する方法がある。この方法によれば、人心の働きには必ず一定の規則性があるだけでなく、その法則が正しいことは実物の円形を見るようなもので、判で押した文字を読むようなもので、これを誤解しようとしても誤解することができない。その方法とは何か。天下の人心を一体のものとみなし、長い時間の間で広く比較して、その痕跡に現れたものが事実であることを示す方法がこれである。

たとえば、晴雨のようなものも、朝の晴れで夕方の雨を占うことはできない。いわんや、数十日の間で幾日の晴れ、幾日の雨と一定の規則を立てようとしても、人智が及ぶところでない。しかし、一年間で晴雨の日を平均して測れば、晴は雨よりも多いことがわかる。また、これを一か所で測るよりも広く一州一国にひろげれば、晴と雨の日数はますます精密にできる。また、この実験を世界中に広めて、前の数十年と後の数十年の晴雨を図って日数を比較すれば、前後は必ず一定で数日の誤差もなくなる。あるいは、これを百年千年に広げれば、一分の差もなくなる。

人心の働きもまた同様である。今一身一家について人の働きを見ると全く規則性があるようには見えないが、一国の規模にひろげてみると、正しい規則性があり、あの晴雨の日数を平均してその割合が精密になると変わらない。某の国、某の時代に、その国の智徳がこの方向に赴き、ある原因でこの程度に進み、あるいはある支障があつてこの程度退いたなどと、あたかも有形のものの進退方向を見るようである。

イギリス学者のバックル氏の「英国文明史」に、一国の人心を一体とみなして観察すると、その働きには法則があつて実に驚かされると言っている。犯罪は人の心の働きである。一人の身をみると、もともとその働きに規則性はないが、その国の事情に異変がなければ、罪人数は毎年変わらない。例えば、人を殺害する者は、多くの場合一時的な怒りによつて行われるもので、自分であらかじめ予測して、来年の何月何日に何人を殺すと考えることなどあるだろうか。しかし、フランス全国で、人を殺した罪人数を計ると、その数が毎年同じような数であるだけでなく、殺害に用いた凶器の種類も毎年異ならない。さらに不思議なことは自殺者である。そもそも自殺という事柄が他人から命じられるものでなく、勧められるものでもない、騙して導くものでもない、脅かして無理強いするものでもない。まさにその人が決心して起きるものだから、その数に規則性があるとは思われない。それなのに千八百四十六年から五〇年に至るまで、毎年ロンドンで自殺する者の数は、多くて二六六人、少なくて二一三人で、平均二四〇人と定まっている。以上が、バックル氏の論である。

また、ここに身近な一例をあげてみる。商売で物を売る人は、これを客に強引に買わせることはできない。これを買うか買わないかは全く買主の権利である。しかるに、売り物の仕入れをする者は大体世間の景気を観察して、いつも余分に品物を貯えることはない。米、麦、反物等は、腐敗の恐れもなく、仕入れが多過ぎてもすぐに損をすることはないが、暑い最中に魚肉、蒸し菓子等を仕入れた人は、朝仕入れて夕方売れなければ、たちどころに全損を蒙ることになる。それなのに、暑い中、試しに東京の菓子屋へ行って蒸菓子を買いに行くと、終日これを売り、日暮れにはありったけの品を売り払ってしまい、夜になって残品が腐敗したということを開かない。その都合がよい様子はまさしく、売主と買主があらかじめ約束したようなもので、日暮れにありったけの品物を買う人は、あたかも自分の不便はさておき、菓子屋の仕入れが余ることを心配してこれを買うようなものである。どうしてこれが不思議なことと言えないだろうか。菓子屋の有様はこのようであるが、市中の各戸へ行つて、一年間に何度蒸菓子を食い、どの店でどのくらいの量を買うかと聞くと、だれもこれに答えることはできない。だから、蒸菓子を食べる人の心の働きは、一人一人についてはわからないが、市中の人心を一体にして調べると、これを食べる心の動きには必ず法則性があつて、明らかにその進退方向を見ることができる。

だから天下の形勢は、一事一物（個々の物事）で臆断すべきではない。広く事物の働きを見て一般の実績に現れたものを見て、あれこれを比較しないと、真の実態を明らかにするには十分でない。このように広く実際について詮索する方法をスタスチクと呼ぶ。この方法は、人間の事業を観察してその利害得失を明らかにするために欠くことができないもので、近来、西洋の学者はもっぱらこの方法を用いて事物を調査して多くの成果が得られたという。土地人口、物価労賃の多少、婚姻、出生、病人、死人など、一つ一つ数を記して表を作つて比較し合うと、世の中の事情を調べる方法がなかったものでも、一目瞭然になることがある。

例えば、イギリスで、毎年結婚する人数は穀物の価格に従い、穀物の価格が高いと結婚が少なく、価格が下落すると結婚が多く、これまでその割合が誤つた事がないといわれる。日本にはまだスタスチクな統計表を作る者がいないので知ることが出来ないけれど、婚姻数は必ず米価の価格に従うことになる。男女が同じ部屋にいるのは人の道の根本で、世の中の人みんなその規範を重んじて、軽率に行うべきものではない。当人同士の好みもあり、身分や貧富の事情もあり、父母の命にも従わざるを得ず、媒酌人の意見も待たねばならないなど諸々の事情で、こちらも向こうも都合よく縁談が整うのは偶然と言わざるを得ない。そうなることを計画してなるものでなく、図らずにそうなるようなものである。世間で婚姻を奇縁といい、又は出雲大社の縁結びの神説もあるが、すべて婚姻が偶然に決まることを証明している。しかし、今、その實際をみると、決して偶然ではなく、当人の意思によるのではなく、父母の命令によつて整うのではなく、媒酌人の達者な意見といえども、縁結びの神霊といえども、世間の婚姻はどうすることもできないものである。当人の心も、父母の命も、媒酌の言葉も、大社の神力も、おおむねこれを押

さえつけて、自由自在にこれを操って、あるいは世間の縁談を整わせて、あるいはこれを壊すことができるものは、世にはただ有力な米の相場があるだけである。

原因には遠因と近因がある

この趣意に従って事物を調べると、その働きの原因を求める上で大変便利なのがある。事物の働きには必ず原因がある。そこで原因を近因と遠因の二つに分けると、近因は見やすく遠因は説明しにくい。近因の数は多く、遠因の数は少ない。近因はややもすると混雑して人の耳目を惑わすことがあるが、遠因は一旦探り当てれば確実に動くことがない。だから原因を探る要点は、近因からさかのぼって遠因を見つけることである。どんどん遡って行けば、原因の数は次第に減少し一因で複数の働きを説明出来る。

水を沸騰させる働きを生むのは薪の火である。人に呼吸の働きを生むのは空気である。だから空気は呼吸の原因で、薪は沸騰の原因だが、ただこの原因だけを探りあててもまだ調査を尽くしたとはいえない。もともと、この薪が燃える理由は、薪の性質の中にある炭素と酸素が化合して熱を発するため、人が呼吸する理由は、空気中から酸素を取り込み肺で血液の中の炭素と化合させて、またこれを吐き出すためで、薪と空気はただ近因に過ぎず、その遠因は酸素にある。だから水の沸騰と人の呼吸はその働きも異なり、近因もまた異なるが、さらに一步を進めて遠因である酸素を知ると、初めて沸騰の働きと呼吸の働きが同一の原因に落ち着いて確実な議論を定めることができる。

前に言った婚姻のことも、その近因は当人の心、父母の命令、媒酌人の言葉、その他諸般の都合で成り立つが、この近因ではまだその事情を詳しく説明できないだけでなく、かえって混乱を生んで人を惑わすことがある。この近因を捨てて、進んで遠因を探り、食物の価格なるものを知って、初めて婚姻の多少を支配する真の原因にたどりついて確実な法則発見することができる。

また、一例をあげて言うと、ここに酒客がいて、馬から落ちて、腰を打って半身不随に陥ったとする。これを治療する方法をどうすべきだろうか。この病の原因は落馬だからといって、腰に膏薬を張って、もっぱら打撲治療を施してよいか。もしそうする者がいたらやぶ医者といわざるを得ない。結局、落馬はこの病の近因にすぎない。実際は多年の飲酒の不養生で、脊髄が衰弱してこの症状を発症した時に、たまたま、落馬して全身にショックを受けて、そのために急に半身不随になったものである。

だからこの病を治療する方法は、まず飲酒を禁じて病の遠因である脊髄の衰弱を回復させることにある。少しでも医学を志す者であれば、これらの病の原因を調べてその治療法を施すことはやさしいけれど、文明を論じる学者に至ってはそうはいかず、みんなやぶ医者の類である。近くで見聞したことに惑溺して、事物の遠因を探る事を知らず、近因に欺かれそれに隠されて、むやみに小言を言って勝手に大事なことを行おうとする。まるで暗黒な闇夜に棒を振るようなものである。その本人を思うと哀れなことだが、世のためを思うと恐ろしいことである。気をつけねばならない。

時に遇わず（ふさわしい時代でなかった）といって嘆く英雄豪傑

前段で論じたとおり、世の文明は広く国民一般に分布する智徳の現象である。その国の治乱荒廢もまた一般の智徳に関係するもので、二、三人で都合良くできるというものではない。全国の勢いは進めようとして進むものでなく、留めようとして留まるものでもない。これから歴史の二、三箇条をあげてその次第を示したい。元来、理論中に歴史資料を用いると、文章が長くなり読者が嫌がる恐れもあるが、歴史資料によつて説明するのは子供に苦薬を与えるのに砂糖を混ぜて口を喜ばすようなものである。思うに、初学の人の精神は、無形の理論を理解するのはとても難しいので、歴史資料を交えて理論を示すと自然に理解が速やかにできるという便利があるからである。

日本や中国の歴史を調べると、昔から英雄豪傑の紳士で、「時に遭う」のはきわめてまれである。稀なことを嘆いて不平を言い、後世の学者もみんな同情して涙を流す。孔子も時に逢わずといい、孟子もまたそうである。道真は筑紫の大宰府へ流されて、正成は湊川で死ぬなど、これらの例は数限りない。昔からたまたま世に功績を残す者がいると、これを千載一遇と呼ぶ。時に遇うことの難しさを評したものである。

そのようなわけで、あのいわゆる時なるものは、何を指して言うか。周の諸侯はうまく孔孟を使つて国政を任せれば、きっと天下を太平に治めることができたはずなのに、これを用いなかったのは当時の諸侯の罪と言えるだろうか。道真の島流し、正成の討死は、藤原氏と後醍醐天皇の罪と言えるだろうか。それならば、「時に遇わず」というのは、二、三人の人の心にあわなかったということで、その「時」なるものはたった二、三人の人の心によつて作るべきものなのだろうか。もし、周の諸侯が心を変えて偶然に孔孟を用いるようにし、後醍醐天皇を楠氏の策に従わせたら、果たしてものごとは成功して今の学者が想像するように千載一遇の大成功を収めることになっただろうか。いわゆる「時」に遇わずとは二、三人の人心に過ぎないのか。「時に遇わず」とは英雄豪傑の心と君主の心に齟齬があるという意

味なのだろうか。

私の意見はまったく異なる。孔孟を用いなかったのは周の諸侯の罪でなく、諸侯にこれを用いさせなかったものがあつたのである。楠氏の討死は後醍醐天皇の識見の不足ではない。楠氏を死に陥らせたものは別にあつたのである。それではそうさせたものは何か。それは時勢である。当時の人の気風である。その時代の人民に広がっていた智徳の有様である。次にこのことを論じる。

天下の形勢はあたかも蒸気船が走るようなもので、天下のことに当たる者は航海士のようなものである。千々の船に五百馬力の蒸気機関を置き、一時間に五里走れば一〇日で千二百里の海を渡ることができる。これを蒸気船の速力という。どんな航海士でもどんなに工夫しても、この五〇〇馬力を五五〇馬力に増やすことはできない。千二百里の航海を急いで九日で終わる方法はない。航海士の仕事はその機関の力を妨げずに、運転の機能を十分に發揮させることにある。あるいは二度の航海で、初めは十五日を費やし、後は一〇日で到達できたとすれば、これは後の航海士がうまくいったわけでなく、最初の航海士の腕が悪く蒸気のを妨げていた証拠である。人の上手下手に際限がない。この蒸気で十五日でも二〇日でも費やすことはできる。極端になると全く働きをなくすこともできるが、人の巧拙で機関がもつ性質にない力を造ることは万が一にもない。

世の中の治乱荒廢もまた同様である。大勢が動くにあたり、二、三人の人物が国政を執つて天下の人心を動かそうとしても、決して行う事ができない。ましてや、民衆の人心に反して自分の意に従わせることが出来るはずもない。その難しさは船に乗つて陸を走ろうとすることと同じである。昔から英雄豪傑が大きな仕事を成し遂げたというのも、その人の技術で人民の智徳を進めたわけではない。ただ、人民の智徳の進歩に当たつてこれを妨げなかっただけである。試しに見るといい。天下の商人は夏に氷を売り冬にタドンを売っているではないか。これはただ世間の人心に従っているのである。

今、冬に氷の店を開き夏の夜にタドンを売る者がいたら、人々は愚者と言うだろう。それなのにかの英雄豪傑の士になると一人そうでなく、風雪の厳寒に氷を売ろうとして、これを買う人がいなければ、それを買わなかった人の罪にして、一人不平を訴えるというのはどういうことか。考えない人のひどい例である。英雄豪傑が氷が売れないことを嘆くなら、これを貯えて夏が来るのを待ち、その間に一生懸命に氷の効能を説いて、世の人に氷というものがあることを知らせるほうがずっと良い。その物に実際の効用があれば、時節が来れば買う者もきつというだろう。あるいは、実際の効用もなく到底売れるめどが立たなければ、きっぱりとその商売はやめるべきである。

孔孟も時勢を知らず（春秋戦国時代の例）

周の末世に天下の人が王室の礼儀や束縛を嫌い、その束縛が次第に緩むに従って、諸侯が国王に背き、大臣が諸侯を制圧し、中には臣下の中に国政を行う者も現れて、天下の政権は四分五裂し、まさに封建の貴族が権力を争う状況になって、堯舜時代の天下泰平を慕う者もなく、天下には貴族同士の争いばかりで人民がいるのも知らない状態になった。だから弱小な貴族を助けて強大な者を制圧すれば、たちまち天下の人心に適合して一世の権力を取ることができた。斉の桓公、晋の文公の覇業がこれである。この時、孔子は一人堯舜の治風を主張し、無形の徳によって天下に影響を及ぼす説を唱えたが、実際に行われることはなかった。当時の孔子の事業を見ると、かの管仲という男が巧みに時勢に従ったことに遠く及ばなかった。

孟子になるともっと難しい。当時、封建貴族が次第に統一の勢いとなり、弱きを助け強きを抑えるという覇業は行われず、強い者が弱い者を滅ぼして大が小を併合する時代になって、蘇秦や張儀は四方に奔走して、ことを助け、破り、合従連衡（駆け引き）で忙しい世であったから、貴族でもその身を安心させることができなかった。どうして人民のことを思う暇があるのか。どうして五畝の宅（小さな自宅）などを顧みる余裕があったか。全国の力を攻防に使って、主君自身の安全を考えるだけであった。たとえ、聡明で慈悲深い君主が孟子の言葉を聞いて仁政を行っても、政治とともに身まで危うくなる恐れがあった。籛が斉と楚の間に挟まった時、孟子によい策がなかったことも一つの証拠である。私はあえて、管仲や蘇張の肩をもって孔孟を排除するわけではないが、この二人の大家が時勢も知らずに、その学問を当時の政治に施そうとして、かえって世間から嘲けられて、後世のためにならなかったことを悲しむのである。

孔孟は当時の大学者で、古来まれな思想家である。もし、この人に優れた見識をもたせて、当時の政治の範囲を超えてあたかも別世界を開いて、人類の本分を説きいつの世にも通用する教えを説いたなら、その効能はきつと広大なものになるはずだった。しかし生涯この政治の枠の中に限定されて一步も出ることが出来なかったためにその説も体裁を失い、純精な理論にもならず、過半は政治談議が混じり、いわゆるヒロソヒー（哲学）の品価を落とすものになった。その道に従事する人はたとえ万巻の書物を読んでも、政府で高い地位に立って事をなすのでなければ他に用はないと思ひ、陰で密に不平をこぼすだけである。これは卑劣な行為である。この儒教が広く行われたら、天下の人は皆政府で政治を行う人になり、政府の下で支配を受ける人がいなくなる。人の賢愚や上下の区別をつくり、自分を上の地位に置いて愚民を治めようと急ぐために、政治に関わろうとする心もまた急である。最後には熱中煩悶して、喪家の狗（喪中の家の犬で宿無し犬をいう）のそしりを招くようになる。私は聖人の為にこれを残念に思う。

また、儒教を実際の政治に施すことについても大きな支障がある。もともと、孔孟の説は修身・人倫の道である。つまるところ、無形の仁義、道徳を論ずるもので、これを心の学といつてよい。道徳も純粹無雜（自然のままで邪心がない）であればこれを軽んじてはならない。個人にとつてその効能は大きいが、徳は一人一人の内面にあつて有形の外物と接する働きはない。だから、無為混沌（何もすることがない状態）として、人が行う事業が少ない世では人民を維持するには便利だが、社会が開くに從つて次第に効力を失わざるを得ない。それなのに今、内面の無形のを外に現れる有形の政治に施して、昔のやり方で今の世の人事に対処し、情実によつて下民を支配しようとするのは、甚だしい惑溺といわざるを得ない。その時と場所を知らないことは、あたかも船で陸を走ろうとし、盛夏の時期に毛皮で作った衣を求めるようなものである。到底実際には行うことが出来ない策である。その明らかな証明は、数千年の長い間、今日に至るまで、孔孟の道を政治に施してうまく天下を治めたものがないことを考えれば分かる。

故に、孔孟が用いられなかったのは諸侯の罪でなく、その時代の勢いに妨げられたためと言える。後世の政治にその儒教が行われなかったのは、教えの失敗でなく、これを施す時と場所を誤つたためである。周の時代は孔孟に適する時代ではなかった。孔孟はこの時代では実際にことをなすことが出来る人物ではなかった。その教えも後世に至ると政治に施す教えではなかった。理論家の説（フィロソフィー）と政治家の道（ポリテカル・マター）とは大いに違いがある。後世の学者は孔孟の教えから政治の方法を求めてはならない。このことについては、本書で別に論じることがある。

楠公も時に遇わず（建武の中興の例）

楠氏の死もまた時勢がそうさせたものである。日本では政権から皇室が去つてずいぶん長くなる。保元平治の時代の前から軍事の権限は源平二氏に歸しており、天下の武士で皆その下に従属しないものはいなかった。頼朝は、父祖の偉業を継いで関東で立ちあがり、日本国中一人としてこれに齒向かうものがいなくなり、天下の人はみんな関東の兵力におそれ従い、源氏を知つていても皇室があることを知らなくなった。北条氏が次に政権を取つたが、鎌倉幕府の旧物を改めなかった。これもまた源氏の余光に頼つたものであつた。北条氏が滅んで足利氏が政権を取つたが、これもまた源氏の一族によつてことをなしとげた人だった。北条・足利の時代に、諸方の武士は兵を挙げて、名前は勤皇と言つたが、実際は関東に対抗して功名を図るものだった。あるいはこの勤王の連中がその計画を成功したとすれば、必ず第2の北条、第2の足利になつただろう。天皇にしてみれば前門の虎を追い出して後門の狼に会うようなものだった。織田、豊臣、徳川の業績を見ればわかる。鎌倉以降、天下に事を挙げる者で一人として勤王の説を唱えない者はおらず、事がかゝつた後に一人として勤王を実行した者はいなかった。勤皇は単に事を企てる間の口実で、事を成し遂げた後に事実になつたことはなかった。

歴史にいう、後醍醐天皇は北条氏を滅ぼして、はじめに足利尊氏の功を賞して諸侯の上に置き、次に新田義貞をおいて、楠正成以下の勤皇の功は捨てて省みず、最後には尊氏が野心を高めて再び王室を衰退させた、と。今日になっても世の学者はこの一段に至ると、齒軋りをして尊氏の凶悪を憤って天皇の才知が足りないことを嘆く。まさしく時勢を知らない者の意見である。

当時、天下の権力は武家の手にあり、武家の元祖は関東にあった。北条を滅ぼしたのも関東の武士で、天皇を位に戻したのも関東の武士だった。足利氏は関東の名家で、名声はもともと高かった。当時関西の諸族は勤王の義を唱えていたが、足利が味方に付いてくれないとして復位などを行うことが出来ようか。ことが成就した日に足利氏を第一の功名者にしたのも、天皇の意思で足利の戦功を賞したのではなく、時勢にしたがって足利家の名望に報いたものである。この一事をみても当時の形勢を推察できる。尊氏には始めから勤皇の心があつたわけではない。その権威は勤王によって得たものではない。足利の家に属する固有の権威である。彼が勤王を掲げたのは、一時北条を倒すためで、自分に都合がよいためだったので、これを倒してしまうと勤王の手段を用いなくても自分の家の権威に損するものはなくなった。これが足利氏が繰り返し態度を変え、また鎌倉で自立した理由である。

正成はそうではなかった。河内の貧しい一族から身を興し、勤皇の名でわずかに数百人の士族を集めて、多くの苦勞を経てすぐれた功績を挙げたというが、残念ながら名望が乏しくて関東の名家と肩を並べるまでにはいかず、足利の目から見れば配下に等しいだけであつた。天皇ももちろん正成の論功は知らないわけはなかったが、人心に反してまでこれを一番の功労者の列に置くことはできなかった。故に足利氏は皇室を支配する者で、楠氏は皇室に支配される者だった。これもまた時代の形勢でどうしようもないものである。加えて、正成はもともと勤王の二字によつて権力を得た者だったから、天下に勤王の氣風が高まれば正成も勢いがつき、そうでなければ正成もまた窮地に落ち込むことになった。それなのに、今、この勤王の主唱者たる正成が、尊氏ごときに従属者扱いされいながらそれに甘んじており、天皇もまたこれをどうしようもできなかったのは、当時天下に勤王の氣風が乏しかったことから推し量ることができる。

それならば、勤王の氣風が乏しくなった理由は何か。独り後醍醐天皇の才知のなさだけによるのではない。

保元平治以降、歴代の天皇を見ると、その才智や徳の不足は数知れない。後世の史家がおもねりへつらつて筆をごまかしても、なおその罪をかばうことが出来ないほどである。父子が戦い、兄弟が討ちあい、武士に頼み込むのは、身内の骨肉を争うためだった。北条の時代になると、臣下の臣下が勝手に君主の廃立を行つただけでなく、王室の各々が偽つて身内を臣下の臣下に偽りの訴えを起こして地位を争うようになった。自分たちの相続を争うことに忙しくて、天下の事を顧みないとまもなく度外視したことが分かる。天皇が天下の事に関わる主人でなくて、武家の威力に束縛された奴隸のようだった。（伏見帝は、ひそかに北条貞時に勅（天皇の仰せ

を書いた手紙)を出して、龜山帝の後任を立てることの不利を説明し自分の皇子を立てて後伏見帝としたが、伏見の従兄弟になる後宇多上皇が貞時に訴えて、後伏見を廢して後宇多の皇子を立てたことがある)

後醍醐天皇は明君ではなかったが、先代の諸帝に比べれば、その言行にやや見るべきものがある。彼が一人で皇室の衰退の罪をこうむることはない。政權が王室から去ったのは、他の者がそれを奪ったためではない。積年の勢いで皇室自らが権力を捨てて、他の人が拾ったのである。あたかも、天下の人心は武家があることは知っていても王室があることを知らず、関東があることは知っていても京の都を知らないのはこうした理由による。たとえ、天皇が優れた智徳をもっている、一〇人の正成を得て大將軍に任命したとしてもこの長年の弱さから何が出来ただろうか、最早人力が及ばないところだった。このことからみれば、足利が成功したのは偶然でなく、楠氏が討死したのも偶然でなく、皆そうなる原因があつてそうなったものである。だから、正成の死は後醍醐天皇の才知のなさによるのでなく、時の勢いによるものだった。正成は尊氏と戦つて死んだのでなく、時勢に敵対して負けたのである。

英雄も時代の氣風には勝てない

以上述べたように、英雄豪傑が「時にあわなかった」というのは、その時代の一般の氣風にあわないうで心事に齟齬が生じたことをいう。だから、千載一遇の好機を得て成功したのも、ただ時勢に乗つて人民の氣力を高めたことをいうに過ぎない。千七百年代にアメリカ合衆国が独立したのも、中心になった四十八人が創業した事業ではない、またワシントン一人の戦功でもない。四十八人はただ十三州の人民に分布した独立の氣力を實際の形に表し、ワシントンはその氣力を戦場に用いたに過ぎない。だから合衆国の独立は千載一遇の思いもよらなかった功績でなく、仮に独立戦争に負けて一時的に事を誤ったとしても、別の四八〇人の勇士や、別の一〇人のワシントンが現れて、結局合衆国の人民は独立するはなかったのである。

最近では四年前、フランスとプロシアの戦争で、フランスが敗走したのは皇帝ナポレオン三世の失策で、プロシアの勝利は首相ビスマルクの功績という者がいるが、決してそうではない。ナポレオンとビスマルクに智愚の差があつたのではない。勝敗が分かれた理由は当時の勢いで、プロシアの人民が團結して強く、フランスの人民は分裂して弱くなったためである。ビスマルクは、この勢いに乗つてプロシア人の勇氣を強めて、ナポレオンはフランス人の人心が赴く方向に逆らつて人心に逆らつたためである。

さらに明らかな証拠を示そう。今ワシントンを支那の皇帝とし、ウエリントンをその將軍として、支那の軍勢を率いてイギリスの軍隊と戦うとすると、その勝敗はどうなるだろうか。たとえ、支那に鉄艦や大砲がたくさんあったとしても、イギリスの火縄銃と帆船に打ち破られただろう。これから見れば、戦争の勝敗は將軍によるのではなく、機械によるものでもなく、人民一般の気力によることが判る。あるいは数万の勇士を戦争に使って敗走する事になったとすると、それは兵士の責任ではなくて、將軍が拙劣で兵隊の進退を妨害して本来備わっている勇気を高められなかったためである。

また一例をあげてみよう。近年日本政府の事務が進まないのは長官の才能がないためとし、ひたすら良い人材を得ようとしてあれこれの登用や拔擢を試みているが、仕事の実際は変わらない。さらに人材不足として外国人を雇い、また外国人を教師や顧問にしているが、政府の仕事は依然として上手くできない。仕事が上手くいかないのは、政府の役人に才能がなく、教師顧問として雇った外国人も皆愚人であるかのようだ。しかしながら、今の政府の中にいる役人は国内では才能ある人たちである。また、外国人も愚人を選んで雇っているわけではない。それならば仕事が上手くできないのは別の理由にあるに違いない。その原因は何か。政治を実際に行うに当って必ず如何ともしがたい事情がある、これが原因である。

その事情なるものを言葉で表現するのは大変難しいが、俗に「多勢に無勢」ではとてもかなわないということである。政府が失策をする理由は、常にこの多勢に無勢なるものに苦しめられたためである。政府の長官はその失策を知らないわけではない。知りながらこれを行うのはどうか。長官は無勢で衆論大衆の意見は大勢である。これはどうすることも出来ない。この衆論の原因を調べてはじめての出所をはつきりさせることはできない。あたかも天から降ってきたもののようだが、その力は十分政府の仕事を左右できるほどである。だから、政府の仕事が上手く出来ないのは、一、三人の官僚の罪ではない。衆論の罪である。世の中の人は間違つて官僚の処置を非難してはいけない。昔の人はまず先に君主の非を正すのが急務とした。私の考えはそうでなくて、天下の急務はまず衆論の非を正すことにある。

そもそも官僚たるものは、もともと近くで国事に接するので、その憂国の心も自然と深く、衆論の非を心配し、あれこれと苦慮してその非を正す方法を探すべきはずである。あるいはそうではなくて、その官僚も衆論者の一人であるか、又はその衆論に惑溺してこれを支持する者かもしれない。この人たちは、人のことを心配する立場にいて、人に心配されることをしている者である。政府の処置にしばしば自分で壊しているような失策があるのも、この人たちのせいである。これもまた国のためにどうしようもない事情であるので、憂国の学者は、当然文明の説を主張して、官民の区別なくこれを惑溺の中から救いだして、衆論の方向を改めることに努めるべきである。衆論が向かう所は天下に敵なしで、どうして政府のことを一々心配などしようか。官僚が行う瑣末なことを一々咎めようか。政府はもともと、衆論に沿って政策の方向を改めるものである。故に、今の学者は政府を咎めないで、衆論の非を心配すべきである。

衆論は天下に敵なしだが、変革できる可能性がある

ある人が言う。この一章の趣意に従えば、天下の事物はすべて天下の人心によっていて横からはどうしようもないことである。世の形勢はさらに寒暑がきたり草木の栄枯のようなもので、少しも人力を加えることは出来ないものだろうか。これでは政府の人も用がなく、学者も無用の長物で、商人、職人もただ自然の成り行きに任せて、各自が自分で努めるべき役目もないようであるが、これを文明進歩の有様と言えるだろうか。答えて言うと、決してそうではない。前に述べたように、文明は人間の目指すもので、これを達成することが人間の目的である。これを達成するには各自にその役割がある。政府は社会の秩序を維持して現在必要な処置をし、学者は過去と未来のことから未来のことを考え、商工業は業を営んで国の富を豊かにすることなど、各自が職を分担して各々が文明の各部署を努めることである。

もとより政府でも過去と将来にのことに注意を払うべきである。学者に現在やるべき仕事がないわけではない。政府の官僚にも学問した人がいるので、両者の職分は同様に似ているが、官民の境界を分けて本来の職務を定めて境界をはっきりさせようとすれば、現在と未来の区別が必要である。今、国に事があれば、まずはじめに即時に事の可否を決めるのは政府の仕事だが、普段から世の中の形勢をよく観察して将来の用意をし、あるいはそれに向けて努力したり、あるいはこれを未然に防ごうとするのは学者の職分である。世の学者にはこの道理を知らずに、やみくもに事を好んだり、自分の本分を忘れて奔走し、はなはだしい場合は官僚に駆使されて目前の利害を処理しようとし、事をやり遂げることも出来ず、却って学者の品位を落とす者もいる。混乱している極端な例である。

政府の働きは外科の技術のようで、学者の論は養生法のようなものである。その効用に遅速緩急の違いはあるが、ともに人身のために欠くことができないものである。今政府と学者の効用を考えると、政府は現在、学者は未来と言ったが、その効用は大きくて国のために欠くことが出来ないのはどちらも同じである。もつとも緊要なことは、互いにその働きを妨げずに助け合い、刺激し合い、励ましあつて、文明の進歩に少しの妨げにもなつてはならないことである。

第五章 前論の続き

一国の文明の有様は、その国民一般の智徳を見て知ることができる。前章で言う衆論とは、国内大衆の議論で、その時代にあつて広く人民の間に広がった智徳の有様をあらわしたものだから、この衆論によって人心の動向を窺うことができるが、今またこの衆論について二つの意見がある。その第一の趣意は、衆論は必ずしも人の数によるのではなく、智力の分量によつて強弱があること。第二の趣意は、人々に智力があるといつても、これを結合する習慣がなければ衆論の体裁をなさない。その次第は次の通りである。

衆論の特徴①人数でなく分布の仕方が変わる、

第一。一人の論は二人の論に勝てない。三人が同説ならば二人を抑えることができる。その人数がもっと多くなればその意見の力はますます強くなる。いわゆる衆寡敵せず（少数は多数の敵にならない）である。そうであつても、この議論の衆寡強弱は、ただ才智が同等な人の間でのみできることである。天下の人を一体としてこれをみれば、その議論の力は人数の多少でなく智徳の量の多少によつて強弱があるものである。人の智徳はあたかも人の筋骨の力のように、一人で ∞ 人分を兼ねる者もいる。或いは ∞ 人分を兼ねる者もいる。故に今、人々を集めて一体とし、その全体の強弱を測るのに単に人数の多少を見て知ることはできない。全体の間に分布する力の量を測らざるを得ない。

たとえば、百人で千貫目の物を挙げれば、一人の力は各々一〇貫目であるが、人々の力は必ずしも同等ではない。試しにこの百人を等分して五〇人づつの二組に分けて、この二組の五〇人にものを挙げさせる。一組の五〇人は七〇貫目を挙げ、他の一組の五〇人は三〇貫目を挙げることもあろう。さらにこれを四等分して、また八等分すると、必ず次第に不均衡が生じて、最強のものと最弱のものを比べると、一人で

一〇人分の力をもつ者がいることもあるだろう。そこでまた百人から屈強な者二〇人を選んで一組とし、他の八十人を一組として試みると、二〇人の組は六〇貫目を挙げ、八〇人の組はわずかに四〇貫目しか挙げられない。これから計算すると、人数を見れば二・八の割合だが、力の量をみれば六・四の割合になる。故に力量は、人数で定めるのではなく、それが挙げるものの軽重と人数の割合を見て測るべきである。

智徳の力は、権衡度量（はかりの度量）で測るべきではないが、その様子は筋骨の力とは違う理由もない。知徳の強弱の違いとなると筋力の差よりもさらに大きくて、

一人で百人、千人を兼ねる者もいるだろう。もし人の智徳が酒のアルコールのようなものとするならば、きつと目を驚かす奇観となるだろう。ある種類の人物は一人を蒸留して智徳の量を一斗得たとすると、別の種類の人は百人を蒸留してわずかに三合しかとれないこともある。一国の議論は人の体質から出るのではなくその精神から出るのです、かの衆論というものも、必ずしも論者の多さで力があるわけではない。その論者とその仲間に分布する智徳の分量が多いため、その量が人数不足を補い、遂に衆論の名前を得たものである。

ヨーロッパ諸国でも、人民の智徳を平均すると、国内で文字を知らない愚民は半数を超える。国論といい衆説といわれるものはすべて中程度人以上の智者の論説で、他の愚民はたんにその説に雷同して囲い込まれて、あえて自分の愚が表立つことがなかったに過ぎない。また、その中程度以上の人の中でも智愚の差は限りなくあって、これはあれに勝ち、あれはこれを排除し、初めて相対してもすぐに引きさがるものもあり、長い間お互いに対立しあつて勝敗がつかないものもある。何度も磨き練り上げて、かろうじて一時の異説を制圧したものを国論、衆説と名付けただけである。これが新聞や演説会が盛んになり、人々の意見が騒々しくなる理由である。つまり、人民は国の智徳によつて指導され、智徳が方向を変え、智徳が分裂すると人民もまた分割されて進退集散し、すべて智徳に従わないものはない。(世間で書画等を好む者は、中程度以上の文字を知り趣きがある人である。それを好む理由は、古い器の履歴を想像し、書画運筆の巧拙を比べて楽しむのだが、今日では古器書画を導ぶ風俗が広く世間で行われて、全く文字を知らない愚民でも、少しお金があると必ず書画を買い床の間の掛け軸にかけて、珍器古物を集めて、得意になっている者が多い。笑うべきあるいは怪しむべきことだがきつとこの愚民も中程度以上の趣味に雷同して、知らず知らずのうちにこのことを行っている。そのほかに流行の衣装、染物の模様なども他人の創意に雷同して喜んでいるのである。)

明治維新が成功した理由

最近のわが日本のことで一例を示す。先年政府を一新し次いで廃藩置県の出来事があった。華士族はこのため権力も給料も共に失ったが、あえて不平を唱える事ができないのはなぜか。人は王制復古が皇室の威光で、廃藩置県は新政府の英断で行った、というかもしれない。これは時勢を知らない者のあて推量である。皇室にもし威光があれば、復古はどうして慶応末年まで待つことがあつたらうか。早く徳川を倒す事ができたはずだった。あるいは足利の末期に政権を取り返すこともできたろう。復古の機会は必ずしも慶応末期に限らなかった。それなのにこの時にはじめて復古を行い、ついに廃藩の大事をも行つたのはどういうことか。王室の威光によるのではなく、政権の英断のためでもない。別にその原因があるに違いない。

我が国の人民は長い間専制の暴政に苦しめられて、門閥が権力の源となり、才智ある者でも門閥によって才能を用いられなければ何もできなかった。一時はその勢いに圧倒されて全国でも智力が働くところをみるものがなかった。物事がみんな停滞不流の有様のようになったが、人智が発生する力は止めようとしても止められず、停滞不流の間にもしっかりと歩みを進めて、徳川末期に至ると、世間の人々にも次第に門閥を嫌がる心が生じてきた。意のある人物は儒医、著述家の隠れ蓑をまとい、あるいは藩士、僧侶、神官の中にもいて、いずれもみんな学はあったが志を得られない者たちだった。その兆候は天明、文化の頃から、世に出る著作詩集、小説の中でしばしばことに寄せて不平を訴える者がいたことで判る。もとより、文字で門閥専制の政治が不正であると明確に論じたものはないが、たとえば国学者では皇室の衰微を悲しみ、漢学者では貴族執政の贅沢を風刺し、また一部の戯作者は慢語放談（思うままに言い散らすこと）で世間をからかうなど、その文章も事柄にも特にこれと言った筋道もないが、その時代に行われる有様を喜んでいない気持は自然と言外に現れるもので、実は本人も訴えるところを知らずに無意識に不平を訴えているのである。その状況は、あたかも持病に悩んで自分で容体をはっきり述べられないで、ただ苦痛を訴えるようなものである。（徳川氏が当初の政權が盛んな時には、世の中の著述家もその威力に圧倒されて少しもその時勢を非難しないで、逆に幕府政治にへつらう者がいた。新井白石の著書、中居竹山の逸史（正史からもれた史実）などをみると分かる。その後、文政の頃に書かれた頼山陽の日本外史では専ら王政の衰退を憤り、その語気はあたかも徳川氏に向かって罪を責めているようだ。その理由を調べると、白石や竹山は必ずしも幕府の奴隸でなく、山陽は天子の忠臣でなく、皆時勢がもたらしたものである。白石、竹山は時勢に制約されて筆の勢いをさかんにできなかった。山陽は少しその束縛を逃れて当時の専制政治を怒って、日本外史の場でその怒気をもらしたに過ぎない。そのほかの国学、小説、狂詩、狂文等が盛んになったのは天明文化の後がピークだった。本居、平田、馬琴、蜀山人、平賀源内等は皆高い志をもった士君子だったが、その才能を伸ばす地位もなかったのも、いたずらに文事（学問、文学などで武事に対応）に身を任せて、それに託してある者は尊王説を唱え、ある者は忠臣義士の様子を書き、又ある者は狂言を放って一世をあざけり、無理に自分の不平を慰めたものである）

こういうわけで国学者も必ずしも皇室の忠実な家来でなく、漢学者もまた真に世を心配した士君子ではなかった。その証拠に世に隠れた君子たちは普段は不平を言っているが、一旦役人に拔擢されるとたちまち変節して不平を聞かない。今日の尊王家も俸禄が豊かになれば明日は佐幕家になり、昨日の町儒者も登用の道が開かれると今日は得意顔になる者が多い。昔からの経験でわかる。そうであるなら和漢の学者たちが徳川末期に、尊王で世を憂いた意見を書いて暗に議論のきっかけを開いたことも、多くはその人の本音でなく、一時的に尊王と憂世を名目にして自分の不平を漏らしたもののだろう。

しかしながら今、その動機が誠実かどうかとか、議論が私ごとか公のことであるかはさておいて、その不平が生じる理由をたどると、専制門閥に妨げられて自分の才能を伸ばすことができず、心に憤りが生まれたものだから、人情からみても、専制を好まない気持ちは、筆先に表れる語気を見ても明らかである。ただ、暴政の勢いが盛んだった頃はこの人情を表すことができなかっただけである。これを表すかどうかは暴政の力と人民の智力の力関係によるだけである。政府の暴力と人民

の智力はまさしく相反するもので、こちらが勢いを得れば向こうが権力を失い、向こうが優位になればこちらに不平が生じて、その釣合いは丁度天秤が平均するようなものである。徳川氏の政権は終始一貫して盛んで、天秤は常に偏っていたが、末年になって人智が少し歩を進めて、初めて一端に少しだけ分銅をおくことが出来るようになった。かの天明文化の頃から世にでた著書の類がこの分銅と言うべきものである。しかしながらこの分銅も極めて軽く、平均をなすには足らず、ましてや平均を破ることは出来なかった。もしその後開港がなければ、いずれの時期にこの平均が逆になって智力が力を得ることが出来たろうか。識者にはわからない。幸いにして嘉永年間にペリーが渡来し、これが改革の好機になった。

ペリー渡来の後、徳川政府が諸外国と条約を結ぶに至って、人々は政府の処置を見て始めて政府が愚かで弱いことを知り、また一方では外国人に接して話を聞いて、あるいは洋書や翻訳本を読んですます知識を広げ、鬼神のような政府といえども、人の力でこれを倒すことが出来ることがわかってきた。その事情を形容して言え、聾啞者や盲人が急に耳目を開き初めて声や色を見聞きできることを知ったようなものである。

攘夷論は革命の近因、智力が遠因。

こうして初めて事の発端を開いたものが攘夷論である。そもそもこの議論の源を調べると、決して人の私情ではなくて、自他の区別をはっきりさせて自らでこの国を守ろうとする赤心（偽りのない心）から出ている。開闢以来初めて外国人に接し、暗くひっそりとした深夜から喧嘩が盛んに行われる白昼に出たので、見る事物はことごとく奇怪で意に沿うものはない。その意は私心でなく、日本と外国との境界を頭で想像して、身を持って国を担う意だったので、これは公といわざるを得ない。もともと情勢が急が変わったので、精神は幻惑し議論も筋道が緻密になるはずもなく、挙動も乱暴で愚かなものにならざるを得なかった。要するに報国心（愛国心）も粗雑で未熟なものだったが、その目的が国のためだったので公的だった。その主張は外夷を追い払う攘夷の一箇条だけで単純なものだった。公の心をもって単純な議論を唱えれば、その勢いは必ず強く旺盛にならざるを得ない。これが攘夷論が初めて力を得た由縁である。世間の人もすぐにこれに共鳴して、未だ外国交際の利益を見る間もなく、先に外国を憎む心になってしまい、天下の悪をことごとく外国交際のせいにして、仮にも国内で災害があるとこれも外国人のせいであるも外国人の仕業といって、国を挙げて外国交際を支持する人がいなくなってしまう。たとえひそかに外国交際を歓迎する者がいても、世間一般の風に同調せざるをえなかった。

それなのに幕府は一人でこの外国交際の折衝に当り、外国人に接するには幾分かは道理によらざるを得なかった。幕府の官僚も必ずしも外交を好んだわけではなく、

ただ外国人の威力と理屈に答えられず道理を唱える者が多かったとはいえ、攘夷家の目から見れば、この道理は因循姑息（古くからのしきたりにこだわってその場しのぎすること）だった。幕府はあたかも攘夷論と外国人の間に挟まり進退きわまる状態に陥り、ついにバランスを失いますます弱体な面をさらし、攘夷家はますます勢いを増して遠慮がなくなり、攘夷、復古、尊王、倒幕を唱えて、幕府を倒して外夷を追い払う一事に力を尽くした。その際に人を暗殺し、家を焼くなど士君子には受け入れられない挙動も少なからず行つたが、結局幕府を倒すという目的に至って衆論が一致し、全国の智力はことごとくこの目的に向かい、慶応末年になって革命を行つたのである。

この成り行きに従えば、革命復古の後は直ちに攘夷に至るべきだったが、そうならず、また仇と考えた幕府を倒せばすぐ止むはずだったのに、併せて大名、士族も除け者にしたのはどういうことか。決して偶然のことではない。攘夷論はたんに革命の始まりで、いわゆる事の近因に過ぎない。一般の智力は初めから目的が違い、その目的は復古でなく攘夷でもなく、復古攘夷の説を先頭に立て旧来の門閥専制を征伐したのである。故に、この事を起こした者は皇室でなく、それが敵としたのは幕府でもなく、智力と専制の間の戦争で、この戦いを企てた原因は国内一般の智力である。これが事件の遠因である。

この遠因なるものは、開港以来西洋文明の説を援軍とし、勢いは次第に強くなったが、智者の戦いの戦端を開くには先頭を切る者が必要だった。ここで近因の攘夷論と一体になって戦場に向かい、革命の一举を終えて凱旋したのである。先鋒を切つた説も一時期は力を得たが、凱旋の後になると次第にその計画が粗雑で長い間維持することができないことがわかり、次第に暴力を捨てて智力へ移り、現在の勢いになっている。その後も智力がますます権力を得て、かの報国心の粗雑なものを緻密に変え、未熟なものを成熟させて、これによつて我が国体を保護することになれば計り知れない幸福と言える。故に王政復古は皇室の威力によるのではなく、皇室はあたかも国内の智力に名前を貸したようなものである。廃藩置県は政権の英断でなく、政権はあたかも国内の智力に使われてその働きを実行にうつしたようなものである。

少数派の知力が衆論になった

このように全国の智力によつて衆論をつくり、その衆論が落ち着くところで政府を改めて、最後に封建制度も廃したが、この衆論にかかわる人を数えると大変少ない。日本中の人口を三千万とし、農工商の数は二千五百万より多く、士族はわずかに二百万人に足らず、その他の儒、医、神官、僧侶、浪人の類を集めて仮にこれを士族とみなしておおよそ五百万人を華士族の集団とし、二千五百万人を平民の集団とし、昔から平民は国の政治にかかわることがないので、今回のことについて

もともとそれを知らない。だからこの衆論が出たのはきつと士族の集団の五百万人の中からである。またこの五百万人の中でも改革を好む者は大変少ない。第一にこれを一番好まないのは華族である。次いで大臣、家老で、次いで高禄の侍である。この人たちは改革によって損失を受ける者だから決してこれを好む理由がない。身に才徳がなくて、家に巨万の富を蓄え、官にあれば高官を占め、民間にあれば富裕の名望を得た人物が、国のために義を唱えて財産を失って自分自身を犠牲にする者は、古来の例では甚だ稀なので、今回の改革でも、かかる人物は士族の中でも平民の中でも極めて少ないはずである。

ただこの改革を好む者は、藩中で門閥がない身分が低い者か、門閥があっても常に志を達成できずに不平を抱く者か、地位も財産もなくて民間に雑居する貧乏書生か、いずれも事にさえ出会えば得るものがあつて損にならない身分の者である。要するに、改革の乱を好む者は智力があつてお金がない人々である。古今の歴史をみてもわかる。今回の改革を企てた者は士族の集団五百万人中のわずか一〇分の一にも足らず、婦人子供を除けばさほどの人数もなかった。どこから始まったとも知れず、突然新奇な説を唱えだして、何時ともなく世間に流布し、その説に応じた者は必ず智力が盛んな人物で、周囲の人はそのために説得され脅かされ、何も考えずにこれに同意する者、やむを得ず従う者もあつて、次第に人数も増して、遂にその説が認められて国の衆論となり、天下の勢いを圧倒して鬼神のような政府をも転覆させたのである。

その後の廃藩置県も、華士族一般のためには極めて不都合で、好まない者が一〇人に七、八人、この説を主張する者はわずかに二、三人であつたが、その七、八人はいわゆる古風家で、この仲間の中に広まった智力ははなはだ乏しくて、二、三人の改革者流が持つ智力の分量には遠く及ばなかった。古風家と改革家の人数を比較すれば、七、八人と二、三人の割合だったが、智力の量はその反対だった。改革家はこの智力の量で人数の不足を補い、七、八人を占める多くの人たちの望むものを盛んにさせなかった。

最近では、真の古風家と呼べる人ははなはだ少なく、旧士族に禄位を続けて禄を払うべきと言う人もなくて、和漢の古学者流も半数以上は説を変えて、あるいは強引な論を作つて勝手に自分のもとの説だと装い、体面を保ちながら改革家の仲間にならうとする者もいる。これはあたかも和睦の名目で降参するようなものである。もともと、その名前が和睦でも降参でも、長い間混同していると、最後には実際に進む方向が同じになつて、ともに文明の道に進むことになるので、改革家の仲間は次第に人数が増えたが、初めにことを企てて成し遂げたこのは、人数が多かつたのでなく、智力で多くの人々を圧倒したためである。今日でも古風家中に智力がある人が生まれて、次第に仲間を増やして盛んに古風を唱えれば、必ずその仲間は勢いを増して、改革家も道を避けるようになるが、幸いにして、古風家に智力がある者が少なくて、あるいはたまたま人物が生まれてもその仲間を背いて自分たちの役には立たなくなる。

知力はスパイでなく自由な言論によって知るべき

ことの成功失敗は人数でなく智力の量によるというのは、前段の証明で明らかになった。故に人社会の事物はこの智力のあるところを目的にして対応せざるをえない。一〇人の愚者の意向に合わせようとして、一人の智者の非難を招いてはいけない。百人の愚人の褒め言葉を得るために一〇人の智者に不平を抱かせてはならない。愚者に非難されても恥じることはない。愚者に褒められても喜ぶ事はない。愚者のお褒めや非難は事を処するうえの規範にすべきではない。たとえば、周礼（周代の官制を記した書）に書かれた郷飲酒の意に基づいて、後世の政府が、時として酒肴を人民に与える例があるが、その人民が喜ぶ様子を見て、地方の人心を判断してはいけない。いやしくも文明に向かう人間世界にあって、人が恵んだものを飲食して喜ぶ者は飢えた者でなければ愚民である。この愚民が喜ぶのを見て喜ぶ者は、その愚民と同じ愚者だけである。

また古い歴史書に、君主がお忍びで民間を回り、童謡を聞いて感動したとの話がある。何と役に立たないことであろうか。これは昔のことで確かめることもできないが、今日でもまさしくこれに似たことがある。それは独裁政府が使う間諜（スパイ）である。政府が暴政を行って民間に不服の者がいることを恐れて、小人（卑しい者）を使って世間の事情を探索させて、その報告を聞いて政治を処理しようとするものである。この小人を名付けて間諜という。そもそもこの間諜なる者は、誰に会って何事を聞くのだろうか。堂々たる士君子は人にものを隠すことではない。もし陰で反乱を企てる者がいれば、その人はきつと間諜よりも智力が盛んな人だから、誰がこの小人を使って秘密ごとを探らせるのだろうか。故に間諜なる者は、ただお金のために雇われて世間を徘徊し、愚民に会って愚説を聞いて、自分の憶測を交えてそれを主人に報告するだけである。実際にも少しも利益となるものがなく、主人にとってはお金を失い無駄に智者のあざけりを買う者といえる。

フランスのナポレオン三世は長い間間諜を使っていたが、プロシアとの戦争の時に国民の实情を探れなかったから、戦争に負けて生け捕りにされたのではないか。これを教訓にすべきである。政府がもし世間の实情を知りたいならば、出版を自由にして智者の意見を聞けばよい。著作や新聞に制限を設けて智者の言論を塞ぎ、間諜を使って世間の動向を探索するのは、あたかも生き物を閉じ込めて空気が入らないようにして、わきからその生死を窺うようなものである。これほど卑劣なことがあるのか。死なせたいなら打ち殺せばよい。焼いて殺せばよい。人民の智力が国に害があるというなら、天下に読書を禁ずることもできる。天下の書生を穴に埋めることもできる。秦の皇帝の先例にならうべきである。ナポレオンの名声もこの卑劣さを免れない。政治家の心だては輕蔑に耐えない。

衆論の特徴②人が集まって議論すると意見が変わる

第二。人の議論は集まって論じるとその趣を変えることがある。臆病な人も三人集まると、闇夜に山道を歩くことも恐れることがなくなる。まさしく、勇氣は個々の人について求めるべきでなく、参人の間で生じる勇氣である。また一〇万の勇士が風や鶴の鳴声などのちよつとしたことでも敵と思つて逃げ出すことがある。まさしく臆病は個々の人について求めるべきでなく、一〇万人の間で生じる臆病である。人の智力の議論は丁度化学の法則に従う物質のようである。ソーダと塩酸を別々に離せばどちらも劇薬で金物類も溶かす力があるが、これを化合すると食塩になつて台所で日用品として普通に使うことができる。石灰とどう砂（塩化アンモニウム）は両方とも劇薬ではないが、これを化合すると「どう砂精（気体アンモニア）」になり、人を卒倒させることができる。

近年の日本で行われる各地の会社なるものを見ると、会社が大規模になるほどその不始末も益々ひどくなる。百人の会社は一〇人の会社に劣る。一〇人の会社は三人の組合に及ばない。三人の集まりよりも一人で元手を出して、一人の考えで商売すれば、得る利益も最も大きい。そもそも今、会社を作つて商売を企てる者は、大体世間ではすぐれた人で、かの古風な頑固者で祖先の遺法を守つて爪に火をともし者に比べれば、その智力の違いは勿論比べものにならない。それなのにこの才子たちが集まつて何かすると、すぐその性質が変わつて大笑いする失策をし、世間に笑われるだけでなく、その当の才子たちもどうしてそんな失敗をしたか自分でもわからず慥然としている。

また、今の政府の役人はみんな国内ではしかるべき人物で、日本中の智力が大半政府に集まつているともいえる。しかし、この人たちが政府に集まつて事をなすに当たりその処置は必ずしも賢くない。いわゆる衆智者結合の変性で、あのソーダと塩酸が結合して食塩を生む道理と同じである。要するに、日本の人は仲間をつくつてことにあたり、各人の持ち前の智力に比べて不似合な拙さを示すのである。

西洋諸国の人民も必ずしも智者ばかりではない。それなのに仲間を組んで事を行い、世間に実績として表れたものを見ると、智者がしたような成果を出す。国でやることはすべて仲間同士の相談で行う。政府にも仲間が相談して行ふ議院なるものがある。商売でも仲間が集まつて行ふカンパニーなるものがある。学者にも仲間があり、教会にも仲間が集まつている。僻地の村落に至るまで小民が各々仲間を組んで公私の事務を相談している。仲間が集まれば仲間毎に固有の議論が生まれる。例えば、数名の友達、二、三軒の近隣で仲間を組めば、その仲間固有の意見がある。それらが集まつて一村になれば一村の意見があり、一州となり一郡になればまた一州一郡の意見が生まれる。こちらの意見と向こうの意見を統合して少し趣を変え、また合併してまた意見が統合されて、最後には一国の衆論が定まることに

なり、その趣はあたかも若干の兵士を集めて小隊とし、合併して中隊となり、また合併して大隊になるようなものである。大隊の力は敵と向かい合ってしつかり戦えるが、兵士一人一人についてみれば必ずしも勇士ばかりではない。故に、大隊の力は、兵士各個の力ではなくて、隊を組んだために別に生じたものと言える。

今一国の衆論も、それが定まった後にこれをみればすこぶる高尚で有力であるが、そうなった理由は、高尚で有力な人物が唱えたというだけで議論が盛んになったわけではない。この議論に同意する仲間が集まって仲間の中で自然と議論が盛んになったものである。要するに、西洋諸国で行われている衆論は、その国の個々人の才智よりもさらに高尚になって、それぞれの人は人物に不釣り合いな説を唱え、不釣り合いな行いをする者といえる。

西洋には議論する習慣。議論する習慣に変える必要

このように西洋の人は、個人の知恵に不釣合なすぐれた説を唱えて、不似合な巧みな事を行う者である。東洋の人は、知恵に不似合な愚説を述べて、不似合な拙策を行う者である。そうなる原因を調べると、ただ習慣の二字があるだけである。習慣も長く続くと第2の天然となって、知らず知らずに事を成し遂げるようになる。西洋諸国の議論の方法も、数百年の昔からの世の習慣でそのならわしになったものだから、今日に至ると知らず知らずのうちに自然に体裁を整えたものだろう。

アジア諸国ではそうではなく、インドのカーストのように、人の格式を決めて偏重がひどくなって、その利害が分かれて得失も異なり、自然とお互いに薄情になるだけでなく、暴政府の風習でことさらに徒党を組むことを禁じる法を作って人が集まって議論することを妨げた。人民もまたひたすら無事を望む気持ち強く、徒党を組むことと集まって評議することを区別する気力もなくて、ただ政府に国事を任せて自分は関与せず、百万の人は百万の心を抱いて、各々各家へ閉じこもって、戸外はあたかも外国のようで無関心になり、井戸浚いの相談もできず、ましてや道普請の相談など出来るはずもなかった。行き倒れをみても走って過ぎ、犬のふんがあっても避けて通り、俗に言う関わり合いを逃れることに忙しくて、どうして集義を企てる余裕などあろうか。長い間の習慣がこの風俗を作り、遂に今の有様に陥った。

これを例えると、世の中に銀行なるものがなく、人はみな財産を家に蓄え、一般に融通させず、国に大事業を企てることができないようなものである。国内の各戸には財産、資本がないわけではない。ただ各家に滞留して全国の用をなさないだけである。人民の議論もそれと同じで、各戸ごとに各人に聞けば、各々所見がないわけではないが、所見が百万千万にわかれて、それをまとめる手段がないので、国全体の用をなさないのである。

世の学者の説に人民の衆議は好ましいことだが、無知の人民は気の毒ながら専制の支配下に置かざるを得ない、故に議事を始めるには時を待つべきだという者がいる。たしかにその時期は人民に智が生じる時であるべきだといえ、人の知恵は夏の草木のように一夜で成長するものではない。たとえ成長しても、習慣として用いられなければ効能はない。習慣の力はとても強いので、これを養えばその働きには際限がない。最後は自分の財産を守ろうとする人の気持ちまでも圧倒するようになる。一例を示そう。

今我が国の政府の歳入のおよそ五分の一は華士族の家禄に使い、そのお金の出るところは農商にほかならない。今この禄を廃止すれば、農商の持ち出しは五分の一減って五俵の年貢は四俵になる。人民をいくら愚と言っても四と五の区別する智力もないわけではない。百姓の身になって考えれば、入り組んだ話ではない。自分がつくったお米を分けて赤の他人を養うことになれば、与えるか与えないかの二つに一つしかない。また、士族の身になって考えれば、家禄は先祖伝来の家産である。先祖に手柄があつてもらつてきたもので、自ずと日雇賃とは違うもので、今自分に兵役がないといって、どうして先祖の褒章を止めて家産を失う理由があらうか、士族は無用としてその家に属した禄を奪うなら、富商豪農で何もしないで食っている者もその家産を奪うべきではないか、どうして一人自分の財産を削って無縁の百姓町人を豊かにしするのか。

このように説を述べれば各々一理ないわけではないが、士族の中でこの議論があることを聞かない。百姓も士族も現に自分の財産を得るか失うかの境にいて、平気で他国の話を聞くように、自然に禍福が降るのを待つように、ただ黙って座って事の成り行きを見ているだけである。実に怪しむべきことではないか。仮に西洋諸国でこの類の事件があれば、世論はどういうことになるか。多くの人が湧くが如く一斉に舌戦を始めて大騒動になるに違いない。私はもともと家禄与奪の得失をここで論じるつもりはないが、ただ日本人が無議の習慣（議論しない習慣）に制約されて、落ち着いていくべきでない時に穏便に安んじて、開くべき口を開かず、発すべき議論を発しないことに驚くだけである。

利益を争うのは古人が諫めていることだが、利益を争うとは道理を争うことでもある。今わが日本は外国人と利益を争って、道理を闘わす時である。内部に淡泊な人は外に対してもまた淡泊にならざるを得ず、内部でのろまな者は外でも活発にはなれない。国民の愚鈍淡泊は政府の専制には便利だが、この国民に頼っている外国との交際は全く覚束ない。一国の人民として地方の利害を論じる気性もなくて、一人の人として独一個の榮辱を重んじる勇氣がなければ、何事を話しても無駄である。まさしくその気性も勇氣もないのは天然の欠点ではなく、習慣によって失ったものだから、それを回復する方法もまた習慣によらなければ得られない。習慣を変えることが大切なことだというべきである。

第六章 智徳の弁

智徳の四様

前章までの議論では、智徳の二字を熟語として用い、文明の進歩は世間一般の人々の智徳の発生に関するものであるという次第を述べたが、この章では、智と徳を区別して、その内容が異なるところを示したい。

徳とは徳義ということ、英語でモラルという。モラルとは心の行儀ということである。人の心を気分よくさせて、他人が見ていないところでも恥ずかしい行いをしないことである。智とは知恵ということで、英語でインテレクトという。物事を考えて、理解し、物事を了解する働きである。また、この徳義にも知恵にも、各々二様の区別があつて、第一には、貞実、潔白、謙遜、律儀などのように、人の心の中に属するものを私徳といい、第二に廉恥、公平、公正、勇強のように外物に触れて人間の社会で発揮される働きを公德と名付ける。第三にものの道理を究めてこれに應じる働きを私智と名付け、第四に人が行うことの軽重大小を分別して軽小を後に重大を先にし、その時と場所を考える働きを公智という。故に、私智はこれを工夫する小智ということもできる。公智は聡明な大智ともいえる。

この四つのうち最も重要なものは、第四の大智である。たしかに聡明英知の働きがなければ、私徳私智を拡大して公德公智にすることはできない。あるいは、公私が互いに害し合うこともある。昔から明らかにこの四者を取り上げて論じたものはないが、学者の議論でも巷の話でも、よくその意のあるところを吟味すれば、この区別があることがわかる。

孟子に、惻隠（思いやり）、羞惡（惡を恥じる）、辞讓（謙遜）、是非（判断力）が人心の四端（四つの心）。孟子の言葉で仁義礼智の道に進む糸口で人は生まれながらにこれをもっているとしたで、これが広く行き渡ると、火が初めて燃えて、泉が初めて出てくるというように、これを充たせば天下を平穩に保つことができて、充たすことができないと父母に仕えることもできないとある。私徳を広く行き渡らして公德に至る意味だろう。また、知恵があつても勢いに乗じる者には及ばない。農具があつて自然の営みを待たざるを得ないという。まさに時勢の緩急を考えて、私智を広く行き渡らして公智にするという意味である。

また、俗世間の話に、某は世間に出しても申し分ない人物で、公用向きには最上だが、一身の行状になるとんでもない人と言うことがある。フランスの首相リシ

ユリーのような人がこれである。公智公德に欠点はないが私徳に乏しいということである。また、某は、囲碁、将棋、そろばんを始め何事にも工夫は上手だが、いわゆる囲碁知恵、そろばん勘で、とかく無分別な人ということもある。まさしく私智があつて公智がないことを評している。このように、智徳の四様の区別は、学者も俗世間も共に認めるもので、これは普通の区別といわざるを得ない。まずこの区別を定めて、次にその働きを論じると次のようになる。

前に述べた通り、聡明英知の働きがなければ、私智を広く行き渡らして公智にすることはできない。例えば、囲碁、カード、手品などの技芸も人の工夫である。物理、機械などの技術もまた人の工夫で、同じように精神を使うが、事柄の軽重大小を察して、重大のほうに従事して世の中の利益になれば、その知恵の働きはやや大きいと言える。あるいは、自らは手を下さないでも、事物の利害得失を考えて、アダム・スミスが経済の法則を論じたように、自ら天下の人心を導いて社会を豊かにする源になるのは知恵の働きが最も進んだものといえる。いずれも小智から進んで大智に至るには、聡明英知の考えが不可欠である。

また、士君子の話に、天下のチリは払っても自分の庭は顧みるに足らないなどと言って、治国平天下の技術を研究して大いに得るものがあっても、自分の家の中を修めることができない人がいる。一途に律儀を守って戸外のことを知らず、はなはだしくなると自分を犠牲にしても世の中の役に立たない者もいる。いずれも皆、聡明の働きに欠けて事物の関係を誤り、大小軽重の判断が出来ず、バランスよく徳を修めることができなかったものである。

これから考えると、聡明英知の働きは、あたかも智徳を支配するので、徳義について論じるときは大徳ということもできるが、こここでは世の一般の人心に従つて字義を用いているので、これを徳と名付けられない理由がある。昔から我が国の人心で徳義と呼ばれるものは、もっぱら個人的な私徳だけに名をつけたもので、その考えからすると、古書に温良恭儉讓（孔子が人に接する態度を評した言葉で、穏やか、素直、恭しく、つつましく、控えめなこと）といい、何もしないで治まるといい、聖人には迷いがないといい、君子で豊かな徳をもつ人を愚者のようにいい、仁者は山の如しなどというのは、すべて私徳を中心に考えていて、結局外に現れる働きよりも内部にあるものを徳義と名づけるだけで、英語で言う**パッシフ**（passive）といって、自分から働くのではなく、物に対して受け身の姿になつて、ただ私心を放散（ほうげ）（洗い流す）することの一事を要領とするようなものである。經典を調べると、全部受け身の徳だけを論じるものでなく、中には活発発地（盛んな勢い）を興味深く論じているものもあるが、残念ながら、その書物全体の印象について人心が感じるものは、ただ、堪忍卑屈の旨を勧めているに過ぎない。その他の神仏の教えも、修徳の一段になると大同小異である。この教えに育てられた我が国の人民だから、一般の人心では徳の意味は大変狭くて、いわゆる聡明英知などの働きはこの中に入っていない。

すべて言葉の意味を解くには、学者が決めた意味に関わらず、天下の人々の心を察して、多くの人々が思う意味をとるのが最も確実である。例えば、「舟遊山」という字のようなものである。一々字の意味を追求するとても具合が悪いが、世間一般の人が思うことは、この文字の中に山に遊ぶという意味は含まない。徳の字も同様である。学者流に意味を追及すれば、その意味はとても広いけれど、世の人が理解しているものはそうではない。世の中で、無欲な山寺の老僧を見ると高德な僧と尊敬するが、物理、経済、理論などの学問に優れた人がいても、これを徳行の君子とは言わず、才子又は智者というにきまっている。或いはまた、古今の人物で大事業をなした人がいると、これを英雄豪傑とほめたたえるが、その人の徳義についてはただ私徳の一事があるだけで、公德のもっと貴ぶべきものは、却ってこれを徳義の項目に加えず、しばしば忘れられることがあるようなものである。世の人が理解する徳の字の意味の狭いことはこれで分かる。

確かに無意識に自分では知徳の四様を知っているが、時としてこれを意識し、また意識しないかのように、結局天下一般の使い方に制約されて、私徳の方を重んじるように偏ったのだろう。だから私も、世間の人々の心にしたがって字の意味を定めると、聡明英知の働きを智慧の項目に分類し、あの徳義と称するものは字の意味の領分を狭く、ただ受身の私徳に限らざるを得なくなる。第六、七章に記す徳の字は、すべてこの意味にしたがって使うので、その議論の際に、知恵と徳義を比較して、智の働きは重く広く、徳は軽く狭くなどのように極論をいうこともあるが、識者がもしここに書いたことの趣意を了解すれば、混乱することはないと思う。

文明が進むと私徳万能では立ち行かない

そもそも未開の状態では、私徳の教えを主張し人民もそれになびくのは、独り我国だけでなく、万国そうならないところはない。確かに国民の精神が未だに発達せず禽獣の段階からさほど遠くない時代では、まず粗野で残酷な挙動を制御して、自身の内部を緩和し、人々の安心を求めることに忙しいので、社会の入り組んだ関係をあれこれ考える余裕もない。衣食住についても、開闢の始めには手から直ちに口に入れる食べ物を得ることに忙しく、未だ家や服装を省みる余裕もなかったようなものである。しかし文明が段々進むと社会もまた複雑になって、私徳の一機械だけで人間世界を制御できる道理はなくなり、古来の習慣と生まれつきの不精によって、昔を慕って今に満足して、一方に偏って平均を失うことになる。

もともと私徳の項目は、永遠に伝わって変わることがなく、世界中に通用して違いがあるべきでなく、最も単一で最も美しいものなので、後世になってこれを改めることが出来ないのももちろんだが、世の移り変わりに沿ってこれを使う場所を選び、使う方法を工夫せざるを得ない。たとえば、食事をするのは昔から同じだが、昔は手ですぐに口に入れる方法しかなかったが、後世になると飲食も様々な方法があるようなものである。またこれを例えると、私徳の人心に対する関係は耳目鼻

腔の人身に対する関係と同じようなものである。本来、その有用無用を論すべきものではない。かりにも人であるならば、必ず耳目鼻腔はあるかないかの議論は、片輪者が住む世界で行われるもので、片輪以上の地位に上れば、あれこれの言葉を費やす必要はない。まさに神儒仏でもキリスト教でも、いずれも昔の非文明の時代のあたかも片輪の時代に唱えられた説だから、その時代にとって必要だったことはいうまでもない。

後世の今日になっても、世界中の人口の十に八、九人が片輪のようなものだから、徳義の教えもいい加減には出来ない。あるいは、このためにあれこれ言わざるを得ない勢いもあろう。(儒者の道に誠実さを尊重し、神仏の教えに一途に一所懸命になるのは、程度が低い民衆には最も緊急に必要なことである。例えば、智力がまだ発達しない子供を育て、或いは無知無術な愚民に、一概に徳義などは人間がそれほど貴ぶべきものではないといえ、きつと誤解を生んで、徳は卑しむべし、智恵は貴ぶべしと心得て、その智恵をまた誤解して、美徳を捨て悪智恵を求めるといふ悪弊に陥り、たちまち社会を覆し滅ぼす恐れがあるので、その人に徳義についてあれこれ説明する必要がある。しかし、誠心一向の私徳を人類の本分とし、これで世のすべてのことを処理しようなどとするのは、その弊害が極めて恐るべきものである。場所と時節をわきまえて、ここでは高尚な議論をせざるを得ない。) そうだとしても文明の本旨は、多事の際で動いて進むので、昔の無事単一に安んじるべきでない。今の人として、食事をするのに手からすぐに口に入れることはよしとせず、わが身に耳目鼻腔を備えていることは誇るに足りないことが判れば、私徳の一方を修めてもまだ人事を尽くしたことになるない理屈は明白である。

文明の社会は極めて複雑なことを必要とする。社会が繁多だから、これに応じる人の心の働きもまた繁多にならざるを得ない。もし私徳の一つだけで万事に対応できれば、今の婦人の徳行をみて満足するのも理由がないとはいえない。支那や日本で風俗がきちんとした家の婦人は、温良恭儉の徳を備えて、言葉は誠実で正直、行動は慎み深く、上手に家事を治める才能がある人は珍しくないが、この婦人を社会の中の公務に用いられないのはどうしてか。社会の中で事務を処理するには私徳だけでは不十分と言う証拠である。結局私の意見は、私徳を人生のささいな行いとして顧みないわけではないが、昔からわが国の人々が心に思っているように、ただこの一方に偏って議論の本位を定めることを避けたのである。私徳を無用として捨てるのではないが、これに勤める以外にまた大切な知徳の働きがあることを示したいと望むだけである。

文明では智と徳を兼備する人が必要

智恵と徳義は、あたかも人の心を二つに割って、各々一方を支配するものだから、どちらかが重い、軽いという理由はない。二者を兼備出来なければ、十全な人とはいえない。しかし昔から、学者が論じるところをみると、十に八、九は徳義の一方を主張して事実を誤り、その誤りが大きなものになると、智恵を全く無用とす

る者もないわけではない。世のために最も憂うべき弊害だが、この弊害を非難するうえで一つの困難がある。何かと言うと、今の世で、智恵と徳義の区別を論じて旧弊を改めようとするには、まずこの二者の境界を明らかにし、その効用の所在を示すことだから、考えが浅い人の目でこれを見ると、或いはその議論は、徳を軽視して智を重んじ、みだりに徳義の領分を侵すものだといって、不平を抱く者もあろう。或いは、その議論を軽々しく見過ごして、徳義は人間に無用であると誤解する者もいるに違いないためである。

そもそも文明のために知徳がともに必要なことは、あたかも人身を養うために菜穀と魚肉の両方を欠くことができないようなものである。故に今、知徳の効用を示して、知恵をいい加減にすべきでないことを論じることは、不養生な菜食主義者に向かって肉食を勧めることと変わらない。肉食を勧めるには、まず肉の効能を説いて菜穀の弊害を述べて、菜肉の両方を使って必要なことを明らかにせざるを得ない。しかし、この菜食主義者なる者は、一方の言うことを信じて、どうしても菜穀を禁じて魚肉だけを食べようとすることがあれば、はなはだしい惑いである。主旨を誤解しているといわざるを得ない。

考えてみると、古今の識者も智徳のことを知らなかったわけではなく、ただこの誤解の弊害を恐れて言えなかったのではないだろうか。そうだとすると、知っていて言わなかったとすれば何も変わらない。何事も道理にさえかなえば、十人が十人とも誤解するものではない。たまたま十に二、三の誤解があっても、言わなかったことよりも優っている。二、三の誤解を恐れて、七、八の知識を塞ぐ理由はない。つまるところ、世の人の誤解を恐れて、言うべき議論も隠し、あるいは議論をこまかしてすっかり理解されないように人を導き、いわゆる座を見て法を説くという策を巡らすのは、同じように生きている人を蔑視する振る舞いというに等しい。世の人が愚かであるとしても黒白は述べるべきである。同類の人間にはなほだしい智愚の差があるはずがない。それなのに自分で人の愚かさを推測し、誤解を心配して事の真実を告げないことは、相手を敬愛する道を失うことではないか。君子がすることではない。仮にも自分が是と思うなら、丸出しでこれを隠さずに述べて、その可否の判断は聞いた方に任せればよい。これがあえて私が智徳の区別を述べる理由である。

① 徳は内、智は外の働き、

徳義は一人の心の中であって、他人に示すための働きではない。修身といい、慎独（一人で、他人がいなくても身を慎むこと）といい、みな外物に関係がないものである。例えば無欲正直は徳義だが、人の誹謗を恐れ世間の悪評に遠慮して、無欲正直な行いを努めるものは真の無欲正直とはいえない。悪評と誹謗は外のこと

ある。外物のために左右されるものは徳義とはいえない。もしこれを徳義というと、一時の事情で世間の咎めを逃れるために、貪欲不正なことを行っても、徳義に支障がないということになる。これでは偽君子と真君子の区別もなくなる。ゆえに、徳義とは一切外物の変化にかかわらず、世間の毀譽きよを考へることもなく、威光や武力にも屈せず、貧賤もこれを動かすことができず、確固不伐として心の内部にあるものを言うのである。

智恵はこれと違う。外物に接して利害得失を考え、それを行って不都合ならば改め、自分では役立つと思っても多くの人が不便と言えばそれを改め、一旦は便利だったがさらに便利なものがあれば、これを採らざるを得ない。例えば、馬車は駕籠よりも便利だが、蒸氣力を使える事を知れば蒸氣車を作らざるを得ない。この馬車を工夫して蒸氣車を發明しその利害を考えて使うのは智恵の働きである。このように智恵は外物に接して臨機応変に処置をするからその趣は徳義と正反対で、これは外の働きといわざるを得ない。有徳の君子は一人家において黙って座っていても悪人とはいえないが、智者がもし何もしないで外物に接することがなければ愚者と呼ぶこともできる。

②徳の影響は狭く、智の影響は広い

徳義は個人の行いで、その効能はまず一家に及ぶ。主人の品行が正直ならば、家内の者も自然と正直になり、父母の言行が穏やかならば、子供の心も自然と穏やかになる。あるいは、親戚や友人の間でお互いに善を促して徳の門に入るべきと言っても、忠告で人を善に導くことができる範囲はとても狭い。いわゆる家ごとに論ずることはできず、各人ごとに説教することもできないとはこのことである。

智恵はそうではない。一旦物理の法則を発見して人に話すとたちまち一国の人心を動かし、その發明が大きければ一人の力で世界を一変させることもある。ジェームス・ワットが蒸氣機関を發明して世界中の工業が状況を一変し、アダム・スミスが経済の定則を発見して、世界中の商売の様子を改めた。それを人に伝えるのは言葉でもよいし、書物でもできる。一度話を聞き、書物を読み、これを実際にやってみる人がいれば、その人はまさしくワットやスミスと変わらない。故に、昨日の愚者が今日智者になり、世界中に幾千万のワットやスミスを生み出すことができる。その伝習は速くて、それが行われる範囲の広さは、あの一人の徳義を家族や友人に忠告する類ではない。

ある人が言うに、トーマス・クラークソンが世の中から奴隷制を廃止し、ジョン・ハワードが経験を積んで刑務所の悪い風習を一掃したのは徳義の働きだが、その

善行が影響する範囲は広大無量と言わざるを得ない、と。答えるならばその通りで、この二人は私徳を広く行き渡らして公德とし、その善行を広大無量に及ぼしたものである。しかし、二人が事を行うに当たって、苦勞もいとわず工夫して、あるいは書物を書き、財産を使って困難を乗り越え、危険を冒して世の中の人々の心を動かし、最後に大事業を成し遂げたのは、ただ私徳の功績ではなく、いわゆる聡明英知の働きと呼ばれるものである。二人の功業は偉大だったが、世の中の人心に沿って徳を解釈し、徳義の一方からこれをみれば、身を殺して人を救ったことにほかならない。今ここに仁のある人がいて、子供が井戸に落ちたのを見て救おうとしてともに命を失うことも、ジョン・ハワードが数万人を救って最後に自分の命を失ったことも、その惻隱の心（憐みの心）を比べると、どちらにも深淺の別はない。ただ彼は一人の子供のためにし、こちらは数万人のためにして、彼は一時的な公德をし、こちらは万代に公德を残したという違いがあるだけである。命を投げ出したという一段に至ると、彼とこちらの間に徳義の輕重はない。数万人を救い、万代の後に功績を残したのは、ハワードが聡明英知の働きによって私徳を大いに使い、功德が及ぶ範囲を広くしたものである。故に、前者は私徳はあっても公德公智に乏しい人である。ハワードは公私両方をもつ人である。

これを例えると、私徳は地金、聡明な知恵は細工のようなものである。地金に細工を施さなければ、鉄もただ重く固いだけだが、これに少し細工を加えて、金づちや釜にすれば金づちや釜のその効能がある。さらに少し工夫をめぐらせて、小刀やのこぎりにすれば小刀やのこぎりの効能がある。さらに巧みに細工をすれば、巨大なものや蒸氣機関にすることもできる。精細なものは時計のばねにもなる。今世間で、大釜と蒸氣機関を比較すると、蒸氣機関の効能が大として尊ばない者はいないだろう。これを尊ぶのはなぜか。大釜と機関と地金が異なるためでなく、その細工を尊ぶためである。故に、鉄の機械を見てその地金を見れば、釜も機関ものこぎりも小刀も同じだが、この諸品のうちに貴いものと卑しいものがでるのは、細工を施すことが多いか少ないかによる。

智徳の釣り合いもまた同様である。かの子供を救おうとした仁者もジョン・ハワードも、その徳行の地金については輕重大小の別はないが、ハワードはその徳行に細工をしてその効能を盛大にしたものである。このようにその細工を施したのは、智恵の働きで、ハワードの人柄は、これを評して単に徳行の君子と言うべきでない。智徳を兼備してしかも聡明な智力は、かつていなかった人物というべきである。もし、この人に智力がなければ、一生、虫がうごめくように無知な者として家にいて、一冊の聖書を読んで命が終わり、その徳義によってよく妻子を感化できるか、あるいはできないこともあったろう。どうして大事業を企ててヨーロッパ中の悪い風俗を除くことができたろうか、できなかったに違いない。故に、私徳の効能は狭く、智恵の働きは広い。徳義は智恵の働きに従ってその領分を広めて光を発するものである。

③ 徳は不変、智は進化

徳義は昔から決まっていた動かない。キリスト教の十戒をあげると、第一、神のほかに神ありと思うなかれ、第二、偶像の前に膝を屈するなかれ、第三、神の名を無益に言うなかれ、第四、礼拝の日を穢すなかれ、第五、汝の父母を敬え、第六、人を殺すなかれ、第七、穢れた姦淫をするなかれ、第八、貧しくとも盗むなかれ、第九、ことさらに嘘をつくなかれ、また嘘を好むなかれ、第一〇、他人の物を欲しがるなかれ、以上の十箇条である。孔子の道の五倫は、第一、父子は大切に思い、親子はお互いに親しみ合う、第二、君臣の間には義があり、主人と家来の間は義理を守って不実な挙動をしてはならない、第三、夫婦は特別といって亭主と細君はあまり馴れ馴れしくして、見苦しくしてはならない、第四、年上と年下の秩序を守り、年が若い者は何事も差し控えて年長者を敬うこと、第五、友人には信頼があつて、友達間でいつわりをしてはならない。

この十戒五倫は、聖人が定めた徳の大綱領で、数千年の昔からこれが変わることはなかった。数千年の昔から今日に至るまで、立派な徳を持った士君子はたくさん輩出したが、この大綱領には注釈をするだけで、別に一箇条も増やすことはなかった。宋の時代に儒教は盛んだったが、五倫を変えて六倫には出来なかった。徳義の箇条は少なくてそれを変えることが出来なかった明らかな証拠である。昔の聖人は、この教えをすべて身に付けて行動しただけでなく、人にも教えたので、後世の人がどんなに苦心して努め励んでも、決してその聖人を越えられなかった。これを例えると、聖人が雪を白いと言いつ炭を黒いというようなものだ。後世の人はこれをいかにすべきか、どうしようもない。徳義の道は、あたかも古人に専売権を占められて、後世の人は単に仲買なかがいをするよりほかに手段がない。これがキリストや孔子の後に聖人がいない理由である。故に徳義は、後世になつても進歩できない。開闢の始めの徳も今日の徳もその性質に変化はない。

智慧はそうではない。古人が一を知れば今の人は百を知り、古人が恐れたものを今の人は馬鹿にし、古人が怪しんだことを今の人は笑い、知恵の数は日々増加して、発明は昔から数えきれないほど多く、今後の進歩もまた予測できないほどである。仮に昔の聖人を現在に連れてきて、今の経済商売の話聞かせ、蒸気船に乗せて大洋の大波を渡り、電信で遠く離れた土地のニュースを一瞬に聞かせるなどしたら、肝をつぶすだろことは言うまでもない。或いはその人を驚かすには、必ずしも蒸気電信を必要とせず、紙を作つて字を書く方法を教え、或いは木版の印刷術を示しただけで敬服させるには十分である。なぜかという、この蒸気、電信、製紙、印刷の技術はすべて後年の人の智慧で到達したものだから、この発明工夫をするのに聖人の言葉を聞いて徳義の道を実践したわけではなく、昔の聖人が夢にも思わなかったことだからである。故に、知恵を基準にすれば昔の聖賢は今の三歳の子供に等しいものである。

④徳は無形、智は有形

徳義は形をもつて教えることができない。学んで身につけるかどうかは学ぶ人の心の工夫にある。例えば、經典に書かれた克己復礼の四文字を示して、その意味を分からせたとしても、まだ道を伝えたとは言えない。故に、四文字の意味をさらに詳しく説明して、克己とは人の私欲を抑制することで、復礼とは自分の本心に立ち返って分限（身のほど）を知る事だと丁寧（じやうぜい）に繰り返し説得する。教師の働きはここまでで、他に道を伝える方法はない。この上は各人の工夫で、古人の書を読み、あるいは今の人の言動を見聞きして、その徳行を真似るだけである。いわゆる以心伝心で、あるいはこれを徳義の教化（風化）という。

教化はもともと無形のことだから、そうなるかならないかについて試験の方法があるわけではない。実際は私欲をほしのままにしながら、自分は私欲を制御していると思い、あるいは分に過ぎることをしながら自分は分限をわきまえていると思う者もいる。その思うと思わざるは、教える人が関与することではなく、学ぶ人の心の工夫にあるのみである。故に、克己復礼の教えを聞いて、心の中で大いにももの道理が分かる者もいれば、誤解する者もいる。また、これを蔑視する者もいれば、理解しながら外見を装って人を欺く者もいる。その様子は千差万別で、真偽を区別することは大変難しい。

たとえその本心では教えを蔑視する人でも、外見を飾って人を欺くか、これを誤解して信じて、真の克己復礼ではないものを正しいとして疑わない者がいても、傍からはどうしようもない。こうなると繩墨（じようぼく）（客観的基準）で証明できるものがないので、これを告げるのに、天を恐れよといい、あるいは自らの心に問えと言うほかに手段がない。天を恐れ心に問うのは、その人の心の中のことで、真に天を恐れのか、偽って天を恐れているのか、外の人の目では急には見破れない。それが世に偽君子（ぎくんし）（偽善者）なるものが生まれる由縁である。

偽君子のはなはだしいものになると、徳義を聞いてその意味を理解するだけでなく、自分で徳義の説を主張し、あるいは經典の注解を書き、あるいは天道や宗教を論じて、その議論は如何にも純粹で混じりけがなく、その著書だけを読むと、後世にまた一人の聖人が出現したようなものになる。しかし、一歩下がってその人の私的な部分を見ると、言行の食い違いに驚かされ、心もりの愚かな様子には笑わされる。韓退之が「仏骨の表」（釈尊の遺骨）を差しだして君主を諫めたのはいかにも忠臣らしく、潮州へ左遷された時には詩などを作って忠義の心の憤る気分を漏らした。しかし、その後遠方から都の高官のところへ手紙をやって、恥知らずにも再度の士官を嘆願したのは、これこそ偽君子の見本である。この類を数えあげると、古今、支那でも日本でも、西洋でも韓退之の手下のような者がいないとは言えない。

巧言令色（口先がうまくこびへつらうこと）でお金をむさぼるものは、論語を講じる人の中にいる。無智な人を欺き弱者を脅して、名前も利益も二つながら取ろうとする者は、キリスト教を信じる西洋人の中にもいる。こうした徳のない人は、形のない徳義が試験による決まりもないことを利用して、徳義の門に出入りしてしばらくの間でも密売をする者と言うべきである。結局のところ、徳義の働きは外から人を制御ができないことの明証である。（書経に きんぶん 今文と古文の別がある。秦の皇帝が天下の書を焼いて、書経も一緒に滅んで、漢が興り文帝の時に、済南の老学生の伏勝がよく きんぶん 編を暗記してこれを伝えた物を今文と名付け、その後孔子の故宅を壊して壁中から出てきた古書を古文と名付けた。故に、今の書経 きんぶん 編のうちに、今文 きんぶん 編、古文 きんぶん 編がある。それなのに今、この両方の文を比較すると全く体裁が違い、今文は難解、古文は平易で、その文意や語調は明らかに違っていて、誰の目で見ても、秦の焚書坑儒の以前に行われた同一書のものとは思えない。必ずその一つは偽作であることは避けられない。ことに壁の中にあった古文の時代は晋の時代で、それ以前の漢の時代の本の一篇である秦誓といっているいろいろな学者が引用したものを、晋の時代に偽秦誓と呼んで廃棄したことがあった。いずれにしても書経の由来はよく分からないと言わざるを得ない。しかし後世になると、人の信仰はますますしつかりして、これを聖人の書とし、蔡沈が書経集伝の序に、聖人の心の書として現れたものと述べた。怪しい話ではないだろうか。蔡沈の意は今文古文の区別を論じなくても、書の中に書かれていることは聖人の旨にかなうと言ってこれを聖書とみなしたが、今古のうちのどちらかは後世に聖人の意を入れて作り上げた文章だから偽聖書と言わざるを得ない。だから、世の中に、偽君子が多いのは勿論だが、偽聖人を生んで偽聖書を作ることでもできると知っておくべきである。）

智恵はそうではない。世の中に智恵の量が多くなれば、教えなくてもお互いに習って、自然と人を智恵の領域にはいらせることはあの徳義の教化と異ならないが、智恵の力は必ずしも教化だけでその働きを伸ばすのではない。智恵は学ぶのに形をもって行い、明らかにその痕跡を見ることができると加減乗除の方法を学べば、すぐに加減乗除を行うことができる。水を沸騰させて蒸気となる理論を聞き、機関を製造してこの蒸気力を用いる方法を習えば、たちまち蒸気機関を作ることができる。一旦これを作ればその効用はワットがつくった機関と同じである、これを「有形の智教」（形あるものを教えること）という。

その教えに形があれば、これを試験するにも有形の客観的基準がある。故に智恵の方法を人に授けたと言っても、これを実施することについてまだ不安なことがあるれば、これを实地に試験すべきである。これを試験してまだ实地の仕方が上手くできない者がいれば、さらに实地施行の手順を教えるべきである。いずれも皆形をもって教えられることはない。例えば、ここに数学の教師がいるとする。十二を二分分して六を得る方法を生徒に教えて、これを実際に出来るかどうかを試みるには、十二個の玉を与えてこれを二分させれば、明らかにその技術を得たかどうか分かる。生徒がもし誤って、玉を二分し、八と四になったら、未だ技術を得ていないことがわかる。そういう場合は、再び説明して今度は十二を二等分して六と六にすることが出来れば、この一段の伝習は終わり、学んだ技術が巧みなことは

教師と同じで、あたかも天地の間に二人の教師が生じたようなものである。その学習が速やかで試験で理解の程度が明白なことは、実際に耳目で見聞きできる。航海の技術を試すには、船に乗って海を渡らすべきである。商売の技術を試みるには、物を売買させてその損益を見るべきである。医術の巧拙は病人が治るか治らないかをみるべきである。経済学の巧拙はその人の家の貧富によって証明すべきである。このように一つ一つ証拠を見て、技術を得たかどうかを確かめる、これを知術有形の試験法という。故に、知恵については外見を飾って世間を欺く方法はない。不徳者は有徳者のふりをして外見を見せかけることはできるが、愚者は智者のふりはできない。これが世に偽君子が多くて偽智者が少ない理由である。

経済家が、天下の経済を論じて一家の世帯を維持する方法を知らず、航海者が議論は巧みだが船に乗ることができないという類は、世間にも事例が少なくない。これらは偽智者に似ているが、世の中の物事で理論と実際が異なるといふ道理はない。ただ徳義のことについては理論と実際の違いを明らかにできる基準が乏しいだけである。智恵の領分では、たとえ偽智者が生まれても、その真偽を確かめる手段がある。故に航海者が船に乗ることができず、経済学者が家計のことが下手なら、その人はまだ真の技術を知らないか又は別にその学んだ技術を妨げる原因があるということになる。(例えば経済学者が贅沢を好み、航海者が身体虚弱で、その技術は巧みだが実行できない類を言う。そのようなわけで、技術といい、またこれを妨げる原因といい、これらはみな有形のものだから、その有様を糺して真に技術を得た者かどうかを証明するのは難しいことではない。その真偽が明らかになった場合は、傍らから意見してこれに教える方法もあるし、自分で工夫して人から学ぶ道もある。結局、智恵の世界では偽智者を容認する余地を残さないのである。

故に、徳義は形をもって人に教えられない。形をもって真偽を糺すこともできない。ただ形のないものとして人を感化できるだけである。智恵は形をもって人に教えられる。形をもって真偽を証明でき、形のないものとして人を感化することもできる。

⑤徳は心掛け、智徳は学習で進退する

徳義は心掛け(心の工夫)によって進退するものである。たとえば二少年がいるとする。二人とも田舎の生まれで、生まれつきの性格は素直で差異がないが、商売のためか学問のためか都会へ出てきて、初めは自分で友達を選んで交わり、先生を選んで学び、都会の人情が軽薄な様子を見てひそかに嘆息するほどだったが、半年過ぎ一年過ぎる間に、一人はもともと田舎魂が変わって街の浮ついた華やかさを学び、ついには放蕩無頼に陥って人生を誤る。他の一人はそうならずに一層身を修めて行状も終始一貫して、かつての田舎の本心を失わない。二人の徳行は天と地ほどの違いになることがある。その事実今日の東京にいて学問をする生徒を

見てもわかる。

もしこの二少年が故郷にいたら、二人ともに謹直な人物で、歳月を経るにしたがつて有徳な老成人になるはずだったのに、中年になって一人は徳から不徳に入り、一人はうまくその身を保つ者になった。今その理由を調べると、二人とも天与の才能には違いはなかった。その交わる人も、学ぶところも同様だったので、教育の良否によるものとは言えない。しかしながら、その徳行が大きく違っているのは、どうしてか。一人の徳はにわかに関心をもち、後退し、他の一人は旧を守ってこれを失わなかったもので、外物の働きに強弱があったのではない。心構えに動と不動の区別があつて、一人は退き、他の一人が進んだ証である。

また、少年の時から遊びにふけり、物を盗み人を傷つけ、悪行の限りを尽くし、親類や友人との付き合いも失い、世間に身を置く場所もなくなった者でも、一旦にわかに関心を改めてそれまでの非を反省して、将来の禍福をよく考へて謹慎勉強して半生を終る者もいる。その生涯の心事をみれば、明らかに前後二段に分かれて、一生に二生のことをして、あたかも桃の木の花の芽を接ぎ成木になった後、梅の花だけを見て根が桃の木であることを話すことができないかのようである。試みに世間でその実例を探すと、昔の博徒が今では坊主になり、有名な悪漢が手堅い町人になったと言う例は珍しくない。こうした人はみんな他人の指図で心を改めたのでなくて、自らの工夫によって改心したものである。

昔、熊谷直実が敦盛を討つて仏門に入り、ある獵師が子をはらんだ猿を撃つて生涯獵をやめたと言うのもこの類である。熊谷も仏に帰依すれば念仏行者となり、昔の荒武者ではない。獵師も鉄砲をなげうって鋤をもてば、やさしい百姓で昔の殺生人ではない。荒武者から念仏行者に変わり、殺生人から百姓に移るのには、他人から教えられる学ぶことを必要とせず、その人の心掛けだけで一瞬に行うことができる。徳と不徳の間は一瞬に変えられる。

智恵のことになると趣は大いに異なる。人は生まれた時は無知である。学ばなければ智恵は進むことができない。生まれたての子を無人の山へ放つと、幸いにして死ななければ、その智恵はほとんど禽獸と異ならない。あるいは驚うぐいすが巢をかけるような巧みな技術も教育がない人間一代の工夫ではできない。人の智恵はただ教育によって生じる。教えればその進歩に際限はない。進歩すれば後退することはない。二人の少年の天賦の才能は同じだから、教えればともに進歩できる。あるいは双方の進歩に遅速があるのは、その天賦の才能に違いがあるか、その教え方が同じでないか、あるいは勤怠が同じでないためにそうなるのである。何らかの事情があつても、心構えだけで急に智が開ける方法はない。昨日の博徒は今日念仏者になれるが、人の智恵は外物に触れないで一日の間に變化することはできない。また、去年真面目だった者が今年は放蕩者になり、その真面目さの跡も見えないということはあつても、人がすでに得た知見は、健忘症にかからなければ失うこと

はない。

孔子が「浩然の氣（俗事から解放された屈託のない心境）」といい、宗代の儒者の説では「一旦豁然として通じる（にわかに迷妄が解ける）」といい、禪家では「悟道（仏法で真理を悟る）」ということがあるが、これらは皆無形の心に無形のことを工夫するだけで、その痕跡を外から見ることができない。智恵の領分では、一旦豁然として悟れば、その効用は盛んになり、その大きさも浩然の氣のようなものではない。ワットが蒸気機関を發明し、アダム・スミスが經濟論を主張したのも、黙って一人座って一旦豁然として道を悟ったわけではない。長い間有形の學問を研究して、その功績が次第に成果として現れたものである。達磨大師を九〇年壁に向かわせても、蒸気機関の發明はできない。今の古學者流に和漢のたくさんの儒學の經典を読ませて、無形の恩恵や威光で人民を支配する妙法を工夫させても、今の世界で行われている治國經濟の説には到底到達できない。故に、智恵は學んで進歩できるが、學ばなければ進歩できない。一旦學んでこれを得れば、また後退することもない。徳義は教え難く學び難い。また心構えで急に進退することもある。

道徳主義批判

世の道徳家が言うに、徳義はすべての事の大本で、人間の事業で徳によらないものはない、一身に徳を修めればできないことはない、故に徳義は教えなければならず、學ばなければならない、人間万事これを放棄しても支障がない。まず徳義を修めてその後にものを考えるべきである。世に徳の教えがなければ暗夜に灯を失うようなもので、事物の方向を見る方法がない。西洋文明も徳の教えによるもので、アジアが半開であるのも、アフリカが野蛮であるのも、その原因は徳義を修めることの浅い深いによるものである。徳の教えは寒暖のようなもので、文明は寒暖計のようなものである。こちらに増減があるとあちらが応じて、徳を一度増すと文明も一度進む、という。こう言って人の不徳を悲しみ、人の不善を憂いてキリスト教に入るべきといい、神道が衰えたのを復興するとか仏法を広めるべしと言う。儒者にも國學者にも自説があつて、異説爭論で喧々諤々となり悲憂嘆息する有様は、あたかも水や火がまさに家に入ろうとしているようだ。これこそ極端に慌てふためくことにほかならない。私には別の考えがある。

何事も事物の極端を持ち出すと、それで議論のとどまらなくなる。今、不善不徳といって極端な様子を本位に定めて、一方を救おうとすると、勿論差し迫った急務に思えるが、一方の欠点だけを補ったからといって、まだ人としてできる限りを尽くしたとはいえない。その手で直ちに口へ運ぶ食物を得ても、人間としてのくらしができたとはいえないようなものである。もし、事物の極端を見て議論を定めようとする、道徳の教えもまた無力であるといわざるを得ない。仮に今、徳の

教えだけを文明の大本とし、世界中の人民すべてにキリスト教の經典を読ませて、これを読むほかに仕事がないとすればどうなるか。禪家の不立文字・禪宗の標語の一つで、悟りは文字で伝えることができず心から心へ伝えるもの)の教えを盛んにして、天下の人民が文字を忘れるようになったらどうなるか。古事記や五経を暗誦して、忠義修身の道を学び、暮らしを立てる方法も知らない者がいたら、これを文明の人といえるだろうか。五官の情欲を捨てて困難に耐えて、人間世界がどういふものかも知らない者がいたら、これを文明開化の人と言えるだろうか。

道端に石像があつて、三匹のサルが彫刻されていて、一つは目を覆い、一つは耳を覆い、一つは口を覆っている。まさしく、見ざる、聞かざる、言わざるのたとえで、我慢の徳義を表したものであろう。この趣意にしたがえば、人の耳目口は不徳の仲立人で、天が人を生むときに人に不徳の道具を与えたようなものである。耳目口に害があるとすると、手足もまたその悪事の道具になる。だから盲聾啞の人は未だ完全な善人でなく、同時に四肢の働きを奪い取ることこそが上策と言うことになる。あるいはそのような不具の生き物を作るよりも、世界中から人類をなくせば、上策の上になる。これが自然の決めごとと言えるだろうか。私は大いに疑わざるを得ない。

それでもキリストの經典を祈り、不立文字の教えにすがつて、忠義修身の道を尊んで、五感肉体の情欲を捨てた者は、徳義の道を信じて疑わない人である。教えを信じて疑わない者は、たとえ無知でもこれを悪人として咎める道理はない。無知を咎めるのは智慧がすること、徳義が関することではない。故に極端に言えば、徳の教えでは、私徳を欠く者を見て概して悪人とし、教えの目的はこの世からこの悪人を少なくすることの一事にあるようだ。そうであっても、しっかりと広く人心の働きを見て、その事跡に現れるものを詳しく見れば、この悪人を少なくする一事だけが文明と言えない道理がある。

今、田舎の土民と都会の市民を比べて、私徳の量を測るとどちらが多いか。はつきりとは決めにくいだが、世間一般の論に従えば、まず田舎の風俗を質朴といって喜ぶだろう。たとえ喜ばなくても田舎の徳風は薄く、都会の徳風が厚いと言う者はいないだろう。古代と近世を比べたり、子供と大人を比べるのも同じようなものだ。それなのに文明を論ずるときは、都会を文明といい、近世は文明が進歩したと誰もが言う。

それならば文明は、単に悪人の多い少ないことでその進退を占つてはならない。文明の大本は、私徳の一方にあるのでないことを明白に証明できるのに、かの道徳家たちは、始めから議論の極度に留まって、他の考えを考慮する余地を残さないで、一方に偏る。文明が広大なことを知らず、文明が多様なことを知らず、それが動くことを知らず、進むことを知らない。人心の働きが複雑で多岐にわたることを知らず、知徳に公私の別があることを知らず、その公私が互いに制しあうことを

知らず、平均しあうことを知らない。すべての事物を一つにまとめてその全体の得失を判断する方法を知らずに、ただひたすらにこの世の悪人を少なくすることだけを望んでいる。その弊害はついには世界の人民を義皇（中国最古の昔にいた三皇五中の伏羲と少昊のこと）以上の民のようにして、都会を田舎のようにし、大人を子供のようにし、一切の生物を石の猿のようにするという、狭い見地に陥ったものである。

結局のところ、神儒仏やキリストの教えでも、その本旨はそんな極端なものでないことは無論であるが、ただ、残念ながら世間一般の気風でその教えを伝えたり受けたりする際に、人心が感じる結果を見れば、最後にはこの心の狭い弊害から逃れられない。その趣を形容すると、ひどい酸敗家（酸味を好む人）には、どんな飲食を与えてもことごとく酸味にしてしまつて、滋養の効果があらわれないようなものだ。飲食の罪でなく、意見を曲げないせいである、学者はこれに注意しなくてはならない。

道德教育は頭があつても腕がない人をつくる

さて、識者がひどく世の不徳を心配する理由を調べると、つまるところ世の中の人をすべて悪人と考えてこれを救おうとする趣意になる。その老婆心はまことに尊いが、世の人を罪深い凡夫と名付けるのは、いわゆる座を見て説く（その場の興を見て）もので、実際は必ずしもそうではない。人はその生涯の間、努めて悪事ばかりを働くものではない。古今の世界中で、どんな善人でも全く悪行をしないことはない、どんな悪人でも全く善行をしないとはいえない。人の生涯の行状を平均すれば、善悪が交じり合つて善の方が多いものになるのではないか。善行が多ければこそ、文明も次第に進むことになる。だから善行は、すべて道德の教えの力だけで生じたものでない。人を誘つて悪に陥れようとして、その謀りごとが百発百中うまくいくことはないとするれば、この謀りごとを反対にして善に導こうとしても、必ず人を善に導くことが出来ないことを証明できる。

つまり人の心の善悪は個々人の工夫にあるもので、傍らから勝手に与奪すべきものではない。教えが行き届かなかつた古代の人民にも善人がいて、智力が発達していない子供に正直な者が多いことを見ると、人の性質は平均すると善であるといわざるを得ない。道德の教えの大趣旨は、その善の発生を妨げないことにあるだけである。家族や友人の間で善を促すのはその人の天性にないものを外から与えるのではなく、善の心を妨げるものを取り除く方法を教え、本人の工夫で本人自身の善を発揮させるのである。だから徳義は人が教えてつくるものでなく、これを学ぶ本人の工夫により発生するものである。

かつ、いわゆる徳行とは、この章の始めに書いたように、ただ受身の私徳で、結局は自分の私欲を捨てて、財を惜しまず名誉を欲しがらず、盗みや偽りをせず、心を潔白にして、誠のためには一命もなげうつことを指して言うことだから、すなわち難を忍ぶ心である。難を忍ぶ心はもととも悪いものではない。これはあの貧吝詐盗、大悪無道（貪欲で偽りが多い無道の大悪人）の不徳とは比べものにならず、人の品行で忍難の善心と不徳の悪心の間には、様々な段階がある。前段で智徳を四つに分けたが、その細目を挙げればほとんど際限がなくなる。あたかも、善悪を暑さ寒さの両極とし、その間に春、秋、薄暑、向寒もあって、寒暖の度に限りがないようなものだ。

もし人類がその本性を全うできれば、ひどい悪心はとくに抜け出して、はるか上流にいるはずではないか。人に盗みや偽りの心がないといって、これを美德とするほどのことではない。不盗不詐などは人の品行に数えるべきことではない。もし貧吝詐盗、大悪無道な者がいたら、人であって人でない者である。悪の心を内面にもつていれば世間から蔑視され、その所業が外に現れたときには社会の法で罰するべきである。いずれにも因果応報の次第は明らかで、懲悪の道具は外に備わり、勸善の機会の内面にあるといえる。

それなのに、今私徳だけを教えて、万物の霊長である人にわずかに人でなしの不徳を免れさせることだけに努めて、免れることを人生最上の目的とし、この教えだけで世間を覆い尽くして、却って人の天賦の智力を後退萎縮させるのは、結局のところ、人を蔑視し人を抑圧して人の自然を妨害する挙動といわざるを得ない。

一度心に圧制を受けると、これを伸ばすことが大変難しくなる。かの一向宗の人々は自ら凡夫と称し、他力によって極楽往生することを求めて、一心に阿弥陀様を拝んで、六字の名号を唱える以外に全く工夫がなかった。漢儒者が孔孟の道に心酔して經典を繰り返し読むほかに工夫がなく、国学者が神道を信じて古書を詮索する以外に工夫がなく、洋学者流がキリスト教の教えを悦んで日々進歩する学問を忘れて一冊のバイブルを読むほかに工夫がないというのも、皆一向宗の類である。本来、この流儀の人でも信じることを信じて、その身を修めて社会の様子を立派にする効能は、世の助けになることだから、決して無用なものとして非難する理由はない。

たとえば、文明の事業を知徳の荷物として、各人がその荷物を担うべきものとすれば、教えを信じて一身の徳を修めるのは、片荷を担う者であって、一方の責任は逃れても、ただ彼が信じられるものを信じるだけで、もう片方の荷物を担いでいない罪は逃れられない。その事情はあたかも脳があっても神経がないようなもので、頭があっても腕がないようなものである。結局、人の本分には達しても、天性を全うした者とはいえない。

キリスト教と文明

このように、私徳は他人の力で容易に作ることは出来ないものである。たとえ、うまく造りだしても智恵とセツトにならなければ用を足すことが出来ない。徳は智恵を必要とし、智は徳を必要とし、無智な徳義は無徳に等しいものである。つぎにその証拠を示めそう。

今の学者はキリスト教を役に立つと云って、神仏儒を役に立たないとするのはどうだろうか。その教えに正邪の区別があるのか。宗教の正邪は私には判定できなし、これを述べるのはこの書の趣意でないのでしておくが、その民心が感じる効能について考えると、キリストの教えも必ずしも常に有力なものではない。ヨーロッパの宣教師が東洋諸島やその他の野蛮な地方へ来て、その土人を改宗させた例は古来少なくない。それなのに今日に至るまで、土人は依然としてもとの土人で、その文明の有様はいうまでもなくヨーロッパと比較できるものではない。夫婦の区別も知らない赤裸の土人が教会に集まって、一母衆交（一人の母親に大勢の男が交わる）の間に生まれた子供にキリスト教の洗礼を行っても、これは単に改宗の儀式に過ぎない。あるいはその地方に文明の端緒を開いて進歩が始まった例も稀にあるが、その文明は必ず宣教師が教えた学問、技術とともに進んだもので、ただ宗教の一事だけで生じた結果ではない。宗教は表向きの儀式に過ぎない。

また一方、神仏儒の教えで育てられた日本の人民も、ただ文明の名を下すことは出来ないだけで、その心立てに至っては全員が悪人とはいえず、正直な人も大変多い。この趣を見ると、神仏儒の道が必ず無力で、キリスト教のみが独り有力なわけではない。それならば何をもって、キリスト教が文明の役に立ち神仏儒の道が役に立たないとするのだろうか。学者の考えは辻褄が合わない。

今のその議論が生じる根本を調べると、キリスト教は文明の国で行われて文明とともに並立しており、神仏儒の教えは不文民国で行われて文明と並立できなかったために、こちらを役に立たないとし、あちらを役に立つと言うのだろうか。そうであっても、それが行われるかどうかは、教えの本体に力の強弱があるのでなく、その本体を飾ってその光明を増すべき智恵の働きに巧拙の差があるためである。

西洋諸国でキリスト教を信じる人は、大概皆文明の風に浴した人で、ことに宣教師のごときは、ただ経典を読むだけでなく、必ず学校教育を受けて学問、技術の心得がある人物だから、前年に宣教師となって遠国へ旅行した者が、今年は自国へ戻って法律の仕事にいそしみ、今日は教会で説法しても、明日は学校へ行って教師となることができる。法俗を兼ね備えて、宗教の教えとともに学問を教えて、人を智の領域へ導くゆえに、文明と並立して後退しないのである。

故に、人がキリスト教を軽蔑しないのは、ただその教えの十戒だけを信じるのでなくて、宗教者の言行が自然と実際的で、今日の文明に適しているために、これにすぎるのである。今もし、キリスト教の教師が無学無術で、日本の山寺の坊主のようであつたなら、たとえその行状が正しくて聖人のようであっても、新旧聖書を暗誦して朝夕に唱えても、文明の士君子の誰がこの教えを信じようか。たまたまこれを信じる者がいたら、その人は農民や田舎の親父で、数珠をなでて阿弥陀仏を唱える連中だけである。その連中の目でみれば、キリストも孔子も釈迦も大神宮も区別がない。手を合わせて拝むものは、狐も狸も皆神仏である。意味も分からないお経を聞いて涙を流す愚民に対して、何を教え、どんな効果があるのだろうか。決して文明に貢献することは出来ない。この非文明的な愚民の中に入って、強いてキリストの清い教えを教えようとして、彼らを諭したり説いたり、はなはだしい場合はお金を与えて導き、次第にこれに帰依する者がいても、その実は、ただ仏法の中にキリスト教と呼ぶ一派を設けたようなものである。このようなものは、決して知識人の本位ではない。識者は必ず、博学多彩なキリスト教の宣教師を招いて宗教とともに学問、技術を学び、文明を発展させようとする考えを持つはずである。

しかし、学問、技術は智慧の事である。智慧を教えるのは必ずしもキリスト教の宣教師に限らない。智慧がある者について学ぶことが出来る。だから、キリスト教が役立ち神仏儒が役に立たないとしたのは、識者の考え違いでなかったか。もとより私はキリスト教の宣教師を憎むのではない。智慧さえある者ならば、キリスト教の宣教師でも普通の教師でも、好き嫌いの別はない。ただ、博学多才で身が正しい人を歓迎するだけである。もし天下にキリスト教の宣教師以外に正しい人物がないとすれば、いうまでもなくこの教師だけに従って何事も勉強すべきだが、キリスト教の宗門が必ずしも正しい人の専売所ではなく、広い世界には自ずから博学正直の士君子もいるに違いない。これを選ぶのは人々の鑑定に任せるべきである。どうして一人キリスト教という名目にこだわる理由があるうか。

いずれであっても教えの本体に便不便があるはずがない。ただこれを信じる人民の智慧によって価値を変えるだけである。キリストの教えも釈迦の教えも、愚人の手に渡せば愚人の用をするだけである。今の神儒仏の教えも、今の神職、僧侶、儒者たちの手にあり、今の人民に教えているからこそ役に立たないのである。もしこの人たちが(期待できないことだが)大いに勉強するようになれば、学問、技術でその教えを装い、文明の人の話を聞いて文明を説くことがあれば、必ずその教えは百倍に価値を増やし、或いは他からうやましがられることになるだろう。これを例えたと、教えは刀のごとく、教えが行われる国の人民は大王の如しである。よく切れる刀であっても、腕が悪い大工の手にかければ役に立たない。徳行も非文明の人民にあつては、文明の用をなさないのである。かの徳行の識者は、大工の巧拙を誤つて、刀が切れるか切れないかを認めたものと言える。故に、私徳は智慧によって光明を生じるものである、智慧は私徳を導いてその効用を確実なものにする。知と徳の両方が備わなければ、文明は期待できない。

「文明と宗教」今の日本に必要なものは知恵

新たに宗教を導入することの得失を論じるのは、この章の趣意でないが、議論がここに及んできたので、ついでながら少し言わざるを得ない。すべて物を求めるとは、自分がないものか又は不足するものを得ようとするものである。ここに二つの求めがあつて、そのどちらかに前後緩急を定めるには、まず自分が所有している有様を考えて、全くないものか、又は二つのうち最も不足するものを考えて、求めざるを得ない。これは一を求めて一を不用にするのでなく、両方とも必要であるが、求めるのに前後緩急の別があるだけである。

文明は一国人民の智徳を外部に現した現象だということは前にすでに述べた。だから、日本の文明が西洋諸国に及ばないことも広く人が認めるところである。そうだとすれば、日本が未だに文明が達しないのは、その人民の知徳に不足するものがあつてそうなっているので、文明に達しようとするには、智恵と徳義を求めざるを得ない。これが今の日本における二つの求めである。だから文明を目指すものは、広く日本中を見渡して、この二つの分量を量り、どちらが多くどちらが少なかを考へなければ、その求めの優先順位を明らかに出来ない。どんなに才智がない人でも、日本全体の人民を評して徳義は不足するが、智恵は余りあると言う者はいない。その証拠となるべきものはとても多くかつ明らかで、数える暇もないほどで、また数えるにも及ばないことだが、念のために一、二の例を示す。

そもそも日本で行われている徳教は神儒仏であり、西洋で行われるのはキリスト教である。キリストと神仏儒はその説くところは同じではないが、善を善とし、悪を悪とする大原則では互いに大きく異なることはない。たとえば、日本で白い雪は西洋でも白いし、西洋で黒い炭は日本でも黒いというようなものである。しかし、道徳については、東西の学者はしきりに自説を主張し、或いは書物に著し或いは他の説を非難して、論争がやむことがない。ただこの論争の様子を見ても、また東西の教えにはなほだしい優劣はないことが分かる。おしなべて、物の力量がほぼ均等でなければ論争は起こらない。牛と猫が戦うのをみたことがない。力士と子供が争ったことも聞いたことがない。闘争が起きるのは、その力が伯仲する間で起こるのである。

かのキリスト教は西洋人の智恵で飾つて維持してきた宗教だから、その精巧で細密なことはとても神仏儒は及ばないが、西洋の宣教師が日本へ来てしきりにその教えを主張して、神仏儒を廃棄して自分の地位を得ようとし、神儒仏の学者が及ばずながら説を立てて対抗しようとして、あれこれと喧嘩争論の体裁をなしたのはどういうことか。西洋の教えは必ずしも牛や力士のようでなく、日本の教えも必ずしも猫や子供のようではないので、東西の教えはまさしく伯仲していることの明らかかな証明といえる。そのどちらが伯でどちらが仲かは、ここで論じることではないが、我々日本人も相応の教えを信じてその徳教に浴してきた者だから、私徳の厚

い薄いを論じるときには、西洋人に比べて、伯仲のように優っているとは言えないがひどく劣っているわけでもない。或いは教えの議論に関わらず事実を見ると、伯のような立派な人はかえって非文明な日本人に多いこともある。故に、徳の量はたとえわが国に不足があるとしても、差し迫った急務でないことは明らかである。

智恵のことはこれと全く異なる。日本人の智恵と西洋人の智恵を比較すると、学問、技術、商売、工業、大から小に至るまで、一から数えて百になっても千になっても、一つとして優れたものがない。西洋人に敵対する者はなく、それに敵対しようと企てる者もない。天下の大馬鹿もの以外は日本の學術商工等について、西洋諸国と肩を並んでいるなどと思う者はいない。

誰も大八車を蒸気車と比較したり、日本刀を小銃と比較する者はいない。日本人が陰陽五行の説を唱えれば、西洋では60元素の発明がある。日本人は天文で吉凶を占うが、西洋ではすでに彗星の暦を作り、太陽や月の内容も調べている。我々は動かない平地に住んでいるつもりでも、西洋人は地球が丸く、動いていることを知っている。我々はわが国が至尊の神州と思っているのに、西洋ではすでに世界中を奔走して、土地を開き、国をつくり、法律や経済などが整っている様子はかえってわが国よりも見事なものが多い。

ここに至ると、今の日本の有様で決して西洋に向かって誇るべきものはない。日本人が誇るものは、ただ天然の物産以外は山水の風景だけで、人が作ったものでこれまでであったというのを聞いたことがない。我々に争う意思がなければ、西洋人もまた争わない。外国人はよく自慢するが、未だ蒸気車の便利を述べて大八車の不便さを反駁したこと聞いたことがない。結局、両者の智恵の相違は牛と猫のようなもので、互いに争いを開くことが出来ないものである。以上のことからみると、今わが国が至急に求めるべきものは智恵以外に何があるか。学者はここをよく考えなくてはならない。

また一例を挙げて示す。田舎に人物がいて、旧藩士族と言う。廃藩の前は家禄二、三百石を取り、主君に仕えて忠、父母に孝、夫婦の区別があり、長幼の順序があり、借金は必ず支払い、付き合いは必ず勤め、少しの不義理もしたことがない。言うまでもなく詐欺や盗みなどもしたことがない。或いは威力を使って百姓町人を無理に従わせたことはあるが、身分上当然のことだから心に恥じるものはない。家庭は極めて儉約で、本人は勉強し、弓や馬の芸や剣や槍の術などやり遂げなかったものはない。ただ学問を知らないだけのことである。今この人のためを考えてどうすべきか。徳を与えるか智恵を与えるのか。

試みに、彼を徳に導いてキリスト教の十戒を示すと、第四戒までの箇条は今までに知らないことなので、或いはこれを聞くかもしれないが、第五戒以下になるとこの人はきつと言うだろう。自分は父母を敬っている、人を殺す意志はない、どうして姦淫をしようか、どうして盗みなどするものかといって、一々反論して容易に従わないだろう。もとより、キリスト教の教えはこの十戒で尽きるものでなく、もっと意味深長なもので、父母を敬うにも自ずと敬う方法があり、人を殺さないこ

とも自ずと殺さない趣意がある。姦淫しないことにもわけがあり、盗みをしないことにもわけがある。故にこれを説明するには、丁寧に繰り返し、その旨を尽くして教えれば、最後にはその人の心を感動させることもあるだろうが、とにかく、徳についてはこの武士は普段の行状では少なくとも初段の心得はある者といわざるを得ない。

それなのに、一方から智恵の有無を試すと、あたかも全身が空っぽのようなものである。五色の区別はかろうじて分かるが、天然の光が七色に分解する道理はもともと知らない。寒暑の挨拶はいえるが、寒暖計が上下する理屈は知らない。食事の時間は間違えないが、時計の用法は理解できない。生まれた故郷以外に日本があることを知らず、日本のほかに外国があることも知らない。どうして国内の形勢を知ることが出来るか。どうして外国との交際を知ることが出来るか。古風を慕って、古法を守り、一家はあたかも一小宇宙で、その眼力が届くのはただ家族の中に限り、戸外に出てもわずか一歩だけで、世界の万物については全く暗黒状態になっているようである。廃藩の一挙でこの小宇宙がひっくり返り、今日ではただ途方にくれるだけである。要するにこの人物を評すると、愚で正直と言う以外に名付けようがない。

こうした愚直な人民は、旧藩士族に限らず、世間にこの類は大変多い。人に広く知られており、学者も政府も心配しているところである。それなのに、かの徳行の識者は、なおこの愚民を説得してキリスト教の正しい教えを伝え、その徳義を勧める事に忙しくて、智恵の有無はどうでもよいのだろうか。識者の目で見れば、ただ愚で不正直な者だけを見ることになるが、世間には愚だが正直なものもまた大変多い。識者はこれに対してどんな処置を施そうとするのか。その正直をもっと正直にし、その愚をもっと愚にしようと望んでいるのか。物を求めるのに優先順位の区分けが出来ないものといえる。西洋家流の人は、常に和漢の古学を役に立たないとして罵っているではないか。彼がこれを罵るのはどういうことか。実際に智恵の働かないことを咎めるものであろう。他人を咎めておきながら自らは失敗を繰り返して、自分で築いたものを自分で壊すやり方は、酷く愚かしい事例である。

宗教も文明進歩で変化

宗教は文明の進歩の度にしたがって、その趣を変えるものである。西洋でもキリスト教が起きた始めはローマの時代だった。ローマの文物が盛んだったといえども、今日の文明から見れば、概して無知野蛮の世と言わざるを得ない。故にキリスト教もその時代にはもっぱら虚誕妄説(うそ)を唱えたが、まさしく当時の知性に適合して世間から咎められることもなく世間を驚かすこともなかった。その後数百年間、世の中と一緒に移るにしたがって次第に人々の信仰を得て、その際に自然と一種の権力を得て、反対に人々の心を押さえつけるようになった。その実際の様子はあたかも暴政府が専制によって庶民を苦しめるかのようなだったが、人智発達の力は

大河が流れるようなもので、これを止めようとするのと却って激しくなり、宗旨の権力は一時にその評判を落とすことになった。紀元一五〇〇年代に始まった宗教改革がこれである。

この改革は、ローマカトリックを排してプロテスタントの新教派を起こしたもので、これより両派は党派を分けて対峙するが、今日の勢いでは新教の方が次第に力を得ているようである。そもそもこの両派は、同一のキリスト教から出たもので、信じる目的も双方異ならないが、新教が盛んになった理由は宗教儀式を簡素に改め、古習の虚誕妄説を減らして、まさしく近世の人の心に対応して、その知識の進歩の有様に適合したものである。要するに、旧教は濃厚で愚痴っぽく、新教は淡泊で活発といった差がある。世情や人文について昔と今の違いを表したものといえる。

以上から、西洋各国では文明が進んだ国は必ず新教に従い、後れた国は必ず旧教を信仰するはずなのに、実際はそうっていない。例えば今、スコットランドとスエーデンの人民は妄誕に惑溺するものが多く、フランス人の鋭敏で活発な様子にははるかに及ばない。故に、スコットランドとスエーデンは文明が遅れ、フランスは文明国と言わざるを得ない。それなのに、フランスは古いカトリックを信じ、スコットランドやスエーデンは新教のプロテスタントを信仰している。これから考えると、カトリックもフランスでは教風を改めてフランス人の気象に適合しているか、そうでなければ、フランス人は宗教を度外視して顧みないかである。新教もスコットランドやスエーデンではその性質を変えて、人民の智愚に適合したものとなっているのだろう。つまり、宗教は、文明の度に従って形を変えることの明らかな証拠と言える。

日本でも、古い山伏の宗旨（修験道）又は天台宗、真言宗などはもっぱら不思議なことを唱えて、或いは水火の縁を結ぶと言って、或いは加持祈祷の妙法を修めるといつて、人を惑わせて、昔の人民はこの妄誕を信仰してきた。中世に一向宗が起きると、不思議なことをいうことも減って、その教風もすべて簡易淡泊を主にし、中世の人の文化に適合し、ついには諸宗を圧倒して権力を占めた。文明が進歩すると宗教もまた必ず簡易になって、少しでも道理に基づいたことの証である。仮に今、弘法大師を再生させて、昔の人を惑わせた不可思議を唱えたとしても、明治時代の人にはこれを信じる者はほとんどいない。

故に今日の人民はまさに今日の宗教に適合し、宗教も人民に満足して人民も宗教に満足して、互いに不平がない。もし日本の文明が今よりも進んで、今の一向宗も虚誕（うそ）だとして厭うようになれば、必ず別の一向宗を生むことになる。或いは西洋で行われる宗教をそのまま採用することもありうる。結局宗教のことは度外視すべきである。学者が力を尽くしても、政府が権力を用いても、どうしようもない。ただ自然の成り行きに任せるだけである。故に本を書いて宗教の是非正邪を論じ、法を作って宗教を支配しようとするものは、天下の大馬鹿ものといえる。

宗教的狂信が迫害を生む

有徳な善人といって必ず善を行うわけではない。無徳な悪人と言っても必ずしも悪を行うわけではない。かつて西洋諸国で、宗教のために戦争を起こして人を殺した例は歴史を見ればわかる。その最も甚だしいものは宗教迫害（パーセキュション）で、自分が信じる宗教と異なるものを追い出して殺戮した。古来フランスやスペインでその例が最も多い。有名なパーソロミューの殺戮は八日間で無罪の人民五千人を殺したと言われる。（西洋事情二編フランスの史記にある。）その残酷さは言語道断だが、殺戮を行った本人についてみれば、始めから熱心にひたすら宗教を信じて、信仰の一事では誰はばかるものではなく、人の目に付かないところでも人に恥じることない善人である。この善人がこの大悪事をしたのはどういうことか。私徳が足らなかったのではない、聡明な智慧が乏しかったのである。

愚人に権力を与えて信仰をもたせると、どんな大悪事もやりかねない。世の中で最も恐るべき妖怪といえる。それ以来、西洋諸国の文明も次第に盛んになり、今日では宗教迫害（パーセキュション）のようなことがあるのを聞かない。これは古今の宗教に異同があったのではなく、文明の発展によってそうなったのである。ともにキリスト教であるが、昔は宗教のために人を殺し、今は宗教で人を救うとはどういう理由か。人の智慧にその原因を求めるほかに手段はない。故に智慧は徳義の光明を増すだけでなく、徳義を保護して悪を避けさせるものである。

近くは日本でも、水戸の藩中に正党、姦党（正義集団や悪党集団のこと）のことがあった。その由来は今ここで論じるまでもないが、結局忠義の二字を議論して徒党が分かれたもので、その事柄は宗教論と違わない。正といい姦というもその字に意味があるのでなく、自ら称して正と言い他を評して姦と名付けただけである。両党とも忠義のことは行い、その一人一人の言行を見ると、腹には饑に入っような真心をもつ者が多い。それが偽君子でない証は、その連中がことを誤った時に、落ちて死につき、狼狽する者がいなかったことで分かる。それなのに、近世、議論のために無辜の人民を殺すことが多かったのは、水戸藩中が最も多かった。これもまた善人が悪をなした一例である。

徳川家康は、乱世のあとを受けて、風雨にさらされて苦勞を体験し、苦勞をもとめせず、ついに三百年の太平を開き、天下を泰山のように平和に安定させた。今日でもその立派な偉業を誰もが褒める。足利の末世、国内が混乱した時に、織田豊臣の功績も未だ太平の基礎を固めることが出来なかった。この時に家康がいなかったら、いつ太平の時を迎えられか。実に家康は三百年間の太平の生みの親といえる。

それなのに、この人の徳義をみると、人に恥ずべきことも少なくない。とりわけ太閤の遺言に背いて、大阪を守る意志がなく、特に託された秀頼を補佐しないで、かえってその遊びほうけや気弱な気分を醸成して、石田光成を外して別にすべきだったのに、後日大阪を倒すときの手段にするために残したことは、悪だくみのはなはだしい事例と言える。この一件については、家康には一点の徳義もないようだ。しかし、この不徳な人間が三百年の太平を開いて、人民を塗炭の苦しみから救い出したことは奇談ではないか。そのほか、頼朝も信長も、個人としての行状を論じれば、残忍酷薄、偽詐反復、憎むべきことも多いが、皆一時期の戦争を止めて、人民の殺戮を少なくしたのはどういふことか。悪人でも必ずしも善を行わないわけではない。つまるところ、彼ら英雄は私徳に欠点があつたかもしれないが、聡明英知の働きで、大きな善を成した人物と言える。一点の傷を見て壁全体の評価をしてはならない。

智徳論の要約

以上述べた事を要約すると、徳義は個人の行状でその効能が及ぶ範囲は狭く、智恵は人に伝わるのも早く、その影響も広い。徳義は開闢の初めからすでに定まっていって進歩するものでなく、智恵の働きは日に日に進んで際限がない。徳義は有形の技術によつて人に教えられるものではない。これを得るかどうかは人々の心構えにある。智恵はこれに反して、人の智恵を確かめるのに試験の方法がある。徳義は急に進退することがあるが、智恵は一度それを得ると失うことがない。智徳は互いに依存しあつて、その効能をあらわすもので、善人も悪をなすことがあり、悪人も善を行うことがあることを説明してきた。

そもそも、徳を人に授けるには有形の方法がなく、忠告が及ぶ範囲はわずかに親族友人の間だけとはいえ、その教化が影響する範囲は大変広い。遠方で出版した書物を見て、大いに発見することがある。古人の言行を聞いて、自ら工夫をめぐらし、ついに自身の心を改める者もいる。伯夷の風（兄の伯夷と弟の叔齊は、臣が君を殺すことは出来ないと諫めたが聞き入れられず、それを恥じて隠遁し餓死した）を聞いて、決心したというのはこのことである。

仮にも人として世の中を害する意志がなければ、徳義を修めないではいられない。名前や利益のためでなく、人たる自分に任された徳義の責任である。自己の悪念を防ぐのは、勇士が敵に向かつて戦うように、暴君が人民を支配して苦しめるようなもので、善を見てこれを探るのは、守銭奴がお金をむさぼって飽くことを知らないようなものである。身を修めて、一家を教化し、余力があれば広く他人にも広げて、説き諭して、生きとし生けるものを徳の門へ入れて、一步でも道義の領分を広めることに努める必要がある。

これまた人間の職務で、文明を助ける効用はもとより広大なため、世に宣教師の類がいて徳義のことを勧めるのは願うべきことだが、ただ徳義の一方だけで世界中を支配しようとして、或いひどい場合になると、徳教の一派を主張して他の教派を排除し、一派で世の徳教を支配し、併せて智恵の領分も侵して、あたかも人間の務めは徳教の一部に過ぎず、徳教はその一派に限るものとし、人の思想を束縛して自由を得させず、かえって人を無為無知に陥れて、実際の文明を害するようなことは、私が最も嫌うことである。

受身の私徳が文明を助け、人々にその恩恵を与えることがあるのは、偶然の美事に過ぎない。例えば、自分の土地に家を建てて、たまたま隣家の壁になったようなものだ。隣人には便利でも、もともと家を建てたのは自分のためで、隣人のためではない。偶然の便利に過ぎない。私徳を修めるのも本来自分のためで、他人のためにはしない。もし他人のために徳を修める者がいたら偽君子で、徳行家が憎むものである。故に徳義の自分は一身を修めることにある。これを修めて文明の利益になることがあるのは偶然の美事に過ぎない。偶然のことで一世を支配しようとするのは大きな誤りといえる。

もともと、人としてこの世に生まれ、わずかに自分の始末をただけで人としての職分を終わらせたというには不十分である。試みに聞こう。徳ある紳士が日々衣食する物はどこから来たか。天子のおかげは広大とはいえ衣服は山に生じないし、食も天から降って来ない。ましてや世の中の文明が進歩すると、その便利は単に衣服や飲食のみならず蒸気、電信の便利があり、法律、経済の便利もある。これらはすべて智恵の賜物である。人間同権の趣旨に従えば、何もしないで他人から恵みを受ける理由はない。もし徳ある君子がひょうたんのようにただ垂れ下がっているだけで、ものを食べなければ、すぐにも死ぬだろう。仮にも食物を食べ、衣服を着て、蒸気電信の利便を利益とし、政令商売の利便を便利とするなら、その責任も負わずにはいられない。

そればかりでなく、肉体を便利にするものがすでに豊かにあつて、一身の私徳に恥じるところがないといつても、その有様に止まって安心してゐる理由はない。豊かと言い、恥じることがないというのは、わずかに今日の文明において足りるだけで、未だその頂点に至っていないことは明らかである。人間の精神の発達には限りがない。自然の仕掛けで法則がないものはない。無限の精神により一定の法則を極めて、最後には有形無形の別なく、天地間の事物のすべてを人の精神の中に網羅して、漏らすものがなくなる日が来るだろう。この一段になると、どうしてまた個々の智徳の区別を争うことなどがあるのか。あたかも、人天並立（社会と自然が共存）の有様である。後世に必ずこの日がやってくるに違いない。

第七章 知徳の行はる可き時代と場所とを論ず

時代と場所を考慮する難し

物事の得失や便不便を論じるには時代と場所を考えねばならない。陸では便利な車も海では不便である。昔便利だったものも今日では不便になるものがある。また、逆に、今日の世では至って便利なものでも、昔の時代には使うことが出来ないものが多い。時代と場所とを考慮しなければ、何物でも便利でないものはない。何事でも不便なものはない。ゆえに事物の得失や便不便を論じるというのは、その事物が行われるべき時と場所とを考えるとということに他ならない。時代と場所さえ叶えば、事物に真に得失はない。

中世の発明である長柄の槍は、中世の戦いには便利だが、これを明治年間に用いることは出来ない。東京の人力車は東京の市中では便利だが、これをロンドンやパリで用いることは出来ない。戦争は悪事だが、敵に対すれば戦わざるを得ない。人を殺すことは無道だが、戦争のときは殺さざるを得ない。君主専制の暴政は卑しむべきであるが、ピョートル帝の所業を見て強く深く咎めることはできない。忠臣義士の行為は褒めるべきといっても、無君の合衆国を評して野蛮と言うことはできない。これも一時一处。あれも一時一处のものである。とても世の中のことに一つだけで貫ける道はない。ただ時代と場所にに応じて進むことが出来るだけである。

時代を察して場所を見ることは極めて難しい。昔の歴史で人の失策と言われるものは、すべて時と場所を誤ったものである。褒められることや事業が盛んであるといわれるのは、上手くこの二者に適合したものである。それではこれを察することの難しさとは何か。場所には類似したものが多く、時には前後緩急の機があるためである。例えば、実子と養子は同類だからといって、養子を扱うのに実子と同じ方法をとると大いに誤ることがある。或いは馬と鹿がよく似ているといって馬を飼う技術を用いて、鹿を失うことがある。或いは、神社と寺院を誤り、或いは提灯と釣鐘を誤り、或いは騎兵を沼地で使い重砲を山道で曳かすことがある。或いは東京とロンドンを誤ってロンドンで人力車を使おうとするなど、この類の失策は数知れないほど多い。

また、時について論じると、中世の戦争と今の戦争がよく似ているといつて、中世に便利だった長柄の槍を今日の戦争に用いるべきではない。いわゆる時が来たとするのは、多くは真の時期に遅れた時である。食事の時はご飯を食べる時である。ご飯を炊くのはそれ以前でなければならぬ。ご飯を炊かずに空腹を覚えて、そこで時が来たと言っても、その時は炊いたご飯を食べるべき時で、ご飯を炊く時ではない。また、眠りをむさぼって、午前に起きた時を朝と思っても、真の朝は日

の出の時にあつて、その時は睡眠中に過ぎてしまつてゐる。ゆえに場所は選ばなければいけないし、時期は機に遅れてはならない。

前章では智恵と徳義の區別を示して効用が異なることを述べた。今また、それが行われるべき時代と場所のことを述べて、この一章を終わることとする。

時代論――未開時代は徳が支配

開闢の後、野蛮が終わつて間もない時代には、人民の智力も未だ発生せず、その様子も子供と同じで、心にあるものはただ恐怖と喜悅の気持ちだけである。地震、雷、風雨、水火、皆恐ろしくないものはない。山を恐れ、海を恐れ、旱魃をおそれ、飢饉を恐れ、その時代の人智で制御できないものはすべてこれを天災と呼んでただ恐怖するだけであつた。或いはこの天災を待つていたが来ないか、または来ても速やかに去つてしまえば、これを天幸と呼んでただ喜ぶだけであつた。例えば日照りの後に雨が降り、飢饉の後に豊年があるようなものだ。

そうしてこの天災天幸が去来すると、人民にはそれを図らずしてそうなるので、ひとえにこれを偶然のせいにして、だれも人の力で工夫をめぐらそうとする者がいなかった。工夫せずに禍福にあえば、人情としてその原因を人間以上のものにせざるを得ない。こうして鬼神の宗教感覚が生じるわけで、その禍の原因を名付けて悪の神と言い、幸いの原因を名付けて善の神と言う。おしなべて天地の間にある一事一物の皆にこれを司る鬼神がいないところはない。日本で言えば、八百万の神のようなものがこれである。善の神に向かつては幸福が降ることを願い、悪の神に向かつては禍災を避けることを願い、その願いが叶うか叶わないかは自分の工夫にあるのでなく、鬼神の力にある。その力を名付けて神力といい、神力の助けを願うことを名付けて祈りと言う。すなわちその時代に行われる祈禱がこれである。

この人民達が恐怖しまた喜悅するものは、ただ天災と天幸だけでなく、人事でも同じである。道理に暗い世の中なので、強大な者が腕力で小弱な者を虐げても、道理でこれを拒む方法もなく、ただこれを恐怖するだけである。その有様はほとんど天災と異ならない。ゆえに小弱な者は、一方の強大に頼んで、他の強暴を防ぐほかに手段がない。この依頼を受ける者を名付けて酋長（部族の長）と言う。酋長はその腕力とともにいささかの智徳を持ち、他の強暴をおさえて小弱を保護し、保護が段々厚くなれば、ますます人望を得て、ついに一種の特権を握り、或いはこれを子孫に伝えることもある。世界中どの国でも、未開の始めには、皆そうならないものはなかった。わが国でも古代には、天皇が国権を取り、中世には関東で源氏が力を占めたのもその一例である。

この酋長なる者が権威を得ても、無知の人民の裏切りがたびたび起きて、権力を維持することが大変難しい。人民を諭すのに高尚な道理ではできず、長い目で見た

利益もない。その方向を定めて一種族の体裁を保とうとするには、ただ自然に備わった恐怖と喜悅の感情を利用して、目前の禍福災幸を示す方法があるだけだ。これを主君の恩威(恩恵と威光)という。ここで初めて礼楽れいらくなるものを作り、礼は目上を敬うことを主に自然に君威の尊いことを判らせて、楽は無言のうちに愚民の気持ちを和らげて自然に主君の徳を慕う情を生みだすものである。礼楽によって人民の心を支配し、征伐によって人民の力を制圧し、人民を率いて知らず知らずのうちにその役割を理解させて、良い者を褒めて喜悅の心を満足させ、悪い者を罰して人民の恐怖心を少なくし、恩威が平行して行われて、人民も自然に苦痛がなくなるのに似てくる。

そうであっても、善人を褒めて悪人を罰するのは皆君主の一存で決まるので、人民はただこの褒美や罰に出会って恐れ喜ぶだけである。褒美や罰の理由を知ることがない。その事情はちようど、天から禍福災幸が降ってくるようなもので、だれもがそうなることを知らずに起きたので、一事一物たりとも偶然に出てこないものはない。故に一国の君主は偶然の禍福が起る源で、人民はこれを仰ぎ見て自然と人間以上の者と見なさざるを得ない。

支那でも、君主を尊敬して天子と言うのも、結局この事情によって起きた名称である。例えば昔の歴史に、しばしば百姓に田租(田に科す年貢)を免除するということがある。政府でどれほどの儉約をしても、君主以下の衣食住の入用と多少の公費は欠くことができない。それなのに、何年かの間、年貢を取らないでなおこの出費に差支えがないのは、前年の租税が過酷で、その時に余った財がある証拠である。

この苛酷な税を取り立てられても人民はそれを出す理由を知らない。今急に何年かの間無税になっても、人民は無税になった理由を知らず、苛酷な時にはこれを天災と思って恐怖し、寛大な時は天幸と思って喜ぶだけである。その禍いも幸いも天子から降ってくることで、天子はあたかも雷と避雷針の両方の力があるものようだ。雷に震えるのも天子の命令で、これを避けるのも天子の命令である。人民はこれに向かってただ祈願するだけである。その天子を鬼神のごとく崇拜するのも、また理由がないわけではない。

今の人の心でその事情を考えると、極めて不都合に思えるが、時勢がそうさせるので、決してそれを非難するわけにはいかない。この時代の人民に向かって一緒に知恵のことを語ることは出来ない。一緒に法律を定めることもできず、一緒に約束も守りたい。例えば、堯舜の時代に今の西洋諸国の法律を用いようとしても、その法律の趣旨を理解してそれに従う者はいない。これに従わないのは人民が不正だからではない。その法律の趣旨を理解する知恵がないのである。この人民を放って勝手に好きなどころへ向かわせると、何らかの悪事を犯し、世のためにどんな災害を起こすか予測出来ない。

ただ曾長なる者は独りその時勢を知り、恩で喜ばせ、威で脅し、一種族の人民を一家の子供のように見て保護維持して、大は生殺与奪の刑罰から、小は日常家計の細事に至るまで、君主が関わり知らないことはない。その様子は天下がまさしく一家のようで、また一教室のようで、君主はその家の父母、教師の如しで、その威徳が測りしれないのは鬼神のようで、一人で父母と教師と鬼神の三職を兼務する者である。

このように君主はしっかり私欲を抑えて、自分をさておいても徳義を修めれば、たとえ智恵は少なくても仁君明天子（人徳があり聡明な君主）の名誉を得る。これを野蠻の太平と名付ける。その時代には止むを得ないことで褒められることである。古代中国の堯、舜、盧の三代の時代がこれである。そうでなく、君主が自分の欲をほしいままにして徳を施さないでただ威力のみを用いると暴君になる。いわゆる野蠻の暴政で、人民はその命も安心できない。

結局、野蠻の世では、人間社会にはただ恩威の二つがあるだけである。すなわち、恩徳でなければ暴威である。仁恵でなければ略奪である。この二者のほかに智恵の働きの見えない。「孟子」で道は二つで、仁と不仁のいずれかと言うのはこのことである。

こうしたことは政治の上だけでなく、人の私的な行いについても、極端な評しかたをし、その基準ははっきりしていた。和漢の古書を見ると、經典でも歴史書でも、道を説いて人の品行を評価する時には、すべて徳義を基準にし、仁不仁、孝不孝、義不義を非常に切迫した仕方、伯夷でない者は盗蹟（中国古代の大盗賊）で、忠臣でない者は賊として、その評価の間に智恵の働きを入れない。たまたま知恵があることをする者がいても、これを些細な事柄と呼んで振り向く者もない。結局、野蠻不文の時代で人間の社会を支配するものは、ただ一片の徳義だけで、その他に用いるものがなかった明らかな証明である。

文明が次第に開花し、智力が次第に進歩するにしたがって、人の心にも疑いが生まれて、自然の物事について軽々しくこれを見過ごさないで、物の働きを見てその働きの原因を求めようとし、たとえ真の原因を探り当てられなくても、疑いの心が生まれれば、その働きの利害を考慮し、利を選んで害を避ける工夫をめぐらすことが出来る。風雨の害を避けるには家を堅固にし、川や海が氾濫するのを防ぐには土手を築き、水を渡するために船を作り、火を防ぐには水を使い、医薬を作って病を治し、水利を治めて旱魃に備え、少し人力に頼りながら安心を確保するようになった。

人間の力で何とかできる技術を知ったので、天災を恐怖する幼稚な心は次第に消えて、昨日まで頼っていた鬼神に対しても、半ばその信仰を失わざるを得ない。故

に、智慧が一步進むと一段の勇氣を生じ、その智慧がますます進めば勇力（勇氣の力）も限りなく生まれてくる。試みに、今日の西洋文明でその趣を見ると、およそ身体以外の万物で、人の五官に感じるものがあれば、まずそのものの性質を探し、その働きを調べて、またその働きの原因を探して、一利といえども役立つものとはとり、一害といえども除くべきものは除き、今の世で人の力のできることはすべて尽くしてみる。水火を操作して蒸氣を作れば太平洋の波濤も越えることが出来る。アルプスの高い山もこれを砕けば車を走らすことが出来る。避雷の方法を発明した後は、雷もその力を振るうことができなくなった。化学の研究がようやく功を奏し、飢饉もまた人を殺さなくなった。電氣の力は畏るべしとはいえ、これを使えば飛脚の代用の通信が出来る。光線の性質は微妙だが、影を捉えて物の眞の姿を写すことが出来る。風波が被害をもたらそうとする場合には港を作って船を守り、流行病が来て襲う時は、これを追い払って人に近づけさせないことが出来る。

要するに、人の力で自然を侵害して、次第にその境に侵入して自然の秘訣を発見して、その働きを制限して自由にさせない。智慧と勇氣が向かうところは天地に敵なしで、人が天地を使うもののである。自然を制限してこれを使う時に、どうして自然を恐怖して拝むことがあるか。どこに山を祭るものがあるか。どこに河を拝むものがあるか。山沢、河海、風雨、日月の類は文明人の奴隸といえるに過ぎない。

天然の力を制限して、これを人間が左右できるようになった。それならば、どうして自然に操られる理由があるか。人民の智力が発生すれば、人事についてもその働きと働きの原因を探して、軽々に見過ごさなくなる。聖人賢者の言葉も全部を信用する必要がなくなり、教典の教えにも疑うべきものがある。堯舜の治世も羨むほどのものでなく、忠臣義士の行いも模範にならない。古人は昔にいて昔の事を成した者である。私は今にいて今のことをする者である。どうして昔学んだことを今に施すことがあるかと言って、満身を開いて、天地の間になに一つ自分の心の自由を妨げるものがない状態に達することができる。

政府と人民

すでに精神の自由を得た。またどうして身体の束縛を受けようか。腕力も次第に權力をなくして、智力が次第に地位を占めて、二者が同列に並ばなくなり、人間の社会で偶然の禍福を受けるものが少なくなる。

世の中に凶暴をしたい放題する者がいても、道理でこれに應じて道理に服さなければ、人民の力を合同してこれを制圧することができる。道理によって暴力を制する勢いになれば、暴威に基づく名分もまた倒すことができる。故に、政府といい人民といえども、その名目が異なつて職業を分けているだけで、その地位に上下の

区別があるのは許されない。政府がうまく人民を保護し小弱を助けて強暴を制御するのは、任務上の仕事であつて、これを特別な功労というには当らず、ただ分業の趣意にそむかないに過ぎない。或いは君主なる者が自ら徳義を治めて、礼樂征伐によって恩威を施そうとしても、人民は君主が何者かを考えて、その恩威が何事であるかをつきりさせて、受けるべきでない私的な恩は受けず、恐れる必要がない暴威は恐れず、「一毫も貸さず一毫も借りず」(少しも貸したり借りたりしないこと)、ただ道理にしたがつて止まるところに止まることに努めるべきである。

智力がある者は自分でその身を支配し、あたかも一身の中で恩威を行うようなものだから、他の恩威に頼る必要がない。例えば、善を行えば心に心地よい褒美があり、善を行う道理を知っているので自ら進んで善を行うのである。他人に媚びるのではない。古人を慕うのでもない。悪をなすと心に恥じる罰があつて、悪をしてはいけない道理を知っているために、悪をしないのである。他人を憚るのではない。古人を恐れるのでもない。どうして偶然に出てきた人の恩威を仰いで、これに恐怖喜悅する必要があるのか。

政府と人民の関係について、文明の人の心に聞くと次のように答える。君主といえども同じ人間で、偶然の生まれで君主の位についたか又は一時の戦争に勝つて政府の上に立つ者に過ぎない。或いは代議士といえども、もとは選挙によつて選ばれた国の臣僕(家来)で、どうしてその人の命令によつてその徳義品行を改める者がいるだろうか。政府は政府で、我は我である。自分のことについては、些細なことで、どうして政府に嘴を入れさせるものか。あるいは兵備刑典懲悪の法も私の身には無用のことである。このために税を出すのは私の責任ではないが、悪人が多い世の中でこれと雑居するために、やむを得ず自分の間、出しているのであつて、實際はただ悪人に与えるだけである。それなのに政府が宗教、学校のことを支配し、農工商の法律を示して、甚だしいのは日常家計のことまで指図して、直接私に向かつて善を勧め、生活を営む道を教えるためといつて、お金を出させようとするに至つては、筋違いも甚だしいものである。誰が屈服して人に頼んで自分に善を勧めよといつてお願いする者がいるだろうか。誰が無知な人にお金を出して、自分に生活の道を教えよと頼む者がいるだろうか。

文明の人が心に思うことを記すとおおよそここのやうなる。この連中に向かつて無形の徳を教化し、私の恩威でこの人達を導こうとするのもまた無駄なことではないだろうか。もともと今の世界の有様では、どこの地方でも、全国の人民はすべて智者ではないが、開闢以来だいたいぶ経っているので、その国の文明が後退しなければ、人民の智慧は必ず進歩し、人民の智慧は平均化されるので、たとえ旧習に浸されてお上の恩威を仰いで下民の氣力がはなはだ乏しくみえても、事に触れ、物に接してしばしば疑いを生ぜざるを得ない。例えば、一国の君主が聖明(優れた智徳がある)と称されても実は聖明でないことがあり、人民をみるのに赤子のやうだと言つて、実は父母と赤子が租税の多い少ないを争い、父母は赤子を脅かし赤子は父母を欺くなど、その醜態は見えないことがある。その場合、中流以下の愚民でも、相手の言行が食い違ふのを疑い、たとえこれに向かつて抵抗しないまでも、その処置を怪しまない者はいない。すでにこれを疑い、怪しむ心が生じるときは、

日本中国でも西洋でも、仁君が世に出て国をうまく治めたのはずっと昔の時代である。和漢では、近世に至るまでこうした君主を作ろうとしていつも誤り、西洋諸国では千六、七百年の頃から仁君が次第に少なくなり、千八百年代に至ると、仁君だけでなく智君もいなくなつた。これは君主の種族に限つて徳が衰えたのではなく、人民一般が智徳を増したために、君主の仁徳を輝かすところがなくなつたためである。これはたとへば、今の西洋諸国で仁君が出て月夜に提灯をとすようなものだ。故に仁政は野蠻不文の世でなければ用をなさず、仁君は野蠻不文の人民に接しなければ貴くなく、私徳は文明が進むに従つて次第に力を失うものである。

徳義は文明が進むに従つて次第に力を失うが、世の中の徳義の分量が減るわけではない。文明が進むに従つて智徳も共にその分量を増して、「私」の領域が広がつて「公」の領域になり、世間に公智公德の影響が広がつて、次第に世の中が平和に向かい、太平の技術は日に日に進み、争ひ事は次第に衰え、その極度に至ると、土地を争う者も財を貪る者もいなくなる。ましてや君主の地位を争うごとき卑劣なこともなくなる。君臣の名義などはすでに地上から消えて、子供の遊びでもこれを言う者はいない。戦争もなくなり、刑法も無くなる。政府は世の悪を止める手段でなくなり、事物の秩序を保つて時間を省き、無益な労を少なくするための存在になる。約束を違える者がいなくなれば、貸借の証文もただ忘れた時の用意のために残すだけである。今後の訴訟の証拠に用いるのではない。盜賊がいなくなれば、窓や戸はただ風雨を防ぎ、犬猫が入るのを防ぐだけで、錠前もいらなくなる。道に落ちてゐる遺品をネコババする者がいなくなれば、巡査が落とし物を拾つて落とし主を探すことに忙しくなるだけである。大砲の代わりに望遠鏡を作り、刑務所の代わりに学校を建てて、兵士や罪人の様子はかううじて古画に残るか芝居を見なければ想像できなくなる。家の中で礼儀がしつかりしていれば、宣教師の説法も聞く必要もなく、全国が一家のようになり、どの家も寺院のようになる。父母が教主で、子は宗徒のようである。世界の人民は、あたかも礼讓（れいじやう）（礼を尽くしてへりくだる）の太氣に包まれて、徳義の海に浴するといえる。これを文明の太平と名付ける。今から幾千万年を経たらこの有様になるのだろうか。私には分らない。ただこれが夢物語の想像といつても、もし人の力によつてうまくこの太平の極度に達することができれば、徳義の効能もまた広大無辺といわざるを得ない。故に私徳は野蠻草昧の時代にその効能が最も著しく、文明が次第に進むにつれ力を失ひ、趣を変えて公德となり、遂に幾千万年の後を推定して文明の頂点を夢想すると、また普通にその徳沢（とくたく）（徳化の恵み）を見ることが出来る。

場所論　徳の力は家族、親族、君臣間など限定的

以上は徳義が行われる時代を論じたものである。今ここでその場所を説明する。野蛮の太平は私が目指すものではない。数千万年の後を待つて文明の太平を期待するのと同じ話である。故に今の文明の有様で、徳義が行われるべき場所と行われてはならない場所を区別するのは、文明の学問において最も大切なポイントである。一国人民が野蛮から遠くなればなるほど、この区別もますます明白になるはずだが、非文明の人はややもするとこれを知らずに大きく目的を誤り、野蛮の太平を維持したまま直ちに文明の太平に至ろうとする者が多い。

古学者流の人が今の世にいて昔を慕う原因は、この区別順序を誤るためである。その事の難しさは木に登って魚を求めるようなもので、梯子を用いずに屋根に登ろうとするようなものだ。心に思うことと事実行われていることが常に食い違っているために、はっきりとその心に思うことを人に語れないだけでなく、自ら問うて自らにも答えられない。思いは錯乱し考えは入り乱れて、生涯、曖昧の中に惑溺して目指すところも分からずに、建てては壊し、自ら論じて自ら反駁し、生涯の事を差し引きすれば、零に等しいだけである。どうして憐れに思わないでいられようか。こういう人は徳義を行う人でなくて、徳義に苦しめられる奴隷と言わなければならない。その次第を述べる。

夫婦、親子で一家にいるものを家族という。家族の間は愛情で交わりが結ばれ、物に決まった主はなく、与えたり奪ったりすることに規則はなく、ものをあげても惜しむことはなく、ものをもらっても悦ぶほどでなく、無礼を咎めず、拙劣を恥じず、妻や子の満足は夫や親の喜びとなり、夫の苦しみは妻や子の苦しみとなり、あるいは自分に薄くしても相手の満足を心に見て心に快さを覚えるものである。例えば、かわいい子が病に苦しむ時に、もし子の苦痛を親の身に移しても子どもの苦痛を軽くする方法があると言う人がいれば、世の中の父母たるものは、きっと自分の健康を捨てても子を救うようにする。要するに、家族の間には自分の所有物を保護する心はなく、面目を守ろうとする心もなく、自分の命だけを大事にする心もない。故に家族の交わりには、規則や約束も必要ない。ましてや知術策略などがどうして必要になろうか。これを使う場所がない。智慧はわずかに世帯整理（家政）の一部の用をなすだけで、一家の交わりはもっぱら徳によっており、教化の美を尽くしている。

肉親の縁から少し遠ざかるとこの様子も少し変わり、兄弟姉妹は夫婦親子よりも遠く、叔父と姪は兄弟よりも遠く、いとこは他人の始めである。血縁が遠くなるに従って、その交際に情合（人情）を用いることも次第に減少せざるを得ない。故に、兄弟も成長して家を別にすれば、財産も別になる。叔父、おい、いとこに至っては当然である。あるいは友人間でも情合による交際が行われる場合がある。刎頸の交わり（友人のためなら首を切られても後悔しないほど親しい交際）といい、莫逆の友（意気投合して親しい間柄）というのは、その交際の親しさがほとんど親子兄弟と異ならないが、今の文明の有様では、その領域は大変狭い。数十の友がいて、その全

員と長く莫逆の交わりを全うした例は、古今の歴史にも未だ見たことがない。

また、この世に君臣なる者がいて、その交際はほとんど家族のようで、ともに苦勞をなめ生死をともし、忠臣の純精さに至ると親子兄弟を殺しても主君のために尽くす者がいる。昔から世間では、この関係の原因を君主と家臣の情愛にするだけで、他に原因を求めることがない。しかし、この世論はただ一方からの光に照らされた君臣の名義にとらわれて、その所見はまだことの実態をみていない。もし、他の光で事実を明らかにすれば、必ず別に大きな原因があることがわかる。その原因とは何か。人に自然と備わった党与の心（党派心のこと、仲間を組む心を指す）とその時代に行われている氣風の二つである。

君臣の始めは人数が少なく、例えば北条早雲が六人の家来と剣を杖にして関東に來た時には、その交情は厚く親子兄弟よりも親しかったかもしれない。しかし、一州一國を領地にし、臣下の数も増加し、君主の位を子孫に伝えるようになると、君臣の交際は初めのようににはできない。その時になって君臣ともに祖先の有様を言い伝えて、君主は臣下の力に頼って家を守ろうとし、臣下は君主の家系を尊んでその家に属し、自らも一種の徒党を結んで、事變があれば家来としての力を尽くして君主の家を守り、併せて自分を守り、あるいは機に投じて利益を得ることもあり、或いはその時代の氣風で世に功名を輝かすこともあるために、粉骨碎身の働きをするのである。必ずしもその時の君臣に刎頸の交わりがあったわけではない。

故に忠義家の言に、社稷^{しゃよく}重し君を輕し（國家が重く君主が輕い）として、役に立たない人物と思えば、一家にただ一人の主人でも、これに対するのに非常の処置を採ることがある。これは人情が厚いとはいえない。また戦場で討ち死にし、落城の時に割腹する者も、多くはその時代の氣風で、一命を落とさないと武士の面目が立たないとして、一身の名誉のためか、または遁走しても命が助かる見込みがないに命を落とすのである。

太平記に、鎌倉の北条滅亡の時、元弘三年五月二十二日、東勝寺で高時と一緒に自殺した將兵八七〇余人、このほか一族の恩を受けた人々がこれを聞いて後を追って死んだ者が鎌倉中で六千余人だったという。北条高時がどれほどの仁君だったのだろうか。六千八百人の臣下と親子兄弟のようにするほどの交情があったのだろうか。決してあり得ない。この様子を見ると、討死、割腹などの人数で主君の君徳の厚い薄いを測ってはいけない。暴君のために死に、仁君のために死ぬというのも、実際には君臣の情に窮して死ぬ者は思いのほか少ないものである。その原因は別に求めざるを得ない。故に、徳義の効能は、君臣の間でもそれが行われるところは大変せまい。

救貧院や病院を建てて窮民を救うことは、道德上の義理人情のことだが、もともとこれを行うのは窮民と施主の間の付き合いによるものではない。一方は富み、他方が貧しいためにできたことである。施主は金持ちでかつ仁者であるが、施しを受ける者はただ貧しいだけで、その徳不徳はわからない。相手の人物が詳しく分からないままに親しく交際する理由はない。故に窮民を救う仕組みを盛んにするのは、広く社会で行われるべき事柄ではない。ただ思いやりのある仁者が余財を投じて、徳義の心を自分で慰めるに過ぎない。

施主の本意は他人のためにするのでなく自分の満足のためにすることで、勿論褒められる美事であるが、救貧の仕組みがますます大きくなり、それが長ければ長いほど、窮民はきつとこれに慣れて、その施しをありがたいと思わなくなるだけでなく、これを決まって得られるものと思い、得るものが以前よりも減るとかえって施主を恨むことがある。これではお金を出して恨みを買うのと同じである。西洋諸国でも、救貧のことについては識者の議論が大変多くて、未だにその結論が出ていないが、結局、恵む方法はこれを受ける人の有様と人物とを聞き糺して、本人がその人に直接あつて、個人的に物を与えるよりほかに手段があり得ない。これもまた徳義が広く世間に及ぼすことができない一証である。

以上の次第から考えると、徳義の力が十分に行われて、少しも妨げがない場所はまだ家族だけである。戸外に出ればたちまちその力を存分に發揮することができなくなる。しかしながら、人の説に家族の交わりは天下太平のひな型ということがあるので、数千万年の後には、世界中一家のようなになる時期も来るかもしれない。かつ、世の事物は活動して常に進退しているもので、今日の文明についてその進退はどうかと問えば、これを進歩の途中にあると言わざるを得ない。そうだとすると、たとえ前途は遠くて、千里の道もわずかに一歩を進むようだが、進歩は進歩である。前途が果てしないことに恐れ入って、自ら線を引いて進まない理由はない。今、西洋諸国の文明と日本の文明とを比較すると、ただこの一歩の前後があるだけで、学者の議論もただ一歩の進退を争うだけである。

規則は徳を排除する

そもそも徳義は、情愛がある所で行われて、規則ルールの中で行うことはできない。規則の効能をみると、情愛と同じように見えるが、行われ方は同じではない。規則と徳義はまさしく相反して、二つは相容れられない。また、規則の中に区別があつて、事物の秩序を整理するための規則と人の悪を防ぐための規則の二つに分けられる。甲の規則を犯す人は人の過失である。乙の規則を犯すのは人の悪心である。今ここで論じる規則は、人の悪を防ぐための規則を指すものだから、学者はこれを誤つてはならない。例えば、家族のことを整理するために、家内の者は朝六時に起きて夜は一〇時に布団に入るべしと規則をたてても、これは家内の悪事を防ぐた

めではない。この規則を犯したからといって罪人とは言えない。ただ一家の中の都合を良くするために申し合わせて定めた規則で、書面に書きおくまでもない。一家の心によって自然と行われるものである。このほか、真に睦まじい親族友人の間でお金を貸し借りするものこの類である。

しかしながら、今世間で広く行われる証文、約定書、または政府の法律、外国との条約等を見ると、あるいは民法、刑法等の別があつて、事物の秩序を整理するための規則も少なくないが、一般にその用向きはどうかと聞くと、すべて悪を防ぐ道具といわざるを得ない。これらの規則書の趣意は、利害の裏表を並べて示し、その人の私心でこれを守らせる策である。例えば千両のお金を盗めば懲役一〇年といい、某の約束を一〇日延期すれば償金百両というようなものである。千両の金と一〇年の懲役と、百両の償金と一〇日の罰金を両方掲げて、人の心が有利と思う方へつかせる趣向で、徳義の精神はみじんもなく、あたかも飢えた犬猫に食物を示して、傍らで棒を振り上げて食ったら打とうと脅しているようだ。その形だけをみると決して情愛のこととは言えない。

また、徳義と規則が行われる境界を明らかにするために、一例を示そう。

ここに甲乙二人がお金を貸借するとする。二人はお互いに親愛関係にあつて、お金を貸すことを恩に思わず、借りて返さないことも恨みに思わず、ほとんど私有の区別がないのは情愛の深さのためで、その交情は全く道に基づくものだった。あるいは返済の起源と利息を定め、忘れないために紙に書いてその書付を貸主へ渡しても、その交情はいまだに徳の領分を出ない。

しかし、この書付に印を押して証券の印紙をはり、或いは保証人を立て、担保を取るとなると、すでに徳の領分を外れて、双方は規則によって交渉するしかなくなる。この貸借については、借主の正不正は信じがたいので、それを不正者と認めて金を返さなければ、保証人に掛け合つて、それでもなお返さなければ政府に訴えて裁判をうけるか、またはその担保を取り押さえようとするもので、いわゆる利害を並べて示し、棒を振り上げて犬を威嚇するようなものである。故に、規則によつて事物を整理するところには、徳の形は全くなくなる。

政府と人民の間、社長と社員の間、売主と買主の間、貸主と借主の間でも、お金を取つて勉強を教える教師と生徒の間でも、規則だけで相対する場合は徳の交際とは言えない。例えば、政府官僚に二人の同僚がいて、甲は公務を深く心配して誠実に仕事をし、役所から帰宅して夜も寝られないほどに苦勞するが、乙はそうではなくて、酒を飲み、遊びにふけり、公務を気にかけない。しかしながら朝八時に出勤して午後四時の退出までの間は、乙も仕事をしてその働きは少しも甲と異ならず、言うべきことは言い、書くべきことは書き、公務に支障がなければこれを非難できない。甲の誠意も威光を表わすことができない。

また、人民が租税を納めることも、政府から促されなければ納めないことができる。納めるのに賈金を使っても、これを受け取れば受け取ったものの落ち度である。誤って多く納めるのも、すでに手渡ししていれば、納めたものの損である。売り物にかけ値を言うのも、それを買えば買ったものの損である。釣銭を多く出したことも、これを渡してしまえば渡したものの不始末である。金を貸してもその証文をなくせば、貸した方の損である。手形、小切手の引換もその期日を過ぎれば、札をもった者の損である。物を拾って隠しても、知る人がいなければ拾った人の得である。それだけでなく、人の物を盗んでも、ばれなければ盗賊の利といわざるを得ない。この様子から考えると、今の世界は悪人が集まる所で徳の痕跡もない。ただ無情な規則に頼んでかろうじて事物が秩序を保ち、悪念が内部に充満しても、規則におさえられて、事の痕跡を表さず、規則が許す極限になって止まり、あたかも鋭い刀の刃の上を歩くようである。どうして驚かずにいられようか。

規則は徳に代る効能

人心の卑しさはこのようなもので、規則の無情さもこのような具合である。急にその外観を見ると実に驚かされるが、今一步進めて、規則が作られた原因とそれにより得られる効果を考えると、決して無情でなく、これが今の世界の最高の善といわざるを得ない。規則が悪を止めるためのものというが、世の中の人みんな悪人であるために、これを作ったのではない。善悪が混ざって識別できないために、これを作って善人を保護するためである。悪人の数はたとえ万人に一人といっても、ゼロにはできないので、万人中で行われる規則は、悪人を制御する趣意には従わざるを得ない。例えば、賈金を見分けるようなものである。一万円の中にたとえ一円でも賈金があると心配する時は、一万円全部を改めざるを得ない。

故に社会では、規則は日に日に繁多になり、規則の外形は無情なようだが、決してこれを卑しいとして見下す理由はない。規則を一層しっかりとって尊重せざるを得ない。今日の有様では、文明を進歩させる道具としての規則の外に方法はない。物の外形を嫌って実際の効能まで捨てるのは、智者がすることではない。悪人の悪を防ぐために規則を設けるといえども、善人が善をなす邪魔になるわけではない。規則が複雑な世の中でも、善人は思いのままに善を行うべきである。ただ後世のためを考えて、一層この規則をたくさん作って、次第にそれが無用になっていくことを祈るだけである。その時期は、数千年後には来るだろう。数千年の長い先を期待して今から規則を作らない理由はない。時代の移り変わりを考えざるをえない。

昔の野蛮で非文明な時代に、君民は一体で天下は一家で、法はたった三つに集約されて、仁君賢相は誠意をもって下民をいたわり、忠臣義士は命をなげうって君主

のために行動し、万民が君主のもとで教え導かれて、上下がともに安心な境遇を得ていたなどというのは、規則に頼らず情実を主にし、徳によつて太平となったものである。にわかには想像すると羨むべきことのようにだが、実際はこの時代に規則を蔑視して使わなかったのではなく、用いようとしても用いるところがなかったためである。これに反して、人智が次第に発達してくると、世の中の仕事もまた次第に繁多にならざるをえなくなった。仕事が多くなれば、規則もそれに伴つて増加するだろう。かつ、人智が進むに従つて、規則を破る方法も自然と上手くなっていくので、これを防ぐ法もまた密にならざるを得ない。

その一例を挙げると、昔は政府が法を定めて人民を保護したが、今では人民が法を作つて政府の専制を防ぎ、自分を保護するようになった。昔の目で見ると、上下の順序が逆で、上下の名分が一掃されたようである。しかし、少し物事を見分ける力をしっかりして、考えを広くすれば、ここには道理の乱れないものがあつて、政府も人民もお互いに面目が立つてゐることが判るだろう。今の世界で、一国の文明を進め、独立を保つにはこの方法しかない。

時代が移るに従つて人智が発達するのは、子供が成長して大人になるようなものである。子供の時には自然と子供らしく、喜怒哀楽の情も自然と大人と異なるが、年月を経て知らず知らずに大人になれば、かつて楽しかった竹馬も今や楽しみにするほどでなく、かつて恐れていた百物語も今や恐れるに足らなくなるのは、自然の道理である。さらにその子供の心事は幼稚で愚かと思つても、あえてそれを咎めるには値しない。子供が子供の時代に子供のことを行つただけで、もともとそれが務めだからこれに多くを求めてはいけない。ただ子供が多い家は家の力も弱く、他家に対しても対等な付き合いができないに過ぎない。今この子供が成長するのは、家のために目出度いことでないか。それなのに、かつての子供をそのまま子供の状態に据え置いて、無理やり竹馬で喜ばせ百物語で脅かし、ひどいのは昔の子供の言行を大人の手本とし、その手本に従わないものを不順粗暴というようなことは、智徳が行われるべき時代と場所を誤つて、家を弱くする災いを招くだけである。

仮にまた規則の趣意を無情なものとして、これを守る人の心も卑しいとみなしても、なお社会に益することは多い。例えば、物を拾つて持ち主へ返せば、その半分を拾つた人へ与える規則がある。今ここに物を拾つてその半分の利を得ようとして持ち主へ返す者がいれば、その心は誠に卑しむべきである。しかし、この規則を卑劣として廃止したら、世の中で落としたものが必ず持ち主の手に戻ることは期待できなくなる。とすれば、折半の方法も、徳義で論じるのは好ましくないが、これは文明の良法といわざるを得ない。

経済道德と規則の関係

また、商売上、目先の小さな利益をむさぼって恥知らずな真似をすることがある。これを商人の町人根性という。例えば、日本人が生糸や蚕卵紙を製造する時不正を行って、一時の利益を貪り、遂に国産の品価を落として長い間全国的な大きな利益を失い、ついには不正者ともども損失を受けたことは、面目も利益も同時に棄てたものである。これに対して、西洋諸国の商人は、取引をしつかりして人を欺くこともなく、小さな見本を示して数万反の織物を売っても、これまでの見本品と異ならず、これを買う者も箱の中を改めることなく安心して荷物を引き取ることができた。

この様子を見ると、日本人は不正で西洋人は正直に見える。しかし、詳しく事情を調べると、西洋人の心が誠実で日本人の心が不誠実なためではない。西洋人は商売を広く行って、長期的に大きな利益を得ようとして、取引を誠実にしなければ後日に差しつかえて自分の利益の道をふさぐ恐れがあるために、やむを得ず不正をしなかったに過ぎない。心の中から出た誠実でなく、勘定づくの誠実である。

言葉を変えて言うと、日本人は欲が小さい者で、西洋人は欲が大きい者である。しかし、今、西洋人の誠実は欲のための誠実で卑しむべきものとして、日本人の丸出しの不正を学ぶ理由もない。欲のためにも利益のためにも、誠実を尽くして商売の規則は守らざるを得ない。この規則を守ればこそ、商売も行われて、文明の進歩を助けることができる。今の人間世界で、家族と親友を除くほかは、政府も会社も商売も賃借も、あらゆる物事ですべて規則によらないものはない。規則の形はひよつとして卑しむべきかもしれないが、無規則の禍に比べれば、その得失は比べものにならない。

今の西洋諸国の有様を見ると、人智が日々進み、敢為（押し切って物事をする）の力が増して、あたかも天地の間には天然でも人為のことも、人の思想を妨げるものはないようで、自由に事物の道理を究め、自由にこれを応用する方法を工夫し、天然のものについてはすでにその性質を知り、その働きを知り、その性質に従ってこれを支配する法則も発明したものが大変多い。人事についても同様である。人の性質と働きを研究して、次第にその法則を調べて、その性質と働きに従ってこれを制御する方法を得ようとする勢いに進んでいる。その進歩の一、二を挙げると、法律がち密で冤罪が少なくなり、商売の方法が明快、便利になった。会社の法もきちんとして大きな仕事を計画する者も多く、租税の法もうまくできていて財産を失う者も少なくなった。兵法とは人を殺す技術のことだが、かえってそのために人命を損なう災いを減らし、万国公法（国際法）は粗雑で抜け道もあるが、少しでも殺戮を減らす手段となり、民庶会議（議会）は政府が強すぎるのを平均し、著作や新聞は強大な政府の暴挙を防ぐことができる。最近では万国公会（国際会議）なるものをベルギーの首府に設け、世界平和を図ろうとする議論が行われると言う話もある。これらはすべて規則がますます細かくなにしたがって利益も大きくなったもので、規則によって大きな徳を行うものといえる。

第八章 西洋文明の由来

今の西洋文明を詳しく調べてその歴史を書くことは、この小冊子でできることではない。よって、ここではフランスの学者ギゾー氏の著書の文明史及び他の著書を引いてその百分の一の大意を記す。

西洋文明が他と異なるのは、社会においてその説は一樣でなく、諸説が互いに並立して統一されることがない点にある。例えば政治権力を優先する説があり、宗教の権利を専ら優先する説がある。或いは君主制といい、神政政府、貴族制、民主制といって、各人が勝手に各々の立場を主張してお互いに議論しても、互いにうまくこれを抑えつけることがない。一人も勝つ者がなく、一人も負ける者がいない。勝敗は長い間決まらずに、互いに対立しているとたとえ不平でも同時に共存せざるを得ない。同時に共存すれば、たとえ敵対しあう者同士でも互いに事情を知り、互いに行うことを許しあわざるを得ない。こちらに完全な勝利が得られず他の行為を許すことになれば、各々自家の説を主張して文明の一部分を担い、ついには統合して一となることもできる。これが西洋文明に自主自由が生じる由縁である。

西洋文明は西ローマ滅亡から始まる

今の西洋文明は、ローマ帝国滅亡の時に始まる。紀元三百年代の頃から、ローマ帝国の権勢も次第に衰え始め、四百年代になると最も盛んに野蛮な諸族が八方から侵入して、帝国の全権を保てなくなった。この種族の中で最も有力なのがゲルマン民族である。フランクの種族もこの仲間である。この野蛮な諸族が帝国を踏みにじり、ローマ数百年の旧物を一掃し、人間の社会で行われるものは腕力だけとなった。無数の異民族が群れをなして至る所で侵略強奪を行った。国を建てるものもあれば、併合させられるものもあった。

七百年代の末、フランク族の酋長カール大帝が、今のフランス、ドイツ、イタリアの地方を征服し、一大帝国の基礎を作り、ほぼヨーロッパの全州を統一する勢いになったが、帝の死後はまた国が分裂して統一は出来なかった。このときに、フランス、ドイツなどの国の名はあったが、まだ国の体をなさなかった。人々は各々腕力を振るって各々の欲望をほしいままにするだけだった。後世、この時代を指して野蛮の時代又は暗黒の時代と呼んだ。ローマの末から紀元九百年代に至るまでのおよそ七百年間である。

この野蛮暗黒の時代にキリスト教会は自らで体制を作って存在してきた。ローマ滅亡の後には教会もともに滅亡するかと思われたが、そうならなかった。教会は野蛮の中に雑居して単に存在しただけでなく、かえってこの野蛮の民衆を教化して、自分の宗教の中に取り込むことに努めた。その胆略（才智に優れた謀りごと）もまた偉大だった。実際に、無知な野蛮人を導くのに高尚な理屈では出来ない。そこで盛大な儀式を行い、外観を飾って人々を驚かせ、わけが分からない間に信心を起こ

させた。後世から論じれば、妄誕によって人民を惑わしたという非難は免れられないが、当時の無政無法の世に天理人道の尊さを知るものはただキリスト教があっただけである。もしこの時代にこの宗教がなかったら、ヨーロッパ全州は一種の禽獣世界になっていたろう。だからキリスト教の功績もこの時代では小さくなかった。それが権力を得たのも偶然ではなかった。要するに、肉体を制御するのは世俗の腕力で、精神を制御することは教会の権限になって、俗権と教権は相対立しあうようだった。それだけでなく、教会の僧侶が俗事に関係して民間の公務を司るのは、ローマ時代からの習慣だったので、この時代になってもその習慣は残った。後世の議会に僧侶が出席する由来も、遠く古代からあった。(寺院、権あり)

初めローマが国を建てたときは、たくさん都市が集まったものだった。ローマの管轄で都市でなかったものはなかった。この都市の中には各々自らの法があり、各々その都市の政治を行い、ローマ皇帝の命令に服し、これらが集って一帝国を形成したが、帝国滅亡後も、市民会議の習慣は依然として残り、後世の西洋文明の元素(要素)になった。(民庶為政の元素)

ローマ帝国が滅亡したとはいえ、その数百年の治世にこの国を帝国と呼び、その君主を尊んで皇帝と名付け、その名称を人民は肝に銘じて忘れることがなかった。皇帝陛下の名を忘れなければ専制独裁の思想もその名前とともに残らざるを得ない。後世の君主制の思想もその源はここにある。(立君の元素)

この時代に横行した野蛮な種族は、古書に書かれたものを見てもその気風性質は詳しくわからないが、当時の事情を推察して考えると、豪気剽悍(ひょうかん) (荒々しい)で人情を知らず、知識もない愚か者で、ほとんど獣に近かった。しかし今一歩進めて、その内情を細かく吟味すると、暗愚剽悍のうちにも、自然と豪邁慷慨(きげ性が強く) 社会の不正や不義を憂い嘆く(の) 気もあり、不羈独立(束縛されないで) 独立するの風があった。この気風は、人間が本来持っている性質から来たもので、自らを独一個の男子と思い、自ら誇りと思う心である。立派な男子の志である。志の発生は止めようとしても止めることが出来ない気持ちである。

昔のローマ時代にも、自由を説く者がいなかったわけではない。キリスト教の中にもこの説を主張する者がいないわけではないが、その自由自主と唱えるものは一種一族の自由で、一人一人の個人の自由を唱えた者はいなかった。個人の不羈独立を主張して、個人の独立の志を盛んにしようとする気風は、ゲルマンの生蕃(せいばん) (教化に服さない野蛮な異民族のこと) ではじめてその要素がみられる。後世、ヨーロッパの文明で、他になく得難い貴重なものとして今日に至るまでも尊重される自由独立の気風は、ゲルマンの賜物と言わざるをえない。(自主独立の気風はゲルマンの野蛮に胚胎せり)

封建制

野蛮暗黒の時代がようやく終わり、民族移動も終わって人々が住まいを定めると、封建割拠の時代に代わった。この時代は九百年代に始まり、千五、六百年代に至ってすたれ滅びた。これをフューダル・システム（封建時代）の世という。封建時代には、フランスといひスペインといひ、各々その国に名をつけて各国の君主がいたが、君主はただ虚位（名目だけの地位）があるのみだった。国内の武人は各地に割拠して集落を形成し、山に城を築き、城に部下を集めて、下層の人民を奴隷視して、自らを貴族と称して、独立の体裁を整えて他をはばかりことなく、武力でお互いに攻め討つだけだった。

暗黒の時代には、世の中の自由は個々人の手で行われたが、封建の時代になると大きく趣を変え、自由の権利は土地人民の主である貴族一人の身に属して、これを制限する一般の国法もなく、欠点を非難する人民の意見もなく、一つの城の中では至尊の君といわざるを得ない。その専制を妨げるものは、敵国や外部から受ける心配事以外は自分の力不足だけだった。ヨーロッパの各国は大体この風になって、国中の人は貴族がいる事は知っていても国王がいる事を知らなかった。かのフランス、スペインもまだ国と呼べる国体をなしていなかった。（封建割拠）

このように封建貴族は独り権力を独占したように見えるが、決してこの独占した権力でヨーロッパ全州を支配したわけではない。宗教はすでに野蛮な人心を取り込んでその信仰を得ており、紀元千百年から二百年代に至ると最も強勢を極めた。その権力を得た由来は決して偶然ではない。

キリスト教の隆盛

そもそも人類の発展の有様をみると、世の沿革に従って一時の栄光を輝かし、力があれば百万の敵も殲滅できたし、才能があれば天下の富を得ることもできた。人間万事が才能と力によって思い通りになると思われるが、死生幽冥の理（生死や冥土の道理）のことになると一つも解決できないものだった。この死後の幽冥の話になると、カール大帝のような武勇に優れた者でも秦の皇帝の猛威も、少しも力が使えず、痛ましい様子で氣力を落とし、浮雲のような富貴、朝露のような人生を嘆かざるを得なかった。人心の最も弱い部分はまさにこのところにあり、防戦の例でいえば備えがない要塞、人心でいえば感覚が鋭い急所のようなもので、一旦これが犯されると、たちまち辟易して自分の力のなさを示さない者はいない。

宗教の本分は、この死後の幽冥の話を説き、神の巧みなやり方を明らかにすると称して、あえて人の疑惑に答えるもので、いやしくも生を受けた人としてこれに心を奪われない者はいない。それだけでなく、当時、文明はまだ開けず、粗忽で軽々しい信仰の世の中なので、虚誕妄説（うそ）といえどもこれを怪しむ者もなく、

天下がなびくようにその教えを信仰する風になり、一心不乱に教えを信じさせるだけで、私的な議論を許さず、その専制抑圧の様子は、王侯が暴政で下民を苦しめることと同じようだった。当時の事情を概略すると、人民はあたかもその身を断ち割って精神と肉体の二つに分け、肉体の運動は王侯俗権の支配を受け、精神はローマの宗教の命令に従うもののである。俗権は身体有形の世界を支配し、宗教は精神無形の世界を支配するものだった。

宗教はすでに精神の世界を支配して人心を奪い、王侯の俗権と対立したが、なおこれに満足せずに、精神と肉体のどちらが貴重か、肉体は末で外にあり精神は本で内にある、宗教はすでに本を制して内を支配している、どうして外と末を捨てる理由があるのか。これを宗教の中に取り込むとして、次第に王侯の地位を侵害し、あるいはその国を奪い、あるいはその地位を剥ぎ、ローマ法王はあたかも天上地下の唯一の神のようである。ゲルマンのヘンリー四世がグレゴリー法王の逆鱗に触れて、厳冬風雪の中で裸足でローマの城門に立つこと三日三晩、泣いて法王に許しを願ったというのもこの時代のことである。（宗教の権力大いに盛んなり）

自由都市の発展、市民の台頭

野蠻人の横行も次第に収まって封建貴族の割拠の時代になり、城を築き家を建て定住するようになると、ただ飢えや寒さを逃れるだけでは満足しなくなり、次第に人に趣味が生じて、衣類は軽くて暖かいものを欲し、食は美味を好み、様々な需要が一時に起こり、昔の粗野を我慢する者もいなくなった。需要があればそれを提供しようとする者も生まれる。こうして始めて少し商工業の道が開いて、あちこちに都市ができて、その市民の中に富をなす者があらわれた。すなわちローマ帝国以来の都市が再興したのである。

たしかにこの市民が集まって群れをなしても、初めは決して有力ではなかった。野蠻な武人も昔を回顧して乱暴略奪の愉快さが忘れられなかったが、時勢が落ち着くと遠くへ出る理由もなく、その近傍で略奪をほしきままにできる相手はただ市民がいるだけである。市民の目から封建の貴族武人を見れば、物を売る時は客のようで物を奪われる時は強盗のようだったために、商売相手として付き合うにしても、同時にその乱暴を防ぐ備えをせざるを得ない。そこで、都市の周囲に城郭を作り、城中の住民は互いに助け合って外敵を防ぎ、利害を共にする工夫をし、集会の時には鐘を鳴らして住民を集め、互いに裏切らないことを誓って信頼を表わし、この集会の時に人民の中から数名の人物を選んで城中の頭取（市長）とし、攻防の政治を司ることになった。この頭取なる者は選挙で選ばれて権力を得ると、その専制権力をふるい、思い通りに出来ないものはなかった。ほとんど君主独裁と同じ体裁だが、市民が権利を持っていて選挙で代表を交代する一定の制限があった。

このように市民が集まって独立するものをフリーシティと名付け、ある時は王の命令を拒み、またある時は貴族の兵と戦い、争乱がない日はほとんどなかった。(フリーシティは自由都市の意味で、その人民は独立市民である。) 紀元一千年ころからヨーロッパ諸国には自由都市を立てるものが多く、有名なものは、イタリアのミラノ、ロンバルディア、ゲルマンのハンブルク・リエージュ(ハンザ同盟、千二百年代の初めよりリユーベック、ハンブルクなどの市民が集まって同盟(公衆の公の会合)をつくった。ハンザ同盟の勢力も次第に盛んになり、一時は八十五都市が連合をつくり、王侯貴族もこれを抑えることができず、さらに条約を結んでその自立を認め、各都市は城郭を築き、兵備を置き、法律を作り、政治を行うことを許されて、あたかも独立国の体裁を成すようになった。(民政の元素)

以上述べたとおり、紀元三、四百年の頃から、教会なり君主なり貴族なり民庶なり、いずれもその形をつくり各々多少の権力を有し、あたかも社会に必要な諸件は備わったが、未だこれを合わせて一になって、一国を作り一政府を立てる時期に至らず、人民の争いも局所的なものに止まって、未だ全体なるものを知らなかった。

十字軍の役割

紀元一〇九六年に十字軍の事件があった。この軍はヨーロッパの人民がキリスト教のために力を合わせて、全ヨーロッパを味方にしてアジアに敵対したもので、人民の心に始めてヨーロッパとアジアの区別を意識させて内と外になる方向を一つにし、かつ欧州各国でも一国全体の大事件だったから、全国の人民の向かう方向も同じになり、一国全体の利害を感じるようになった。故に十字軍の一挙は、ヨーロッパの人民にヨーロッパがあることを知らしめ、各国の人民に国があることを知らしめたものと言える。十字軍は一〇九六年から始まり、中断しつつ前後八回の征伐があり、すべてが終わったのは一二七〇年だった。

十字軍は、もともと熱心な宗教心から起きたことで、二百年の長い間を経てもその功を奏しなかった。人の心はこれを厭うようにならざるを得なかった。各国君主も、宗教の権力を争うことは政治権力を争うよりも重大なことでなく、アジアへ行つて土地を占領するより、ヨーロッパで国境を開く方が役に立つことがわかり、軍事に従う者もいなくなった。人民もまたその所見を大きくして、自国で産業の奨励を企てるべきことを知り、遠征を好まず、征伐の熱心さも曖昧になり立ち消えて事はついに終わった。その成り行きは笑えることだが、当時欧州の野人が東洋文明のあり様を目撃して、これを自国へ移し自ずからの物事の進歩を助けて、また一方では東西が相対することで内外の区別も知り、自らが国体を定めたのは、この十字軍の結果と言つてよい。(十字軍、功を奏すること大なり)

絶対主義で国が統一

封建の時代には、各国君主は単に虚位を擁していただけたが、心が平穏で野心がなかったわけではない。また一方では国内の人民も次第に知見を開いて、長い間貴族に支配されていることを快く思われなくなった。こうしてまた、世の中に一種の変動が生じて、貴族を倒す端緒を開いた。

その一例を挙げると、千四百年代の末にフランス王ルイ十一世が貴族を倒して王権を復活したのがこれである。後世からこの事業を論じると、その詐欺狡猾なことは卑しむべきものだったが、実はそうでない。確かに時勢の変革を考慮に入れないみないわけにはいかない。昔は世の中を支配するには武力しかなかったが、今日ではこれに代わって智力で行い、腕力に代えて狡猾さ（悪賢さ）、暴威に代えて偽計（ペテン）を行い、あるいは言葉で論し、誘い、巧みに策略をめぐらす様子を見ると、たとえその人の心は卑劣でも、期待する目的は遠大で、武力を軽んじ文明を重んじる風があると言わざるを得ない。

この時代に王室へ権力を集めたのは、フランスのみならずイギリス、ゲルマン、スペインの諸国でもそうであった。君主がこれに努力したのはもちろんだが、人民もまた王室の権力を借りて宿敵の貴族を滅ぼそうとし、上下が一緒になって中間を倒す風になり、全国の政令もようやく一つに集まって、やや政府の体裁をなすようになった。

また、この時代には火器の使用が次第に広がり、弓馬の道が次第にすたれ、天下に身分の卑しい者の勇猛さを恐れる者もいなくなった。また同時に、文字を版にする印刷術の技術が発明され、あたかも人間世界に新たに考えを伝える道路を開いたようで、人智も急に発生し、事物の軽重が変わって、智力が地位を占めて、腕力が道を譲り、封建の武人である貴族は日に日に権威を落として地位を失い、上下の中間にあつて孤立するもののものであった。要するに、この時の形勢を評すると、国の権力がようやく中心の一政府へ集まろうとする勢いに赴いたものと言える。（国勢合一）

宗教改革

教会は長い間特権をほしいままにしてのさばり、その様子はあたかも旧悪な政府が倒れないで残っているようなもので、内部の有様は腐敗しついでにしまつたが、ひたすら古いものを守って変化に適応することを知らない。振り返って世間を見ると、人智は日々に進み、昔の粗忽輕信（荒つぽくい加減な信仰）だけでなく、文字を知るのは僧侶の独り占めでなく、一般人の中にも本を読む者が現れた。本を読み、道理を求める方法を知れば、事物について疑いを持たずにはいられない。それなのにこの疑いの一字は教会の禁句で、その勢いでは両者は衝突せざるを得ず、ここから宗教改革の大事件が起きた。

一五二〇年、有名な改宗の首導者ルター氏は、始めてローマ法王に背いて新説を唱え、天下の人心を動かし、その勢いは止めようがなかった。そうはいっても、ローマもまた病める獅子のようで、元氣は衰弱したといえども、獅子はやはり獅子である。旧教は獅子のようで、新教は虎の如しで、その勝敗は容易に決まらない。欧州各国ではこのために殺した人の数は数知れずで、遂にプロテスタントという一宗派を開いて、新旧ともに地位を失わなかったのを見ると、ルターの尽力もその功は虚しいというわけではないが、殺人の禍を数えると、この新教の値段は安いものではなかった。

しかし、安いか安くないかはさておき、結局この宗旨論の眼目は、双方ともに教えの正邪を主張するのではなくて、人心の自由を許すか許さないかを争うものである。キリスト教の是非を論じるのではなく、ローマの政權を争う趣意である。故にこの争論は、人民の自由の氣風を外に表したもので、文明進歩の兆候といえる。(宗教の改革、文明の兆候)

近代国家の形成

千四百年代の末から、欧州各国で国力が次第に一つの政府に集まり、初めは人民はみな王室を慕うだけで、人民自ら政治に関する権利があることを知らなかった。国王もまた貴族を倒すために民衆の力に頼らざるを得なかった。一時の便宜のためにあたかも国王と人民が仲間を組んで、互いに利用できることを利用して、自然と人民の地位を高いところへ引き上げて、あるいは政府が許してことさらに人民に権力を付与したこともある。この成り行きに沿って、千五、六百年になると、封建貴族も次第に後を絶ち、宗教論争はいまだ収まらなかったが、ほぼその方向を定めて国の形勢はただ人民と政府の二つに帰したようになった。そうであっても権力を独占したいのは権力者の通弊で、各国の君主もその癖が抜けられなかった。こうして人民と王室の間で争いが始まり、この先駆けになったのがイギリスだった。

この時代には、まだ王室の權威は盛大だったが、人民もまた商工業に励んで財産を積み、中には貴族の土地を買って地主になった者も少なくなかった。財産土地を所有して事業に努め、内外で商売を専門に行つて、国を支える担い手になったので、黙って王室の専制を傍観することができなくなった。昔はローマに敵対して宗教改革があった。今日では王室に敵対して政治を改革しようとする勢いになった。その事柄に宗教と世俗の違いはあるが、自主自由の氣風を外へ表して文明の兆候となっているのは同じである。昔行われたフリーシテイの元素も、ここに至つてようやく芽を出したのである。

一六二五年チャールズ一世が位についた後は、民権論に加えて宗教論争も騒々しくなり、議會をたびたび開いたり閉じたりして大論争が行われ、ついに一六四九年に国王の位を廢して、一時共和制となったが、永續できず、以降様々な混乱を経て、一六八八年ウィリアム三世が王位についた時から、はじめて政府の方向をはっきり改めて、自由寛大の趣意に従った君民同治の政体（立憲君主制、イギリスの政体を指す）を定めて、今日に伝わっている。

フランスでは、千六百年の初めルイ十三世のときに、宰相リシュリーの力によってますます王室の權威が盛んになり、一六四三年ルイ十四世が王位を継いだ時には五歳でいまだ国事を知らなかったが、内外多事な時でも国力を落とさず、王が成長するに従って、資質が抜きんで優れていたため、祖先の偉業を受け継いで国内を權威をもって従わせただけでなく、しばしば外国と戦争して負けたことがなかった。在位七十二年の間、王威は光り輝いて極に達し、フランスで王室が盛んになったのは特にこの時代が最高だった。

しかしながら太陽王ルイ十四世の末年になると、軍隊の威力も振るわなくなり、政治の大綱も次第に緩み、隱然として王室の零落の兆しが見えた。確かにルイ十四世が老いたのは、その人が老いただけでなく、欧州一般で王權が老衰したと考えるべきだった。ルイ十五世の世になると、政府はますます醜態を極めて、ほとんど無政府状態に陥り、昔の有様に比べると、フランスはあたかも前後に二つの国があるようだった。

しかし、一方から国の文明はどうかと尋ねれば、政治が廢れ潰える時になって、文明が盛んなことは前代無比だったといえる。千六百年の間にも学者の議論に自由の思想がなかったわけではないが、その所見は狭かった。千七百年代になると、面目を一新して宗旨の教えなり、政治学なり、理論なり、物理なり、学者が研究するものに際限がなくなり、これを究め、疑い、糺し、試み、心思^{しんしかっせん}豁然（心が俄かに開けて向かうところを妨げるものがない）の有様になった。この時の事情を要約すると、王室の政治は不流停滞して腐敗し、人民の智力は進歩快活のために生氣を増して、王室と人民の間に激動が避けられない情勢になった。

千七百年代末のフランス大革命は、この激動が事実として表れたものである。ことが破裂したのは、イギリスでは千六百年代半ば、フランスでは千七百年末と、前後百余年の差があるが、この原因と結果が互いに照応する様子は、まさに同一の軌跡をたどっているといえる。

これが西洋文明の大略である。詳しいことは文明史の訳書があり、そこで見るができる。学者がその書の全体に目をおいて、反復熟読して前後を参考にするならば、きっと大いに得るものがある。

第九章 日本文明の由来

権力の偏重

前章で述べたとおり、西洋の文明は社会で並立している諸説が次第に近づいて、ついに統合して一となり、その間に自由を存在させたものである。これを例えると、金銀銅鉄などの諸要素を溶解して塊としたものだが、金でなく銀でなく銅鉄でもない一種の混和物になって、自然と平均をなしてお互いに維持しあつて全体のバランスを保っているようである。

振り返って我が日本の有様をみると、大いにこれと異なる。日本の文明も、社会にはもともと様々な要素があつた。君主、貴族、宗教、人民など、昔からわが国にもあつて、各々一種族をなして各々自家の説もあつた。しかし、諸説が社会の中で並立することはなく、近づきあうこともなく、統一することもなかった。例えると、金銀銅鉄の諸品はあつたが、これを溶解して塊にすることができなかったようなものである。仮に合体して一になったようなものがあつても、実は諸品の割合を平均に混ぜたのでなく、必ず片重片軽（どちらかが重くどちらかが軽い）、一方の特色が他方の特色を消し、他のものの本当の色を表させないようなものになっている。あの金銀の貨幣を作るとき、十分の一の銅を混合しても、銅はその色を出すことが出来ず、出来たものは混じり気のない金銀貨幣のようである。これを事物の偏重と名付ける。

そもそも文明における自由は、他者の自由を犠牲にして実現すべきものではない。様々の権義（権利と義務）を認め、諸々の利益を得させて、諸々の意見を受け入れて、諸々の力を發揮させて、こちらとあちらの平均の間に成立するだけである。或いは自由は不自由と接するところに生じるといってもよい。

ゆえに、社会において、政府、人民、学者、官吏などその地位を問わず、権力をもつものは、たとえ智力でも腕力でもその力と名づくものは必ず制限しなくてはならない。すべて人が持つ権力には決して純精なものはない。その中に必ず自然の悪弊を孕んでおり、卑怯なためにことを誤り、過激なためにものを害するなど、昔からの例を見ればわかる。これを偏重の禍と名付ける。権力者は常に自らを諫めざるを得ない。わが国の文明を西洋文明と比較して、その趣が違ふ点は、特に権力の偏重について見ることができる。

日本で権力の偏重というのは、広く社会の中に染込んでいて、行きわたっていないところはない。本書第二章で一国人民の気風を論じた事がある。この権力の偏重もその気風の中の一つである。今の学者は、権力のことを論じると、政府と人民だけを相対させて、或いは政府の専制を憤り、或いは人民がのさばることを咎める

者が多いが、事実を詳しく吟味すれば、この偏重は社会の至大なものから至小なものに及び、大小を問わず、公私に関わらず、いやしくも人間関係があれば、権力偏重にならないものはない。

その趣を例えると、日本国中に幾百幾千の天秤をかけたとしたら、その天秤が大小問わず、ことごとく権力の一方に偏って平均を失うようなものである。或いは三角四面の結晶物を砕いて、千分、万分とし、ついに細粉にしても、その一分子は三角四面の元の色を失わず、またこの細粉をあわせて一小片とし、またあわせて一塊としても、そのものは依然として三角四面の形を保っているようなものである。権力偏重が一般に広く行き渡り、事々物々、微細緻密の頂点まで達している有様はこのとおりだが、学者がこれに特に注意しないのはどうしてだろうか。政府と人民の関係が大きくて公的だからしばしば人の耳目に触れるために、議論もこれを目的にするものが多いにすぎない。

日本における権力の偏重

今、実際に偏重があるものを説明する。ここに男女の交際があれば男女に権力の偏重がある。親子の関係があれば親子に権力の偏重がある。兄弟の関係にもあり、幼長の関係にもある。家庭を出て世間を見渡してもそうでないものはない。師弟主従、貧富貴賤、新参古参、本家末家、いずれも両者の間に権力の偏重がある。さらに一步を進めて、人々が集まっているところには、封建のときに大藩と小藩があり、寺に本山と末寺があり、神社に本社と末社があり、少しでも人間関係があれば、権力の偏重がないところはない。

或いは、政府の中でも役人の地位、階級においてこの偏重は最もひどい。政府の役人が庶民に威厳を振るう様子を見ると権力があるようにみえるが、この吏員が政府の中で上級の者に対するとき、その抑圧を受けるのは庶民が吏員に対するよりもさらにひどいものがある。例えば、地方の下級役人らが、村の村長を呼び出して事を相談する時の傲慢さは避けて遠ざけたくなるほどだが、この下役が上司に接する様子を見るとまた哀れな笑いを誘う。村長が下級役人にあつて理不尽に叱られる様子は気の毒だが、村へ帰って水のみ百姓を理不尽に叱る様子を見ると、また憎むべきものがある。

甲は乙に抑圧され、乙は丙に抑え付けられ、強圧抑制の循環は果てがない。奇観ともいえる。もともと、人間の貴賤貧富、智愚強弱の類は、その有様（コンディション）にも何段もあつて際限がない。この段階があつても交際の妨げにはならないが、その有様が異なるに従つて、實際上の権義（ライト）にも差が生じることが多い。これを権力の偏重と名付ける。

今世の中の物事の表面を見ると、権力者は政府だけのようだが、政府が何物かをよく調べてそうなる由来を調べると、少し議論もすっかりしたものになる。元来、政府は国民が集まって事をなす所である。この場所にいる者を君主や官吏と名付けただけである。だから君主、官吏は生まれながらに君主や官吏ではない。たとえ封建の時代に世襲の風習があっても、実際にことを行う者は多くは偶然に選ばれた人物である。この人物は一旦政府の地位に昇ったからといって急に普段の心事を改める理由はない。その人が政府の中で権力をほしきままにすることがあるのは、平生の本音を現したに過ぎない。

その証拠には、封建の時代でも、賤民を動員して政府の要職に用いたことがなかったわけではないが、その人物の所業を見ても、決して不思議なものではなかった。ただ従前の風に従ってことを少し上手にただけであった。その上手さは權威をほしきままにすることの巧みさで、人民を愛して馬鹿にするものでなければ、人民を脅して萎縮させるものだった。もしこの人物を民間に置いたとすれば、必ず民間の中でこれを行っただろう。村にいれば村で行い、市にいれば市で行い、国民のがれられない流行病だったので、一人この人に限って逃れることは出来なかっただろう。ただ政府にいれば、その事業は大掛かりで、よく世間の耳目に触れることがあるので、多くの人から批判されたということである。

故に政府だけが独り権力をほしきままにする源ではなく、政府は権力者を集める府であった。権力者に席を貸して、普段の本音を出させて、盛んに事を行わせるのに丁度適当な場所だった。もしそうでなくて権力の源が特に政府にあるなら、全国の人民はただ役人の間だけで流行する病と感じて、あとの人民は無病だったということになるが、そんなことは実情にあつていないと言ふに違いない。そもそも権力を濫用するのは、権力者に共通して見られる弊害だから、政府にいて権力をもつとその権力に自ら幻惑されて、ますますこれをもてあそぶ弊害もあるだろう。或いはまた、政府の都合で、権力をほしきままにしなければ事を行うこともできない状況もあるだろうが、一般の人民で平生の教育習慣の中でそういう要素がない者をただ政府で地位を当てたとしても、急にこれを心得て事を行う道理は万々あるはずもない。

この議論に従えば、権力をほしきままにして、その力が偏重になるのは決して政府だけでない。これは全国の人民の気風と言わざるを得ない。この気風は、西洋諸国と日本を区別する著しい境目だから、今ここで原因を求めないではいられないが、それは大変難しい。

西洋人の著書に、アジアで専制が行われる原因は、気候が温暖で土地が肥沃なために人口が多すぎたからとか、山海が陰しく大きいので妄想恐怖の念がひどかった

からなどの説もあるが、この説を日本に適用してことの疑問を解決できるだろうか。まだ分からない。たとえこの説が当たっているとしても、その原因はすべて天然のことだから、人力ではどうしようもない。ゆえに私は事の成り行きを説明して、専制が行われる次第を明らかにしたいと思う。その次第が明らかになれば、これに応じる手立ても生まれよう。

治者と被治者の分離

そもそも日本も開闢の初めは、世界の他の国々と同じように、若干の人民が一群をなし、その一群の中から腕力が最も強く智力も最も逞しい者が現れて支配するか、あるいは他の地方から来てこれを征服して酋長になったと思われる。歴史書によれば、神武天皇は西から兵を起こしたと言われる。一群の人民を支配するのにひとり一人の力では出来ないで、その酋長に付き添って助けた者もいたに違いない。その人は、酋長の親戚あるいは友人の中から出て、ともに力を合わせて、次第に政府の体裁をなしたのである。

政府の体裁をつくれれば、その政府にいる者は人民を治める者であり、人民はその支配を受けるものである。ここに至って初めて治者と被治者の区別が生じて、治者は上で、主人で、内部の者である。被治者は下で、客で、外部のものである。上下主客内外の別をはつきりと見ることが出来る。確かに、この両者は、日本の社会で最も著しい区別になっていて、あたかも日本の文明の二要素といえるほどである。昔から今日に至るまで、社会の中には様々な身分階層があったが、結局その結末はこの二要素に帰し、一つとして他に独立して自家の本分を保つものはない。(治者と被治者とに別れる)

人を治めるのはもとより容易なことではない。故にこの治者の仲間に入る者は、必ず腕力と智力のほかに多少の財産がなければならぬ。身心に力があつて財産を兼ねるときは、必ず人を支配する権力を得る。ゆえに治者は必ず権力者になる。皇室はこの権力者の上に立つて、その力を集めて国内を支配し、戦つて勝たないことはない。征服して負けることもない。かつ、被治者の人民も、皇室の由来が長いという理由でますますこれに服従し、神後の時代からしばしば外征もあったことを見ると、国内では威圧と福徳が行われ、振り返つて国内のことを心配しなかつたと思われる。

以降、文明も次第に開けて、養蚕や造船の技術、織物や耕作の機械、医術や儒仏書、その他文明の諸々の物が、あるものは朝鮮から伝わり、或いは自国で発明し、人々の生活は次第に向上していったが、この文明の諸件を実施する権力はすべて政府の手に属し、人民はただその指揮に従うだけだった。それだけでなく、全国の

土地、人民の身体も皇室の私有でないものはなかった。この有様を見れば、被治者は治者の奴隷に異ならない。後世に至るまで、御国、御田地、御百姓等の呼称があった。この御の字は政府を尊敬した言葉で、日本中の田地も人民の身体も皆政府の所有物という意味である。

仁徳天皇は民家に炊煙が立つのを見て、私はすでに富めりと言ったというが、要するに人民を愛する本心から出た言葉で、人民が富むのは自分が富むのと同じようなものだという趣意で、いかにも心にわだかまりもないさっぱりした仁君と呼べるが、しかし、天下を一家のようにみなして私有するという気象はうかがい知ることができる。この勢いで、天下の権力はすべて皇室に帰し、その力は常に一方に偏ったまま、古代の末代に至った。実際にも権力の偏重は、前に言ったとおり、大きなことから細部にまで及び、人間社会を千万に分ければ千万段の偏重があり、集めて百とすれば百段の偏重がある。今皇室と人民の二段に分ければ、偏重もまたその間に生じ、皇室の一方に片寄ったものである。（国力王室に偏す）

政府が交代しても国勢は変わらない

源平が起きると天下の権力は武家に帰し、これによって武家と王室の間で権力が平均して、社会の勢いは一変すべきところだったが、決してそうではなかった。源平なり、皇室なり、皆これは治者の中の部分で、国権が武家に帰したのは、治者中のこの部分から他の部分へ力が移ったに過ぎなかった。治者と被治者の関係は依然として上下主客の関係をもち、少しも昔と異ならない。単に異ならないだけでなく、先に光仁天皇が宝亀年間に、天下に命令して兵農分離し、百姓の中で富裕で武力がある者を選んで兵士に用い、体が弱い者を農業につかせたという。この法令の趣旨に従えば、人民のうち、富んで強い者は武力で弱者を保護し、貧しくて力が弱いものは農業に励んで武人を食わせることになるので、貧弱はますます貧弱になり、富強はますます富強になって、治者と被治者の区別はますますはっきりし、権力の偏重はますますひどくならざるを得ない。

諸書から考えると、頼朝が六十余州の総追捕使そうつうぶしになって、各国に守護を置き、荘園に地頭を任命し、昔からの国司・荘司（地方官や荘園を管理した荘長）の権力を剥いで以来、諸国の健児こんでい（国府の守護、関所の警護をした兵士）のうちで、血筋がよくて家来を持つものを守護地頭に任じ、それ以下の者を御家人と呼んで守護地頭の支配を受けて、すべて幕府の支配下にはいつて、或いは百日交代で鎌倉に宿直して護衛する例もあったという。北条の時代にも、大体同じ有様で、国中至るところ武人がいないところはない。承久の乱で、泰時が十八騎で鎌倉を出発したのは、五月二十三日のことで、二十五日までの三日間で東国の兵がことごとく集まって、都合十九万騎になったという。

これから考えると、諸国の武人なる者は平生から出陣の用意に忙しく、もともと農業をする暇があるはずもなく、きつと他の人民の力に頼って食べていることが分かる。兵農の区別がますますはつきりと定まり、人口が増加するに伴って武人の数も次第に増えたのだろう。頼朝のときには、おおむね関東で奉仕する武家を諸国の守護に配置し、三、五年で交代したが、その後いつとはなく代々世襲の職になって、北条が減んで足利の時代になると、この守護なる者が互いに併合や、或いは新たに起こり、廃止し、土地の貴族に追われ、家来に奪われて、次第に封建の時代になってきた。

古代以降の有様を概して述べると、日本の武人は初めは国内の各所に分散して、一人一人が権力をふるって王室の命令に服していたが、鎌倉時代までに統合して幾つかの集団を作り、初めて大小名の称号も出来た。足利時代になると、また統合して大大名が生まれたが、まだ統合できなかった。応仁の乱以降の乱世は武人が最も盛んな時代だった。このように武人の世界では、離合集散があり、進退榮枯があったが、人民の世界ではなんらの運動があったことを聞かない。ただ農業に勉めて、武人の世界に供給するだけだった。ゆえに人民の目から見れば、皇室も武家も区別がなかった。武人の世界で治乱腐敗があっても、人民にとってはあたかも天候時候の変化と異ならず、ただ黙って、その成り行きを見るだけだった。(武家が起きて神政府の惑溺を一掃したことの利益は第2章36頁に論じている)

新井白石の説に、天下の大勢は九変して武家の代となり、武家の世も五変して徳川の代に変わったと言い、そのほかの諸家の説も大同小異である。この説はただ日本で政権を取る人が新陳交代する様子を見て、何回変わったと言うに過ぎない。これまで日本で行われた歴史は、ただ皇室の系図を詮索するか、或いは君主や役人の政策を論じるか、或いは戦争の勝敗話を書く講釈師の戦争話の類か、大抵こんなものである。まれに政府に関係しないものがあっても、仏教者の虚誕妄説があるだけで、これもみるに足りない。要するに、日本国の歴史がなくて、日本政府の歴史があるだけだ。学者の不注意で、国の一大欠点と言える。新井先生の「読史余論」などもこの類の歴史書で、書中に天下の政変とあるが、実は天下の大勢の変化でなくて、天下の大勢はすでに古代の時に治者と被治者の二要素に区別されたことで定まっていて、兵農が分かれるに及んで一層この区別が明らかになって、今日に至るまで一度も変わったことがなかった。

ゆえに平安時代末に、藤原氏が権力を独占し、上皇が院政を開くことがあっても、ただ王室内部のことで、世の形勢には関係がなかった。平家が減んで源氏が興り鎌倉に幕府を開いても、北条が將軍の臣下のまま政権を取っても、足利が南朝に敵対して賊と呼ばれても、織田、豊臣、徳川も各々日本国中を支配したが、支配するのに巧拙があるに過ぎない。天下の形勢は依然として昔と異ならない。ゆえに北条、足利がよいと思つたことは、徳川もよいと思ひ、甲が憂いたことは乙も憂い、その喜びや心配への対処法も甲乙で少しも異ならない。例えば、北条、足利の政府で五穀豊熟や人民従順を喜ぶ気持ちは、徳川政府も同じである。北条、足利の政

府で恐れた謀反人の種類は、徳川の時代でもその種類は変わらなかった。

振り返って欧州諸国の有様を見ると、大いに趣が異なる。その国民の間で新しい宗教が起こると、政府もまたこれに伴って処置せざるを得ない。昔は封建貴族だけを恐れたが、世の中の商業が次第に繁盛して中等の人民（ミドルクラス）に権力を持つ者が現れると、またこれを喜び或いは恐れざるを得なくなった。

故にヨーロッパ各国では、国勢の変化に応じて、政府もその趣を変えざるを得なかったが、独り我が日本はそうではなかった。宗教も、学問も、商売も、工業もすべて政府の管理下にあるので、その変動を心配する必要もなく、又恐れる必要もなかった。もし政府の意にかなわないものがあれば、即座にこれを禁止することが出来た。唯一の心配は、同類の治者の中から勢力をもつ者が現れて、政府が新陳交代するのを恐れるだけであった。（同類の中から起こる者とは、治者の中から起こる者をいう）。故に、建国から二千五百有余年の間、国の政府は同一の仕事を繰り返し、その状態はあたかも同じ版の本を再々復読するようなもので、同じ題目の芝居を何度も上演するようなものだった。新井氏が、天下の大勢が九変五変と言うのは、すなわちこの芝居を九度催し、また五度催したことを言うに過ぎない。ある西洋人の著書に、アジア諸国で変革騒乱があるのはヨーロッパと異ならないが、その変乱のために国の文明を進めたことがないと言う説がある。たしかに理由がないものではない。（政府は新旧交代すれども、国勢は変わることがない）

日本に国民（ネーション）なし

このように、政府は時として変革、交代することがあるが、国勢はそうではない。その権力は常に一方に偏って、あたかも治者と被治者の間に広大な隔壁を作ってその通路を絶っているようなものである。有形の腕力も無形の知徳も学問も宗教もすべて治者の側にあり、その仲間は互いに寄りかかって各々の権力を伸ばして、富も才も、榮辱も、廉恥もここに集まり、はるか上流の地位を占めて、下民を支配し、治乱興廢、文明の衰退もすべて治者に関連するもので、被治者はこれまでも心から関与することなく、少しも氣にかけないで道端のことを見聞するかのようだ。

例えば、昔から日本でも戦争があった。甲越の合戦と言い、上国（上方）と関東の争いと言い、その名を聞けば、両国が互いに敵対して戦うようだが、実際は決してそうではない。この戦いはただ両国の武士と武士の争いで、人民はかつてこれに関与したことはない。元来敵国とは全国の人民が心から敵対することで、たとえ自らは武器を持って戦場へ行かなくても、自分の国の勝利を願い、敵国の不幸を祈り、あらゆる物事について些細なことに至るまで、敵味方の区別を忘れないことこ

そ、真に敵対した両国ということである。人民の報国心（愛国心）はこの辺にあるものだ。それなのに、わが国の戦争では、古来未だにその例を見たことがない。

戦争は武士と武士の戦いで、人民と人民の戦いでない。家と家の争いで、国と国の争いでなかった。両家の武士が戦争を開くときは、人民はこれを傍観して、敵でも見方でもただ強いものを恐れているだけだ。故に戦争の際、双方の旗色次第で、昨日は味方の軍需品を運んだ者が、今日は敵の兵糧を担ぐことがある。勝敗が決まって戦いが止むときは、人民はただ騒動が静まって地頭が交代するのを見るに過ぎない。その勝利を榮譽とするともなく、またその敗北を恥辱とするともない。新地頭の法律が寛大で年貢米の高を減らすことがあれば、これを拝んで喜ぶだけである。

一例を挙げて言う。後北条の国は關八州である。一旦は豊臣と徳川に敵対して敗滅したが、その後すぐ關八州を支配したのは仇敵の徳川だった。徳川家康がどんなに傑出した人といえども、一時に八州の敵を服従させる事ができようか。実際にも八州の人民は敵でも味方でもなく、北条と豊臣の戦争を見物していたのである。徳川が關東に移った後に、敵の残党を鎮圧したというのは、ただ北条家の遺臣を討つただけのことで、百姓町人の始末になると、あたかも手でその頭をなでて、即時にほっとしたということである。

これらの例をあげれば枚挙にいとまがない。今日に至ってもその事情は変わらない。ゆえに、日本は昔から未だに国の形をなさずとも言うことが出来る。今もし、国を挙げて外国に敵対することがあれば、日本国中の人民が、たとえ兵器を持って出陣できなくても、戦いのことを心に留める者を戦者と名付け、この戦者の数といわゆる見物人の数を比較して、どちらが多いか前もって知っておくべきである。かつて私が、日本には政府ありて国民（ネーション）なしといったのも、この意味である。もとより、ヨーロッパ諸国でも、戦争によって他国の土地を併合することがしばしばあるが、これを併合するのは簡単なことではなく、大兵力を用いて鎮圧するか、もしくはその土地の人民と約束して幾分かの権利を付与しなければ、これを自分の領土に入れることは出来ないという。東西の人民の氣風が異なるのをこれから見る事ができる。（日本の人民は国事に関せず）

人民が独立市民になっていない

故に、たまたま民間に才徳をもつ者がいても、そのままの地位ではその才徳を用いる手段がないため、自分からその地位を抜け出して上流の仲間に入らざるを得ない。故に昨日の平民が今日は將軍、大臣になる例が昔から少なくない。これを一見すると、上下の壁もないように見えるが、この人物は抜け出して他に逃れたに過

ぎない。これを例えると、土地が低くて湿気たところを避けて、高燥の地（土地が高くて湿気が少ないところ）へ移ったようなものである。自分一人のためには都合がよいかもしれないが、もともとの湿地に自分で土を盛って高燥の地を作ったのではない。故に湿地はもとの湿地のままで、さしあたり自分が住まいを定めた高燥の地と比べれば、その隔壁は引き続きあって、上下の区別も少しもその趣を変えてはいない。

昔、尾張の木下藤吉が太閤になったが、尾張の人民は昔からの百姓のままでその有様を改めなかったことがそれである。藤吉は、ただ百姓の仲間を脱走して武家の仲間に入っただけである。これは藤吉一人の出世で、百姓一般の地位を高くしたのではない。本来その時の勢いなので今さらそれを論じることでもないし、論じても無益だが、もし藤吉が昔のヨーロッパの自由都市にいたら、市民は必ずこの英雄の行動を喜ばなかったに違いない。あるいはまた、今の世に藤吉を生んで藤吉がしたことをさせて、自由都市の市民を今の世に生き返らせてその事業を評価させたら、この市民はきっと藤吉を薄情な人と言うだろう。故郷を顧みず、仲間の百姓を見捨てて、一人で武家に頼み込んで一身の名利をむさぼるものは、我々の仲間の人ではないとして罵りただろう。つまり、藤吉とこの市民とは根本の考え方が違うもので、挙動の粗さや厳しさは似ていても、時勢や状況にかかわらず、昔から今に至るまでついに両立できないものである。

たしかにヨーロッパで千二、三百年の頃、盛んに行われた独立市民は、その行いはもとより乱暴過激あるいは固陋蠢愚（ころうしゅんぐ）（頑なで無知、愚かなこと）な者もいたが、決して他人に頼るのでなく、本業では商売に努め、その商売を守るために兵備も設けて、自分たちでその地位を強固にしたものである。近世に至り、英仏その他の国々で、中等の市民（ミドルクラス）が次第に富をなし、その品行を高くし、議会などで論議が騒々しく行われることがあるのも、ただ政府と権力を争って下層の人民を圧倒する力をむさぼっているのではなく、自らで自分の地位の利害を全うし、他人からの圧政に対抗しようと努力している趣意である。その地位の利害とは、地方ではローカル・インタレスト、職業ではクラス・インタレストがあり、各々その人が住む地方または商売をとにもするなどのよしみで、各自の説を主張し、自家の利益を保護し、このためには一命をも捨てる者すらいる。この趣を見ると、古来日本人が、自分の地位を顧みずに便利な方へ就いて他人に頼って権力を求めるか、あるいは他人へ依頼しなければ、自らが他人に代わって権力者になろうとして暴力をもつて暴力に対抗しようとするのは、卑劣のはなはだしいものである。これを西洋の独立の人民に比較すると、天と地の違いがあると言える。

昔支那で、楚の項羽が秦の始皇帝の行列を見て、彼にとって代わるべしといい、漢の高祖はこれを見て、立派な男はそうありたいと言ったことがある。今この二人の心中を察すると、自分の地位を守ろうとするために、秦の暴政に腹を立てるのでなく、実はその暴政を好機会として自分の野心を盛んにして、秦の皇帝に代わって秦がやることを行おうと望んだに過ぎない。あるいはその暴虐は秦ほどではないにしても、ことを少し巧みに行って人望を買うに過ぎない。権力をほしいままに

して人民を支配する一事については、秦も漢も区別はない。わが国でも古来英雄豪傑と呼ばれる者が少なからずいるが、その実績をみると項羽でなければ漢祖である。開闢の初めから今日に至るまで、日本国中で、独立市民のことは夢の中の幻にも妄想されたことがない。（国民その地位を重んぜず）

宗教に自立的統治権なし

宗教は人心の内部で動くので、最も自由、独立して少しも他人からの支配を受けず、少しも他の力に頼らずにこの世に存在すべきなのに、わが日本ではそうならなかった。もともと我が国の宗教は、神仏両道と言う者もいるが、神道はいまだ宗教の体をなしていない。たとえ昔その説があっても、すでに仏教の中に取り込まれて（神仏習合）、数百年間、本音をあらわすことができなかった。あるいは近年になって少し神道の名を聞くようになったが、維新の変革に際して、わずかに皇室の威光によって微々たる運動をしようとするだけで、一時的で偶然のことだから、私の所見では、これを定まった宗教とは認められない。とにかく、昔から日本で行われて文明の一部分として働いてきた宗教は、唯一仏教があるだけである。それなのにこの仏教も、我が国へ初めて入った時から治者の側へ入って、その力に頼らなかつたことはない。古来、名僧高僧と呼ばれる者は、唐へ行って仏教の勉強をし、あるいは自国にいて新教を開き、人を教化し寺を建てた者も多いといえども、たいがいみんな天皇や將軍などのひいきを得て、その威光の助けを得て法を広めようとしただけである。甚だしいものは政府から爵位をもらって榮譽とする者までいる。

僧侶が僧正そうじょうや僧都そうずなどの位に補される例は、最も古くは、延喜式に（平安時代に編纂された律令の細則）僧都以上は三位に準じるといい、後醍醐天皇の建武二年の宣旨せんじ（天皇の命を受命者が書き残したもの）には、大僧正が二位大納言、僧正が二位中納言、権僧正ごんのそうじょうが三位参議さんみさんぎに准じるとある（釈家官班記）。このなりゆきをみると、当時の名僧高僧も朝廷の官位を身につけその位によって朝廷の多くの臣下と上下の席次を争い、席の内外を榮辱としたのだろう。

このため日本の宗教は、昔から今日に至るまで、宗教はあっても自立した宗教があつたことを聞かない（宗教の自立的な統治権なし）。その実証を得たいと望むなら、今日でも国内の有名な寺へ行きその由来記を見ればよい。聖武天皇の天平年間に国ごとに国分寺を建て、桓武天皇の延暦七年には伝教大師・最澄が比叡山を開き、根本中堂を建てて王城の鬼門を鎮め、嵯峨天皇の弘仁七年に弘法大師・空海が高野山を開いて帝から許可を賜って大伽藍を建立した。その他、奈良の諸山、京都の諸寺、中世の鎌倉五山、近世には上野の東叡山（寛永寺）、芝の増上寺などどれも政府の力によらなかつたものはない。その他歴代の天皇で自ら仏に帰し、あるいは親王で僧になった者も甚だ多い。白河天皇に8男がいて、うち六人は僧だったという。これも宗教が権力を得た原因の一つである。

独り一向宗は自立に近いが、やはりこの弊害を逃れなかった。足利の末、大永元年、実如上人の時、天子即位の費用をさしだし、その褒美として永世准門跡として法親王に准じる地位を賜ったことがある。皇室の衰微貧困を気の毒に思つて、余つたお金を出すのは僧侶の身分ではもつともなことであるが、実際はそうでなく、西三条入道（仏門で修業する人）の仲介でお金で官位を買つたものである。これは卑劣といわざるを得ない。

故に古来日本国中の大寺院と称するものは、天皇皇后の勅願所（思し召し）でなければ將軍、執權が建立したものである。要するにこれは御用の寺と言わざるを得ない。その寺の由来を聞けば、御朱印は何百石、住職の資格は何々と言つて、あたかも身分が高い武士が自分の家柄を語ることと変わらない。少し聞いただけで不快な気持ちになる。寺の門前に下馬札（下馬すべきことを記した立札）を立てて、門を出ると一党を召し連れて、人を払い、道を開けさせて、その威力は封建の大名よりも盛んなものがあつた。かくしてその威力の源を調べると、宗教の威力でなく、ただ政府の威力を借用したもので、結局俗権の中の一部にすぎない。仏教が盛んといえども、その教えはすべて政權の中にすいとられて、十万世界を遍く照らすものは仏教の光明でなく、政權の威光のようなものだ。寺院に自立した宗教がないことも怪しむに足りない。その教えにすぎる人に信仰の本心がないこともまた驚くに値しない。

その一例を挙げると、古来日本では宗教のために戦争になつたことが極めてまれなことをみても、信者が怠けて弱いさまを窺い知ることができる。仏教の教えで信心帰依が表に現れるのは、無知無学な農家の男女や老人が涙を流して泣くくらいに過ぎない。この有様を見ると、仏法はたんに文盲世界の道具の一つに過ぎず、最も愚かで頑固な人々の人心を緩和する手段にすぎない。そのほかには何らの効用もなく、何らの勢力ももたない。

その力がないことのひどい例は、徳川の時代に破壊の僧といつて世俗で罪を犯したのでなくただ宗旨上の戒律を破る者がいると、政府が直ちに捕えて、市中にさらして流刑に処す例がある。このような例は僧侶が政府の奴隸と言うことも出来る。最近になつて、政府から全国の僧侶に肉食妻帯を許すという命令があつた。この令によれば、従来僧侶が肉を食べず、婦人を近付けなかつたのは、その宗教の宗旨を守るためでなく、政府の許可がなかつたために努力して自ら禁じていたことになろう。これらの成り行きを見ると、僧侶は単に政府の奴隸であるだけでなく、日本国中すでに宗教なしと言うこともできる。（宗教権なし）

學問に權なく、かえつて世の專制をたすく

宗教ですらそうである。儒道などの学問では言うまでもない。わが国に儒書が伝わったのはすでにずいぶん前のことである。古代に博士をおいて天皇自ら漢書を読み、嵯峨天皇のときに大納言冬嗣が勸学院を建てて一族の子弟を教え、宇多天皇のときには中納言行平は奨学院を設けるなど、漢学も次第に広がって、ことに和歌は昔から盛んであったが、すべてこの時代の学問は、地位ある人の子弟に及ぶだけで、物を書くのもすべて官の手で作られたものである。いうまでもなく印刷技術もいまだ発明されていなかったの、民間に教育を施す手段もあるはずがなかった。

鎌倉時代に、大江広元、三善康信らが儒学者として登用されたが、これもまた政府に属したもので、人民の間に学者がいたことを聞かない。承久三年北条泰時が宇治勢多へ攻め入った時、後鳥羽上皇から宣旨が来て、従事した兵隊五千余人の中からこの宣旨が読める者を探した時に、武蔵の国の住人藤田三郎なる者が一人しかいなかったという。世間の人がいかに学問を知らないかがわかる。これより足利の末期に至るまで、学問はすべて僧侶が行うものになり、文字を学ぼうとする者は寺に頼る以外に方法がなかった。後世、文字を習う生徒を呼んで寺子と言うのもその因縁による。ある人の説に、日本に版木による印刷本ができたのは鎌倉の五山が始めと言う。なるほど信じられそうなことである。

徳川の初めにその始祖・家康は、一番に藤原惺窩を召し、次いで林道春（林羅山）を用い、太平が持続するに伴って、大学者が輩出し近世に至った。このように学問の盛衰は世の治乱と歩みをともしして独立の地位を占めることもなく、数百年の戦争の騒乱の時代はすべて僧侶の手に任せたことは、学問としては人に顔向けできないと言わざるを得ない。この一事を見ても、儒教は仏教に及ばないことがわかる。

そうであっても、戦乱で学問が衰微するのは一人日本だけのことではなく、世界万国、みなそうならないところはない。ヨーロッパでも中世の暗黒の時代から封建の時代に至るまでは、学問の権限はすべて僧侶に属していて、世間に次第に学問が広がったのは、実に千六百年代以降のことだった。また、東西の学風はその趣を違え、西洋諸国は実験の説を主張し、わが日本は孔孟の理論を悦び、虚学と実学の違いは比べ物にならないが、一概にこれを咎めるべきでもない。とにかく、わが人民を野蛮の域から救って今日の文明に至らせたのは、仏法と儒学の賜物と言わざるを得ない。ことに近世に儒学が盛んになるに及んで、世間で行われる神道や仏教の虚誕妄説を排除して、人心の蠱惑（人を引き付け、惑わすこと）を払ったことなど、その功績も少なくないものがあつた。この一方から見れば、儒学もまた有力なものと言える。故に今、東西学風の得失はさておき、学問がおこなわれた次第について、著しい二つの違いを掲げてここに示す。

その違いとは何か。乱世の後に学問が起きた時に、この学問なるものが西洋諸国では人民一般の間から起こり、わが国では政府の中から起きたことである。西洋諸

国の学問は学者の事業で、それが行われるのは官私の区別なくただ学者の世界にあった。わが国の学問はいわゆる治者の世界の学問で、あたかも政府の一部分に過ぎない。試みにみると、徳川の治世二五〇年の間に国内で学校と称するものは、政府の設立でなければ諸藩のものだった。有名な学者もいなかったわけではなく、大きな著作もなかったわけではないが、その学者は必ず誰かの家来である、その著書は必ず官の発刊である。或いは浪人に学者がいたかもしれない。私家版の出版があったかもしれないが、その浪人は家来になりたいと願っていて家来になれなかった者である。その私家版の出版も官による出版を願いながらできなかったものである。国内に学者の団体があることを聞いたことがない。論文や新聞などの出版物があるのを聞いたことがない。技芸の教室も見ることがない。多くの人が評議する会議もないし、学問のことについて民間の企てがあったことがない。

たまたま大学者で私塾を開いて人に教える者がいても、その生徒は必ず士族に限り、世襲の家禄を得て君主に使える余業に字を学ぶに過ぎない。その学問も治者の名前にそむかず、専ら人を治める道を求め、数千百巻の書を読了しても、官位につかなければ用をなさないのである。或いはまれに、陰君子（人目につかない君子）と称する先生もいるが、その実は満足して隠れているのではなく、ひそかに不遇を嘆いて他人を怨望する者か、そうでなければ世を忘れてぼんやりした者である。その様子を形容して言う、日本の学者は、政府と名付ける籠の中に閉じ込められて、その籠を自分の世界とし、この小世界のなかで煩悶するものといえる。幸いにして世の中に漢儒の教育が広く行き渡っておらず、学者も多くないのが幸いである。もし先生の思い通りに無数の学者が生まれたら、狭い籠の中は混雑し、身を置く場所もなくなって、怨望がますますひどくなり、煩悶もますます激しくならざるを得ない。気の毒千万な有様ではないだろうか。

このように、限りある籠の中に限りなく学者が生まれて、籠の外に人間世界があることを知らない者だから、自分の地位を作る手段がない。ひたすらにその時代の権力者に依存して、どんな軽蔑を受けてもこれまでそれを恥じたことがない。徳川の時代に学者の志を達成した者は、政府諸藩の儒官である。名前は儒官（儒学を教える官）といっても、その実は長袖身分公家や僧侶をあざけて呼んだ言葉で、貴ばれたわけではない。ただ一種の道具のように使われて、当人が好きな政治上の事務にも参加させず、わずかな俸禄を与えて少年に読書を教えるだけだった。字を知る人が少ない世の中だったので、ただその不自由を補うために使われただけで、これを例えれば、皮細工に限ってエタに命じるようなものである。卑屈で賤しいことの極みといえる。その人に向かって何を求められようか、また何を責められようか。その仲間に独立の連中がいらないことを怪しむまでもなく、見識ある議論がないことも驚くに当たらない。

そればかりでなく、政府専制は人を束縛するといつて、少し気力がある儒者の中にはどうかすると不平を抱く者もないわけではない。しかし、その本を調べると、先生自ら種をまいて培養しその苗が蔓延したためにかえって、自らが苦しめられるようなものである。政府の専制を教えたものは誰か。たとえば政府本来の性質に専

制の要素があつても、その要素の発生を助けてこれに光彩を添えるものは儒学の学問ではないだろうか。古来日本の儒者で最も才力があつて最もよく仕事を行った人物として呼ばれる者は、最も専制に貢献して最もよく政府に用いられた人物である。この一段に至ると、儒者は先生で、政府は生徒ということも出来る。

気の毒なことだ。今の日本の人民は誰もが誰かの子孫ではないだろうか。今の世で専制を行い、その専制に苦しめられるものは、独り今の日本人だけではない。遠い祖先から受けた遺伝毒がそうしているものといわざるをえない。それならこの病毒の勢いを助けたものは誰か。儒者先生もまた関与に大きな力を持ったものである。(学問に権なくして却つて世の専制を助く)

前段に述べたように、儒学は仏教とともに各々一部分で役割を働き、わが国で今日に至るまで文明を作ってきたが、いずれも昔を慕う病の弊害を免れない。宗教の本分は人の心の教えを司り、その教えに変化があるはずもないので、仏法や神道の連中が数千年の昔の話で今の人を教え導こうとするのは尤もな事だが、儒教になると宗教と異なり、もっぱら社会の道理を論じ、礼楽六芸(音楽や土の六つの大礼)のことも説いて、半ばこれは政治に関する学問といえる。今この学問が、変通改変(臨機応変に、旧弊を改革して進歩を図ること)を知らないのはけしからんことではないだろうか。

学問は日進月歩で、昨日の得は今日には失となり、前年の是も今年は非となり、何物にも疑いを持ち何事にも不審を抱いて糺し吟味し、発明し変革して、子弟は父兄に優り後進は先進の先へ進み、毎年経験や学習を重ね、次第に盛大になつて、振り返つて百年の昔をみれば、粗野で非文明だったことを憐み笑われるものが多いことこそ、文明の進歩、学問の上達と言うべきである。

それなのに、論語でこう言っている。「後世畏るべし、いづくんぞ来者の今に如かざるを得んや(若者は実力次第で将来どんな大人物になるか分からないので、恐るべきである。後進の者が今に追いつかないわけがない)」と。孟子が言う、「舜何人ぞ、余何人ぞ、することある者はまたかくのごとし」(舜も私も同じ人間。見込める人はこの位の気概を持つものだ)と。また、曰く、「文王は我が師なり、周公がどうして我を欺くことがあろうか」(文王は自分の師と周公が言った。周公のような文武の偉人でも父の文王のような聖人を模範にしているのだから彼を信用してよい)と。この数言で、漢学の精神をうかがい見ることが出来る。「後生畏るべし云々」とは、若者が勉強すれば、あるいは今の人に追い付けるかも知れない、油断ならないという意味である。それならば後進の人が勉強して達すべき頂上は、かろうじて今の人の地位までである。そればかりでなく、その今の人もすでに古人に及ばない季世の人(末世の人)だから、仮に古人に至ることがあつても、あまり頼もしい事柄ではない。また後進の学者が大いに奮発して、大声で一喝して、憂い嘆きを述べたところで、数千年前の舜のようになろうと望むか、または周公を証人にたてて文王を模範にするまでのこ

とで、その趣は不器用な子供が先生に習字の手本をもらって、お手本のとおりに字を書こうとして苦心しているようなものである。初めから先生には及ばないと覚悟を決めていれば、極々よくできたところで、先生の筆法をまねるだけで、とてもそれ以上になることはできない。

儒教の道の系図は、堯、舜より禹、湯、文、武、周公、孔子に伝え、孔子以降は、聖人の種も尽きて支那も日本でも再び聖人がいることを聞かない。孟子以降、宋の儒者や日本の大学者、大儒者も後世に向かって誇ることはできるが、孔子よりも前の古い聖人に対しては一言もあるはずがない。これを学んでも届かないと嘆息するだけである。故に儒教の道は、後世になるほど悪くなって、次第に人の智徳を減らし、段々悪人の数を増やし愚者の数も増やし、一伝また一伝、末世の今日に至ると、とつくに禽獣の世界になるはずであったのは計算上からも明らかだったが、幸いにして、人智進歩の法則は自然と世に行われて、儒者の考えのようにはならず、しばしば古人に優る人物が生まれたのか、今日までの文明を進めて儒者の勘定の割合の予想に反したことはわが文明の慶福だったと言うべきである。このように、古を信じ古を慕って、少しも自分の工夫を交えず、いわゆる精神の奴隷として自分の精神のすべてを古の道にささげ、今の世にいて古人の支配を受け、その支配をまた次に伝えて世を支配し、広く人間の交際に停滞不流の要素を浸透させたのは、儒学の罪と言える。

そうとはいえ、一方から言えば、もし昔我国に儒学というものがなければ、今の世の有様に達することはできなかった。英語にリファインメント（改良）といって、人心を鍛錬して清らかで雅にさせる一事について儒学の功績は少なくなかった。ただ昔には効用があったが、今では無用なだけである。物が不自由な時代には破れた筵も夜着に用いなければならなかったし、糠も食料にしなければならなかった。儒学もそうであり、必ずしもその旧悪を咎めることは出来ない。

私が思うに、儒学を昔の日本人に教えたのは田舎の娘を御殿の奉公に出したようなものである。御殿での立ち居振る舞いは自然と清雅を真似て、その才知も感覚の鋭さを増したが、活発な気力は失われて、一家の財産としては無用な一人の婦人を生んだことになる。まさしく、その時代には、娘に教えることが出来る教室もなかったもので、奉公も理由がないわけではなかったが、今日に至ると、その利害得失を考えて別の方向を定めざるをえない。

武士に独一個の氣象なし

昔から我が日本は義勇の国と呼んで、武人が剽悍（ひょうかん）（素早く強いこと）、果敢、忠誠で、率直なことはアジアにおいても恥じるものがなかった。とりわけ、足利の末年の天下大乱の時には、豪傑があちこちに割拠して戦いは止まず、およそ日本で武力が横行したのは前後を見てもこの時ほど盛んなことはなかった。負けて国を滅

ぼす者がおり、勝つて家を興す者がいた。門閥もなく親戚もなく、功名は自在で、富貴も一瞬で得ることが出来た。文明の程度に前後の差はあっても、かのローマの末世に北の民族が侵入した時代を彷彿とさせるとも言える。この時勢にあつて、日本の武人も自然と独立自主の気象を生じて、あるいはかのゲルマンの野人が自主自由の要素を残したように、わが国民の気風も一変したように思われるが、事実はそうではなかった。この章の初めに述べた権力の偏重は、開闢の初めから社会の微細なところまで入り込み、どんな震動があつてもこれを破ることがなかった。

この時代の武人は、快活不羈（快活で何者にも束縛されないこと）のようだったが、この気象は一身で社会の不義不正を憤つて発したものでなく、自ら一個の男子と思ひ、一身のほかは何も持たず、自己の自由を楽しむ心から出たものでもなかった。外物に誘われて発生したか、そうでなければ外物によつて発生が助けられたものである。何を外物と言うか。先祖のため、家名のため、君のため、父のため、自分の身分のためである。この時代の戦争の名目にするものは、必ずこのどれかによつてゐる。或いは先祖、家名、君主、父、身分などをもたない者は、ことさらに名義を作つて口実に用いた。どんな英雄豪傑で有力有智な者といえども、智力だけで事を企てた者はいなかった。ここに歴史上に現れたものから一、二の例を示そう。

足利の末年に、各地の豪傑が主人を追ひだし、或いは主君や父の仇を討ち、或は祖先の家を興そうとし、或いは武士の面目を果たそうとして、仲間を集めて土地を占領し、割拠の勢いをなしたが、それが目指したことはただ上洛京都へ上ることの一事に過ぎなかった。そもそもこの上洛とは何かというと、天皇もしくは將軍に拝謁して、權威を借用して天下を支配することである。或いは未だ上洛のてだてを持たないものは、遠隔地にいたまま皇室の官位を受けて、この官位によつて自家の榮光を増し、地位が低い者を支配する手段に用いた。この方法は古来日本の武人の間で行われる一定の流儀で、源平の大將でそうしなかった者はいなかった。北条に至ると、直接最上の官位を求めず、將軍を名目上置いたままにして自分は五位にいて天下の権力を握つたのは、単に皇室を道具に利用しただけでなく、兼ねて將軍の權威も利用したものである。その外形をうわべだけで見れば、美しく巧みだが、この内部を詳しく見れば、つまるところ、人心の卑劣から生じたもので、まことに卑しく憎むべき要素を含んでゐるといわざるを得ない。

足利尊氏が赤松円心の策を用いて、後伏見帝の命を受けて、その子の光明天皇を立てたことなどは、誰が見ても尊王の本心から出たものとは思えない。信長は初め將軍義昭を手に入れたが、將軍の權威が天皇の權威に及ばないことを知ると、たちまち義昭を捨てて直ちに天皇を看板にしたことも、天皇への畏敬の気持ちの厚かつたためとは言えない。いづれも皆、詐謀偽計（さぼうぎけい）（他人を欺くはかりごと）の典型的な例であつて、天下のことについて注意を払う者なら、その内情を洞察すべきはずなのに、その表面では忠信節義を述べて、子供の悪戯に等しい名分を口実にして策を圖つたものと考えて、人もまたこれに疑いを入れないのはどういふことか。き

つとその仲間の中では、上下ともに大いに利益になるものがあつたに違いない。

抑圧移譲の発生

日本の武人は、開闢の初めからこの国の社会の法則に従い、権力の偏重のなかで養われて、常に人に服従することを恥としなかった。かの西洋人が自己の地位を重んじ、自己の身分を貴んで各々その権義を主張する者に比べて著しい差異が見られる。ゆえに戦争騒乱の世といえども、この社会の法則を破ることは出来なかった。一族の頭には大将がいて、大将の下に家老がいて、次いで騎士、徒士、足軽中間まで、上下の身分に伴う名分がはっきりとし、その名分とともに権義も異なり、誰もが無理を押しつけられ、誰もが誰かに無理を押しつけていた。無理に抑圧させられ、また無理に抑圧し、上へ向かつて服従すれば、下に向けて必ず得意になる。例えば、ここに甲、乙、丙、丁の一〇名がいて、乙が甲に対して卑屈な態度を示し、我慢できないほどの恥辱があつても、丙に対すると意気揚々として大いに誇らしげで愉快になる。故に前の恥辱は後の愉快によって償い、それにより不満足を平均し、丙は丁から償い^ばをとり、丁は戊に代わりを求め、段々と限りなく、あたかも西隣へ貸したお金を東隣へ催促するようなものである。

またこれを物に例えて言うと、西洋人の権力は鉄のようで、これを膨張させるのは大変難しく収縮させるのも簡単ではない。日本の武人の権力はゴムのようで、それが接するものよって伸び縮みし、下に接すれば大いに膨張し、上に接すれば急に収縮する性質がある。この偏縮偏張の権力が一か所に集まると武家の威光と言う名前になり、その抑圧をこうむるものは無告の庶民（気の毒な者）である。庶民にとっては気の毒だが、武人の仲間では、上は大将から下は足軽中間に至るまで、上下共通の利益といわざるをえない。

単に利益を図るだけでなく、上下の関係はうまく整合し物事の秩序もすこぶる美しいものがある。その秩序は仲間内で上下の間にめいめい卑屈な醜態があるといえども、仲間全体の栄光をもつて無理やりに自らに自分の栄光とし、かえって独一個の地位を捨てその醜体も忘れて、別に一種の秩序を作つて慣れきつたものである。この習慣の中で育つてついに第二の性質になって、どんなものに触れても変化することがない。威武にも屈せず、貧賤も奪うことが出来ず、いかめしい武家の気風を窺い見ることが出来る。この一面についてその場の働きをみると、まことに羨むべき、また慕うべきものも多い。昔の三河の武士が徳川家に仕えた有様などもその一例である。

こうした仕組みによって成り立った武人の社会だから、この社会を維持するためには、やむを得ず一種無形で最上の権威が必要になるのはやむを得ない。つまり、その権威がある所は皇室になるが、人間世界の権威は人の知徳の結果だから、王室といえども、実の知徳がなければ、実の権威もここに落ち着かせることができない。こうして、その名目だけを残して皇室に虚位を持たせ、実権は武家の統領に握らせる策をめぐらすことで、当時各地域の豪傑が上洛の一事に熱中し、子供の遊びに等しい名分をことさらにつくって、これを利用した理由である。つまり、その本を調べると、日本の武人に独一個人の気象（インディビデュアリテイ）はなくて、こうした卑劣なふるまいを恥としなかったのである。（乱世の武人に独一個人の気象なし）

昔から、世の人が気にせず見過ごして意にとどめなかったことだが、今、特にこれを記すと、日本の武人に独一個人の気象がない趣を窺い見ることができる一件がある。それは人の姓名のことである。もともと、人の名は父母がつけるもので、成長の後に改名することもあるが、他人の指図を受けるべきものではない。衣食住の物品は人々の好き嫌いに任せて自由自在のようであるが、多くは外物によって動かされて、自然と時代の流行に従うものだが、人の姓名は衣食住のものと異なっていて、名前をつけるのに他人の指図を受けないことは勿論、例え親戚友人といえども、自分から求めて相談を求めることがなければ口をいれるべき事柄ではない。人事の形に現れたものの中で最も自由自在な部分といえる。法によって改名を禁止する国では、もとよりその法が自由を侵害しているわけではないが、改名自由の国では、源助という名を平吉と改めるか改めないかの自由は、全く個人の意志に任せて、夜寝ている時に枕を右にするか左にするかの自由のようなものだ。少しも他人が関与すべきことではない。

それなのに古来わが日本の武家に、偏諱（^{へんき}）（大名等が功績ある家臣や元服の際に、名前の一字を与えたこと）を賜り、姓を許す例がある。卑屈賤劣（他人にへつらう卑しいこと）の風と言うべきものである。武勇に優れた上杉謙信もこの習慣から逃れることが出来ず、將軍義輝の偏諱を拝領して輝虎と改名したことがある。さらにひどいのは、関ヶ原の戦争後に、天下の大権が徳川氏に帰して、豊臣氏に背いた諸侯がことごとく本姓に戻り、また松平を名乗る者もいた。これらの姓の変更は、自ら願ひ、あるいは上からの命令で賜ったこともあるが、いずれにしてもは卑しむべき挙動と言わざるを得ない。

ある人がいうに、無理な姓名の変更は当時の風習で、人は意に留めないもので、今になって非難することが出来ないというが、決してそうではない。他人の姓名を名乗って快いと思わない人情は昔も今も同じである。その証拠に、足利の時、永享の年、鎌倉の將軍・持氏の子が元服して名前を義久と名付けたために、支配者の上杉憲実は例の如く、室町（幕府がおかれた場所）の諱（^{いみな}）（与えられた名前）を願うべきといって忠告したが、持氏は聞かなかったといわれている。この時持氏には自立の心があって、その志が善でも悪でも、他人の名前を名乗るのは卑しい挙動と思っていたのだろう。また、徳川の時代に、細川家へ松平の姓を与えようとしたが断つ

たとして、民間では美談として言い伝わっている。虚実ははっきりしないが、これを美談とする人情は今も昔も同様であることを明らかに示している。以上述べた姓名のことは、それほどの大事件でもないが、古来正義のため力を尽くす武人が、実は思いのほか卑怯だったことを知ることができ、また一には權威を握る政府の力は恐ろしいことで、人心の内部まで犯してこれを制限することができるとの次第を示すために、数言をここに述べたものである。

権力偏重で治乱があっても文明は進まない

以上一つ一つ論じたとおり、日本の社会は、古代の時から治者流と被治者流の二元素に分かれて権力の偏重を作り、今日に至るまでもその勢いが変わったことがない。人民の間で自分の権義を主張する者がいなかったことは言うまでもない。宗教も学問もみな治者流の中に取り込まれて、これまで自立することが出来なかった。乱世の武人には正義を尽くす勇氣があるように見えるが、「独一個人」の味を知らない。乱世でも治世でも、社会の大から小に至るまで、偏重が行われないうところがなく、また偏重によらなければ何事も行われなかった。あたかも万病に一葉を用いるように、この一葉の効能で、治者側の力を補なって力を集めて、これを権力者の一手に集める工夫だった。

前にすでに述べたように、古代の政治も武家の政治も、北条、足利の策も徳川の策も、決して元素が違うものではない。ただあれをこれより善いとし、これをあれより悪いと言うのは、この偏重を使ううまさを見て、その得失を判断するに過ぎない。巧みに偏重の術を施し、最上の権力を権力者へ集めることができれば、あらゆることが達成でき、それ以上に望むものはなかった。

古来からの風習に国家という文字がある。この家の字は人民の家をさすのではない。権力者の家族、家名と言う意味である。故に国は家で、家が国である。甚だしいのは、政府を富ますことを御国益などと言うこともある。このようなことは、国が家のために滅びた姿である。こうした考えで政治の本が定められたために、その策は常に偏重の権力を一家へ集めることが政策のすべてになった。山陽外史は、足利の政治を評して、尾大不掉^{びだいふとう}（尾が大き過ぎて自由に動けないこと、上が弱小で下が強大で制御しにくいこと）として失策とした。この人も偏重がうまく行われず足利の家に権力が集まらなかったことを論じたまでのことで、当時の儒者の考えではもつともだが、つまり家があることを知って国があることを知らない者の論である。

もし足利の尾大不掉を失策とすると、徳川の首大偏重^{しゅだいはんじゅう}を見てこれに満足せざるを得ない。偏重の政治を徳川家ほど巧みで立派なものではなかった。統一の後、頻繁

に自家のために土木工事を起こして諸侯に財を使わせ、他方で各地の城を壊し諸藩の築城をやめさせ、大船を作ることを禁じ、火器が首都に入ることを許さなかった。諸侯の妻子を江戸に留めて、盛んに邸宅を築かせて、自然と奢侈に導いて有用な事業を怠らせた。まだ余力があるとみると、「お手伝い」、「お固め」と言う口実を設けて、忙しく活動させて疲れさせた。「申しつける」と言えば皆実行させ、「命じる」と言えば皆従った。た。その状態はあたかも人の手足を弱らせて、それと力を比べるようなものである。偏重の政治では、実に最上最美の手本とすべきもので、徳川一家にとつて巧を尽くし妙を得たものと言える。

もともと政府を建てるには、中心で権力を握り全体を支配して釣り合いをとらざるをえない。この釣り合いが必要なことは、独り日本だけでなく世界万国みなそうである。野蛮非文明な昔の日本人も、これを理解したからこそ数千年の前の時代から、専制の精神だけは忘れたことがなかったではないか。まして文明が次第に開けた後の世では、誰一人として政府の権力を奪い去つてその後文明を期待するという者もいなくなった。政権が必要なことは学校の子供でも知っている。

しかし、西洋文明の各国では、この権力の発生はただ一か所ではなかった。政令は一つの方向から出るが、その政令が国内の人心を集めたものか、たとえ集められなくても、その人心を考慮して多少趣を変えて、様々な意見を調査したもので、単に出るところを一つにしたものである。それなのに、古来日本では、政府と国民はたんに夫人と客であるだけでなく、あるいは敵対関係と言うこともできる。すなわち、徳川政府が諸侯に財を支出させたのは、敵に勝つて賠償金を取ることと異ならない。国民に造船を禁じ、大名に城普請を止めさせたのは、戦争に勝つて敵国の台場を壊すことと同じである。これは同国人に対する所業とは言えない。

敢為の精神の喪失

すべて世の事物には初歩と次歩の区別があり、初めの一步は、これが次の第二步に適するような工夫をしなければならない。故に次歩は初歩を支配するともいえる。例えばことわざに、苦は楽の種と言ひ、良薬は口に苦しと言ふことがある。苦痛を苦痛として避け、苦薬を苦薬として嫌うのは、人情の常で、事物の初歩だけに注目すると、これを避けて嫌うというのはいかにも道理にかなうようだが、次の第二步の安楽と病の回復に着目すれば、これを我慢して耐えなければならない。

あの権力の偏重も、一時的には国内の人心を維持して事物の秩序をたてるにはやむを得ないことで、決して人の悪心から出たものではない。いわゆる初歩の処置である。それだけでなく、その偏重が巧みになると、一時的には人を驚かすほど立派なものもあるが、残念ながら、次の第二步に進もうとすると、たちまちそれまでの弊害がでて初歩がよくなかった兆候が見られる。これから考えると、専制政治は巧みになるほどその弊害がひどく、その治世が長いほどその害は深刻になり、い

つまでも続く遺伝毒となつて、容易にとり除くことができなくなるようなものである。徳川の太平のなどはその一例である。今日に至つて、世の中の有様を变革し、社会が第二步に進もうとすると、それが極めて難しいことになる。その難しい理由は何か。徳川の専制が巧みで、その太平が長かつたためである。

私はかつて、卑しい言葉を使ってこの事情を評したことがある。専制政治を飾るのは、暇な隠居が瓢箪を愛して磨くようなものだ。朝に夕に心身を働かせて磨いたものは、依然として元のままの丸い瓢箪で、ただ光沢を増しただけである。時勢が変化して第二步に進もうとするに当たり、なお旧物を慕い、変化し適応していくことを知らず、到底求められないものを頭の中で想像し、これを実際に探り当てようとして煩悶するのは、瓢箪がすでに傷がついているのになおこれを磨くようなものだ。愚さも一層甚だしいものといえる、と。

この言葉はあるいは当たつていなくもないだろう。なんでも事物の初歩を心配して次歩があることを知らずに、初歩に止まつて次歩に進まず、初歩が次歩を妨げている。こうしたことは、あの初歩を偏重して事物の秩序を得ることができたと言うが、実は秩序を得たのでなく、人間の社会を枯死させたものと言える。社会を枯死させるから、山陽外史のいわゆる尾大不掉も徳川の首大偏重もどちらが良かったかを論じても仕方がない。結局、外史などもただことの初歩に着目して、瓢箪を磨く考えがあるに過ぎない。

権力の偏重で文明も停滞

試みに徳川の治世を見ると、人民はこの専制偏重の政府を上にあぐらをかき、振り返つて世間の有様を見て人の品行はどうかと問うと、日本国中幾千万の人々は、各々幾千万個の箱の中に閉ざされ、また幾千万個の囲いに隔てられているようなもので、少しも身動きできない。士農工商は身分が別々なことはもちろん、士族の中には禄を代々引き継ぎ官位も代々引き継いで、はなはだしいのは儒官、医師のような職も家業になつて代々職を改めることがなかった。農民にも家柄があつて商工にも株があつて、その囲いは堅固で鉄のようで、どんな力を用いても破ることができなかった。人々は能力を持つていても、進んでことをなすべき目的がないので、ただ退いて身を守る策を求めるだけだった。数百年の長い間、その習慣がついに人の性になつて、いわゆる敢為の精神（アドベンチャー精神）を失い尽くしてしまつた。

例えば貧しい士族や人民が無知文盲で人の軽蔑を受けて、年ごとに貧しくなり、その苦しみは人間世界に比べるものがないほどだったが、自ら困難を犯してあえて事を行う勇氣はなかった。図らずも来てしまった困難にはなんとか耐えるけれども、自ら困難に飛び込んで未来の樂しみを求める人はいない。貧士貧民だけでなく、

学者も商人もそうである。おおむね、日本人は普通の人に備わるべき運動力を欠いて、停滞不流の極に沈んでしまったといえる。

これがすなわち徳川の治世二五〇年の間、この国に大きな事業を企てる者が稀になった理由である。近年廃藩置県の一挙があったが、全国の人は急にそのあり方を変えることができず、治者と被治者の区別は依然としてはつきりしていて、少しもその趣を改めなかった理由である。その原因を調べると、すべて権力の偏重からきたもので、事物の第二步に注意しなかったことの弊害と言える。故にこの弊害を認識して偏重の病を取り除かなければ、天下が乱世でも治世でも、文明は決して進むことができないだろう。ただし、この病の療法は、今日では現に政治家の仕事であるので、これを論じるのは本書の旨でなく、ただ病の容態を示したに過ぎない。

そもそも西洋諸国の人民も、貧富強弱は一樣ではない。富強な者が貧弱な者を支配するのに、酷薄殘忍（薄情でむごいこと）もあろう。傲慢無礼（高飛車で礼儀をわきまえないこと）もあろう。貧弱な者もまた名誉や利得のために、人にへつらうこともあろう、人を欺くこともあろう。その様子が醜惡なことはわが日本人と異ならない。或いは日本人よりもひどいこともあるに違いないが、その醜惡の際に、自然と人々のうちに独一個人の気性があつて、精神がよどみなく働くことを妨げない。その酷薄傲慢は単に富強なためで、他の權威を借りてそうなっているわけではない。その諂諛欺詐（てんゆおもねりや欺き）はただ貧弱なためで、他に恐れるものがあるわけではない。このようなわけで、富強と貧弱は自然によるものでなく、人の智力によってもたらされたものである。智力でなしとげようという目的があれば、たとえ実際には出来なくても、人々は自分の力で独立進取の道に赴くことができる。

試みに、西洋の貧民に向かって聞けば、口では言わないとしても、心では次のように答えるだろう。私は貧乏だから金持ちに従順になる、貧乏な時期だけ彼に支配される、私の従順は貧乏がなくなれば消える、彼の支配は富貴と共になくなるはずだ、と。まさに精神の流暢とはこの辺の氣象をさして言うことである。これを我が日本人が開闢以来世の中で行われてきた偏重の法則に支配されて、人に接すればその富貴強弱にかかわらず、智愚賢不肖を問わずに、ただその地位だけをみて輕蔑し、あるいはこれを恐怖して、少しも活気をもたず、自分の困いの中に固着する者と比較すれば、天と地の相違があるのを見ることができ（權力偏重なれば治乱ともに文明は進むべからず）

經濟の二大原則

この権力の偏重が、全国の経済に与えた影響もおざりにして見過ごすことはできない。そもそも経済の議論はとも入り組んだもので、これを理解するのは簡単ではない。各国の事態は時と状況により異なるため、西洋各国の経済論を直ちに我が国へ移すことができないことは言うまでもないが、ここにどの国でも、いつの時代でも、広く通用できる二つの原則がある。

第一の原則は、財をためてまた使うことである。そうしてこのためることに使うことの関係は、最も近密で決して離れることができない。ためるのはすなわち使うための手段である。使うのはためるための手段である。例えば、春の時期に種をまくのは秋の穀物をためる手段で、衣食住のために財を使うのは身体を健康に保つてその力を養い、また衣食住に必要な財をためる手段であるようなものである。この積散の際に、使つてためることができないものがある。火災水難のような災害がこれである。あるいは人の欲望で贅沢を好み、いたずらに財を消費して跡形もなくなるものがある。これもまた水火の災難と異ならない。

経済の要は決して消費を禁じることではない。ただこれを費やして散じた後に得るものの多少を見て、その消費の得失を決めるだけである。所得が諸費用より多ければ利益と呼び、所得と諸費用が同じならば無益と名付け、所得が却つて諸費用よりも少ないか、或いはまた全く所得がなければこれを損又は全損と名付ける。経済活動の目的は、常にこの所得を損よりも多くし、次第に蓄積しまた消費して、全国を富有にすることにある。

故にこの蓄積消費のコツは、どちらを手段としどちらを目的とするということができず、いずれを前としいずれを後とすることもできない。前後緩急の区別がなく、難易軽重の差もない。まさしく同一のことで同一の心で処置すべきものである。たしかに、財を蓄積して消費の方法を知らない者は、最後に大きな財を蓄積することができない。消費するだけで蓄積できない者は、最後まで大きな消費ができないからである。富国の基礎は、ただこの蓄積と消費を盛んにするだけである。それが盛んな国を名付けてこれを富国と呼ぶ。これから考えれば、国富の蓄積消費は、全国の人心によつて処置せざるを得ない。すでに国富の名があるので、国心の名前があるのも理由がないことではない。国富は国心によつて扱わざるを得ない。政府の歳入歳出も国富の一部分なので、西洋諸国で政府の会計を人民と協議するのも、その趣意はここに基づくのである。

第二の原則。財を蓄積しこれを消費するには、その財にふさわしい智力と習慣が必要である。いわゆる理財の智、理財の習慣がこれである。例えば、金持ちの子が家を滅ぼし、博打が得意な者が長くその富を蓄えられないようなものである。いずれもその財と智力習慣が釣り合わないものである。智力なく習慣もない者へ過大な財を与えるのは、いたずらに財を失うだけでなく、子供の手によく切れる刃物を持たせるようなもので、却つてそれで身を害し人を傷つける災いをもたらすことになる。古今にその例は大変多い。

上の二原則が事実と認めるなら、これに照らして昔から我が国で行われた経済政策を評価することが出来る。古代のことはさておき、葛山伯有先生は田制沿革考で次のように述べている。

源平の乱の時には、徴税は国司の役所に頼らなくなった。人民は誰に税を納めるのかわからなくなった。一つの土地で、朝廷に納め、平族に納め、源氏に納めることになった。たまたま強盗のために糧食を取られて、無告の民は塗炭の苦しみにみまわれた。ついに源氏の世になって、国に守護をおき、荘園に地頭が置かれた。国司、壮司の支配者は依然として存在していたので、人民は二人の主人をいただいていたといえる。(中略)足利時代になると、きまった政令がなく、国郡、郷壮はすべて分割して武士に与え、租税はその武士の指揮に任せ、別に五〇分の一の税を課して自分に治めさせた。例えば祖米五〇石をだすき土地では別に一石を出させて京都へ搬送させて、將軍の費用に当てられた。或いは増額して二〇分の一になった年もあった。守護地頭は、自分で支出に応じた取り立てをしたため、二つの税となった。(中略)また、段銭(石高に応じて割り付けた税)、棟別(臨時費用のために家屋一棟ごとに賦課した税)、倉役(土蔵、質屋に課した税)は時を選ばないで徴収した。段銭とは田地に賦課して税を出させる、今の高掛り(村の石高に応じて課税すること)のようなものである。棟別とは軒別に割り付けてお金を出させたもので、今の鍵役(人家の自在鍵の数で課税したもので、所帯別に賦課した税)などと同じである。倉役とは、富民富商人だけに割りふったもので、今の分限割り(財力があるものへ賦課した税と同じである。倉役は、義満公の時代には四季に割り当てられて、義教公の時代には一年十二度に及び、義政公の時には十一月九度、十二月八度に及んだため、百姓は田や家を捨てて逃亡し、旅商(行商)は戸を閉めて財の交換をやめたことが応仁記にでている、云々。また、豊臣家が統一後、文禄三年になると、定則があるところは、天下の租税の三分の二は地頭が取り、三分の一は百姓の取り分とされた、云々。また、徳川時代の初め、前の世がきびしい税の取り立てだったとして、領主の取り分から租税三分の一を緩めて、四公六民として急激な人民の苦しみを解いた、云々。

上記の沿革考の説によれば、古来わが国の租税がはなはだ苛刻だったことは疑いがない。徳川の初めになって少し緩めたが、年月を経るに従いいつとなくもとの苛税に戻ったのである。

また、昔から世の識者と称する人の説に、農民は国の本だが、商工業の二民は税をわずかに出すか出さずであるのに、働かないで満腹に食べて、道理からみてあつてはならないこととしてしきりに工商を咎めたが、事実を詳細に調べると、商工業は決して税から逃れた逸民(自適の生活を樂しむ遊民)ではなかった。まれに大商人又は豪商の中には働かないで暮らす者もいたが、彼らはただ自分の資本によって生計を立てるものだから、豪農がたくさんの田地を持って働かないで食べているのと

異ならない。それ以下の貧しい商人になると、たとえ直接的に税を払わなくても、利益を上げることの難しさは農民と異ならない。日本には古来商工業から税金を取らなかった。税がないためにこれを業とする者も自然と増加してきた。しかし、その増加もいずれ限界が生じる。その限界は農の利と商工業の利とが互いに平均しあつて止むことになる。

例えば四公六民の税地を耕すことは、その利益はもとも豊かではないが、平年ならば妻子を養つて飢えを逃れることができた。商工業が都市に居住して無税で業を営むのは、農民に比べれば有利に見えるが、それでも飢えや寒さを逃れられない者も多かった。そうなる理由は何か。仲間の競争のためである。全国の商工業の仕事には限度があつて、少しの人で出来るようになっていくところへ、仕事を増やさずに人員のみを増やすと、一〇人で行うべき商業を二〇、三〇人に配分し、百人で取るべき日雇賃を二、三百人に配分し、三割の口銭こうせん（手数料）が得られる商売も口銭を一割に減らして二貫文を取るべき賃料も五百文に下がり、自然と仲間の競争で利潤が薄くなり、かえつて他の人の利益になつて、農民もまたこの利益を受けることが出来た。

故に、商工業は無税といえども、実際は有税の農業と異ならない。あるいは商工業に利益が多いことがあると、その多い理由を政府が識者の言葉を用いて、様々な参入障害を設けて、農民が商工業へ変わるのを妨害した。その人数の割合が少なかったためにわずかに専売の利を得たのである。この事情から考えれば、農と商工業はまさしく利害を共通にし、ともに国内で有用な事業を行っているので、名目上は有税と無税の区別はあるが、いずれも逸民（悠々自適な生活を送る人）ではない。双方ともに国財を蓄積する種類の人民というべきである。

経済に現われた権力の偏重、蓄財と消費が分離

故に人間社会では治者と被治者に区別されたものを、今経済の上では生産者と非生産者の二種に分けることができる。農工商以下被治者の種族は国富を生む者で、士族以上の治者の種族はこれを生まないものである。或いは先の用語を使って、一を蓄積の種族と言ひ一を消費の種族ということもできる。この二種族の関係をみると、その骨折や安楽の損得の有様はもともと公平ではないが、人口が財に対する割合で増えすぎると、互いに争つて職業を求めるようになり、富者は利益を逃し、貧者は働らかざるを得なくなる。これもまた独りわが国だけのことでなく、世界中で普通の弊害で何ともできないものだから、強く非難するほどのことではない。

かつまた、士族以上の治者を非生産者又は消費の種族と名付けるといっても、政府で統治を行い、世の中のものごとに秩序を整えるのは、経済を助ける大本であるので、政府の歳出を一概に無益な費用とはいえない。ただ我が国の経済で特に不都合なことで、特に他の文明国と異なるのは、この同一のことである国富の蓄積と消費を処理するのに、同一の精神で行わなず別々に考えることにある。

古来我が国の法律では人民は常に財を蓄積し、例えば四公六民の税法とすると、その六分でかろうじて父母や妻子を養い、残りの四分は政府に納め、ひとたび自分の手を離れるとその行く先を知らず、何の用に供するかも知らず、余ることを知らず足りないかも知らない。要するに、これは蓄積することを知って消費の仕方を知らないものである。政府もまた自分の手に税を受け取ると、それが来たところを忘れ、どんな方法によって生じたものかも知らない。あたかも天から与えられたもののように思い、これを気ままに消費・散在する。要するに消費することは知っているが、蓄積の方法を知らないものである。

経済の第一原則の蓄積と消費はまさしく同一のことで、同一の精神で処置すべきものと言った。それなのに、今この有様を見ると、同一のことを行うのに二様の精神で行い、例えると、一字の文字を書くのに偏と作りを分けて二人の手を用いるようなものである。どんなに達筆でも字を書くことができないことは明らかである。このように社会の上下の心を二様に分けて、各々考える利益が別で、互いに知らないだけでなく、互いにその動きを見て怪しみあうようになる。経済に不都合が生じないわけがない。費やすべきものに費やさず、費やすべきでないものに費やして、とてもそのバランスが上手くいくわけがない。

足利義政が応仁の乱の最中に銀閣寺を建て、花の御所の屋根を金銀で飾り、六〇万緡^{びん}、高倉御所の腰障子の一間に二万錢を使うほどの贅沢で、諸国の人民へ段錢、棟分の税を厳しく催促し、政府に一錢の余財もなかったのは、上下ともに貧しい時代だった。太閤が内乱の後に大阪城を築き、次いで朝鮮征伐を行って、国外で軍事で無駄使いし、国内で酒宴の贅沢を尽くして、なお財の蓄えがあったのは、下が貧しくて上が富栄えた時代と言える。また、歴代で賢明といわれる北条泰時以下、時頼、貞時らの諸君は、自ら努めたことはきつと質素儉約であったのだろう。

時代が下って、徳川の時代になると、はじめは明君賢相（優れた君主や大臣）が続々と出て、政府の体裁は一も非難すべき欠点がなかった。これは義政の時代などと全く違って比べ物にならないが、民間で富をなして事を企てる者がいた事を聞いたことがない。北条及び徳川の遺物として今日に伝わるものの中で最も著しいのは、鎌倉五山、江戸、名古屋の城、日光山、東叡山（寛永寺）、増上寺などで、いずれも盛大なものだが、不審なことはその時代の日本で、このように盛大な事業を起こすことが出来たことの一事である。果たして全国の経済の割合にふさわしかったか、私には決してそうは思えない。

今、国内にある城郭は勿論、神社仏閣の古跡であつても、あるいは大仏大鐘、大伽藍などで壮大なものがあるのは、たいがい神道仏教が盛んだつた徴しるしではなくて、独裁君主が盛んだつたことを証明しているだけである。まれには、水道、堀割（運河）などの大公共事業を起こしたこともあるが、決して人民の民意から出たものでない。ただその時の優れた君主や役人の好意で、いわゆる人民の悩みや苦しみを聞いてその便利を推し量つて行つたものに過ぎない。もともと古代は無知の世だつたから、政府が独りで事を行うのが必然の成り行きで、これを怪しむ者は誰もいないだろう。今からその挙動の是非を行う理由は全くないが、国富の蓄積と消費が別々に行われて、経済上にこのうえない不都合を生じ、明君賢相の世でも暴君汚吏の時でも、ともにこの弊害を免れられなかったのは明らかに証明できることから、後世で眼力を備えた人であれば、再びその失敗の前例を踏むべきでない。

明君賢相は必ず有用なことに財を費やすとはいへ、その有用とは君主の意向できまるものだから、人の好き嫌いで、武力を有用と言う者もいるし、学問、芸術を有用と言う人もいるし、或いは真に有用なことを有用と言うこともあろうし、または無用なことを有用とすることもあろう。足利義政の時代に、政府の命令ですべての借金の約束を廃棄してこれを徳政と名付けたことがある。徳川時代にもこれに似た例がないわけはなかった。これらも政府の側が徳といえ徳になるようなものである。いずれの場合も、蓄積者は消費者がすることに何の意見も言えない風だつたから、消費する者は歳出を量つて歳入決めるのでなく、歳出歳入ともに限りなく、ただ庶民の暮らしをみて以前と同じ様子ならばそれを最上の仁政として他を心配することもしない。年々歳々同じことを繰り返して、ここに蓄積したものをあちらで消費し、一字の文字を二人で書いて、数百年後の今日になつて、振り返つて今と昔を比較し、全国経済の発展を見て、その進歩が遅いことに実に驚くばかりである。

その一例をあげて言う。徳川の治世二五〇年、国内で軍隊を用いたことがなかったことは、世界中でも比類がない太平の世だつたといえる。世界に比類ない太平の世にいと、日本の人民は愚かと言つても、工芸の道も開けなかったと言つても、蓄積は少しづつだつたとしても、二五〇年の間には、経済上、長足の進歩をするはずだつたのに、実際にはそうならなかったのはどういうことか。これを一人將軍及び諸藩主の不徳だけの原因にすることはできない。もしこれを君主や役人の不徳不才によつて生じた災いとする、その不徳不才はその人の罪ではなく、その地位にいたらやむを得ず不徳不才にならざるを得ない勢いになつて、その勢いに迫られたものである。故に経済の一方から論じれば、名君賢相（すぐれた君主や大臣）も思ひのほか当てにならず、天下太平も思ひのほか効能が薄いものであつた。

ある人の説に、戦争は実に恐るべきで憎むべき災いだが、その国の経済に対する影響は、これを人身に例えると刀傷のようなものである。一時は人を驚かすが、生

命など大事な部分に関わらなければその傷の癒着は案外早いものである。ただ経済について特別に恐れなければならないことは、刀傷でなく、あの結核のように日に日に衰弱する病である。この説によつて考えると、わが日本の経済も、もともと権力の偏重で蓄積者と消費者の二つに分かれ、双方が連携をとらず、日に日に衰弱しなければ年でも同一の有様に止まり、あるいは数百年の間に少しは進んでも、到底盛大活発な域には達することができず、徳川氏二五〇年の治世に著しい進歩を見なかったのは、いわゆる経済の結核に違いない。(昔から日本の学者に、政府の勘定奉行と郡奉行とは、役割を分けざるを得ないと言われている。たしかにその趣意は、勘定奉行に収税権を任せると自然と過重に陥るために、民に近い郡奉行によつてこれを平均するつもりだったという。もともと一つの政府の同じ穴の中にいる役人の役割を分けても事実上違ひはないが、その意義を推量すると、消費するものの一手に財政権を与えることの害は古人も暗に知らなかったわけではない)

理財の要は財の蓄積と消費のバランス

経済の第二則に、財を蓄積し又はこれを消費するには、その財にふさわしい智力とそれに対処する習慣が必要であるという。そもそも理財の要点は、活発敢為の働きと節儉勉強(仕事)の力によるので、この二者が程よくあつて、互いに制約し合い、平均しあつて、初めて蓄積消費が盛んになるはずである。もしそうではなくて、片方に偏し、敢為の働き(活発な活動)がなくて節約を専らにすると、その弊害は貪欲吝嗇(欲深いけち)に陥り、節約の本旨を忘れて敢為の働きを活発にするとその弊害は浪費、乱用となり、いずれも理財の根本に反する。それなのに前段に述べたように、全国の人を蓄積者と消費者の二種族に分けて、その境界がはっきりしていると、その種族全体の品行は必ず一方に偏し、甲の種族には節儉勉強の元素があるが、敢為の働きを失つてけちの弊害に陥らざるを得ず、乙の種族には活発敢為の元素はあるが、節儉の本旨を失つて浪費の弊害に陥らざるを得ない。

日本の国民は、教育は広く行き渡つていとはいえないが、生まれながらの愚でないので、理財(経済活動)の一事について特に下手という理由はない。ただ社会の勢いで、分けるべきでない仕事を分けて各種族がその習慣を作つて、遂にその品行を別々にしてつたなさが表れたものである。その品行の素質は決して悪くなく、適宜に調和すれば、敢為活発、節儉勉強と名付けるものを生じて、理財に他に二つとない大きな役割を果たすはずだが、用をなさないでかえつて浪費乱用、貪欲吝嗇に変わったのは、きつと、素質の悪性によるのではなく、調和が上手くいかなかったものである。これを例えると、酸素と窒素を調和すれば空気と名付けるものが出てきて、動植物の生成に欠かせない効能をもたらすはずだが、この二元素を各々別にとすると、効能を生まないだけでなく、かえつてものの命を損なうようなものである。

古来、我が国の理財の有様を見ると、お金を使って事を行うものは常に士族以上の治者ある。政府で土木工事を起こし、文武を企画するのは勿論のこと、すべて世の中で書を読み、武を講じたり、あるいは技芸を磨いたり、あるいは風流を楽しむなど、その事柄が有用でも無用でも、一身の衣食以外にゆとりを作って人生のやや高尚な部分に関心を持つ者は、必ず士族以上に限られ、その品行も自然と鋭敏活発になって、敢えて何かを行う気力も乏しくない。実に我が文明の根本と言うべきものであるが、残念ながら、理財の一事に至ると数千百年の勢いに従い、使うことを知って入ることを知らず、消費することを知って蓄財を知らず、あるものを消費することを知らないものを作ることを知らない人々だから、その際に自然と浪費乱用の弊害から免れることができない。それだけでなく、因習が長くついに一種の風俗を作って、理財を語るとは士君子のことに非ずとして、知らないことを恥としないだけでなく、かえってこれを知ることとを恥とし、士君子の最も上流のものと理財の最もへたなものとは、二つが同義になるに至った。まわりくどいこともここに極まったといえる。

また一方で農商以下被治者の種族をみると、上流の種族に対して明らかに身の程を知り、あたかも別に下界を開いたようで、人情風俗を別にし、他から支配を蒙り、他から侮蔑を受け、話すにも呼称を異にし、座る席も別にし、衣服にも制限があり、法律にも違いがあり、はなはだしいのは命の権利も他人に任せることもある。徳川の法に、「足輕」とき者でも、身分の軽い百姓町人が分限（身の程）をわきまえず法外な雑言など不注意な振る舞いをして、やむを得ず切り殺した者は、よく調べたうえで、明らかにそうであるときは、罪を問わないこと」とある。この法によれば、百姓町人は常に幾千万人の敵に接しているようなもので、それが無事なのは幸いにして難を免れただけである。生命も安心できなければ、どうして他を顧みる余裕があろうか。廉恥功名の心は尽き果てて文学技芸などを志さずゆとりもなく、ただお上の命令に従って、政府の費用を提供するだけで、心身ともに束縛されているものといえる。

そうは言っても、人の天性で、心の働きはどんな方法を使っても全くこれを押しつぶして閉じ込めることはできない。どこかに隙間を探して少しでも漏れる道があるものだ。今この百姓町人等の身分も進退はもとと不自由とはいえ、私財を蓄積して家業を営む一事については、その心の働きを伸ばすことができる道を開くものでこれを妨害する者も少ない。このため少しでも気力ある者は蓄財に心を尽くし、苦勞を厭わず節儉勉強（努力）し、しばしば巨万の富を作る者がいないわけではなかった。しかし、もともとこの人は、ただ富を望んで富を作った者で、他に志すものがあつたわけではない。富を求めるのは他の目的の手段でなく、まさにこれが生涯のかけがえない目的のようだった。

故に、人間世界で富以外に尊ぶものがなく、富をなげうって欲しいものはない。学術などの人心の高尚なものは顧みないだけでなく、かえって贅沢の一つとして禁止し、上流の人の挙動を見て密かにその役に立たないことを失笑するようになる。時勢から見れば理由がないわけではないが、その品行が卑劣で敢為の気性がない

ことは真に卑しむべきことである。試みに、日本国中で富豪と呼ばれる家の由来とその興廢の様子を調べると、明らかに実証できる。古来、大商人や豪農の家を起こした者は決して学者士君子ではない。百に九十九は無学無術の野人で、恥じるべきを恥じず、忍ぶべからざるを忍んで、ただケチの一身で蓄積した者ばかりである。また家を滅ぼす者を見ると、氣力が乏しく蓄積を怠るかあるいは酒におぼれて肉欲をほしいままにして金を失ったに過ぎない。一方の士族が呑気に財産を管理せず、好きなことをしてその志を曲げず、あえてその志すことを行って、貧しさを心配しない者に比べると全く違って比べものにならない。もともと肉欲で破産するものも、のんきに家を破産するのも、破産することは同じである。しかし、心が向かうところをみれば、上流の人にはなお智徳の働きに余地が残り、下流の人はただ錢を好んで肉体の欲に奉仕することの要素しかないようなものである。その品行の違いはまた大きいといえる。

このような次第で、被治者の節儉勉強は形を変えて貪欲吝嗇になり、治者の活発敢為は性質を変えて浪費乱用になり、ともに經濟の用にあわず今日の有様に至ったものである。そもそもわが日本を貧しいといつても、天然の産物が乏しいわけではなく、ましてや農耕の一事になれば、世界万国に対して誇るべきものも多いではないだろうか。決してこれを天然の貧国と言うことはできない。あるいは税法が苛酷なのだろうか、税法が苛酷だと言っても、その税は集めて海へ投げ込むわけではないので、国内にとどまつて國富の一部分にならざるを得ない。そうであるのに、今日のように全国が貧困というのはどういうことか。きっと財が乏しいのではなく、財を利用する智力が乏しいのである。智力が乏しいのではなく、智力を二つに断ち切つて上下が各々その一部分をもっているためである。これを要約すれば、日本國の財は、開闢の始めから今日に至るまで、未だにこれにふさわしい智力に出会っていないといえる。

実際にこの智力を二つに断ち切つたものを調和させて一とし、實際の用に適するようにするのは、經濟の急務だが、数千百年の習慣になつていたので、一朝一夕の運動で変革できるものではない。近年になつて、少しその改革の一端が見えるようだが、上下の種族は互いにその長所を取らず、かえつて短所を学ぶ者が多い。これまたどうしようもない勢いできつとその人の罪でない。滔々たる天下の大勢は、古代から流れて今の世に及び、億兆の人を押し倒して、それが向かう方向へ傾くものなので、今急にこれに抵抗することができないことも、またもつともなことを言える。

第十章 自国の独立を論ず

文明論の課題

前の第八、九章において、西洋諸国と日本の文明の由来を論じ、その全体の有様を調べて比較すると、日本の文明は西洋の文明よりも遅れているといわざるを得ない。文明に前後があれば、前にあるものは後のものを支配し、後のものは前のものに支配される道理になる。昔、鎖国の時には、わが人民はもとと西洋諸国なるものも知らなかったが、今ではすでにその国があることを知り、またその文明の有様も知り、その有様を自分に比較して前後の別があることを知り、わが国の文明がそれに及ばないことを知り、文明の遅れた者は先立つものに支配される道理も知ると、その人民がまず考えることは、自国の独立はどうなるのかの一事にならざるをえない。

そもそも文明というものは極めて広大で、およそ人類の精神が到達するところはすべて文明の領域でないものはない。外国に対して自国の独立を図るようなことは、もともと文明論の中では小さな一箇条に過ぎない。しかし、本書第二章で述べたとおり、文明の進歩には段々の発達があるので、その進歩の度合に従ってふさわしい処置がなければならない。今、我が人民の心に、自国の独立はどうなるかを感じて心配するのは、結局わが国の文明の発達度は、今正に自国の独立について心配する段階で、その精神が集中するところはあたかもこの一点に限られており、未だ他を省みる余裕がない証拠である。ゆえに、私がこの文明論の末章で自国独立の一箇条を掲げるのも、結局人民一般の方向に従って、その精神が正に目指すところについて議論を立てるものである。文明の奥深いところまで残らず詳しく極めることは、他日後進の学者に任せるだけである。

維新直後の精神的空白状態

昔封建時代に、人間の交際に君臣主従の間柄というものがあつて世の中を支配し、幕府並びに諸藩の士族が各々そのときの主人に力を尽くしたのはもちろんだが、遠い先祖の由来を忘れずに、ひたすらに御家の御ためを思い、その俸禄を受ける者はそのことで死ぬとして、自分の一命も全て主家に属したものととして、あえて自分から命を解放しなかった。主人もまた国の父母と称して、臣下を子のように愛し、恩義の二字で上下の間を円く固く治めて、その間柄が美しいことはうらやむべきものがなかったわけではない。或いは真に忠臣義士ではないが、一般に義を貴ぶ風俗だったので、その風俗に従って自ら身の品行を高尚に保つこともあった。例

えば、武士の間で、その師弟に注意する時には、必ず身分又は家柄などの言葉を使って、侍の身分として卑劣なことは出来ないといい、或いは先祖伝来の家柄に対してといい、或いはご主人様に申し訳ないといい、身分、家柄、ご主人様は、まさしく武士が拠るべき大道で、生涯の品行を維持する綱のようであった。西洋の言葉にいうモラル・タイ（精神的軛帶）というものである。

この風俗はただ士族と君主の間で行われるだけでなく、広く日本全国の民間に染込んで、町人の仲間でも行われ、百姓の仲間でも行われ、エタの仲間でも、非人の仲間においても、すべて人間の交際があれば、大から小にいたるまで行き渡らないところがなかった。例えば、町人百姓に本家分家の義があり、えた非人にも親子分の別があつて、その義理が固いことはあの君臣のようだった。この風俗を名付けて君臣の義といい或いは先祖の由緒といい、或いは上下の名分或いは本末の差別といい、その名称はどれであつても、とにかく、日本開關以来今日に至るまで社会を支配して、今日までの文明に達したものはすべてこの風俗習慣の力だった。

近年外国人と交際を結ぶに至り、わが国の文明とかの国の文明を比較すると、その外見に表れた技術工芸が西洋に遅れているのは言うに及ばず、人心の内部に至るまでもそのあり方を異にしている。西洋諸国の人民は、智力が活発で、自らでその身を管理し、社会は整い揃い、事物は秩序を備えて、大は一国の経済から小は一家一身の処し方に至るまで、とても今の有様ではわが日本人の企てが及ぶところではない。要するに、西洋諸国は文明国で、我が日本は未だ文明に至っていないことが今日になってはじめて明らかに、これを認めない人はいないだろう。

ここで世の知識人は我が日本の非文明の原因を探し、まず一番に古来の習慣がよくなかったと考えた。この古習を一掃するために、専らその改革に手をつけ、廃藩置県を初めすべて旧物を廃し、大名も華族になり侍も貴族になり、臣下が上に対して進言する道を開いて、人物を登用する時代になったので、昔5千石の家老も兵卒になり、一人扶持（俸禄）の足輕も県令（県知事）になり、数代にわたって両替商だった豪商は一代限りになり、一文無しのばくち打ちが御用達になり、寺が神社になり、僧侶が神官になった（廃仏毀釈）。富と名誉も幸福も人々の働き次第となり、いわゆる功名も思いのままになって、自ら努力して物を得る時代になった。開關以来我が人民の心の底に染込んだ恩義、由緒、名分、差別などの考えは次第に消えて、働きの一方に重心が移り、無理にこれを名付ければ、人心が活発になり、今の世間で言う文明駁々（早く進むこと）として進む有様となった。

さて、この功名自在、文明駁々と進む有様で、知識人は注文どおりの目的を達成し、この文明が駁々と進むのを真の駁々とみなし、他に求めるものはないかと聞くと、決してそうではない。知識人で今の文明に満足している者はいない。どうしてかというと、今の事物の有様でわが人民の品行に対する影響を見ると、人民はあ

たかも先祖伝来の重荷を下ろして、未だに代わりの荷物を担がないで休息している者のようだからである。その次第は非常にはつきりしている。廃藩の後は、大名と藩士の間には君臣の義がない。無理にこの義理を果たそうとしても役に立たないと言われたら言訳が立たない。

足輕が隊長になって、以前の上司を指揮しても、その号令にはそむくことが出来ない。上下が立場を変えた。法律も厳しいが、元上司もお金さえ出せば兵役は逃れることができる。ゆえに、元足輕も得意になって隊長になることができ、元支配頭もまた得意になって悠々としている。博徒が御用達になって威張れば、財産を失った町人は時勢のせいにしてその身を責めず、氣楽に世を渡ることが出来る。神官が時を得たとして得意になると、僧侶も公然と妻帯してまた得意になる。

要するに、今の時代は上下貴賤を問わず皆得意になって、貧乏の一事を除けばことさらに心身を困らせるものがない。討死も損、敵討ちも損、戦争に出れば危険、腹を切れば痛い。学問も仕官もただお金のためだけである。お金さえあれば何事も努力しなくてもよい。お金は天下に敵なしということ、人の品行はお金で相場が立っているようなものである。この有様を昔の窮屈な時代と比べると、どうしてこれを氣楽といえないことがあるか。だから、今の人民は重荷を下ろして正に休息している者というのである。

精神的空白を埋めるための六説

① 尊王国体論

しかしながら、休息とは何ものなすべき仕事がない時の話である。仕事が終わるか又はなすべき仕事がなくて休息するのは尤もだが、今、わが国の有様を見ると、決して無事な日ではない。しかも、昔に比べてずっと困難な時代である。世の知識人もこの状態を理解していないわけではなく、きつと休息すべきでない情勢を知って、努めて人心を役に立つ方へ導こうとし、学者は学校を作って人に教え、訳者は原書を訳して世間に発表し、政府も人民も専ら学問技術に力を尽くしてこれを試みているが、人民の品行をみても目覚しい成果を見ていない。学問に身を委ねる人の様子を見ると、まじめに勉強していないわけではないが、本心の一片に財産も命もなげうつ場所と決める大切な覚悟の事になると、或いは忘れたかのようで、とかく心に関するものがなくて、安樂世界はお氣楽といわざるをえない。

ある人々はここに注目して、今の人の振る舞いをさして輕薄とし、その罪を昔の精神を忘れたせいとし、さらに大義名分を誇張して昔に戻ろうとしてその学問を修めて、神代の昔に証拠を求めて国体論なるものを唱えて、これによって人心を維持することを企てた。いわゆる皇学というものがこれである。この考えもまた理由

がないものではない。君主制の国で君主を奉つて、政權をこの君主に与えるのは本来当然のことで、政治上も最も大切なことだから、尊王説は決して非難すべきではないが、かの皇学者流はさらに一步を進めて、君主を尊奉するのにその理由を政治上の得失に求めないで、人民の懷古の情に負わせる。その誤りが甚だしいものになると、君主を虚位（見せかけの位）に祭り上げることも厭わず、実を忘れて虚を喜ぶ弊害がみえる。

そもそも人情というのは一時の挙動で容易に変えることができないので、今の人の人情に頼んで、君主奉尊の教えを達成しようとするには、まずその人情を変えて、古いことを忘れて新に従わせざるをえない。それなのに、我が国の人民は数百年の間、天皇がいることを知らず、ただ歴史として伝え聞いただけだった。維新の一举によって、政治の体裁は数百年の昔に戻ったというが、王室と人民の間に親密な交情があったわけではない、そのかわりは政治上の関係だけで、交情の深さを論じる時は、今の人民は鎌倉以来封建の君主に養われてきたので、皇室に対するよりも封建君主に対して親密にならざるを得ない。天下にただ一人の君主という大義名分としてその説はたてるが、この実際を見るとその考えは完全に行われていないことを知るべきである。今の勢いでは、人民も古いことを忘れて、封建の君主を思う情は次第に霧散するようだが、新たに皇室を慕う情を作つて、これによつて真に赤子のようにさせようとするのは、今の人心と文明の有様のもとでも難しいことで、ほぼ上手いかない結果になるに違いない。

またある人の説に、王制一新は人民の懷古の情に基づいたもので、人情が幕府を嫌つて皇室を慕つたためと言う者もいるが、結局、事実を調べていない説に過ぎない。もしこの説のように、人情が本心に旧を慕うものならば、数百年來民心にしみ込んだ幕府こそ慕うはずである。およそ今の世の士族やその他の者で、先祖の由緒などを唱えるのは、多くは鎌倉以降の世の有様に関係するものである。幕府政治の由來もまた古く広いものと言える。或いはまた、人情は旧を忘れて新を慕うものとすれば、王政が行われたのは幕府政治以前のことで、最も古いものだから、王政と幕政のどちらを忘れたかといえ、必ず最も古いものを忘れるのが道理である。

或いはまた、人心が皇室へ向かうのは時間の新旧によるのではなく、大義名分がそうさせるものという説があるが、大義名分とは眞実無妄（眞実でうそがないもの）の道理である。眞実無妄の道理は、人から一時も離れるものではない。それなのに、鎌倉以來人民が皇室を知らないことがほぼ七百年続いた。この七百年の年月はどんな時間であつたか。この説に従えば、七百年の間人民はみな方向を誤り、大義名分もこの世から一掃された野蛮暗黒の世だったと言わざるを得ない。もともと人間がすることの良し悪しは一年または数年の成り行きで決定すべきことではないが、仮にも心を持つ人が自ら方向を誤つたと知りながら、どうして七百年の長い間耐えることができたか。それだけでなく、実際にも証明できるものもある。実にこの七百年の間は決して暴乱だけの時代ではなかった。今の文明の源を尋ねれば、

十に七、八はこの年間に成長して今に伝わる賜物というべきである。

以上のことから考えれば、王制一新の原因は、人民が幕府を嫌って皇室を慕ったためでなく、新を忘れて旧を思ったためでもなく、百千年の間、忘れていた大義名分を急に思いだしたためでもなく、ただ当時の幕府の政治を改めようとする人心によって起きたものである。一新の業はすでに達成されて、天下の政權は皇室に帰したので、日本国民としてこれを尊奉するのは本来当面の役目だが、人民と皇室の間にあるのはただ政治上の関係だけである。その交情になると、決して急に作ることができるものでない。無理にこれを作ろうとしてもその目的を達成できずに、かえって世に偽君子の類を生み、ますます人情を輕薄に導くこともあろう。故に言う、皇学者流の国体論は、今の人心を維持してその品行を高尚な域に導く手段としては不足である、と。

② キリスト教立国論

また一種の学者には、今の人心が輕薄なことを心配し、これを救うのに国体論ではうまくいかないことを知り、そこで人の靈魂を頼みにキリスト教を布教して人心の非を改めて安心立命の境地を与えて、人民の方向を一にし、人々が真に頼ることが出来る大目的を定めようとする説がある。この説も決して輕率な気持ちから出たものではない。その説の本を調べると、学者が考えるには、今の人民を見ると、みんなバラバラな方向へ向かい、政治上のことについても庶民に一定の説がないのは勿論、宗教においても神か仏かも定まらず、はなはだしいものは無宗教と名付けられる者もある。人に最も大切な靈魂があるところも分らずに、どうして他人の人事を顧みる余裕があるのか。天道を知らず、人倫を知らず、父子夫婦の在り方も知らない。これはあたかもこの世の地獄だから、仮にも世を憂うる人は、この有様から救わずにはいられない。また、一方から考えれば、宗教で一旦人心を維持することができれば、人民が留まる所も初めて定まり、これを広めて政治上に施せば、一国独立のもとにもなることができるという趣意である。

これは決して輕率な妄説と言うべきでない。実際にキリスト教によって今の人民を教化し、心の非を改めて徳の門へ入らせて、たとえ天道の頂点に到達できないにしても、父子夫婦が守るべき道を明確にして孝行貞節の心を奮い立たせ、子弟教育の義務を知らせ、妾を囲うなどの淫らな行いが悪事であることをわきまえさせるなどのことは、世の文明にとつてもその効能が最も大きい。非難すべき点は何もないが、今の我が国の有様について得失を論じると、私はこの説に全く同意できない。どうしてかと言うと、かの学者の憶測に、キリスト教を広めてこれを政治上に及ぼし、一国独立のもとを立てようとする説について少し意見が違うからである。

本来キリスト教は永遠無窮を目的とし、幸福安全を永遠に期待して、災難や苦しみを永遠になくし、現在の罪より未来の罪を恐れて、この世の裁判よりもあの世の裁判を重んじる。結局、今のこの世と未来のあの世を区別して論を立てて、言うことはいつとも広大で、他の学問とは全く趣を異にするものである。一視同仁、四海兄弟としてこの地球はあたかも一家のようで、地球上の人民は等しく兄弟のようにして、互いに交わる情に優先順位をつけない。世界が一家のようならばどうして家族内で境界を作る必要があるのか。それなのに、今この地球を何個かに分けて、国境を作り、人民がそれぞれ境界内で仲間を組んで一国人民と称し、その仲間の便宜を図るために政府を作り、甚だしいのは凶器を携えて境界外の兄弟を殺し、その土地を奪い、商売の利益を争うなどは、決してこれは宗教の旨と言えない。これらの悪業を見れば、永遠や来世の裁判はさておいても、現在のこの世の裁判も機能していないと言うことができる。キリスト教から見れば罪人である。

そうであっても、今世界の有様を見ると、国がないところはなく、政府がない国もない。政府はしっかり人民を保護し、人民はしっかり商売に努め、政府がしっかりと戦い、人民がしっかりと利益を得れば、これを富国強兵と呼んで、その国民が誇りにするのは勿論、他国の人もこれを羨み、その富国強兵に倣おうとして努力するのはどうしてか。宗教の教えには背くが、世界の勢いでとまることがない。故に今日の文明における世界各国の関係を問うと、人民は私的な交際においては遠く離れた人を友にし、一見すると昔馴染みのような者もあるかもしれないが、国と国の交際になるとただ二箇条があるだけである。平時は物を売買して互いに利益を争い、事あれば武器をもって互いに殺し合うことである。言葉を変えて言えば、今の世の中は商売と戦争の世の中と名付けることもできる。

もともと戦争にも種類が多く、戦争を止めるための戦争もある。貿易ももとは世の中にあるものとなないものを互いに融通しあうことで、最も公正で私意のない仕事だから、戦争も商売も両方ともその素質は一概に悪事とばかりは言えないが、今の世界で行われている戦争と貿易の実情を調べると、宗教の愛敵（汝の敵を愛せよ）の極意から出てきたものとは全く思えない。

このように、宗教の一方から光を照らして事を決めて、ただ貿易と戦争と言えば大変粗野で卑しむべきことに似ているが、今の事物の有様からこれをみれば、大いにそうではない。どうしてかと言うと、貿易は利益を争うことで、腕力だけでうまくできるものでもない。必ず智恵を必要とする仕事だから、今の人民に向かってはこれを認めざるを得ない。かつ、外国に対して貿易するには国内でも努力せざるを得ない。だから、貿易が盛んになることは国内の人民の知見を開き、学問や技術も盛んに行われてその余光を外に放つものだから、国の繁栄の兆候と言うことが出来るからである。

戦争もまた同様である。これを殺人の技術と言えば憎むべきことだが、今すぐ大義名分のない戦争を起こそうとする者がいれば、たとえ今の不十分な文明でも、条

約の明文があり、交渉の駆け引きがあり、万国公法もあり、学者の議論もあつて、容易には暴挙を許さない。また、ただ利益のためでなく、国の誇りのため、道理のためにと言つて起こす戦争もないわけでもない。故に、殺人争利（人を殺して利益を争うこと）の名称は宗教の趣旨にとつては汚らわしく、教敵の名は逃れ難いが、今の文明の有様ではやむを得ない勢いで、戦争は独立国の権義を伸ばす術として、貿易は国の光を放つ兆候と言わざるを得ない。

自国の権利を伸ばし民を富ませ、自国の智徳を修め、自国の名誉を輝かそうとして努力する者を報国（愛国）の民と呼び、その心を名付けて報国心（愛国心）と言う。その要点は、他国に対して自他の区別を作り、たとえ他を害する意図がなくても、自らを厚くし他を薄くして、自国は自国で自ら独立しようとするものである。故に報国心は、個人的な利己主義でなく、一国にとつての利己主義である。すなわち、この地球をいくつかに分割して、その区内で集団を組み、その集団の便利を図つて自ら私物化する偏頗（へんぱ）（不公平、偏ること）の心である。故に報国心と偏頗心は、名前は違ふが、実は同じものと言わざるを得ない。この一段に至つて、一視同仁、四海兄弟の大義と報国尽忠、建国独立の大義とは、互いに矛盾して両立できないことがわかる。故に宗教を広めて、政治に影響してそれにより一国独立の基礎を立てようとする説は、ものの考え方の筋道を誤るものと言える。

宗教は個人の徳に係るだけで、建国独立の精神とはその目的が違うものだから、たとえその教えによつて人民の心を維持できたとしても、その人民とともに国を守るといふ一事に至ると、果たして大きな効能を果たすことが出来ない。要するに、今の世界各国の有様と宗教の趣意を比較すると、宗教は広大に過ぎ、善美に過ぎ、高遠に過ぎ、公平に過ぎ、各国の対立の有様は狭隘に過ぎ、卑劣に過ぎ、浅見に過ぎ、偏頗に過ぎて、二つが隔てなくつながることはできない。

③ 学者の儒学

また一部の漢学者は、所見をやや広く持つて、皇学者流のようにただ懷古の情に訴えるのみではないが、結局、その眼目は礼楽征伐（社会秩序のために規範を大切にし、服従しないものを攻め討つこと）によつて人民を支配する流儀で、情実と法律をあわせて民心を維持しようとするものだから、とても今の世の有様に当てはめることはできない。もしその説が行われると、人民はただ政府があることを知つても人民がいることを知らず、官があることを知つて民間があることを知らず、かえつてますます卑屈に陥つて、ついには一般の品行を高尚にすることまではできない。このことについては本書第七章及び九章に述べたので、ここで改めて述べない。

外国交際が重要な課題

以上述べたとおり、目下、我が国の状況は困難であるが、人民はあまりこの困難を自覚していない。あたかも旧来の束縛から抜け出てかえって安楽な有様なので、志をもつ士君子は深く心配して、ある皇学者は国体論を唱え、ある洋学者はキリスト教を入れようとし、またある漢学者は堯舜の道を主張し、何としても民心を維持してその目的の一つにして、わが国の独立を保とうとして各自努力しているが、今日にいたるまで一つとして功を奏したものが無い。また将来も一つも功を奏することはできないだろう。大きなため息がでる話である。ここで私もいささか平生の所見を述べざるを得ない。

すべて事物を論じるには、まずその事物の名前と性質を明らかにして、その後これを処理する方法を得るべきである。例えば火事を防ぐには、まず火事の性質を知り、水で消すことができることをはっきりさせ、その後消防の手段を得るようなものである。今我が国の事態が困難と言えども、その困難とはそもそも何のことでをさして言うのか。法律が行われていないわけではない、租税も納められていないわけではない、人民も急に無智に陥ったわけではない、官吏も皆愚で不正をしているわけでもない。これらを列挙すれば、日本は依然として旧の日本で、ことさらに変動があるわけでもなく、ことさらに心配するものがあるとは見えない。あるいは前の時代の有様に比較すると、新たに面目を改めて善に進んだとも言える。それなのに、我が国の事態を前の時代に比べると、さらに困難になって、心配事が一層増したというのは、果たして何をさして、どんな困難ごとを憂いているのか、これを糺さざるを得ない。

思うに、この困難ごとはわが祖先からの伝来のものではない、きつと近年急に生じた病で、我が国命の重要な部分を犯し、除こうとしても取り除くことができず、治療しようとしても医薬が乏しく、到底我が国の従来力では抵抗できないものである。どうしてかという、旧態然たる日本国で旧と異なることがなければ安心すべきはずだが、特にこれを心配するのは、きつと別に新しく心配な病が生じた証である。世の識者が憂慮するのも、きつとこの病にあることをはっきり知るべきであるが、識者はこの病を指して何と名付けるだろうか。私はこれを外国交際と名付ける。

世の識者ははつきりとこの病に名前をつけて、外国交際とは言わなくても心配はまさしく私と同様で、今の外国交際の困難さを心配しているもので、まずここで物の名前は決まる。次いでその性質を詳しく調べざるを得ない。そもそも外国人が日本へ来るのはただ貿易のためである。そこで今、日本と外国の間で行われる貿易の有様を見ると、西洋諸国は物を作る国で、日本は物を産する国である。物を作るとは天然の物に人工を加えて、たとえば綿を変化させて織物とし、鉄を精製して刃物にするようなものである。

物を産するとは、自然の力に頼って本来の素材を生産することを言う。日本で生糸を生産し、鉱物を掘り出すようなものである。ゆえに今仮に名をつけて、西洋諸国を製造の国と名付け、日本を産物の国と名付ける。もともと製造と産物はその境界を明らかにし難いが、甲は人力を用いることが多く、乙は自然の力に頼ることが多いので、名前が違うのである。

さて、経済の道では、一国の貧富は天然に生じる物産の多少に関係することは思いのほか少なくて、実際は専ら人力を用いることの多少と巧拙による部分が多い。土地が肥えているインドが貧しくて、物産がないオランダが富んでいるようなものである。製造国と産物国との貿易では、甲は無形無限な人力を用い、乙は有形有限な産物を用いて、力と物を相互に交易するものである。詳しく言えば、産物国の人民は働くべき手足と智慧を働かせず、製造国の人を海外で雇ってその手足と智慧を借用して労働させ、その労賃として自国で産出する天然の物を与えることになる。

またこれを例えると、給与三百石、家族一〇人の侍が、気ままに暮らして何もせず、朝夕の食事は仕出し屋から取り、夏冬の衣服は呉服屋から買い、世帯に必要なものは一から十までことごとく町で出来上がった物を買って、その代金として毎年三百石の米で支払うようなものである。三百石の米はあたかも自然の産物のようなのだが、年々の支払いでとても蓄財のめどは立たない。今わが日本と外国の貿易の有様を論じると、あらまはこのようなものである。結局、わが国の損失といわざるを得ない。

また西洋諸国は製造物によってすでに富を蓄え、日々新しい文明のおかげで人口も年々増えて、イギリスなどはその極度に達したものといえる。アメリカ合衆国の人民もギリス人の子孫である。オーストラリアにいる白人もイギリスから移住したものである。東インドにもイギリス人がおり、西インドにもイギリス人がいる、その数は数え切れない。仮に今、世界中に散在しているイギリス人と数百年来イギリスから出身した者の子孫を集めて、本国の大ブリテン及びアイルランドへ戻して、現在のイギリス人三千余万人の人民と同じ所に住ませたら、全国で生産する物では衣食が不足するのはいうまでもない。平地のほとんどは家を建てるために占められることになろう。文明が次第に進み制度がよければ人口が増えることが分かる。子を生む一事は人も鼠も違わない。ねずみは自分でその身を保護することが出来ないで飢えや寒さで死に、或いは猫に捕まってその繁殖は激しくないが、人間の場合は条件が良くて、飢えや寒さ、戦争、流行病の心配が少なければ、人の繁殖はいわゆるネズミ算の割合で増える理屈で、ヨーロッパの古国ではすでにその始末に困っている。

イギリスの経済家の説に、この心配を防ぐ策は、第一に自国の製造物を輸出して、土地が肥えている国から衣食品を輸入することである。第二は自国の人民を海外に移して植民することである。この第一策は限りがある仕事で、未だ心配を解決するには十分ではない。第二策は多額の資本を使うが、それで成功しないこともある。故に第三策に外国に資本を貸して利益をとり、自国の用に使うというものである。たしかに人を海外の地へ移すには、すでに開けた地方が最もよいが、開けた地方にはすでに建国されて政府があつて、その人民も一種の習慣風俗を備えているので、他国から来てその中へ入って雑居して便宜を得ようとしても簡単には出来ない。唯一の解決の糸口は、その海外の国の産業が未だ発達せず、富を蓄えていなくて資本が乏しくて肉体労働者が多く、そのために利息が高くなっていれば、本国で余っている資金をその貧しい国へ貸し付ければ、勞せず利益を得ることができる方法がある。

言葉を変えていえば、人を雑居させず、金を雑居させる方法である。人は習慣風俗が異なれば雑居することは容易でないが、お金ならば自国の金でも他国の金でも見た目に区別がないので、これを用いるものは單に利息の高い低いをきにするだけで、平気で他国のお金を融通し、知らず知らずのうちに他国の人に金利を支払うことになる。資本家の名案といえる。今の日本でもすでに若干の外債があり、その利害得失をよく考えなければならない。

そもそも文明国と未開国を比較すると、生計の有様は全くその趣が違い、文明が次第に進むに従つて費用も次第に大きくなる。かりに人口繁殖の心配は別にしても、平常の生計ではその費用の一部は必ず他に求めざるを得ない。それを求めるところは下流の未開国になる。世界の貧困はすべて下流へ集まるといえる。文明国の資本を借用してその利息を払うというのは、貧困が下流に集まりその形が現れたものである。故に資本の貸借は必ずしも人口増加の一事だけに關係するものではないが、今ここに特に挙げたのは、学者の理解をしやすくするために、西洋人が利益を争わざるを得ない一つの明らかな原因を示したにすぎない。

外国交際が品行を卑屈にさせる。

以上は、外国交際の性質について、その経済上の得失を論じたものである。次に、この交際によるわが人民の品行への影響について示そう。近來わが国の人も大いに面目を改めて、人民同権の説はほぼ天下に広まつて、これに異論をはさむ人もいなくなつたように見える。實際、人民同権とは單に一国内の人々が互いに權利を同じにするという意義だけではない。この国の人とかの国の人が相對しても同じでこの国とかの国が對しあつても權義は同じで、その境遇の貧富強弱にかかわらず權義はまさに同一であるべきという趣意である。それなのに、外国人が我が国へ来て貿易を始めた時から、条約書面では、彼も我も同等と明文化されているが、實際の實際について見ると、決してそうではない。慶應義塾の社友の小幡君の著述で民間雜誌第八編に次のように述べている。

前略、米国が我が国と音信を開いた時、海軍提督ペリーに一隊の軍艦を率いて我が領海に侵入させて、我々に通信交易を強いる、その口実は同じ天をいただき地を踏んで、ともに四海の兄弟である。それなのに独り人を拒絶して、相容れないことは天の罪人だから、たとえこれと戦っても通信貿易を開かないわけにはいかないと趣意である。なんとその言葉は美しいが、その行為の醜いことか。言行が食い違ふはなほだしい例と言える。形容を省いてその事実だけを直言すると、我と商売しないものは殺すというに過ぎない。中略。今試しに、都内の有様を見よ。馬にまたがり車に乗って意気揚々として、人を避けさせる者の多くは外国人である。たまたま、警官や通行人あるいは御者車夫らが口論することがあると、西洋人はそばに人がいないかのように手で打ち足で蹴る。臆病でいじけた人民は応じる気力もなく、外国人ではどうしようもない。として、怒りを我慢し訴訟があつてもいかなる者も少なくない。あるいは商売取引のことについて訴えることもあるが、五港の地へ行って結局向こうの国の人の裁判で決まることになるので、その恨みを晴らすこともできない。このことから人々は互いに、むしろ訴えて恨みを重ねるよりも、怒りを我慢する方が簡単だと言う。その状況はあたかも弱小な新婦が悪賢い舅に対するようなものである。外国人はすでにこのような力を蓄え、また資本も豊かな国から資本が乏しい国へ来てお金を使うところが多いため、利に走る人はみな争つてこれに媚を売つて、儲けようとする。故に外国人がいるところは、温泉場も宿駅も茶屋も酒屋も、一種軽薄な人情を生みだし、事柄の正邪も考えずにお金の多寡を問ひ、勝手気ままな外国人はますます妄想や思い上がりを強くさせている。一目見て嫌悪に絶えない。

以上が小幡君の議論で、真に私も同意できる。この他、外国人との交際については、居留地の関係、内地旅行の関係、外国人雇入れ、出入港税の問題もある。これらの諸案件について、表向きは対等で各国が彼我同権の体裁はあるが、その実は同等同権の旨を尽くしたとは言えない。外国に対してはすでに同権の旨を失い、これに注意をする者もないので、我が国民の品行は、日々卑屈の方向へ向かわざるを得ない。

同権論と世界の実情

前に述べたとおり、近年世の中には人民同権の説を唱える者が多く、あるいは華士族の名称も廃止して全国に同権の趣旨を明確にして、それによつて人民の品行を奮い立たせて卑屈の旧習を一掃しなければならないという者もある。その議論は勇ましく人を心地よくさせるが、外国の交際についてこの同権説を唱えるものが少ないのはどうか。華士族といふ平民といつても等しく日本の人民である。その間に権力の不均衡があれば、これを問題として平等の地位になるように努める。それなのに今、利害を別にし、人情を別にし、言語風俗、顔色体格に至るまで同じでない遠く離れた外国人に対して、権力の不均衡を主張しないのはそもそもどういう理由だろうか。呐々怪事とつつかい（非常に奇怪なこと）といえる。その理由はきつと種々様々あるだろうが、私の所見では最も著しいものが二箇条ある。第一は世に同権

の説を唱える者も、その論説についていまだ深く掘り下げていないことである。第二は外国の交際もまだ日が浅く、そこで生じる害の大きいことをしらないことである。

第一。今の世に人民同権の説を唱える者は少なくないが、これを唱える者は大概みな学者流の人で、言いかえれば士族で、国内の中流以上の人である。かつて特権を有した人である。かつて権力がなくて人に苦しめられた人ではなく、権力を握って人を苦しめた人である。故に同権の説を唱えるに当たって、どうしても歯がゆくもどかしい感じがする。例えば、自分で食べなければ物の真の味は判らない。自分で入牢したものでなければ牢内の真の苦勞は語ることができないようなものである。

今仮に、百姓町人に智力をもたせ、かつて権力者のために苦しめられて骨髓にしみ込んだ怒りの気持ちを語らせ、当時の細かな事情を聞くことができれば、始めて真の同権論の差し迫ったものを得ることもできるだろう。しかし無知無勇の人民はかつて怒るべきことに出会ってもその怒るべき方法を知らず、或いは心でこれを怒っても口に出して言うことを知らないから、外からその事情を詳しくできる手掛かりも殆どない。それだけでなく、今日でも世の中には、権力が不均衡なために怒りや怨みの情を抱く者もきつと多いだろうと思うが、はっきりとそれが分らない。ただ自分の心でその内情を推察するだけである。故に今の同権論は人の推量憶測から出たものと言わざるを得ない。

学者がもし同権の本旨を探って、議論の確実なものを得たいと望むならば、これを他人の推測に求めるべきでなく、必ず自らの身を振り返り、少年の時から今日に至るまで自身の経験を振り返って発見できる。いかなる身分の人も、いかなる華族士族でも、詳しく自分の経験を吟味すれば、生涯の中にはきつと権力偏重の局面に直面してかつて不平を抱いたことがあるはずだから、その不平憤懣の実情は他人に求めず、自らに問うべきものである。

身近で私の身に覚えがあることの一例を示す。私の生まれは幕府の時代に無力な譜代の小藩の小臣である。その藩中にいる時、お歴々の大臣士族に会ういつも軽蔑されて、子供心にも不平がないわけではなかったが、その不平の真の事情は、小役人の身分だった私の仲間でなければ判らない。あの大臣士族には今日になってこれを想像もできないだろう。あるいはまた藩を出て旅行をするとき、公卿、幕吏、御三家の家来などに出会えば、宿駅では駕籠を奪われ、川の渡しでは先をこされ、旅籠屋では同宿を許されず夜中に急に迫り出されたこともあった。この時の事情は、今になっては一笑に付すものに属するが、現にそのことに当たっている時の憤懣はいまだにこれを思い起こすことができる。そうして、この憤懣はただ譜代大名の家来であるわが身に覚えがあるだけで、その憤懣を起こさせた公家、幕

吏、御三家の家来は、漠然としていてこれを知らない。たとえ、漠然としていなくてもかろうじて憤懣を推量憶測するに過ぎない。

そうであるとしても、結局私もまた日本の国内では、中人以上の士族の列にいた者だから、自分の身分以上のものに対しては不平を抱くことは知っていても、自分の身分以下の百姓町人に向かつて、きつと不平を抱かせたこともあったに違いない。ただ本人はこれを知らないだけである。世の中にこの類のことは大変多い。いずれにもその局面に当たらなければ、ことの真の事情は分からないものである。

これから考えると、今の同権論は所論は正確なようだが、当事者自ら論じたものでなくて、他人のことを推量憶測した客の論だから、細かな事情を知り尽くしたものではない。故に権力不均衡の害を述べるに当たり、自然と粗雑で回りくどい弊害が生じる。国内でこれを論じる場合でさえもうっかりすることが多い。ましてやこれを押し広めて外国の交際に広げて、外国人と権力を争おうとする場合にはとても無理である。いまだにこれを考える段階に達していない。将来もし私が実際にその局面を担当し、広く西洋諸国の人と接して親しく権力を争う時代になり、百姓町人が軽蔑を受けて士族に苦しめられたり、譜代の小藩の家中が公家、幕吏、御三家の家来に辱められるような場合になったら、始めて今の同権論が実際に役に立たないことを知り、権力不均衡を嫌い、憎み、怒り、悲しむべきことがわかるだろう。

それだけでなく、昔の公家、幕吏、士族の人達は、たとえ無礼で慎みがなくても、同じ国内の人で智力が乏しい人達であるので、平民はこれを処遇するに当たり、敬して遠ざける方法を用い、表向きではこれを拝み陰でそのお金を巻き上げる策もないわけではない。本来悪い策であるが、いささかでも不平を慰める方便になっている。しかし、今の外国人の狡猾剽悍（ずるく荒々しい様子）は公家や幕吏の比ではない。智恵で人をだまし弁舌でこじつけをし、争えば勇気があり闘えば力があり、智弁勇力を兼ね備えた一種法外な華士族と言うこともできる。万が一にもこの支配の下にいて束縛を蒙ることがあれば、その無慈悲な厳しさはあたかも空気の流通も許さないようなもので、わが日本の人民はこれで窒息することになる。今からこの有様を想像すると、全身がたちまちぞっとして毛髪がそばたつ気がする。

ここで我が日本の忠告の手本としてインドの例を示す。イギリス人が東インドを支配するのにその処置の無情残酷さは実に言うに忍びないものがある。その一、二を挙げると、インド政府が人を採用するには、イギリス人も土人も同様の権利を持ち、学識を調べてから採用する方法を取っている。それなのに、インド人を審査するときは十八歳以下に限り、その審査の自身は当然ながら英書を読み、イギリスの事情に通じていなければ駄目であるため、インド人は十八歳になるまでにまず自国の学問を終わり、兼ねて英学を勉強し、その英学力でイギリス人と相対しイギリス人と並ぶ者でなければ及第できない。或いは一年過ぎて十九歳のときに学問

を終えても、年齢に制限があるので、学識を問わず人物を論じないで採用されないで、一切官吏として行政にあずかることを許されない。

イギリス人はこの無情で厳しい方法でもまだ不足するとして、審査を行う場所を本国のロンドンと定めて、このためさらにインド人を海を越えたロンドンまで出張させる方法を設けた。だからインド人は一八歳で既に審査を受けて及第できる学力をもっている、多額なお金を使って遠路を往復できなければ官吏になることができない仕組みに制約されて、学力の深淺にかかわらず、家産が富んでいないと官吏の道につけない。あるいはまれに頑張る人がいて、旅費をなげうってロンドンへ行って審査を受けても、不幸にして落第すればいたずらに家産を失うだけである。その不利な状況はたえようがない。イギリスの暴政は尋常なものでない。

また、インドの政府で裁判する時に、陪審員にはインド人はなれず、必ずイギリス人に限る方法を取っている。(裁判のことである。西洋事情第8巻英国の第9ページに出ている。)ある時、一人のイギリス人が地方で鉄砲でインド人を打ち殺したことに付いて訴訟になって、被告人の言い分に、何か一個の動物を見かけてこれを猿と誤って発砲したところが猿でなくて人だったと答えて、列席した面々も全く異議なく、被告人は無罪に決まったという。

近來ロンドンで数名の学者が私的に結社を結んで、インドの有様を改革しようと尽力する者があつた。上で述べた嘆きの訴えは、一八七四年の春、あるインド人からこの結社へ差し出した手紙の中に記されたもので、私の旧友で当時ロンドンにいた馬場辰猪君の報告である。馬場氏は現にこの結社にも出席して、詳しくその事情を見聞し、この類のことは枚挙にいとまがないと言っている。

外国交際の経験不足

第二。外国人が我が国と貿易するのは、ここわずか二〇年、五港を開いたといえ、輸出入品も少なく、外国人が集まるところは横浜が第一、神戸がこれに次ぎ、他の三港は列挙するほどもない。条約上の約束で、各港に居留地を設けて内外の人民の住居に境界を作り、外国人の旅行地は港から各方面に一〇里と定めて、この外側へは特別な許可がなければ行き来をさせず、このほか不動産売買、金銀の賃貸などについても、法律を作つて内外の区別を限ることが多いために、今日に至るまで双方の交際は次第に繁盛してきたといえ、内外の人民が互いに触れることは大変少なくて、たとえその交際についてわが人民が不正を蒙つて不平を抱く者がいても、それは大体開港場の近隣の人民に限られて、世間一般のうわさとして伝わるものは甚だ稀である。

かつ、開港の始めから政治上の交際の事務は政府が一手に行うので、人民はその状況がどうなっているかを知ることがなかった。生麦の一件について一〇万ポンド、下関の賠償金が三〇〇万ドル、旧幕府時代にアメリカへ軍艦を注文し、フランス人と条約を結んで横須賀の製鉄所を開き、維新以後も砲艦を買い入れ、灯台を建て、鉄道を作り、電信線をかけて、外債を募り、外国人を雇うなどその交際は大変煩雑で、その間に不当なことは蒙らなかつたが、やむを得ず談判でお金を損したこともあろう。

結局、相手方に損害の心配がないことは確かだが、我が方に十分な利益と面目を得たかどうかは極めて疑わしいが、政府一人行うものだから人民は未だそのことを知らない。ただ下賤の人民が知らないだけでなく、学者、士君子また政府の官吏でも、それに関係しない者はそれを知る手掛かりもなかった。故に、我が国の人民は、外国交際について、内外の権力が果たして均衡しているかどうかを知らず、我々が不当な扱いを蒙ったかどうかを知らず、利害を知らず得失を知らず、平気で他国のことを見るようなものだった。これが我が国の人が外国に対して権力を争わなかつた原因の一つである。確かに実情を知らない者は、相手を心配する理由もないからである。

そもそも外国人が我が国へ来てからまだ日が浅い。かつ、今日に至るまで、我々に著しい損害を与えて我々の面目を奪ったこともなかったので、人民の心に感じることも少なかつたといえども、いやしくも国を心配する真心をもつ者は、見聞を広くもつて世界の昔から今までの出来事を見ておかなければならない。今のアメリカはもともと誰の国だったか。その国の主人であるインディアンは白人に追われて、主客が立場を変えたものではなかつたか。故に今のアメリカ文明は白人の文明であり、アメリカの文明と言うことはできない。このほか、東洋諸国及び大洋州諸島の有様はどうか。ヨーロッパ人が進出したところでうまくその国本来の権利と利益を守って真の独立を保ったものがあるだろうか。ペルシャはどうか、インドはどうか、シヤムはどうか、ルソンやジャワはどうか。

サンドウィッチ島（ハワイ島）は、一七七八年、イギリスのキャプテン・クックが発見したところで、その文明の開化は近傍の諸島に比べて最も早かつたといわれている。それなのに、発見時の人口三〇、四〇万人だったものが、一八二三年に至ってわずか十四万人が残っただけという。五〇年の間に人口が減少し、おおそ毎年百分の八が減った。人口の増減には種々の原因があるだろうが、それはしばらくおいて、その開化というのは何事だったか。ただこの島の野人が人肉を食べるのをやめて、白人の奴隷にふさわしくなったことを指しているだけである。

支那のごときは、国土も広大だから西洋人は未だに内地に入り込めずその跡はただ海岸だけであるが、今後の成り行きを考えると、支那帝国もまさにヨーロッパ人

の庭園に過ぎず、ヨーロッパ人が進出したところは、あたかも土地の元気が絶えて草木も成長を遂げることができない。ひどい場合には人も絶えてしまったものもある。これらの事がらを明らかにして、我が日本も東洋の一国であることを知れば、たとえ今日に至るまで外国交際について著しい損害を被ることがないとしても、後日の禍を恐れざるを得ない。

以上述べたことが正しければ、我が日本における外国交際の性質は、経済上で論じても権利上で論じても困難な大事件で、国にとって致命的な重要な部分を冒す持病と言わねばである。そしてこの持病は全国の人民がかかった病気だから、人民自らがその療法を探さざるを得ない。病が進むのも自分のことで、病が治るのも自分のことである。利害得失はすべて我々にあるので、少しも他人に頼むことはできないのである。

考えの浅い人は近年世の中の有様が昔と異なるのを見て、これを文明と名付け、わが文明は外国交際の賜物で、その交際がますます盛んになれば、世の中の文明もともに進歩できるとして、これを喜ぶ者がいないわけではないが、その文明と名付けるものはただ外形の体裁だけである。もちろん私が願うものではない。たとえその文明がすこぶる高尚なものになったとしても、全国の人民の間に一片の独立心もなければ、文明も我が国の用をなさず、日本の文明と名付けることはできない。

地理学では、土地山川があれば国と名付けるが、私が論じるところでは、土地と人民を合わせてこれを国と名付け、その国の独立といいその国の文明というのは人民が互いに集まって自らその国を保護し、自らでその権力と面目を完全に果たすものを指して名前をつけるものである。もしそうでなくて、国の独立文明をただ土地につけて人が関与しないものとするのは、今のアメリカの文明を見てインディアンのために祝すべき理屈になる。或いはまた、我が日本でも、政治学術等の諸案件を取り出してこれを文明が進んだヨーロッパ人にまかせて、我が日本人は奴隷になって使役させられても、日本の土地は影響がなく、しかも今の日本の有様よりも数百倍も優れた独立の文明国になるだろう。不都合極まりないものと言える。

④天地の公道論

またある学者の説に言う。各国交際は天地の公道に基づいたものである。必ずしも互いに害し合う趣意でないので、自由に貿易し自由に往来し、ただ自然にまかせらねばである。もし我々の権利を損ない、我々が利益を失うことがあれば、そうなる原因は自分に求めざるを得ない。自ら反省せず相手に多くを求めるのは好ましい道理ではない。今日諸外国と平和に交渉するうえでは、あくまでも誠意を尽くして交誼を完全に果たすべきである。少しも疑念を抱くことはない、と。

この説はまことにその通りである。人と人の私的な交際では全くその通りにすべきだが、国と国との交際とは全く趣を異にするものである。昔、封建時代に行われた諸藩の交際なるものを知らないのだろうか。各藩の人民は必ずしも不正な人々ではないが、藩と藩の間の付き合いでは、各々物事を自らに私物化することを免れなかった。その私なるものは藩外に対しては私であるが、藩内では公と言わざるを得ない。いわゆる各藩の情実というものである。この私の情実は天地の公道を唱えることと否定することができない。藩がある限りは藩とともにあって永遠に伝えるべきものである。数年前、廃藩の一举で始めてこれがなくなり、今日では諸藩の人民も次第に古い藩情を脱するようではあるが、藩がある間は決して非難することができなかった。

わずかに日本国内の諸藩でもこんな状態である。ましてや東西遠く離れて異なる地域の外国人に対して、その交際に天地の公道を頼りにするのは、果たしてどういうつもりか。不注意もはなはだしい。俗に言う結構人（お人好し）の議論というべきものである。天地の公道は本来慕うべきものである。西洋諸国がよくこの公道にしたがって日本に接するならば、また我々も仕方がないと思つてこれに應じるべきで、決してこれを断るわけにいかないのだろう。もしそれが果たしてそうならば、まず、世界中の政府を廃止すべきである。我々が古い藩を廃止したようにすべきである。学者にはその見込みがあるか。もしその見込みがなければ、世界中に国がたつて政府がある限りはその国民の私情を取り除くわけにはいかない。その私情を取り除く方法がなければ、我々もまたこれに接するときに私情を持つて行わざるをえない。結局、これが偏頗心と報国心が名前が違つても中身が同じになる理由である。

上記のとおり、外国交際はわが国の一大難病で、これを治療するに当つて自国の人民でなければ頼むものはない。その任は大きく責任は重いといえる。

この章の初めに述べたように、今のわが国は無事な日にあるのではなく、しかもそのことは昔に比べてさらに困難であるというのは、正に外国交際のこの困難病のことである。一片の本心において、財産も生命もなげうつべき場所とは、正にこの外国交際のこの場所である。それならば、今の日本人がどうして気楽に日々を暮らしていけようか。どうして何もせずに休息できようか。開闢以来、君臣の義、先祖の由緒、上下の本分、本末の差別というものが、今日では本国の義となり、由緒になり、内外の名分になり、内外の差別になつて、何倍も重大さを増してきているのではないだろうか。

昔の封建時代には、薩摩の島津氏と日向の伊東氏の間に年来の恨みがあつて、伊東氏の臣民はひどく薩摩を仇とし、毎年元旦に臣下が登城すると、まずお互いに諫めて薩摩の旧怨を忘れるなといつて、その後には正月を賀した例があるという話がある。また、ヨーロッパでフランスのナポレオン一世の時代に、プロシアがフラン

スに負けて未曾有の恥辱をこうむり、それ以降、プロシア人は深く遺恨を抱いて、復讐の念はいつも絶えなかった。このために国民が努力するのはもちろんのこと、中でも国内の教会その他の人民が集まるところでは、前年プロシア人が大敗して恥を受けて、その怒りと悲しむ様子を絵にして額に掲げるなど様々な方法で人心を奮い立たせた。それが向かう気持ちを一つにして復讐を図り、ついに一八七〇年になって旧怨に報いたという。

これらのことはいずれも皆、怨恨による良くない心から生じたもので、その事柄を美として賞賛すべきではないが、国を守ることが難しく、人心が苦勞する様子がこれで分かる。我が日本も、外国交際では、これまで伊東氏やプロシアの苦勞をなめたことはないが、インドその他の先例を見て、これを戒めとして伊東氏やプロシアのようにせざるをえない。或いは元旦に一度でなく、国民たるものは毎朝お互いに諫めてあつて、外国交際に油断するべからずといつて、その後朝ごはんを食べてもいいくらいだ。

これから考えると、日本人は祖先伝来の重荷を下ろして、代わりの荷物を持たないのでなく、その荷物は現に頭上にかかっている、しかももの物より何百倍も重さを増して、正にこれを担うべき責任を負い、昔に比べれば、何百倍もの力を尽くさざるをえない。昔の受け持ちはただ窮屈に耐えるだけだったが、今の引き受けは窮屈に加えて活発なことが必要である。人民の品行を高くするというのは、この窮屈な修身の徳義と活発発地の働きの両方にある。それなのに、今この荷物を引き受けて、なおかつ身に安楽さを感じるのとは、ただそのものの性質や軽重を知らずにこれに注意を向けていないためである。或いは注意を向けてもこれを担う方法を間違っているためである。例えば、世に外国人を憎む者がいないわけではない、しかしこれを憎むに当り、趣意を誤つて憎むべきを憎まず、憎むべきでないものを憎み、人をそねみ疑う気持ちを持って眼前の細事を怒り、小は暗殺、大は攘夷によつて自国に大きな害をもたらす者がいる。この連中は一種の氣違いで、あたかも大病国の中の病人と名付けるだけである。

⑤攘夷論

また別の憂国者は、攘夷家に比べれば所見が高く、みだりに外国人を追い払おうとはしないが、外国交際の困難さを見て、その原因を兵力の不足に求めてわが国に兵備さえ盛んにすれば勢いを得られるとして、海陸軍の予算を増やそうといい、巨艦や大砲を買おうといい、砲台を築こうといい、あるいは武器庫を建てるという者がいる。その意図を推測すると、イギリスに千艘の軍艦があるので、我々にも千艘の軍艦があればきっとこれに敵対できると思うようなものである。結局事物の割合を知らない者の考えである。

イギリスに千艘の軍艦があるのは、単に軍艦だけが千艘あるのではない。千の軍艦があれば万の商船もある。万の商船があれば十万人の航海士もいよう。航海士を作るには学問もないわけにいかない。学者も多く商人も多く、法律も整い、商売も繁盛し、人間社会の物事は整い、あたかも千艘の軍艦にふさわしい有様になって、初めて千艘の軍艦があるべきである。武器庫も、砲台も、すべてこの様に他の諸件に比べて割合が整ってなければならぬ。割合がふさわしくなければ便利な道具も用を果たさない。例えば、裏表に戸締りもなくて、家内が乱雑な家の門前に二〇インチの大砲を一基置いても、盗賊を防ぐには役に立たないようなものである。

武力偏重な国で、ややもすると前後のわきまもなく、やみくもに兵備にお金を費やし借金で国を倒す者もないわけではない。まさしく巨艦大砲は巨艦大砲の敵に対応するもので、借金の敵には対応できない。今日本で軍備のために、砲艦はもちろん小銃、軍服に至るまで、百に九十九は外国の品物を仰がざるを得ない。或いは我々の製造技術が未だ開けていないためといえ、その製造技術が開けないのはわが国の文明が未だ整っていない証拠だから、その未整備な状態の中で独り軍備だけを整えようとしても、事物のつりあいを失って実際の用には立たない。ゆえに今の外国交際は、兵力を増やして維持できるものではない。

このように、暗殺攘夷論は初めから問題にならないが、さらに一步を進めて、兵備による方法も実用に適せず、又、先に書いた国体論も、キリスト論も、漢儒論も人心を維持するには足りない。それならばこれをどうするか。言うならば、目的を定めて文明に進むという一字があるだけである。その目的とは何か。内外の区別を明らかにしてわが国の独立を保つことである。そしてこの独立を保つ方法は文明のほかに求めることは出来ない。

今の日本人を文明に進めるのは、この独立を保つためだけである。故に国の独立は目的で、国民の文明はこの目的に到達する手段である。すべて人間の事物について、その目的とそれに到達する方法を考えれば数限りない。例えば、綿をつむぐのは糸を作る手段である。糸を作るのは木綿を織るための手段である。木綿は衣服を作るための手段となり、衣服は風や寒さを防ぐ手段である。この何段もの手段がお互いに手段となり、或いは相互に目的になって、結局は人体の温度を保護して体を健康にさせる目的に達するようなものである。私もこの一章の議論では、結局自国の独立を目的にした。本書の初めに、事物の利害得失はそのためにする目的を定めなければ議論できないといったが、まさしくこれらの議論に当てはめて参考にすべきである。

人は或いは言うかも知れない。人類の目的は単に自国の独立だけではない。さらに永遠高尚の極みに着目すべきであると。そのとおりである。人間の知徳の頂点に至ると、それが期待するものもともと高遠で、一国独立などの細事にこだわらない。たかだか他国からの輕蔑を免れるのを見て、すぐにこれを文明と名付けるこ

とが出来ないのはいうまでもないが、今の世界の有様では、国と国の交際には未だこの高遠なことは議論できない。もしこれを議論する者がいたら迂遠な絵空事の話といわざるを得ない。

ことに目下の日本のありさまを見ると、ますます事は急になっており、他を顧みるとまもない。まず、日本の国と人民が存在してこそ、しかる後に文明のことも語ることができる。国がなく人もいなければこれを日本の文明とは言えない。これが私が理論の域を狭くして、単に自国の独立をもって文明の目的とする議論を唱える理由である。故にこの議論は今の世界の有様をみて、今の日本のために考えて、今の日本の急に応じて説き始めたものだから、もともと永遠微妙な奥義を言うのではない。学者がたまたまこれを見て、文明の本旨を誤解し、これを軽蔑視して、その言葉の面目を汚さないようにすべきである。

かつまた、私が独立を目的に定めたといえ、世の人がすべて政治家となり、毎日これに従事させようと願っているわけではない。人は各々努めるところが違い、また違わざるを得ない。あるいは高尚な学問を志して、談天彫龍（門の飾り）にふけり、深く究めてこれを楽しんで食事することも忘れる者もいるだろう。あるいは活潑な事業に従事して、日夜寸暇もなしに東奔西走し、家庭のことを忘れる者もいるだろう。これを咎めることは出来ないだけでなく、文明中の一大事業としてこれを褒めせざるをえない。ただ願うことは、食を忘れ家事を忘れる時にも、国の独立がどうなるかにかかることがあれば、たちまちこれに心を動かして蜂の尾の針に触れる如く、心身ともに鋭敏になることを望むだけである。

⑥鎖国復活論

ある人が言う、前説のようにただ自国の独立だけを望むならば、外国の交際をやめたほうがずっと都合がいい。わが国に外国人がまだ来なかった時代は、国の有様は非文明だったが、これを完全な独立国と言わざるを得ない。そうすると今、独立を目的にするならば、昔の鎖国に返るほうが上策である。今日に至ればこそ独立の憂いもあるが、嘉永以前には人が知らなかったことである。国を開いて国の独立を心配するのは、自分から病を求めて自分でこれを心配しているようなものである。もし病の憂いを知れば、無病の時に返ることに勝るものはない。

私はそうではないと答える。独立とは独立できる力があることを指して言うことである。偶然に独立した形を見て言うのではない。我が日本にまだ外国人が来なくて国が独立したのは、真にその勢力があつて独立したのではない。ただ外国人に触れなかったために、偶然に独立の体をなしていたにすぎない。これを例えると、

未だ風雨にあつていない家屋のようなものである。それが果たして風雨に耐えるかどうかは、風雨にあわなければ証明できない。風雨が来るかどうかとは別のことである。家屋が堅牢かどうかは内のことである。風雨がこないからといって家屋の堅牢を証明できない。風もなく雨もなければ家屋が存在するのはもちろんだが、どんな大風大雨にあつても少しも動かず直立するものこそ、真に堅牢な家屋と言える。

私のいう自国の独立は、我が国民が外国交際に當つて経験を積んで、遂にその勢いを落とさずに、あたかもこの大風雨に耐える家屋のようにしようとする趣意である。どうして自分から委縮して昔に戻り、偶然の独立に恵まれて得意になっていられようか。それだけでなく、今の外国交際は、適宜にこれ进行处理すれば、我が民心を奮い立たせるために、あたかもほどよい刺激を与えたかのようになるために、かえつてこれによつて大いに文明を利することができる。結局、私の旨とするところは、進んで独立の実を取ることにある。退いてその虚名を守るようなことは、あえて望まないことである。

独立が目的、文明化は手段

故にまた前説に返つて言う。国の独立は目的である。今の我が国の文明はその目的に達する手段である。この「今」の字は、特に意味があつて用いたもので、学者はなおざりにしてはならない。本書第三章には、文明は至大至洪で人間はすべて皆これを目的にせざるを得ないとして、人類がまさに到達すべき文明の本旨を目的にして論をたてたが、ここでは、私の地位を今の日本に限つて、その議論もまた自然と区域を狭くして、ただ自国の独立を得させるものを目指して、仮に文明の名前を下したにすぎない。故に、今のわが文明と言うのは文明の本旨ではない。まず事の初歩として自国の独立を図り、その他は第二步に残して他日改めて行ふという趣意である。

結局このように議論を限定すると、国の独立とはすなわち文明である。文明国でなければ独立を保つことができない。独立と言うのも文明と言うのも、ともに区別がないようだが、独立という表現をすると、ことを想像する時に一層限界が明らかになり分かりやすくなる。ただ文明とだけ言うときは、自国の独立と文明とにかかわりなく、文明なるものがある。はなはだしいのは、自国の独立と文明を害して、なお文明に似ているものがある。

その一例を挙げて言う。今日日本の諸港に西洋各国の船が停泊し、陸上には広大な商館を建てて、その有様は西洋諸国の港と違わず、盛んであるといえる。しかし、事柄に暗い愚人は、この盛んな有様をみて、今や五州の人民はわが国の法律が寛大なことを慕い争つて皇国に集まり、貿易も日々に盛んになつて、わが文明が進ん

でいることは諸港の有様を一見して判るなどといって、得意になる者もいる。大きな誤解である。外国人は皇国に集まってきたのではない。その皇国の茶と絹糸に対して集まっているのである。諸港が盛んであるのは、文明のあらわれには違いないが、港の船は外国船で、陸の商館は外国人の住居である。我が国の独立や文明には少しも関係するものでない。

また、資産がない投機人が外国人の元金で国中で広く取引し、その所得はすべて金主の利益に戻っているのに、商売繁盛の景気を見せている者もいる。あるいは、外国からお金を借用してそのお金で外国からものを買入れ、国内で並べて、文明の観を見せている者もいる。石橋、鉄橋、船艦、銃砲の類がこれである。我が日本は文明が生まれる国でなく、その寄留地というに過ぎない。結局この商売の景気、文明の外観は国の貧困を招いて、長い年月の後には、必ず自国の独立を害するものである。まさしく私が文明と言わず独立の文字を用いたのは、これらの誤解を防ごうとする趣意に過ぎない。

結論

このように、最後の目的を自国の独立に定め、あたかも今の人間の万事を溶かして一に集めてすべてこれをかの目的を達する手段にするときは、その方法が煩雑なことは際限がない。制度なり、学問なり、商売なり、工業なり、一つとしてこの手段にならないものはない。単に制度、学問等の類だけでなく、あるいは卑しくて浮ついたもの、遊び楽しむものでも、その内情をよく調べてそれがもたらす効能を考えれば、また文明の中の箇条に入れるべきものは多いだろう。

ゆえに、人間のあれこれの事物についてその利害得失を説くには、一つ一つの部分を見て簡単に決められない。例えば昔から学者の議論も大変多かった。質素儉約を主にする者もいるし、あるいは秀美精雅を好む者もあり、専制独断が役に立つと言う者もいる、おおらかに自由を主張する者もいて、意見百出で、西といえは東といい、左から論じると右から反論し、ほとんど尽きるところがない。ひどいのはこれまで定見もなく、ただその身の地位に沿って議論をし、その身と議論と進退榮衰と一緒にしている者もいる。さらにこれよりもひどいのは、政府にすがって威勢を振るう地位について、各々の政権の中でかねてからの自分の説を広げようとし、その説の利害得失については忘れてしまったような者もいる。ひどく卑劣なものと言える。

これらの有様を形容すると、的もないのに矢を射るようなもので、裁判所がないのに訴えるようなものである。いずれを是とし、いずれを否とすべきなのだろうか。ただこれは子供のたわむれに過ぎない。試みに見ると、天下の事物をその局部で論じれば、一として正しくないものはない。一として不正にならないものはない。

質素儉約は野蛮粗暴に似ているが、個人の身についてはこれを勧めざるを得ない。秀美精雅は贅沢で浪費のようだが、全国人民の生計を考えると日々に秀美に進むことを願わざるを得ない。国体論が頑固なことは民権のためには大いに不便なようだが、今の政治の中心を定めて、行政の秩序を維持するためには大いに都合がよい。急激に民権拡張する粗暴論は、立君治国のためには大いに害があるようだが、人民の卑屈な古い悪習を一掃する方法として用いれば、とても役に立つ。

忠臣義士の論もキリスト教の論も儒者の論も仏者の論も、愚だと言えば愚であり、智と言えば智である。それを施す段階によって、愚にもなり智にもなる。それだけでなく、かの暗殺攘夷の連中といえどもその行いは非難されるが、その人の心を解剖して検査すれば、必ず一片の報国心があるのは明らかにすることができる。

そうすると本章の初めに述べた、君臣の義、先祖の由緒、上下の名分、本末の差別なども人間品行の中では尊ぶべき箇条で、文明の手段だから一概にこれを排除する理由はない。ただこの手段を使って世の中の利益になるかどうかはその用法次第である。およそ人として、国を売る悪だくみを抱かない者なら、国益になることを好まない者はいない。もしそうでなくて、国の害を犯すことがあれば、その罪はそれが向かう目的を間違えて偶然に犯した罪である。すべて世の事物は、様々な手段によって事を成就させるものだから、その手段は努めて多くを必要とし、また多くならざるを得ない。ただ千百の方法を用いる際に、その用法を誤ることなく、この方法が果たしてこの目的に関係あるものか、もし関係があればどの道でこれに達するべきか、あるいは直接に達するべきか、あるいはその間にまた別の手立てをおいて間接的に達するものか、あるいは二つの手段があればどちらかを重く先にするか、いずれを軽く後にするべきかと、様々な工夫をめぐらして、結局、その最後最上の大目的を忘れないことが緊要である。将棋を指す者が様々な手があっても、結局その目的は自分の王将を守って敵の王を詰める一事にあるようなものである。もしそうではなくて王より飛車を重んじる者がいれば、これを下手将棋と言わざるを得ない。

故に今、この一章の眼目である自国独立の四文字を掲げて、内外の別を明らかにして、人民が進むべき道を示せば、物の軽重も初めてここで測ることができ、事の緩急も始めて定めることができて、軽重緩急が明らかになれば、昨日怒ったことも今日は喜ぶべきものになり、去年楽しんだことも今年は心配するものとなり、得意が転じて心配になり、楽国は変化して苦界となり、怨敵も友達となり、他人も兄弟となり、喜怒をともし、憂楽を同じにして、同一の目的に向かうことができるだろう。私の所見では、今の日本の人心を維持するには、唯一この方法があるだけである。

福沢諭吉「文明論之概略」の翻訳の経過

初版	二〇〇九年六月十五日	「文明論之概略」(現代語訳)	(ヨコ書き)
初版修正	二〇〇九年七月十五日	「脚注版 文明論之概略」(現代語訳)	(脚注付きに変更)
第二版	二〇一〇年一月二十五日	「文明論之概略」(現代語訳、脚注付き)	(脚注見直し)
第三版	二〇一二年一月十一日	「文明論之概略」(現代語訳、脚注付き)	(本文見直し)
第四版	二〇一五年十一月十五日	「現代語訳 文明論之概略」	(タテ書きに変更)
第五版	二〇一五年十二月二十五日	「現代語訳 文明論之概略」	(小見出し付きに変更)